偽りの保育園児

文章・高木かおり
挿絵・みあ

プロローグ　一ページ
第一章　～園長室～　五ページ
第二章　～女の子に～　三七ページ
第三章　～通園バス～　五七ページ
第四章　～マンション～　七二ページ
第五章　～お出かけ～　八八ページ
第六章　～再びマンション、そして～　一三八ページ
第七章　～初登園の朝～　一五一ページ
第八章　～羞恥の入園式～　一六八ページ

プロローグ

「ね、葉月。あんた、夏休みの間どうする予定なの？」
「ん？　どうするって言われても、そうだな、どうしようかな。冷房は効いてるし、専門書も揃ってるし」
賃貸マンションのお世辞にも広いとは言えないダイニングルームで、小ぶりのテーブルに向かい合って夕飯を食べながら唇を少し突き出し気味にして問いかけたのが御崎皐月。
それに対して微かに首をかしげてぽつりと応えたのは、皐月の弟で、この春に大学に入ったのをきっかけに親元を離れて皐月のマンションに同居するようになった葉月だ。
「は～あ、大学の図書館に引き篭もりねぇ。ま、あんたらしいっちゃらしいけど、もうちっと行動的になれないものかしらね。実の姉としちゃ、あんたのそういうとこ、ちょっと苛々しながら見てるんだよ。そこんとこ、わかってる？」
お茶碗を持った右手とお箸を持った左手を大げさに広げ、わざとらしく肩をすくめてみせて、皐月は溜息混じりの声で言った。
「言われなくても、そんなことわかってるよ。わかってるけど、でも……」
口にしかけた味噌汁のお椀をテーブルに戻すと、葉月は拗ねたような顔になって口ごもった。「わかってるんだったら、アルバイトでもしてみたらどうなのよ？　あんた、子供の頃から人見知りが激しいし、いっそコンビニのレジとか、いっぱい他人と顔を会わせるような所でバイトでもして、その優柔不断な性格、どうにかした方がいいんじゃない？　このままだとガールフレンドもできないままだよ？　せっかく可愛い顔してるのに、今のままじゃ勿体ないよ」
皐月は肩をすくめたまま葉月の顔をテーブル越しに正面から覗き込んだ。
「だって……」
「だってとか、でもとか、んとにはっきりしないんだから。いくら可愛い顔してても、男の子なんでしょ、もっとしゃんとしなきゃ駄目じゃない」
葉月の顔を正面に見据えて皐月は幾らか語気を強めた。
けれど、微かに唇を尖らせて押し黙ってしまう葉月の様子に、やれやれといった様子で口調を和らげると
「ま、小さい時からの性格だし、急にはどうしようもないか。それに、だいいち――」
と言って、途中からは悪戯めいた口調になる。
「コンビニのバイトで夜勤シフトになってあんた一人で店番なんてことになったら危ないもんね。悪いヤツが入ってきたりしたら、弱っちいあんたが追っ払えるわけなんてないし、それよりなにより、下手したら、あんた自身の貞操の危機ってことにもなりかねないし」
くすっと笑ってそう言った皐月に対して、けれど葉月は反論する様子もない。一言も抗弁しようとせず、ますます拗ねたような顔をするばかりだ。
「うふふ、そうやってほっぺを膨らませちゃうようなところが可っ愛いんだよね、葉月は。実の姉弟じゃなかったら放っとかないんだけどなぁ、私だったら。なのにまだガールフレンドの一人もできないなんて、あんたの性格のせいもあるけど、世の中の女の子、んとに見る

目がないよね」
　皐月は五月に誕生日を迎えて、今は二四歳。一方の葉月は九月の誕生日をまだ迎えていないから、今は十八歳。年の差は六つなのだが、さっぱりした性格で面倒見のいい姉と優柔不断で人見知りの激しい弟という間柄は、実際の年以上に年齢に開きがあるような印象を昔から周囲に与えていた。
　それに加えて、葉月の容貌。皐月は「あんた自身の貞操の危機」と冗談めかして言ったけれど、実のところ、あながち冗談ではすまない恐れが充分にある。高校に入る前に成長期が終わってしまったのか、大学生になる葉月なのに、身長は一メートル六十センチそこそこだし、殆ど筋肉の付いていない体は華奢で細っこい。痩せぎすのがりがりといった感じではないものの、いかにも全体に線が細いといった雰囲気だ。しかも丸っこい輪郭の童顔を肩に届くか届かないかといった長さの髪で包んでいるから、ぱっと見には、中学生の女の子だと紹介されてもまるで疑うことなく信じてしまいそうな容貌をしている。髪をなかなか切らないのは外へ出るのがあまり好きではなく理髪店へ行こうとしないせいなのだが、もって生まれた髪質の良さのためなのだろう、碌に手入れもしていないのにいつもさらさらだ。ただ、髪が目にかかるのが鬱陶しいからといって眉の上でばっさり自分の手で切っているのが唯一の手入れと言えば手入れなのだが、前髪を眉の上で無造作に切り揃えた髪型がおかっぱ風でもあり、ますます葉月の顔を少女めいて見せていた。そんな葉月が深夜のコンビニに一人でいたりすればどんな目に遭うか、半ば本気で心配もしたくなるのも仕方ないところだろう。事実、皐月のマンションに同居するようになってすぐに生活に必要な細々した物を買い揃えるために二人で商店街に出かけた時を含め、これまでに何度も高校生くらいの男の子から、年下の少女と思われて強引にナンパされかけたことも一度や二度ではない。
　そんな葉月とは対照的に、一メートル七十センチを超える身長に加えて、護身用にと小学校に入る前から習い始めた合気道でいつのまにか段位を取得し、高校生の時には県大会に出場するまでになったほどで、見るからに凜とした雰囲気を漂わせる皐月。見た目や性格も含め、二人が親元にいる頃は、お互いに入れ替わっていればよかったのにねというご近所の（決して悪意があるわけではないものの、少しひやかすような）噂話が絶えなかったのも当然か。

　けれど、そんな弟を皐月が嫌っているわけでは決してない。どんなことにもはっきりしなくて引っ込み思案で皐月があれこれと世話を焼いてやらなければ何もできない葉月のことが可愛くていとおしくてたまらない。そんな心の内を表すかのようにもう一度くすっと笑って皐月は言った。
「ま、コンビニのバイトは無理として、けど、うちでちょっとしたバイトの口があるんだけど、マジ、来てみない？　時給をはずんでくれるよう私からも園長先生に掛け合ってあげるからさ」
「え？　それって、姉さんの職場でバイトしないかってこと？　……けど、僕、資格なんか持ってないよ。大学に入ってまだ半年も経ってないから専門課程の講義なんて一つも取ってないのに、それでもいいの？」
　皐月からの思いがけない申し出に、葉月は要領を得ない顔で訊き返した。
　皐月が勤めているのは、『ひばり保育園』という私立の保育園だ。

葉月たち姉弟は昔から教育に携わる人材を輩出してきた血統の家に生まれついている。姉弟の父親は地元の県立高校の校長だし、母親も小学校の教頭だ。祖父や祖母、更に遡って多くの先祖たちも多くが旧制高校や女学校で教鞭を執っている。そんな家系だから、二人とも自分も学校の先生になるんだろうなと幼い頃から漠然とながら思っていて、事実、皐月は短大の初等教育科を出て、実家から少し離れた町にある『ひばり保育園』に職を求めたのだった。そうして、勤め始めて丸三年が経った今年の四月、咄嗟の決断が早くなにごとにも物怖じしない上に日頃からいかんなく発揮するリーダーシップをかわれ、何人かの先輩保育士を差し置いて主任保育士という地位に就いていた。

そんなわけだから、葉月がこの春に入学したのが教育学部なのは言うまでもないこと。ただ、前述のように貧相な体格の持ち主だから、高校や中学の教諭になるのが無理なのは自分でも痛いほどわかっていた。今どきの発育のいい中学生や高校生を相手にして、華奢な体つきで優柔不断な性格の葉月が威厳をもって（例えそれが教員免許を取得するための教育実習だとしても）授業を進める姿など想像もできない。かといって小学校の教員免許を取得しようとすると、これまたいろいろと面倒なことになる。単科授業だけを受け持てばいい高校や中学の教諭とは違い、小学校の教諭は全ての教科を教える必要があるため、最低限の楽器の演奏や水泳指導までこなさなければならないのだ。高校や中学の教員免許を取得するのとはまた別の意味で、こちらも葉月にはまるでそぐわない。ということで葉月が選んだのは、皐月と同じ初等教育の途だった。ただ、皐月が取得したのは保育士の資格で、葉月が目指したのが幼稚園の教員免許だという違いはあるのだけれど。

それに加えて二人の間にもう一つ違いがあるとすれば、皐月が短大卒なのに対して、葉月が入学したのが四年生の大学だという点だ。保育園で働く保育士にしても、幼稚園の教諭にしても、短大を卒業すれば資格を取得することができる（もちろん、短大卒の場合は二種免許、四年生大学だと第一種免許といった差はあるものの）。だから、少しでも早く現場に出たいなら、葉月も短大でもよかった筈だ。なのにわざわざ四年生大学を選んだ葉月。実は、この選択も葉月の性格に起因していた。教育現場に立てば、子供たちだけではなく、その保護者を相手にせざるを得なくなる。けれど、小さな頃から人見知りが激しくて優柔不断な葉月だ。中学生を相手に授業を進める自信もないのに、あれこれと口やかましい保護者に対して自分の教育方針を貫く自信などある筈もない。幼い頃から漠然と思い抱いてきた教職への途と、それを阻もうとする自分自身の不甲斐なさ。二つの思いに苛まれて葉月がようやく思いついたのが、教育に関連する場に身を置きつつも教職の現場には立たずにすむ方法――教育分野を専攻とする研究者になるという選択だった。そう、資格を取りながら大学を終え、そのまま大学院の教育学専攻課程に進むことを葉月は望んだのだった。

「うん、資格なんて要らないよ。ちょっとしたアシスタントみたいなもんで、難しく考えるような仕事じゃないから」

戸惑い気味の葉月の問いかけに、皐月はすっと目を細めて応えた。

「そうなんだ。……じゃ、やってみようかな。いつも忙しい姉さんに食事の用意や洗濯をしてもらってばかりだし、そのお礼ってわけじゃないけど、姉さんのところでアシスタントが要るんだったら、それで、僕なんかでよかったらやってみようかな」

皐月の視線を正面から受けて、ちょっとおどおどした様子で葉月が小さく頷いた。

揃って教職に就いている両親はいつも忙しくて、家でゆっくり過ごす時間を持つのは難し

かった。そのため、葉月は生まれてすぐの時から六つ年上の姉に面倒をみてもらって育ったようなものだ。長じても、決断力があってどんなこともさっさとこなす皐月の陰に隠れるようにして生きてきたと言っても過言ではない。そんな葉月にとって、皐月からの『提案』や『申し出』は殆ど『命令』や『指示』と同じ意味合いを持っていた。そう、葉月にとって、皐月の言葉に逆らってみせるなど、およそ想像の埒外にある行為だったわけだ。

とは言え、葉月がバイトをしてみてもいいなと思ったのは、姉に気圧されて渋々といった理由のせいばかりではない。誰に対しても面倒見のいい皐月は、後輩といわず先輩といわず、同僚の保育士を自分のマンションに招いてささやかなホームパーティを開きつつ、あれこれと会話に興じ、更に、誰を厭わず愚痴や悩みを聞いてやることが少なくなかった。

それは葉月が同居するようになってからも変わらずで、そのため、ひばり保育園で働く保育士たちと葉月とは、いつのまにか顔見知りの間柄になっていた。もちろん、互いのプライバシーに立ち入るといったことはないものの、その人がどういう名前で、保育園でどんな立場にいて、どんな感じの人なのかといったことくらいはいつしか葉月も憶えてしまっていたのだ。そんなだから、見も知らずのまるで他人ばかりの初めての職場ではないという安心感も幾らかはある。そんな事情も、アルバイトをしてみてもいいかなと葉月に思わせる要因だった。

「じゃ、決まりね。ただ、私の一存だけでってわけにはいかないから、最終決定は園長先生と会ってからってことにしましょう。面接日は七月最後の日曜日。それでいいわね？」

皐月は葉月に向かってわざとのように大きく頷き返して言った。

「え？　面接、日曜日なの？」

皐月がきょとんとした顔で聞き返す。

「そう、日曜日よ。同じように小さな子供を預かる施設とはいっても、文科省管轄の幼稚園は土日がちゃんとお休みで、平日も原則はお昼ごろまでしか保育しないんだけど、厚労省が管轄する保育園は土曜日も夏休みも関係なしなの。平日も、建前は夕方五時までの保育ってことになってるけど、お母さんなりお父さんなりが迎えに来るまで、夜の七時くらい、ううん、どうにかすると八時や九時くらいまで預かることもあるのよ。あんたも知ってるでしょうけど、幼稚園と保育園とじゃ、もともとの設立の目的が違うから仕方ないんだけどね。だから、園長先生にまとまった時間を取ってもらおうとすると、どうしても日曜日になっちゃうってわけ」

皐月は、今度は小さく頷いて、諭すように言った。

第一章　～園長室～

【一】

そして迎えた、七月最後の日曜日。時刻は午前十時。
ひばり保育園の園長室では、大きな執務机を挟んで園長と葉月が向かい合って座っていた。
園長は、豊かな髪をアップに束ねて上品なクリーム色のスーツに身を包んだ四十歳くらいの理知的な女性。柔和な笑みに時おり垣間見せる鋭い眼光が印象的だ。
対して葉月は、皐月が洗濯してくれた清潔そうな白の綿シャツに、これまた皐月が丁寧にアイロンをかけてくれた、きちんと折り目のついたスラックス。まだビジネススーツなど持っていない学生の身分としては充分によそ行きの身なりと言っていい。

「初めまして。お姉様とご一緒に住んでらっしゃると聞いていますから、当園の先生方とは何度かお会いになっておられるとは思います。けれど、私とはこれが初めてですね。よろしくお願いします、御崎葉月さん」
落ち着いた口調でそう切り出す園長に対して、まるで世間慣れしていない葉月の方はしどろもどろだ。
「あ、あの、姉さんが……あ、いえ、姉がお世話になっています。そ、それで、今日は僕の……いえ、わ、私のためにわざわざ面接の時間を、その……」
「あらあら、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。ほら、私の合図に会わせて大きく息を吸ってごらんなさい。はい、いち、に、さーん」
葉月の緊張ぶりがよほど可笑しかったのか、園長はひとしきりくすくす笑うと、柔和な笑みを浮かべたまま、不意に、ついさっきまでとはがらりと違う、まるで自分の保育園で預かっている子供に接するみたいな口調に変わって言った。
「え？　あ、ああ、はい……」
言われるまま、何度かぎこちなく深呼吸を繰り返す葉月。
「はい、よくできました。とっても上手に深呼吸できたわね、葉月さん。これで少し落ち着いたかな？」
深呼吸を終えて幾らか落ち着いた表情になった葉月の顔を見て、園長は、園児に対して話しかけるような口調に加え、葉月のことを名字ではなく下の名前で呼んで、これもまた幼児に向かってそうするように、大げさな身振りで両手を叩いてみせた。
「え、ええ、まあ……」
最初に受けた印象とは打って変わった園長の仕草に戸惑いを覚えつつも、いつも小さな子供と接しているとそういうことが癖になるのかなと思いながら、葉月は曖昧に応えた。
「そう、よかった。じゃ、いろいろお話できるわね？　葉月さん、食べ物は何が好きなのかしら。　何が好きか、ちゃんとお話できるかな？」
小さく頷く葉月の様子を満足そうに見ながら、ますます葉月を子供扱いするみたいな調子で重ねて言う園長。
「あ、あの、卵焼きです。姉さ……姉のつくってくれる卵焼き」

深呼吸でいったんは少し落ち着いたのに、すっかり態度の変わった園長の様子に再びしどろもどろになりながら、葉月は僅かにうわずった声で応えた。
「そう、葉月さんは卵焼きが大好きなの。可愛いお顔にぴったりね」
園長は葉月の返答を聞くと、やはり幼児をあやしてでもいるかのような声で言い、続けてこんな質問をした。
「じゃ、動物は何が好きなのかな？　わんちゃんかな、それとも、にゃんこちゃんかな。あ、ひょとすると、お鼻の長い象さんかしら」
それに対して葉月は考え考え「犬です」と返したのだが、その後も園長からの質問が途切れることはなかった。
けれど、どの質問も、アルバイトの面接に来た大学生に向けてのものとはどうしても思えないものばかりだった。しかも、内容だけでなく、園長が葉月に質問をする口調が、いかにも幼児に対して優しく話しかけているふうなのは最後まで改まらなかった。

結局、園長と葉月とのそんなやり取りは三十分ほども続いただろうか。
そうして、ようやく最後の質問に葉月が僅かに首をかしげながら応えると、園長が満足げに大きく頷いて穏やかな声で言った。
「うん、いいわよ。葉月さん、とってもお利口さんだこと。これなら、ひばり保育園に来てもらっても大丈夫でしょう。――明日から来られるわね？」
「あ、はい……」
これじゃまるで保育園への入園を希望する児童への面接みたいだなという、妙にくすぐったいような違和感を抱き続けたまま、それでも、面談に立ち会っている姉の手前もあって、そんな思いを言葉に口にすることもできず、葉月はおずおずと返事をするしかなかった。
「じゃ、この紙にサインしてもらおうかな。はい、ここに今日の日付と、その下のここにお名前を書いてちょうだい。葉月さん、お利口さんだもん、お名前も上手に書けるよね？」
ひとしきりの質問が終わっても園長はまだ子供向けの口調を改めることなくそう言って、あらかじめ自分の欄に署名・捺印した雇用契約書を葉月の目の前に差し出した。
契約書と一緒に差し出されたペンで日付と自分の名前を記入し、印鑑の代わりに右手の親指に朱肉を付けて拇印を押せば、それで契約は終了。葉月にとって生まれて初めてのアルバイトの契約はこうして無事に交わされた。
だが、この時の葉月には、それがどれほど羞恥に満ちたアルバイトになるのか、想像することすらかなわなかった。

「あらあら、葉月さん、自分のお名前、ちゃんと漢字で書けるのね。本当になんてお利口さんなのかしら」
葉月が署名・捺印した契約書をすっと手元に引き寄せ、書き損じがないことを確認した園長は、質問の時と同様、それこそ、ようやく自分の名前を書けるようになったばかりの幼児を褒めそやすみたいな口調で言った。
そうして、不意に葉月の右手の手首をつかむと、自分の方にぐいっと引っ張る。
「え……？　あ、あの、なにを……」
突然のことに大きく両目を見開いてうろたえる葉月。

「そんなにびっくりしなくても大丈夫よ。お箸を持つ方の手のお父さん指が汚れちゃったから、きれいきれいしてあげるだけなの。葉月さんはお利口さんなんでしょ？　だったら、ほら、そんなに暴れないでじっとしてましょうね」
「あの、あの……そんなこと、自分でします。指くらい、自分で拭きますから」
朱肉で汚れた右手の親指を園長が拭いてくれようとしていることに気づいた葉月は、自分の右手をつかんでいる園長の手の柔らかさに思わず顔を赤らめて、躊躇いがちに首を振った。
「いいのよ、そんなに遠慮しなくても。自分じゃ綺麗に拭けないことがあるんだから、さ、ちゃんとお手々を伸ばしてちょうだい。葉月ちゃんのぷにぷにのお手々をきれいきれいしましょうね」
園長は半ばたしなめるように半ばあやすように言って、強引に葉月の右手を自分の胸元近くまで引き寄せ、親指の先を柔らかいティッシュで拭い始めた。
自分の母親よりも少し若いだけの、有り体に言って中年の女性だ。なのに、その柔らかな手の感触と、ブラウス越しにもはっきりわかる胸元の形のいい膨らみに、葉月の頬がぱっと赤く染まる。
「とってもすべすべしてるのね、葉月さんのお手々。ぷにぷにですべすべで、なんだか赤ちゃんのお手々みたい。こんなに可愛らしいお手々が汚れてちゃ可哀想だもの、うんときれいきれいしておこうね」
それこそ幼い子供に言い聞かせるかのごとく甘い声で囁きかけながら、園長は撫でさすらんばかりに、たっぷり時間をかけて葉月の右手をティッシュで拭き清めるのだった。

【二】

「はい、できた。ちゃんとおとなしくしてて、お利口さんだったわね」
ようやくのこと葉月の右手を拭き終えた園長が、名残惜しそうな様子で手を離しながら言った。
そこへ、二人から少し離れた所に座って面接の様子を見守っていた皐月が椅子から立ち上がって近づいて来た。そうして、葉月が腰かけている椅子のすぐ横に歩み寄ると
「念のために確認させていただきますが、正式に採用ということでよろしいのですね？」と、念押しするような口調で園長に話しかける。
「もちろん、合格ですよ。御崎先生は葉月さんのことを人見知りが激しくて気の弱いところがあるとおっしゃっておられたけれど、こうして話してみると、ちょっと恥ずかしそうにするところは見受けられるものの、自分のお名前も好きな動物や食べ物もきちんと言えるし、漢字でお名前も書けるし、思っていたよりもしっかりしてらっしゃるじゃありませんか。これなら、うちの保育園へ来てもらっても大丈夫です。ええ、他の子供たちともすぐ仲良くなれるに違いありません」
園長は執務机越しに皐月の顔を見上げ、柔和な笑顔で応じた。
その口調がアルバイトの採用の合否を告げるというよりも、新しい園児に入園を許可しているように聞こえたのは葉月の気のせいだろうか。

「ああ、よかった。面接に連れて来た甲斐がありました。それでは、さきほど園長先生が葉月に言っておられたように明日から登園させますので、よろしくお願いいたします」
皐月は、かたわらの椅子にちょこんと腰かけている葉月の肩にぽんと掌を載せた。
「こちらこそ、よろしくお願いします。ただ、これだけは堅く申しておきますけれど、御崎先生からも弟さんに、契約書に記載されている事項は必ず遵守するよう念を押しておいてくださいね。弟さんがそうだとは申しませんけれど、近頃の若い方は無責任な人も多くて、せっかく契約書を交わしても、その後で随分と身勝手な主張をなさることもが少なくありませんから」
相変わらず穏やかな声で応じる園長だったが、『契約内容の遵守』という言葉を口にする時は幾らか厳しい口調になり、鋭い眼光で葉月の顔をねめつけた。
瞬間、どういうわけか、葉月の胸を、なんとも表現しようのない後悔めいた感情がよぎった。
途切れることなく続く園長からの質問に最後の方はうんざりしかけていたのと、逆らうことなど考えもできない相手である姉に勧められたアルバイトの採用面接ということで、まるで書面を確認することなく署名・捺印してしまった契約書。なぜとはなしに、今になってそれが悔やまれてならない。

「ね、姉さん……」
思わず葉月は、すがるような表情で皐月の顔を見上げた。
が、不安でいっぱいといった顔つきの弟とはまるで対照的に、しっかり者の姉は涼しげな表情を浮かべるばかりだ。
「あらあら、なんて顔してんのよ、葉月ってば。あんた、まだ一回も働いたことがないから初めての契約書ってことでびびってんでしょうけど、そんな心配することなんてないわよ。私もそうだし同僚の先生方もみんな園長先生と雇用契約書を交わしてるけど、当たり前のことしか書いてないわよ、普通の雇用契約書なんて。例えば、遅刻や早退が三回あると一日の欠勤とみなすとか、お給料の計算期間は毎月二十日が締め日だとか、病欠の場合は診断書を提出しなしなければならないだとか、そういうことちょっとが難しい表現で書いてあるだけよ、普通の雇用契約書には」
頼りなげな葉月の顔を見おろしながら、皐月はこともなげにそう言った。
そのさりげない口調のせいで、『普通の雇用契約書』という言葉を皐月が妙に強調して繰り返し言ったことに葉月は気づかない。
「そうそう、そういうことよ、葉月さん。お姉さんにはちょっときつい言い方をしちゃったかもしれないけど、そんなに難しいことじゃないから心配しなくて大丈夫よ。お利口さんの葉月さんならちゃんと守れるようなことばかりだから心配しないで。――お弁当を食べる時はみんなで仲良くとか、決められた制服を着なきゃ駄目よとか、そんな簡単な、葉月さんだったらきちんと守れるような決まりごとばかりだもの」
ゆっくりした動作で葉月の方に向き直った園長が皐月の言葉を引き継いだ。皐月に対する時とは打って変わった、わざとのように優しい口調だ。
「は、はい……」
不安な表情を隠せないまま、それでも、二人から諭されて小さく頷く葉月。

「うん、ちゃんとお返事ができて、やっぱりお利口さんね、葉月さんは」
園長は満足げに目を細めて頷き、少し間を置いてから続けて言った。
「それじゃ、せっかくだから、試しに制服を着てみましょうか。実を言うと、葉月さんのことは前もってお姉さんからいろいろ聞いていて、実際に会う前から合格って決めていたの。それで、これもお姉さんから先に聞いていた葉月さんのスリーサイズに合うような制服を業者さんにお願いして持って来てもらっていたのよ。だから、本当のことを言うと、今日は、面接っていうより、契約書にお名前を書いてもらうのと、制服のサイズ合わせとに来てもらったようなものなの。実際の登園の前に制服を試しに着てもらって、サイズが合うかどうか確かめておきたかったから」
前もって採用を決めていたという園長の思いがけない言葉に、なぜとはなしに、葉月の胸の中に芽生えた言いようのない不安がますます大きく膨らんだ。と同時に、微かな疑問が生じる。
「……あのさ、姉さん」
葉月はおそるおそる皐月の顔を見上げ、遠慮がちに訊ねた。
「園長先生は僕に制服の試着をしなさいって言ってるけど、僕、姉さんが制服を着てるとこなんて一度も見たことないよ？　いつもは小さな子供たちの相手をするのに思いきり体を動かさなきいけないからってジャージを着てるし、通園の時は私服だし。四月の入園式の時だって、自分で買ったスーツだったよね？　ひょっとしたら、姉さん以外の保育士さんたちは制服を持ってるのに、姉さんだけ勝手なことして私服で押し通したりしてるわけ？」
「なに言ってるのよ、葉月ったら。私だけ私服で押し通すだなんて、そんな身勝手なことするわけないでしょ？　うちの保育園、ジャージは支給してくれるけど、保育士用の決まった制服なんて昔からないわよ」
皐月は、要領を得ない顔つきの葉月に対して軽くかぶりを振ってみせ、部屋の片隅に置いてある、保育園の指定業者のマークが入った幾つかの紙袋にちらと視線を走らせて続けた。
「でも、あんたは正式な保育士じゃない、アルバイトのアシスタントだから、違いが一目でわかるようにわざわざ園長先生が用意してくださったのよ。あんたのことを新しい保育士だと勘違いした親御さんたちが育児のことで何かと相談を持ちかけても、まだ大学に入ったばかりのあんたが何か答えられるわけないじゃない。そんな混乱を防ぐために、正規の保育士とアルバイトのアシスタントを区別できるようにって」
「……そ、そうなの？」
皐月の説明を聞いても、どういうわけか疑問は解消しない。いや、解消しないどころか、ますます不安が高まってならない。葉月は不承不承の態で微かに首をかしげるばかりだった。
「ええ、そう。御崎先生のおっしゃる通り、葉月さんが保育士さんと間違われないようにするために用意した制服なのよ」
疑わしげな眼差しで皐月の横顔を見上げる葉月に、唇の両端を吊り上げるような笑みを浮かべて園長が言い、悪戯めいた声で続けた。
「ま、それと、葉月さんが他の園児たちから浮いちゃわないようにするためにっていう目的もあるんだけどね」
「僕が他の園児から浮かないように……？　どういうことなんですか、それ？」
思いがけない言葉に、葉月がきょとんとした表情で園長の方に向き直る。

「うふふ。それは、葉月さんが制服を着てみればすぐにわかることよ」
園長は謎々でも楽しむかのように囁きかけた後、どこか冷ややかな声で続けた。
「ところで、葉月さん。面接の時は自分のことを『僕』じゃなく、ちゃんと『私』って言い直していたわよね？　御崎先生のことも、『姉さん』じゃなく『姉』って言っていたんじゃなかったかな？　なのに、今はもう油断しちゃったのかしら。まるで自分のお家にいる時みたいに『僕』や『姉さん』だなんて言っちゃって。きちんと雇用契約を交わした上で、ここは園長室なのよ。それなりの言葉遣いをしなきゃいけないんじゃないのかな。お利口さんの葉月さんだもの、できるよね？」
「あ……す、すみません。気をつけます」
不意の叱責に、葉月は、ついさっき園長が口にした言葉の真意を詮索することも忘れて体をすくめてしまう。
「いいお返事だこと。じゃ、ちゃんと注意してちょうだいね。まず、自分のことは『私』と呼ぶこと。ただ、『私（わたくし）』じゃ堅苦しいから『私（わたし）』でいいわ。わかった？」
「は、はい」
「それと、いくら実の姉弟でも、保育園にいる間は、他の先生方に接するのと同じように、お姉さんのことは『御崎先生』と呼ばなきゃいけないわね。お家だったら『姉さん』でもいいけど、けじめをつける時はきちんとしましょう」
「……はい、わかりました」
葉月は思わず姿勢を正して生真面目に頷いた。
にこやかな笑みを浮かべていても、元来が威厳のある園長だ。初対面とはいえ、皐月に対するのとはまた別の意味で、その言いつけに逆らうことは難しい。
「それじゃ、私は弟のことをどう呼べばいいでしょうか？　御崎さんでいいですか？」
葉月がおずおずと頷くかたわら、どこか芝居がかった様子で皐月が園長に尋ねた。
「……そうですね。でも、名字での呼び合いだと、先生方はわかってくださるとしても、子供たちが混乱するかもしれませんね。年長さんはともかく、年中さんや年少さんの子供だと、『御崎先生』と『御崎さん』の区別がつかないかもしれません。だから、葉月さんのことは下の名前で呼んであげた方がいいんじゃないかしら」
園長は葉月と皐月の顔を交互に見比べて言い、更に少し考えてこう付け加えた。
「ああ、それと、どうせ下の名前を呼んであげるんだったら、『葉月さん』ではなく『葉月ちゃん』の方が親しみがあっていいかもしれませんね。うん、そうね、そうしましょう。他の先生方にも、御崎先生の弟さんのことは『葉月ちゃん』と呼ぶよう伝えておくことにします」
「はい、承知し……」
「ち、ちょっと待ってください」
皐月が園長に向かって恭しくお辞儀をして同意をしめすのを、葉月が途中で遮った。普段の二人の間柄から考えれば滅多にないことだ。とはいえ、葉月の胸の内を考えれば、いつもは気の弱いくせに咄嗟に抗議の声をあげてしまったのも無理からぬところか。
「僕……あ、じゃなかった、わ、私は大学生なんですよ。そ、そりゃ、背も低いし体も華奢だし童顔だし、子供っぽく見えることは否定しませんけど、でも、これでもちゃんとした大

学生で、もうすぐ十九歳になるんです。それなのに、『葉月さん』はともかく、『葉月ちゃん』だなんて、そんな呼び方、困ります」
その外見と、声変わりも済んだ筈なのに同年代の男子と比べるとまだ甲高い声のせいで、高校時代も大学に入ってからも、友人たちから『可愛い葉月ちゃん』とか『お姫様』とかことあるごとに呼ばれからかわれてきた葉月だ。それが、アルバイト先でも同じ目に遭うなんて。
「なに言ってるのよ、葉月ったら。せっかく園長先生が親しみやすいようにって呼び方を考えてくださったのに、文句なんて言ったら罰があたるわよ」
背筋をぴんと伸ばして腰に手の甲を押し当てた皐月がたしなめるように言い、じと目で葉月の横顔を見おろしてこんなふうに続けた。
「だいいち、うちの保育園の保育士さんたち、前からあんたのこと、『葉月ちゃん』って呼んでるじゃない。今さら恥ずかしがることなんてないんじゃないのかな」
「そ、それは……」
「あら、そうだったんですか？　うちの先生方はもう弟さんのことを『葉月ちゃん』って呼んでいるんですか？」
今度は葉月が言葉を遮られる番だった。皐月が言った内容を耳にするなり、園長は葉月の抗弁などまるで意に介するふうもなく、ぱっと顔を輝かて念押しするように聞き返した。
「はい。園長先生もご存じの通り、私は先生方をうちに招待してお茶の時間を持ったりささやかな食事の席を設けたりしています。弟が同居するようになってからもそれは変わらず続けているのですが、初めて弟に会った先生方はどなたも葉月のことを私の妹だと勘違いなさるようで。それも、見た目がこうですから、高校生、いえ、どうにかすると中学生の女の子だと思い込まれることも多くて、後で大学生弟だと説明して誤解を解いても、第一印象というのはなかなか拭い取れないものなのか、それからもうちにいらして葉月に会うたびに『葉月ちゃんはいつ見ても可愛いわねぇ』などとおっしゃられることがたびたびなんです。ま、私も姉として、弟のことを可愛く思っていただけるのはとても嬉しいんですけれど」
くすっと短く笑って皐月が説明する。
「まぁまぁ、そういうことだったんですか。それはよろしゅうございます。先生方がもう『葉月ちゃん』という呼び方をしておられるなら、なにも問題はありませんね。結構なことです」
園長は鷹揚に頷いてから、改めて葉月の瞳を覗き込むようにして言った。
「それじゃ、新しい制服を着てみましょうね、葉月ちゃん。とっても可愛らしい制服だから、きっと葉月ちゃんにお似合いよ。――御崎先生、壁際に置いてある三つの紙袋のうち、一番手前のを持ってきてもらえますか」
園長は、それまで『葉月さん』と呼んでいたのを早速のこと『葉月ちゃん』と呼び方を変えて言い、ちらと皐月に目配せをして、部屋の隅に並べて置いてある紙袋を指し示した。
「承知しました。――これでよろしいでしょうか」
さほど広くはない園長室。皐月は機敏な身のこなしで壁際に歩み寄ると、待つほどもなく、真新しい紙袋を一つ手に提げて戻ってきた。
「ええ、それで結構です。あらかじめ聞いておいた葉月ちゃんのサイズに合わせて制服と体操着、それに園内着を出入りの業者さんにお願いして用意していただきました。とりあえず、

制服を試着してもらってサイズを確認しておきましょう。制服が合うようなら、体操着と園内着も問題ない筈ですから」
「それでは、用意いたします」
園長が首を軽く縦に振るのを見届けて、皐月が、執務机の横に置いた紙袋の中に両手を差し入れた。
いいしれぬ不安とも後悔の念ともつかぬ表現しようのない感情が葉月の胸の中で更に大きく膨れあがる。

【三】

「うわっ、可っ愛いぃんだ!!」
突然、室内に嬌声が響き渡った。声の主は、紙袋から取り出したばかりの新しい衣類を広げて両手で捧げ持った皐月だ。
反射的に葉月が皐月の方に振り向いた。
葉月の反応を楽しむかのように、葉月の顔を見据えたまま、少し遅れて園長がおもむろに首を巡らせる。
皐月が両手で広げて持っていたのは、紛うことなき、真新しい制服だった。それも、ひばり保育園の園児が揃って身に着けているセーラースーツだ。いや、正確を期すためにもう少し詳しく表現すると、ひばり保育園に通う園児の内でも女の子用の制服として採用されているセーラーワンピースだった。

ひばり保育園の園児が着る制服は男児用も女児用も基本的にはセーラースーツだ。ただ、男児用の制服が上着と半ズボンとの組み合わせでツーピースになっているのに対し、女児用の制服は上着の裾をふわりとした曲線を描くようにして丈を延ばし、その延長部分がそのままスカートになるようデザインされたワンピースに仕立ててあるといった違いがあるから、皐月が広げ持った制服の裾がスカートになっているところを見れば、それが女児

用のセーラーワンピースだということは一目瞭然だった。それも、季節に合わせて、長袖ではなく二の腕の中ほどまでの三分袖を丸く膨らませ、風通しのいい薄手の生地で縫製した夏用の制服なのは間違いない。

真っ白で大きめのセーラーと幅の広いリボンふうのボウタイとの組み合わせが見るからに可愛らしく、同じ地区にある幾つかの保育園や幼稚園の中でも評判のいい制服だといつも皐月が自慢げに話しているし、その制服を着た園児たちが勢揃いした音楽会の写真を見たこともあるから、それがひばり保育園の制服だということは葉月にも一目でわかった。　けれど、それがひばり保育園の制服だとわかった瞬間、葉月の脳裏を一つの疑問がよぎる。自分が勤めている保育園の園児が着る、すっかり見慣れている筈の制服なのに、どうして姉さんはあんな甲高い嬌声をあげたんだろう――ふと、そんな疑問を葉月は抱いたのだ。

が、その疑問も、皐月が

「園長先生、この色もいいですね。セーラースーツっていうとどうしても海をイメージするからブルーだっていう先入観があるんですけど、このパステルピンクの生地もすごく可愛らしく仕上がっています。特に女の子用だと、こっちの方が断然お似合いですよ」

といかにも楽しげに言いながら新しい制服を裏返したり下から覗き込んだりしている様子を見ているうちに次第に解けてきた。おぼろげながら思い出すに、皐月から見せられた音楽会の写真に写っていた園児が着ている制服の色合いは、どれも、白とマリンブルーとの組み合わせだった筈だ。男児用と女児用とで生地の色を変えているようなことはなかったと記憶している。そこへ、これまで目にしたことのないパステルピンクを基調にした生地で仕立てた女児用のセーラーワンピースを目にしたものだから、皐月が思わず嬌声を発したのだろうと想像がつく。

けれど、その疑問が解消すると同時に、更なる疑念が湧きあがってくる。

（あれ？　あの紙袋に入ってるのって、僕が試着する制服じゃなかったっけ？　なのにどうして園児の制服が入ってるんだろう。ひょっとして、女の子用に新しい色の制服を試しにつくってもらったのが間違って入ってたのかな？）葉月は胸の中で呟いた。

が、それは縫製業者の間違いなどでは決してなかったのだ。

「どうやら御崎先生にもその色の制服を気に入っていただけたようですね。業者さんと念入りに打ち合わせを繰り返した甲斐があるというものです」

両袖を左右の手に持って改めて制服を大きく広げてみせた皐月に向かって、園長は何やら含むところのありそうな笑みを浮かべて言った。そうして、葉月の方に一瞬だけちらと目をやってから、もういちど皐月の方に向き直って僅かに首をかしげる。

「はい。この制服、私はとっても気に入りました。私が気に入ったのですから、もちろん、弟も気に入るに違いありません」

皐月は園長に向かってにっと笑ってそう言い、パステルピンクの生地で仕立てたセーラーワンピースの袖を大きく広げ持ったまま、葉月が腰かけている椅子と執務机との間に歩を進めた。

そうしてすっと膝を折ると、手にしたセーラーワンピースを葉月の体に正面から押し当てる。

「え……!?」

葉月の顔に、驚愕と戸惑いがない交ぜになった表情が浮かんだ。

「わざわざ園長先生が葉月のために新調してくださった制服だもの、気に入らないわけないよね？　新しい色でつくってくれるよう園長先生が業者さんにお願いして用意してもらった可愛い制服だもの、喜んで着るに決まってるよね？」
真新しいセーラーワンピースを葉月の肩に押し当てた皐月は、そんなふうに、穏やかな声ながらも有無を言わさぬ強い口調で決めつけるのだった。
「え……？　これを着るの、ぼ、僕……なの!?」
葉月は、自分の体に押し当てられたセーラーワンピースと、わざとのようなにこやかな笑みを浮かべる皐月の顔とをのろのろと見比べて蚊の鳴くような声を出した。
「僕じゃないでしょ？　自分のことは私と呼びなさいって園長先生から注意されたんじゃなかったかしら。ほら、言ってごらんなさい。『わたし』よ、わ・た・し」
「ちょっと待ってよ、姉さん。今はそんなことにかまってなんかいられないんだってば。そんなことより、これが僕の制服だって本当なの？　ひばり保育園の女の子用の制服を僕に着せるつもりなの!?」
怯えの色を顔に浮かべながらも、葉月は激しくかぶりを振った。
「そうよ。見てごらんなさい、ほら、ぴったりじゃない」
顔色を失った弟とは対照的に皐月は涼しい顔で言って、パステルピンクの制服をますます強く葉月の体に押し当てた。
言われて今さら確かめるまでもなく、セーラーワンピースを肩に押し当てられて反射的に自分の体を見おろした瞬間に、サイズがぴったりなのは見て取っていた。皐月が紙袋から取り出した真新しい制服を目にすると同時に覚えた違和感。その違和感の正体が、見た目は幼児用の制服なのに、そのサイズが随分と大きく仕立てられていることに気がついたせいだということに、三分袖のセーラーワンピースを体に押し当てられた瞬間に理解していた。
そう。葉月の制服が収められている筈の汚れ一つ付いていない紙袋に、保育園に通う女の子用の（としか見えない）制服が入っていたのは、縫製業者の手違いなどではなく、園長が縫製業者に指示してそうさせた結果だったのだ。
だけど、なんのためにそんなことを……。「ああ、そういえば、うちの保育園でどんなお仕事をしてもらうか葉月ちゃんにはまだ説明していなかったわね。いいわ、お仕事の内容を私が教えてあげる。それを聞けば、どうして園児と同じ制服を着なきゃいけないか、葉月ちゃんも納得してくれるでしょう」
園長が執務机の向こうで椅子から立ち上がりながら葉月の顔を見て言い、おもむろに皐月の方に視線を向け直した。
「私が説明している間に、御崎先生は葉月ちゃんのお洋服を脱がせてあげてちょうだい。葉月ちゃん、とってもお利口さんの筈なのに、今はなんだかむずがってばかりで自分じゃお洋服を脱ぎ脱ぎできないみたいだから」
「承知しました。――ほら、葉月、椅子から立ちなさい。汗臭い洋服を脱がせて、新しい制服を着せてあげるから。なんの飾り気もない綿のシャツなんかさっさと脱がせて、真新しい可愛い制服に着替えさせてあげるからね」
それまで膝立ちの姿勢になっていた皐月も園長に従ってさっと立ち上がると、持っていたセーラーワンピをそっと執務机の上に置いて、椅子に腰かけている葉月の脇の下に両手を差し入れた。

「ちょ、ちょっと待ってよ。そんなの、やだってば。大学生の僕が保育園の子供の、それも女の子の制服なんて着られないってば。駄目だって、そんな無理に立たせないでってば……」

脇の下に手を差し入れて強引に立たせようとする皐月に対して、葉月は椅子の肘掛けを握って身をすくめる。

「暴れちゃ駄目でしょ、葉月ってば。んとに聞き分けのない子なんだから。いい加減、おとなしくなさい！」

皐月が語気を荒げると共に、抵抗もむなしく、力尽くで肘掛けから両手を引き離され、葉月は強引に床に立たされてしまう。

そこへ、横合いから、たしなめるような園長の声が飛んできた。

「駄目ですよ、御崎先生。子供というのは、叱ってばかりだと萎縮してしまうから、もっと優しく接してあげなきゃいけませんね。それに、先生方には弟さんのことを葉月ちゃんと呼んでいただくことにしたのですから、御崎先生もそれにならっていただかないと。葉月ちゃんはお姉さんのことを御崎先生、御崎先生は弟さんのことを葉月ちゃんと呼ぶ。お互い様なんですから、保育園にいる間や通園の途中はちゃんと決まり事を守ってください。他の園児たちや先生方の手前、しめしがつきませんからね」

「申し訳ありません、園長先生のおっしゃる通りです。――じゃ、葉月ちゃん、今着てるお洋服を脱ぎ脱ぎしましょうね。ううん、大丈夫。葉月ちゃんは何もしなくていいのよ。先生が脱がせあげるから、葉月ちゃんはじっとしていればいいの。少しの間だもの、お利口さんの葉月ちゃんは先生の言うことをきけるよね？」

園長の言葉にわざとのような大げさな仕草で恭しくお辞儀をしてみせ、皐月は一瞬、弟が小さかった頃のことを思い出すかのようにすっと目を閉じてから、面倒をみている園児に接する時と変わらないほど優しげな声で言って、葉月が着ているシャツの第一ボタンに指をかけた。

「だから、やだってば！」

悲鳴じみた声をあげて、葉月は皐月の手を振り払おうとする。

けれど、相手は、体が自分よりも一回り大きい上に、合気道の有段者だ。抵抗しようとする体の動きの一つ一つがいとも簡単に封じられ、手足の関節を逆に抑えこまれて、気がついた時には体の自由をすっかりを奪われてしまっていた。

そうしている間にも、園長が、葉月を採用した理由を淡々とした口調で話し始めていた。

「どんな仕事でもそうだけど、学校で習っている時と実際に現場に立った時とでは、考えられないほどの違いがあるものなのよ。特に、うちみたいに小さな子供相手の仕事だと尚更その傾向が強いわね。いくら大学や短大で幼児心理学とか幼児教育論を履修したとはいっても、それは、結局のところ、大多数の平均的な子供たちの行動を大雑把に記述しただけのものにすぎない。それに対して、一人一人の子供たちというのは、私たちが思ってもみない突拍子もない行動を取るものなの。言い換えれば、一つ一つの突拍子もない行動をならして平均化して理想化したものが教科書に書いてある内容だということになるわね」

葉月に対するそれまでの子供扱いが嘘みたいな、まるで大学で講義でもしているかのような園長の口調。

「理想に燃え使命感に燃える新人の保育士さんたちを、毎年、ひばり保育園も迎え入れています。だけど、なんの問題もなく仕事に馴染んでゆく保育士さんはごく稀れ。いいえ、程度の差こそあれ、教科書で習ったのと現場で立ち向かう現実とのギャップに悩まない保育士さんなんて一人もいないと言った方が正確でしょうね。――私たちの仕事は、第一に、子供たちを預かって保護者の代わりに無事に保育することだけど、それだけじゃないの。私たちには、ギャップに悩む保育士さんたちを励まし、きちんと子供と接することができるよう導く使命もあるんですよ。特に、園長である私や、今年度から主任になってもらった御崎先生みたいな人にはね」

そこまで言って、園長は静かに口を閉ざした。

だが、体の自由を奪われ、気がつけば皐月の手で綿シャツとスラックスを脱がされてしまった葉月には、園長が何を言わんとしているのか、まだぴんとこない。

要領を得ない顔つきの葉月をちらと見て、なにやらおかしそうな表情を浮かべた園長は、執務机をまわりこんでこちらに歩み寄って来つつ、再び口を開いた。

「ひばり保育園は今年も新しい保育士さんを採用しました。採用するかどうかを決める面接にあたって、成績も優秀だしやる気もあるし、この人なら大丈夫だと太鼓判を押したのは私です。でも、彼女も例外ではありませんでした」

分厚い絨毯の上をスリッパの音を響かせることもなく静かに歩み寄って来た園長は、綿シャツの下に着ていたTシャツも皐月の手によって剥ぎ取られんばかりになっている葉月の目の前で足を止めた。間近で見ると、園長も随分と体格が良く、身長も皐月とさして変わらないほどだということに今更ながら葉月は気がついた。

「彼女は短大を卒業するまで、父親以外には、男性と接する機会が殆どなかったそうです。幼稚園から短大まで女子校だった上、親類の中にも男の従兄弟は一人もいなくて、女の子ばかりだったと聞いています。そのせいでしょうね、短大の幼児教育科では男児と女児との差異も習った筈なのに、うちの保育園で実際に腕白盛りの男の子と接してみて、どう対処していいのかわからずに、四月の終わり頃にはすっかり自信をなくしてしまいました。……まぁ、もっとも、初めて接する男児の行動が自分の理解の範疇を超えていたということだけがその理由の全てというわけではないのですが……」

それまで淡々とした口調で話していた園長だが、不意に口ごもってしまい、顔が曇った。

「園長先生がおっしゃっているのは、遠藤弥生さん――遠藤先生のことよ」

右手で葉月の自由を奪い器用に左手だけでTシャツも脱がしてしまった皐月が、園長の言葉を引き継いだ。

「遠藤先生？　……遠藤先生がどうしたっていうの？」

六月の上旬に初めて顔を会わせた、マンションにいる間ずっと伏し目がちにしていた弥生の物憂げな表情が脳裏をよぎる。葉月は、今にも裸に剥かれそうになっている自分の置かれた状況も忘れ、ぎこちない動きで首を巡らせると、背後からおおいかぶさるようにして立っている皐月の顔をおずおずと見上げた。

「遠藤先生が卒業した短大、元々は女子ばかりだったんだけど、学生の数が減ってきたからって、男子学生の募集も始めたんだそうよ。それが丁度、遠藤先生が入学する年だったそうで、幼児教育科にも一人だけ男子学生が入ってきたんだってさ。それも、遠藤先生と同じゼミにね」

こちらも葉月に対する子供扱いはすっかりなりをひそめ、低い声でそう説明し始める皐月の口調は憎々しげだった。
「学生の間は何もなかったんだけど、遠藤先生、卒業した後うちの保育園にやって来て、園長先生がおっしゃったように、やんちゃ盛りの男の子の扱いに困って、それで、同じゼミにいたその男に相談したんだって。ま、男の子の行動原理を聞くには一番手近な存在だから、遠藤先生がそうしようと思った気持ち、私もわかるんだけど……」
そこまで言って、皐月も園長と同じく口ごもってしまう。
けれど、ぶるんと首を振ると、一度だけ大きく息を吸い込んで、感情を押し殺した声で皐月は続けた。
「そいつがとんでもないヤツでさ、相談を持ちかけた遠藤先生を言葉巧みに自分のアパートへ誘い込んで、でもって、狼藉に及んだのよ。……遠藤先生が暴れて大声で助けを求めたおかげで未遂に終わったんだけど、それが遠藤先生の心に大きな傷跡を残しちゃってさ」
「……」
思いもかけない皐月の説明に、葉月も言葉を失ってしまう。
「まさかそんなことがあったなんて知らない私は、遠藤先生の落ち込みようがあまりにもひどいから、御崎先生にお願いして事情を聞き出してもらったの。男の子の扱いがわからないってだけじゃ説明できないくらい、遠藤先生、それこそ、いつ保育園を辞めてもおかしくないような思い詰めた顔をしていたから。……でも、御崎先生のおかげでおよその事情はわかったものの、それでどうにかしてあげられるわけじゃなかった。それまでも男の子の扱いに悩んでいた遠藤先生は、それ以来、極度の男性不信に陥った上に、とうとうそれが高じて、保育園の中でも男の子が近づくだけで怯えるようになってしまったの」
一瞬しんと静まり返った部屋の中に、再び園長の声が微かな波紋になって広がってゆく。

「……で、でも……」
部屋を満たす重苦しい空気に耐えかねて、葉月が小刻みに震える声を絞り出した。
「そう。でも、だよね。でも、それは僕には関係ない話だ――あんた、そう言いたいんでしょ？」
まるで、短大時代に弥生と同じゼミだったその男が目の前にでもいるかのような冷え冷えした声で、皐月は葉月の胸の内を見透かしたかのように言った。
「だけど、関係ないって思ってるのはあんただけ。実は、これが、おおいに関係してたりるんだな、可愛い可愛い葉月ちゃんと」
まわりの物を凍りつかせるような冷たい声から一転、皐月は今度は今にも笑い出しそうな声でそう言って、強引に葉月の右手を肩の上まで上げさせ、すっかりあらわになった脇の下をじっくり眺めまわすと、
「あんたってば、成長期なんてとっくに済んでる筈なのに、声は高いままだし、髭なんて私の産毛よりも薄いくらいだし、お肌もぷりぷりのつるつるだし、脇の下なんて、じっくり眺めてもまっちろいお肌が丸見えだし、体全体も、よぉく見ないとわからないほどしか無駄毛が生えてないし、ほんと、とてもじゃないけど大学生の男の子だなんて、いくら説明されても信じられない体してるよね。そりゃ、いくらなんでも胸が膨らんでるわけじゃないけど、それにしたって、ちょっと発育が遅れてる中学生くらいの女の子って感じで、アキバあたり

をうろついてるようなお兄さんにだったら却ってウケがいいんじゃないかってとこだもんね」
と、どこか嘲るような口調で続けた。
「き、急に何を言い出すんだよ……!?」
小さい頃の「可愛い」は男の子にとっても褒め言葉だが、同じ言葉でも、長じてから言われると、口にする者の言いようもあるのだろうが、いかにも馬鹿にされているようで我慢できないものだ。しかも、常日ごろからそんなふうに言われ続け、そんな体つきを自身がコンプレックスに感じている葉月にとっては尚のこと。
「あらあら、そんな怖い顔しなくてもいいじゃない。あんたのこと、可愛いって言ってるのは私だけじゃないんだから。遠藤先生だって、初めて見たあんたのこと、『可愛らしい妹さんですね。中学生ですか？』って私に言ったんだから。でもって、その後、遠藤先生はこう言ったのよ。『女の子はいいですよね。でも、男の子は世の中から一人残らずいなくなっちゃえばいいんです。もちろん、大人の男もいなくなっちぇばいいけど、子供もそう。保育園で預かっている男の子にしたって、いつ暴れ出すか知れたものじゃないし、それに、今は可愛らしげにおしっこを出すしか能のないおちんちんだって、大人になったら、いやらしくて汚らしい液体を出すようになるに決まってる。だから、男の子も大人の男も、みんないなくなっちゃえばいいんです！』ってね」
手首をねじりあげるようにして上げさせていた葉月の右手を元に戻しながら、感情の起伏を押し殺すようにして皐月は言った。
「極度の男性不信に陥った遠藤先生を励ますためにマンションへ招待したのはいいけど、そこに弟がいたんじゃまずいかなと思って一瞬はあんたのことを妹だと思わせとこうかとも考えたんだけど、でも、いつまでも騙し通せるわけなんてないし、騙してたことがわかったら却って事態が悪化しちゃうかなって考え直して、本当のことを言ったのよ。――でも、意外なことに、遠藤先生、あまり取り乱さなかった。玄関からダイニングルームへ行く途中に自分の部屋から出てきたあんたと顔を会わせただけっていうほんの短い間でも、大学生の男を目の前にしたんだから、もっと大騒ぎするんじゃないかと思ったけど、こっちが拍子抜けするくらい平気な顔してたのよ、遠藤先生」
皐月は、それまで葉月の関節を締めあげていた右手の力を緩め、なんとも表現しようのない笑みを浮かべた。
「ええとね、ダイニングルームであれこれ話してさ、逆に私への気遣いもあってのことだろうけど、ほんの少し遠藤先生が笑顔になった頃を見計らって、あんたのことを説明したわけよ。ああ見えても、あの子、本当は弟なんだよって。でも、遠藤先生、騒いだりしなかった。それどころか、はにかんだ様子で『あんな子ならいいですね。男の子でも、あんな子だったら私、近くにいても怖くないかもしれません』って言ったのよ。驚いた私は『でも、あいつだって男なのよ？　見た目はあんなふうだけど、いつ狼に変わるかしれない男どものの仲間なんだよ？』って念を押したんだけど、私の言うことなんてまるで聞こえないふうで、『だって、ちっともそんなふうに見えないじゃないですか。さっき廊下で顔 を会わせた時なんて、弟さんの方が恥ずかしそうにおどおどしちゃって。顔を真っ赤にしてぺこりと頭なんかさげちゃって。だから、なんだか、弟さんとだったら大丈夫みたいな気がして仕方ないんです』とかなんとか言っちゃってさ」

その時の状況を思い出したのか、皐月はくすりと短く笑った。
「考えてみれば、遠藤先生、保育園での最初の自己紹介で、小池徹平のファンだとか言ってたのよね。あんた、どことなく面影がないわけじゃないし。そりゃ、ま、あんたと比べれば徹平の方がよほど男っぽくてしっかりしてるように見えるけど、基本的なラインは同じかもしれないよね。それに、あんただって、遠藤先生みたいな楚々とした感じの女の人が好きなんでしょ？　一目でわかったわよ。他の先生方と初めて顔を会わせた時はただ恥ずかしがるだけだったのに、遠藤先生を初めてお招きした時は、あんた、ほんとに顔を真っ赤にしてたもん。人見知りが激しいところにもってきて、ずばり好みの女性と顔を会わせて、あんた、どうしていいかわからなくておどおどするだけだったんでしょ？　そんなところも遠藤先生の保護欲を掻き立てちゃったんでしょうね。保育士になるくらいだから、遠藤先生も私と同じくらい子供好きに決まってる。もともと子供好きで保護欲とかが強い女性があんたみたいな子をみたら、そりゃ、たまんないかもしれないよ。――で、あんたも満更じゃないんでしょ？」
皐月は、最後の方を強く念押しするように強調して言った。
葉月の顔がかっとほてり、すっかり裸に剥かれた上半身も赤く染まった。
それを見た皐月は、葉月の背中をぴしゃりと叩いて強い調子で断言する。
「だから、あんたなのよ。この役を任せられるのは、あんたしかいないのよ」
「つまり、そういうことです。これでわかってもらえたましたね？」
園長が穏やかな声で言った。

「……わかりません。つまりとか、そういうことだとか言われても、僕にはさっぱりわかりません。何なんですか、その、僕にしか任せられない役って？　それが、保育園の制服と関係あるんですか？」
弥生に対する憎からぬ想いを見透かされた葉月は、自分の置かれた立場がどんなものなのかまだ理解できない苛立たしさとが相まって、少しばかり逆切れ気味に唇を尖らせた。
「やれやれ、これだけ説明してもまだわかんないわけ？　あんたってば、優柔不断で気が弱いだけじゃなくて勘も鈍いんだね。もっとも、遠藤先生にしてみりゃ、そういうとこがいいのかもしれないけどね。自分が一緒にいてあげなきゃ何もできない頼りない葉月ちゃんって感じでさ」
皐月はひとしきり冷やかし気味に言って、すぐに真顔になった。
「じゃ、説明してあげる。あんたにしか任せられない重要な役っていうのが何なのか。――遠藤先生は極度の男性不信に陥っている。ううん、不信というより、恐怖症と言った方が正しいかしらね。だって、おもらしでパンツを汚しちゃった男の子に近づくのも怖々だし、やっとのことパンツを脱がせることができても、おちんちんが見えた途端、顔をひきつらせて今にも悲鳴をあげだしそうになるくらいなんだから。これが幼稚園だったら夏休みの間にじっくり時間をかけて精神的なリハビリをすることもできるんだけど、うちは保育園だから、ちゃんと決まった夏休みなんかなくてさ。ま、小学校や中学校が夏休みの間は自由登園になってて実際に登園してくる園児は普段の半分とか三分の二くらいだから、その間に先生方には順番に休みを取ってもらってるけど、どんなにやりくりしても、せいぜい一週間ってとこ。そんな短い期間じゃ遠藤先生の心の傷が癒えるわけないってことは、あんたにもわかるわよ

ね。今は定期的にカウンセラーのところに通いながらなんとかして仕事を続けてるけど、いつどうなっちゃうか知れたものじゃないのよ、本当のところ」
そこまで言って皐月は溜息をついた。が、じきに思い直したかのように説明を続ける。
「でも、さっきも言った通り、そんな遠藤先生にとってもあんただけは別なのよ。あんたが男の子だってわかってもあまり怖がる様子もない。だから、あんたにはなるべく長い時間、遠藤先生と一緒にいてあげて欲しいの。でもって、あんたっていう男の子と一緒にいても大丈夫だってことを実感してもらって、遠藤先生に自信を取り戻してもらいたいのよ。遠藤先生に毎日の仕事を続けてもらいながら精神的なリハビリを施すには、そんな方法しかないの。それが、前もって園長先生と相談して決めた方法なのよ」
「……けど、それでも、僕が保育園児の制服を着る必要なんてないじゃない。アシスタントとして遠藤先生の仕事を手伝えば、それでいいんじゃないの？」
一通りの説明を聞いて、おおよその事情は葉月にもわかった。それはわかったけれど、でも、まだ説明のつかない部分が残っているのは事実だ。
「それじゃ駄目なのよ。確かに、遠藤先生にとって、あんたは他の男とは違う。でも、遠藤先生の精神状態は刻々と変化するのよ。普段の比較的落ち着いている時はあんたと一緒にいても大丈夫だったとしても、いつ精神状態が昂ぶってパニックを起こすかわからないの。そんな状態になるのは稀れでしょうけどってカウンセラーの先生は園長先生に説明してくださったけど、その可能性が全くのゼロというわけじゃない。その時、男のあんたがすぐそばにいたりしたら、それこそどうなるか想像もつかないの。下手したら、パニックを起こした遠藤先生、自分で自分を傷つけちゃうかもしれない」
皐月は大きく首を振った。
「そんなことにならないよう、遠藤先生と一緒にいてもらうあんたに、保育園の女の子の格好をしてもらうことにしたのよ。遠藤先生の精神状態が万が一にもひどく昂ぶっちゃった時に、目の前にいるのが女の子だって言い聞かせるために。遠藤先生の近くには男なんていませんよ。大人の男も園児の男の子も一人もいませんよ。そばにいるのは可愛い制服を着た女の子ですよ。そんなふうに説得するために。そうやって遠藤先生の心を鎮めながら、落ち着いたら、あんたが男の子だってことを改めて思い出してもらう。そんなことを何度も繰り返して、男の子と一緒にいても大丈夫なんだって自信を取り戻させる。そうして、男の子なんてちっとも怖くないんだってことを心に刻みつけてもらう。――ここまで説明すれば、勘の鈍いあんたでもわかるよね？」
「……」
念を押すみたいにして同意を求める皐月に、けれど葉月は一言も応えられない。
「でも、そのお顔を見ると、まだ納得できていないみたいね。うふふ、葉月さんが何を言いたいのか、私にもわかるわよ。『けど、女の子の格好をするにしたって、わざわざ保育園児の真似までしなくてもいいじゃないか。男の子だと思わせなければいいんだったら、遠藤先生のアシスタントとして、女性の保育士の格好をすればそれでいいじゃないか。なのに、こんな、僕の体に合わせた大きな園児服まで用意するなんて。どうせ女装するにしても、年相応の格好で女装させてくれればいいじゃないか』――葉月さん、そう言いたいんでしょう？」
葉月の表情を読み取った園長が、これ以上はないくらい真剣な表情で言った。

園長が口にした『女装』という言葉に思わず頬を赤らめながら、葉月が弱々しく頷く。
それを見た園長が、一度だけ小さく首を横に振って応じた。
「でも、それじゃ、根本的な解決にはならないのよ。葉月さんに女性アシスタントとして遠藤先生と一緒にいてもらって、それで仮に遠藤先生が心を開くことになっても、それだけでは、『互いに好意を持っている御崎葉月さんという個人に対して』遠藤先生が心を開いたということでしかないの。けれど、それでは、なんの解決にもなっていません。遠藤先生には、保育園にいる全ての男の子、そして、世の中にいる全ての男性に対して心を開いていただかなければならないんです。そうでないと、保育園で園児の面倒をみることも難しく、園児の父親とは保護者面談もできないということになってしまいます。だから、葉月さんという特定の個人だけに心を開くような不完全な結果なんて、なんの解決にもならないの」
一息でそこまで言って、園長は、葉月の反応を確認するかのように言葉を切った。
が、あまりにも真剣な園長の口調に気圧されたのか、葉月は無言のままだ。
待つほどもなく、再び園長の口が開いた。「だから、葉月さんには女の子の園児の格好をしてもらう必要があるんです。実は男性だけど女の子そのままの格好をした葉月さんのお世話を続けるうちに、男の子も女の子も思っていたほどの違いなんてないじゃないかと遠藤先生も気づいてくれるに違いありません。相手が女の子のつもりで面倒をみていたら、結果として男の子の面倒をみていた。その事実を受けとめることで、遠藤先生に自信が戻ってくることを私たちは期待しているの。だからこそ、葉月さんには、大学生が務める臨時アシスタントの御崎葉月さんではなく、ひばり保育園に通う女の子の御崎葉月ちゃんになってもらわないといけないのよ」
「この役、最初は、うちの保育園に通っている本当の園児に任せることも考えたのよ。でも、事情を全部わかった上で男の子なのに女の子のふりをしてくれる保育園児なんていないわよね。それに、めぼしい男の子に強引に女の子の格好をさせたとしても、親御さんから苦情が来るのは目に見えているし。だから、あんたしかいないの。この役にふさわしいのは、葉月、あんたしかいないのよ。こんなに言ってもまだわかんないって言うなら、もう姉弟の縁を切るからね」
園長の言葉が終わるか終わらないかのうちに、葉月の耳元に口を寄せて皐月が決めつけた。
「……そ、そんな……だいいち、急にこんなこと言われても……」
二人に対して言い返す言葉が咄嗟には出てこない。おずおずと口を開きかけた葉月だが、途中で唇の動きが止まってしまう。

「さ、難しいお話はこのくらいにして、可愛い制服を着てみようね。葉月ちゃん、優しいお顔をしてるから、ピンクのセーラーワンピ、絶対に似合うわよ。他の子供たちはブルーのセーラーワンピだけど、葉月ちゃんだけ特別にピンクなのよ。嬉しいでしょ？」
唇を震わせ長い睫をしばたたかせるばかりの葉月に向かって、再びがらりと口調を変えた園長が、わざとのような優しい声で話しかけた。そうして、すっと両手を伸ばして、葉月が穿いているスラックスのボタンに指をかける。
「いろいろお話をしている間に、御崎先に上のお洋服をみんな脱ぎ脱ぎさせてもらったみたいね、葉月ちゃん。じゃ、次は私がおズボンを脱ぎ脱ぎさせてあげるから、いい子でおとなしくしているのよ」

「や、やめてください。ぼ、僕、小さな子供のふりなんてできません。保育園に通う女の子になんかなれっこありません！」
園長の手から逃れようとして腰を退きながら、葉月はなけなしの気力を振り絞って叫んだ。が、葉月の口を衝いて出たのは、叫び声というよりも、どちらかというと悲鳴に近かった。
「なれっこありませんですって!? でも、なってもらうしかありませんよ。ひばり保育園の代表者たる私と、御崎葉月さんとの間で、もう雇用契約を交わしてあるんですから。ついさっき自分の手で雇用契約書に署名をして拇印を押したという事実を忘れたなどとは言えませんよね？」
葉月の悲鳴じみた抗弁を耳にするなり、園長の口調が再び一変した。これまで聞いたことのないような冷ややかな声だ。
「で、でも、あれは……あれは、どんなことをするのか前もって聞かせてもらってなかったから……」
心臓を冷たい手で鷲づかみにでもされるような思いにとらわれながら、葉月は金切り声をあげた。
「あら？ どんな仕事なのかは、簡単なアシスタントだという説明を御崎先生から前もって聞いてもらっている筈ですよ。園児と同じ制服を着用する必要があるとか、園内では女の子として過ごすとか、そういった細々したことは聞いていないかもしれませんけれど、それは、こちらがわざとか隠していたわけではありません。そちらから細部の説明を求められれば、いつでも説明できるよう準備していました。確認されなかったそちらの落ち度と言うしかありませんね。――あと、念のため付け加えておきますけれど、最近は契約を交わした後であれこれと追加条件を出したり勝手に契約を解除しようとする人が増えてきているようですので、そんなことにならないよう、契約書には連帯保証人の名前を記載させていただくことにしています。葉月さんの場合、お父様とお母様の名前が連帯保証人として契約書に記載されています。当方の承諾なしにそちらが一方的に契約を解除した場合、お二人にご迷惑がかかることになります。お父様は県立高校の校長先生で、お母様は市立小学校の教頭先生。尊敬される立場にあるお二人にご迷惑をかけることは、葉月さんとしても本望ではありませんわよね？」
「そ、そんな……」
葉月は唇を噛みしめ、背後に佇む皐月の顔を見上げた。
「姉さんからも何か言ってよ。父さんや母さんに迷惑がかかるだなんて、そんなの……」
だが、そう言う葉月に対して皐月から返ってきたのは予想外の言葉だった。
「なにを馬鹿なこと言ってんのよ、葉月ったら。あんたがちゃんと仕事をこなせば契約違反にはならないんだから、父さんや母さんに迷惑がかかることなんてないじゃない。それとも、最初から契約違反する気満々なわけ？」
皐月はこともなげにそう言うと、背中越しに葉月の顔を見おろすようにして、こんなふうに付け加えた。
「だいたい、せっかく園長先生もあんたのことを気に入ってくださったのに、それに対して文句つけるなんてどうかしてるんじゃない？ 考えてもごらんよ。目的は遠藤先生の心のリハビリってことになってるけど、それがきっかけになって、憧れの遠藤先生とお近づきになれるんだよ？ 先生の方が二つ年上だけど、あんたみたいな優柔不断な男、年上の女性に引

っ張ってもらった方がなにかとうまくいくに決まってるんだから、二人がおつきあいすることになっても、私は反対なんてしないわよ。ううん、それどころか大賛成。可愛い弟がどっかの得体の知れない女に引っかかるんじゃないかって心配しなくてもいいんだから。私が主任になった年に入ってきた新人の優秀な保育士さんが引っ込み思案の弟とつきあってくれるんだもの、姉さんとしちゃ大歓迎よ。それに、あんた、研究職に進みたいみたいだけど、教員免許も取るんでしょ？　だったら、四年生になったら保育実習を履修しなきゃいけないんだけど、それを前もって保育園で経験できるんだなんて、願ったりかなったりじゃない。それも、園児としての経験を積めるんだから、今度いざ実習が始まったら子供たちの気持ちが手に取るようにわかって、いい成績を狙えるわよ、きっと。それに、保育園で大勢の子供たちと生活するうちに、あんたの優柔不断で気の弱いところも治るかもしれないし。――ほら、こうして考えてみると、いいことばっかだよ。いつまでもぶうたれてないで、この計画を考えてくれた園長先生と私に感謝するのが本当じゃないかしらね？」

しれっとした顔でそんな言葉を口にする皐月に、葉月はもう何も言い返せない。

言葉を失い唇を噛みしめる葉月に向かって、改めて優しい保育士の顔になった皐月が、あやすように言い聞かせる。

「さ、わかったら、園長先生にズボンを脱ぎ脱ぎさせてもらおうね。ズボンを脱ぎ脱ぎさせてもらって、可愛い制服を着せてもらおうね。ほらほら、お尻をそんなに後ろに退いたりしないの。それに、ほら、そんなに脚を突っ張ったりしちゃ駄目だってば」

園長の手から逃れようとする葉月の体をぐいっと前方に押し出した皐月は、絶望的な表情を浮かべる弟の耳元に、家の中では一度も聞いたことのない甘ったるい声で囁きかけた。

【四】

園長の指先が優雅に動くと同時にボタンが外され、微かな音をたててジッパーが引きおろされる。

頭半分ほど背の高い皐月に背後から抱きすくめられ体の自由を奪われた葉月には、その場から逃れる術はない。

きちんと折り目のついていたスラックスがシワまみれになってぱさっと落ち、葉月の足首に絡みつく。

「あら、葉月ちゃん、トランクスだったのね。可愛いお顔してるから、てっきりブリーフだと思っていたのに、ちょっと予想外だこと。さ、ズボンの後は、そのトランクスを脱ぎ脱ぎしましょうね。大きなお兄ちゃんが穿くトランクスなんて、可愛い葉月ちゃんにはちっとも似合わないんだから。大人のトランクスなんてバイバイしちゃって、可愛いアニメのパンツを穿こうね。ほら、シナモロールのパンツよ。それとも、葉月ちゃんはキティちゃんの方が好きかな」

スラックスを引きおろした園長は、その下から現れたトランクスを目にするとひょいと肩をすくめ、皐月が執務机の横に置いた紙袋を手元に引き寄せて右手を無造作に突っ込み、しばらく中の様子を探ってから、バックプリントが愛くるしい女児用のショーツを二枚まとめ

てつかみ上げ、それを葉月の目の前に突きつけた。
「そんな……下着もだなんて、そんな……」
綿とポリエステルの混紡だろう、見るからに柔らかくて吸水性の良さそうな純白の生地でできていて、ウエストと股ぐりのゴムのせいで、ぽんと床に投げ出せばくしゅくしゅ丸まってアニメキャラのバックプリントが隠れてしまいそうな児用ショーツ。そんな恥ずかしい下着を目の前に突きつけられて、葉月は、あえかな呻き声を漏らしてしまう。

「そんな、じゃありませんよ。ピンクのセーラーワンピースを着ている可愛らしい女の子がその下におっきなお兄ちゃんが穿く男物のパンツを穿いていたりしたら、その方がよっぽどおかしいでしょ？　制服のスカートが風で捲れちゃって、下のパンツが見えたらどうするつもり？　葉月ちゃんが本当は男の子だって知っているのは私たちや遠藤先生と他の先生方だけで、子供たちには葉月ちゃんのこと、体は大きいけど事情があってもういちど保育園からやり直すことになった女の子だって説明するつもりなのよ。なのに、スカートの下から男物のトランクスが見えちゃったりしたら、子供たちだって変に思って、葉月ちゃんの正体をあれこれ詮索するかもしれないわね。そしたら、本当は大学生のお兄ちゃんが保育園の女の子の格好をしてるんだってことがばれちゃうかもしれない。それでもいいの？　――葉月ちゃんはお利口さんだから、スカートが風で捲れ上がらないように注意するかもしれないわね。でも、困ったことに、うちの保育園で預かっている男の子は腕白揃いで、すぐにスカートめくりなんかして女の子を泣かしたりしてるのよ。ほんと、困ったことよね？」
口ではわざとらしく困った困ったと繰り返しつつも、その実まるで困ったふうもなく、手にしたショーツをひらひら振ってみせながら、園長は唇の端を吊り上げてにっと笑った。
「でも、でも……」
葉月は声を震わせて身をよじるのだが、皐月の手に阻まれて、その場から逃げ出すことはかなわない。
「だから、ほら、ちゃんと女の子のパンツに穿き替えようね。葉月ちゃん、シナモロールとキティちゃん、どっちがいい？　好きな方を穿かせてあげるから先生に教えてちょうだい」

園長は、右手で二枚まとめてつかみ持っていたショーツを左右の手に一枚ずつ持ち直し、これまで以上に葉月の顔に近づけた。
「……」
どちらがいいか決めなさいと言われて、けれど、選べるわけもない。
「そう。葉月ちゃん、どっちも大好きだから、どっちがいいか、すぐには決められないのね。じゃ、いいわ。先生が選んであげるから、残りは、お風呂上がりの時にでも御崎先生に穿かせてもらいなさい。――うーんと、最初はこっちがいいかな」
葉月が押し黙ってしまった真意をわざと取り違えてみせ、園長は少し考えるふりをしてから、シナモロールのバックプリントが付いたショーツをさっと振り上げた。
「よかったね、葉月ちゃん、園長先生に選んでもらえて。じゃ、最初はシナモロールのパンツね。でもって、お家に帰って、おねむの前にお風呂に入って、その時にキティちゃんのパンツを穿かせてあげるわね。今は夏だから、葉月ちゃん、びっしょり汗をかいて、せっかく園長先生に穿かせてもらったシナモロールのパンツを濡らしちゃうに決まってる。だから、お風呂上がりには新しいパンツにしないとね」
葉月の両手を抑えつけたままの姿勢で、園長が持っている女児用ショーツと葉月の秘部を覆い隠しているトランクスとを二度三度と見比べながら、皐月が笑いを含んだ声で言った。
「じゃ、お兄ちゃんのパンツを脱ぎ脱ぎしようね。大好きなシナモンロールのパンツを穿けるんだもの、葉月ちゃん、おとなしくしてられるよね」
皐月が執務机の上に置いたセーラーワンピの上に二枚の女児用ショーツをそっと重ね置いて、園長が葉月のトランクスに指をかけた。そうして、葉月の口を衝いて出る
「やめて！　パンツ、僕のパンツを脱がしちゃやだってば！」
という悲鳴じみた哀願の声などまるで聞こえぬかのように、そのまま、さっと引き下げてしまう。

それまで葉月の下腹部を覆っていたトランクスは、園長の手の動きに合わせ、あっという間に膝の下まで引きおろされた。
と同時に、園長の口から、くすっという笑い声が漏れ聞こえる。
「葉月ちゃん、お顔だけじゃなくて、こっちの方も随分と可愛らしいのね。やっぱり、トランクスからお子ちゃまパンツに穿き替えさせてあげた方がお似合いね、これじゃ」
「ほんと、園長先生のおっしゃる通りね。顔は童顔だし、無駄な体毛は生えてないし、その上、ここも子供の頃とちっとも変わってないなんて。これが大学生の体だなんて、実際にこの目で見ても信じられないくらい」
あらわになった葉月の下腹部を無遠慮に眺め回しながら笑い声を漏らす園長に、皐月がわざとのような溜息混じりの声で同意した。
葉月が小学校の四年生になるまで、皐月が葉月をお風呂に入れていた。さすがにそれ以後は葉月が恥ずかしがるようになったせいで一緒に入浴することもなくなったため下腹部を目にすることはなかったものの、久しぶりに直視した葉月の股間は、最後に一緒に入浴した時と比べて、殆ど成長していなかった。
皐月の手で自由を奪われ園長の手でトランクスを引きおろされたことに起因する怯えのせいで股間で小さく縮こまってしまっているペニスは、極端に貧相というほどではないにせよ、

同年代の青年のそれと比較して一回りほどは小さく見えるし、その上、小学校の頃と変わらず、皮をかぶったままだ。下腹部の肉づきも、青年らしく腹筋が発達しているわけではなく、平均よりも張り気味の腰骨と凹み加減のお腹まわりのせいで、少年というよりも少女めいた印象が強い。ただ、小学校の頃と違って下腹部には飾り毛が生えてはいる。生えてはいるのだが、けれど、それにしたところが、黒い茂みと言うにはほど遠く、どうにかすると産毛と見紛うほどの短く細い毛が、ほんのお情けみたいに、まばらに生えているだけだ。

久しぶりに目にする可愛い弟の股間をもっとよく見ようとしてか、皐月が更に前かがみになった。同時に、葉月の体の動きを封じている力が一瞬ふっと緩む。

普段は優柔不断で何事にも決断の遅い葉月だが、この時ばかりは違った。皐月の両手から力が抜けるのを感じ取った葉月は、日ごろからは考えられないほど俊敏な動きをみせて身をよじり、かろうじてながら、いましめを解くことに成功したのだ。

「あ！」

「駄目よ、葉月ちゃん！」

皐月と園長の声が重なった。

その直後、葉月がたっと駆け出す。

駆け出した葉月はそのままドアに向かって走り去る。……走り去るつもりだったが、必死の思いの脱出劇は、あっけないくらい簡単に幕を閉じてしまう。

足首に絡みついたスラックスと、膝の下まで引きおろされたトランクスとに両脚の自由を奪われ、二歩も進まぬうちに、葉月は大きな音を立てて床に尻餅をついてしまったのだ。毛足の長い絨毯のおかげでさほど痛みは感じなかったものの、裸に剥かれた股間をさらして床に尻をつく自分の惨めな姿に、葉月の胸が言いようのない屈辱と羞恥に満たされる。

「おとなしくしてなさいって言ったのに、葉月ちゃんたら、先生の言いつけも守れない聞き分けの悪い子だったのね。でも、考えてみたら、葉月ちゃんはまだあんよも上手にできないほど小っちゃな子だもの、おとなしくしてられないのも仕方ないかな」

一瞬は驚きの声をあげた園長だが、葉月が床に尻餅をつき膝を立て気味にして両脚をだらしなく広げ、のろのろと顔を上げる様子を見て取ると、薄笑いを浮かべて揶揄するように言った。

それに対して、皐月が大げさに頷いてみせ、こちらもやはり少しからかい気味の口調で言う。

「園長先生のおっしゃる通りね。葉月ちゃん、まだあんよも上手にできない小っちゃな子供だったんだよね。そんな小っちゃな子なのに恥ずかしい所にいやらしい毛が生えてるなんて、どう考えても変なんじゃないかなぁ。いくら薄くても、小っちゃな子供のあそこに毛が生えてるなんておかしいよ。他の子供たちに見られてからかわれちゃうかもしれないから、ちゃんとしてあげないと葉月ちゃんが可哀想ね。いいわ、先生がちゃんとしてあげる。葉月ちゃんのあそこ、小っちゃな女の子の葉月ちゃんのお似合いになるよう、つるつるのすべすべにしてあげる」

トランクスとスラックスに足を取られて尻餅をついてしまったことを口実に、園長も皐月も、ますます葉月のことを子供扱いしてやまない。

（こんなことだったら下手に逃げようとしなけりゃよかったかもしれない）葉月は思わず下

唇を噛みしめたが、大学生の男の子の身で女児用のショーツを穿かされそうになったのだから、おとなしくしていろというのが無理な話だ。
「じゃ、園長先生、ちょっと準備してきますから、葉月ちゃんが勝手なことしないよう見張っていていただけますか。どうせ逃げ出すことなんてできないに決まってるけど、それでも懲りずに勝手に駆けまわってまた転んじゃったりしたら葉月ちゃんが可哀想ですから。それに、足をもつれさせてころんした拍子に応接セットでお顔を怪我でもしたら大変ですし。葉月ちゃん、可愛いお顔をしているくせに、男の子みたいに元気に駆けまわるのが大好きみたいだから、心配で心配で」
皐月は、いかにも聞き分けの良くないお転婆な女の子が勝手なことをして怪我でもしやしないかと案ずる保育士そのまま園長に向かって言い、くるりと踵を返して廊下に歩み出た。

【五】

しばらくして園長室に戻ってきた皐月は、プラスチック製の小ぶりの洗面器や陶器のソープカップと、柔らかそうなソープブラシ、吸水性の良さそうなフェイスタオルに加え、どきどきするような鋭い刃の付いた剃刀、それに、長さ1メートル弱くらいの厚手の布地といった様々な物を両手に抱え持っていた。
「ま、まさか……冗談だよね？　冗談なんでしょ、姉さん!?」
園長室を出て行く前に皐月が口にした言葉と、今、皐月が両手に抱えて持っている道具。それ等を考え合わせれば、皐月が何の準備をするために園長室をあとにしたのかは容易に想像がつく。葉月は、スラックスに足首を絡み取られ膝下にトランクスをまとわりつかせて、お尻を床にぺたんと落とし、両手を床について上半身だけを起こした姿勢で弱々しく首を振った。
「ほら、また、姉さんだなんて言ってる。園長先生から注意された筈よ、私のことは御崎先生って呼ばなきゃいけないって」
皐月はひょいと肩をすくめて言い、床に膝をつくと、まるで葉月に見せびらかすようにしながら、抱え持って来た道具を一つ一つ、わざとゆっくり葉月の体のすぐ横に並べていった。
「さ、用意はできたし、そろそろ始めようか。葉月ちゃんのあそこ、可愛い女の子パンツが似合うよう綺麗綺麗してあげる。――あっと、でも、その前に、絨毯が汚れないようにしとかないといけないね」
並べ終えた道具を更に一つずつ丁寧に指差し確認をしてから、皐月は、改めて気づいたかのように、丸めて持ってきた厚手の生地をさっと広げ、こちらもわざと丁寧な動作でぽんぽんと叩いてシワをとった。
「ああ、これ？　これは、おねしょシーツよ。うちで預かっている子でも、年少さんとか年中さんとかだとまだおねしょの治らない子がいるから、お昼寝の時に敷布団の上に敷いているの。葉月ちゃんのあそこを綺麗綺麗する時も、これを敷いとけば、石鹸やいやらしい毛やらで絨毯を汚さなくてすむからね。まだあんよも上手にできない小っちゃな葉月ちゃんのお尻の下に敷くのに、これほどお似合いの物は他にないわよね」

顔に怯えの色を浮かべつつこちらの様子をちらちら窺っている葉月の視線に気づいた皐月は、何度も繰り返しおねしょで汚れて幾ら洗濯しても落ちなくなってしまったおねしょシーツの上の薄いシミを指差してくすりと笑った。
「冗談なんでしょ？　そんなの、冗談に決まってるよね？」
他の言葉などまるで思い浮かばない。葉月は、惚けたように同じ言葉を何度も繰り返すばかりだ。
「ううん、冗談なんかじゃないわよ。だって、葉月ちゃんは遠藤先生に面倒をみてもらわなきゃ何もできない小っちゃな女の子になるんだもの。お転婆なくせにすぐにころんしちゃう、まだあんよも満足にできない小っちゃな子に。そんな女の子のあそこはつるつるじゃなきゃおかしいもの、御崎先生にちゃんとしてもらうのよ」
葉月の懇願などまるで無視してソープカップのシャボンをブラシで泡立て始めた皐月に代わって、葉月の足元に左右の膝をついた園長がなだめるように言った。
「違う。僕、女の子じゃない。僕、あんよもできない小っちゃな女の子なんかじゃ……」
「だから、何度も言ってるけど、自分のことは僕じゃないでしょ？　ついさっき、御崎先生のことを姉さんって呼んで叱られたばかりじゃなかったけった？　あんよもできない小っちゃい子なんかじゃないって言うけど、こんなに物憶えが悪いんじゃ、葉月ちゃんのことをおっきなお兄ちゃんだって思ってくれる人なんて誰もいないんじゃないかな」
やれやれとでもいうような口調で園長にそう言われると、葉月は途中で言葉を飲み込むしかなかった。
「そう、それでいいのよ。さ、御崎先生がシャボンの用意をしている間に、葉月ちゃんも恥ずかしい所を綺麗にしてもらう準備をしちゃおうね」
唇を微かに「へ」の時に曲げる葉月に向かって園長はさもおかしそうに言い、葉月の足首を絡め取っているスラックスに手を伸ばした。
思わず葉月は床についた両手に力を入れて後ずさりしかけるのだが、園長の手で足首をつかまれてしまっては、それもかなわない。
「聞き分けのないお転婆さんだと、ボーイフレンドもできなくなっちゃうわよ、葉月ちゃん。ひばり保育園には格好いいお兄ちゃんたちがたくさんいて、可愛い葉月ちゃんならすぐにボーイフレンドができると思うけど、お転婆が過ぎると、男の子が一人も寄ってきてくれなくなっちゃうのよ。そんなの、寂しいよね。だから、お利口さんでいようね。――はい、じっとしててちょうだい。次はパンツだからね」
園長はもうすっかり葉月のことを保育園の新入園時だと決めてかかったかのように言いながらスラックスを足首から自分の手元にたぐり寄せると、続いて、膝の下に引っかかっているトランクスも手早く脱がせた。
これで、葉月が身に着けているのは、地味なグレイの靴下だけになってしまう。
「はい、いい子ちゃんね。お利口さんだから、そのままじっとしているのよ」
剥ぎ取ったスラックスとトランクスを部屋の隅に無造作に放り投げた園長は、葉月の両方の足首を一つにまとめて右手でつかむと、そのまま高々と差し上げた。
それまで床に両手をついて上半身だけは起こしていた葉月だが、園長の手で力まかせに両脚の足首を差し上げられたせいで、たまらず、肩を床につけて仰向けに寝そべった姿にさせられてしまう。しかも園長はまるで遠慮なしにますます右手を高く差し上げるものだから、

とうとう最後には、赤ん坊がおむつを取り替えてもらう時そのままの姿勢を強要される羽目になった。

屈辱に耐えきれず、ぎゅっと瞼を閉じる葉月。

だが、次の瞬間、閉じた筈の瞼が、はっと大きく見開いた。お尻から伝わってくる、これまで経験したことのない感触のせいだ。

しばらく逡巡してから、葉月は微かに首を曲げ、思わず開けてしまった目を自分の下半身に向けた。

大きな瞳に映ったのは、空いた方の手でおねしょシーツをお尻の下に敷き込んでいる園長の姿だった。そう、園長は、右手で葉月の足首を高々と差し上げたまま、左手でおねしょシーツを葉月のお尻の下に敷き込み、シワを取って乱れを整えていたのだ。

お尻から伝わってくるのは、おねしょシーツの表面の妙にすべすべした防水生地の感触に違いない。物心ついてからは一度も味わったことのない、奇妙な懐かしさと胸をこがしてやまない羞恥とが混じり合った、他に例えようのない甘酸っぱい屈辱感に満ちた肌触り。

「あ……」

おねしょシーツの防水生地のいいようのない柔らかな感触に、呻き声とも喘ぎ声ともつかぬ熱い吐息が葉月の口から漏れる。

「気持ちいいのね？ おねしょシーツの肌触りがとっても気持ちいいんでしょ、葉月ちゃん？」

あえかな喘ぎ声を耳にした園長は、おねしょシーツの乱れを整え終え、葉月の足を床におろしながら、ぞくぞくするような甘い声で囁きかけた。

「そ、そんな……おねしょシーツの感触が気持ちいいだなんて、そんな……」

園長の囁き声に、葉月は激しく首を振った。肩に届くか届かないかの髪が絨毯にこすれて、はらりと頬にかかる。

「そう？ 気持ちよくないの？ ――ま、いいわ。葉月ちゃんがそう言うなら、今はそういうことにしておいてあげる。でも、いつか、本当の気持ちを口にすることになるのよ、葉月

ちゃんは。きっと、近いうちにね」
園長は含み笑いを漏らしてそう言い、傍らでシャボンを泡立てている皐月に向かって目配せをした。
それに対して皐月もそっと目配せを返すと、葉月の下腹部のすぐ横に場所を移して、きめの細かい泡をたっぷり含んだソープブラシをこれ見よがしに持ち上げた。
「ん……」
皐月がソープブラシを下腹部に押し当てると同時に、葉月の形のいい唇から再び熱い吐息が漏れる。

「さ、葉月ちゃんのここ、綺麗にしようね。じきに、おっきなお兄ちゃんのお股を小っちゃな女の子のお股に変えてあげるからね」
皐月は、葉月の下腹部に押し当てたブラシを丹念に動かし、ひくひく震える肌に純白の泡を執拗に塗りたくってゆく。
「や、やだよ……やめてよ、姉さんったら……」
びくんと腰を震わせ、体を起こそうとする葉月。けれど、いつのまにか膝をつく場所を変えていた園長の手で膝と肩を床に押さえつけられ、思うにまかせない。
「ほら、また私のことを姉さんって呼んでる。そんなに聞き分けが悪い子だから、年相応のお股にしてあげるのよ。先生の言いつけをちゃんと守れない、お転婆な小っちゃな女の子にお似合いのお股に」
皐月は再びブラシをソープカップに浸し、無数の泡を掬い取ると、目の端で葉月の表情を窺って言った。
「ご、ごめんなさい。姉さ……先生のこと、ちゃんと御崎先生って呼ぶ。僕……わ、私、約束する。だから、もう許して」
ペニスのまわりに広がる柔らかな泡の感触とお尻の下に広がるおねしょシーツのすべすべした肌触りとに下腹を包まれ、さらさらの髪を絨毯にこすりつけながら首を振って、葉月は今にも消え入りそうな声で懇願した。
「忘れない？　ちゃんとするって約束したこと、絶対に忘れない？」
懇願というよりも哀願と表現した方がふさわしい葉月の訴えに、皐月はブラシを持つ手をふと止めて、涙目になっている弟の顔を見おろした。
「忘れない。絶対に忘れない。だから……」
念を押す皐月の言葉に一縷の望みを託して、小刻みに震える声で葉月が喘ぐ。
「だったら――」
なんとも表現しようのない笑みをたたえて、皐月はブラシをソープカップに収めた。
そんな皐月の行動を目にして、葉月の顔に微かな期待の色が浮かぶ。
だが、それは束の間のできごとに過ぎなかった。床から僅かに頭を浮かせて葉月が注視する中、ソープブラシを手放した皐月は、代わりに剃刀を握りしめたのだ。
「だったら、葉月ちゃんが絶対に約束を忘れないよう先生も手伝ってあげる。葉月ちゃんが約束を忘れないよう、腕によりをかけて、葉月ちゃんのここを綺麗にしてあげるね。お風呂に入ったりトイレに行ったりしてパンツをおろすたびに、つるつるになったお股を自分の目で見て、そのたびに約束を思い出すといいわ。これなら、葉月ちゃんがつい忘れそうになっ

ても大丈夫だよね。指切りげんまんの代わりに毛を切っちゃうの。せっかく葉月ちゃんが約束を忘れないようにしてるんだから、先生も手伝ってあげないといけないもんね」
「やだったら！　わ、私、約束を忘れない。御崎先生との約束も園長先生との約束も絶対に忘れない。だから……」
「だから、忘れないようにしてあげるんじゃない。忘れかけても、小っちゃな女の子のお股になった自分のここを見るたびに思い出すように」
皐月は剃刀の刃を葉月の下腹部、だらしなく縮こまってしまっているペニスのすぐ横にすっと押し当てた。
「ひ……」
エアコンの冷気で冷やされた薄く鋭い金属のぞくりとするような感触に、皐月の唇が僅かに開いたまま固まってしまう。
「おとなしくしてるのよ。暴れたりしたら、カミソリの刃で大事なところをちょん切っちゃうかもしれないんだからね。でも、それで葉月ちゃんが本当の女の子になれるなら、それはそれでもいいかもしれないけど」
どこまで本気でどこからが冗談かわからないような口調で言って、皐月は剃刀をつっと滑らせた。
言われなくても、こうなってしまっては、葉月としても身動きの取りようがない。今はただ、羞恥と屈辱にまみれつつも、剃刀の刃が一刻も早く自分の肌から離れてくれることを願うばかり。
「でも、子供たちのプール遊びのお守りをする時に水着にならなきゃいけないからって持ってきたお手入れの道具がこんな形で役に立つなんて思わなかったわ。まさか、自分のあそこの手入れだけじゃなく、弟のここを綺麗にするのに使うことになるなんて」
剃刀を念入りに動かしながら、皐月がぽつりと呟いた。独り言のようにも聞こえるが、その言葉を葉月にも聞かせて反応を楽しもうとしている様子がありありだ。
「……」
それに対して投げ返せるような言葉を葉月が持ち合わせている筈がない。胸の内を満たす屈辱と羞恥に必死の思いで耐え、歯咬みしながら、変に動いて大事な部分を剃刀の鋭い刃によって切り刻まれないよう体を硬くするので精一杯なのだから。
その間にも、細い飾り毛が一本、また一本と剃り落とされてゆく。
みだしなみとして黒い茂みの形を整えるためになどではなく、ただでさえまばらにしか生えていない飾り毛を全て剃り落とし、幼い子供のそれとまるで変わらぬ下腹部に変貌させられるために。
剃刀はなんの抵抗も受けていないかのように、ひたすら滑らかに滑り続ける。己の下腹部を数え切れないほどの飾り毛が覆っているのなら、ぞりぞりした感触が葉月の神経にも伝わってくるだろう。けれど、どうにかすると産毛とも見紛ほどの細く短い縮れ毛がまばらにしか生えていないため、石鹸を塗りつけたすべすべの肌の上を滑るかのごとくといった感触しか覚えない。それがまた葉月には惨めでならなかった。
その上、それだけでは飽き足りないとでもいうふうに、園長が更に葉月の屈辱を煽りたてるような行動に出る。

「さっきまでむずがっていたのが嘘みたいにおとなしくなったわね、葉月ちゃん。じゃ、この間に靴下も履き替えさせてあげるわね。こんな灰色の靴下じゃせっかくのシナモロールのパンツに合わないから、可愛い靴下に替えようね」
　股間に鋭い刃を押し当てられて身をすくめる葉月の様子をしばらく眺めていた園長だが、もう暴れることはないだろうと判断すると、足首と肩を押さえつけていた手を離し、すっと立ち上がって、セーラーワンピースや女児用ショーツが入っていた紙袋に右手を突っ込み、今度はソックスを取り出した。
　絹だろうか、やや光沢のある純白の素材でできたソックスは、ぱっと見、葉月の爪先からくるぶしのすぐ上あたりまでを包み込むくらいの長さで、くるぶしの上に当たる端の部分には、やはり純白の細かなフリルのレースで縁取りがしてあった。それだけだといかにも上品で清楚なお嬢様っぽい感じになってしまうのだが、フリルのレースの少し下に縁取りと同じレースでできた小さなリボンが縫い付けてあるため、小さな女の子向けの可愛らしい印象も強調されて、エレガントさとキュートさが絶妙に混じり合った絶妙のプリティ感を醸し出しているといった、そんなソックスだ。
「あ、御崎先生はそのまま続けていていいわよ。ほんの少し足を持ち上げれば履かせてあげられるから、こっちのことは気にしないで続けてちょうだい」
　園長は、ちらとこちらの様子を窺う皐月に向かって鷹揚に頷くと、ショーツをそうしたように、紙袋から取り出したばかりの女児用ソックスをこれ見よがしに葉月の目の前に突きつけてから、最初に右足の足首をつかんで僅かに床から浮かせた。
「さ、パンツの次は靴下を脱ぎ脱ぎしようね。これを脱いだら、さっき見せてあげた可愛いソックスを穿かせてあげる。シナモロールのパンツとレースたっぷりのソックスで可愛らしい女の子になるのよ、葉月ちゃんは」
　言うが早いか、園長は葉月の右足から地味なグレーの靴下を脱がせ、続いて手際よく左足の靴下も脱がせてしまった。
　続いて園長が、靴下を脱がせたのと同じ順番で先ず右足に女児用ソックスを履かせると、葉月の口から、いかにも恥ずかしそうな
「や……」
という喘ぎ声が漏れ出た。
　園児のおしっこの跡がシミになって残っているおねしょシーツの上にお尻を載せ、実の姉の手で飾り毛を剃り落とされながら、勤め先である保育園の園長の手で小さな女の子用のソックスを履かされる屈辱と羞恥。そこに、おねしょシーツとは微妙に異なる絹のソックスのすべすべした肌触りに爪先からくるぶしの上までを包み込まれる感触とが相まって、いいようのない被虐感が胸を満たしてゆく。
「うふふ、可愛い声を出すのね、葉月ちゃん。とてもじゃないけど大学生の男の子だなんて思えないような、本当に可愛い声だわ。これなら、セーラーワンピの制服がお似合いの可愛らしい保育園児になれるわね。保育園に通う小っちゃな女の子になって、遠藤先生にたっぷり甘えるといいわ。そうやって、遠藤先生を元気づけてあげてちょうだい。もちろん、遠藤先生のためだけじゃなく、遠藤先生のことが大好きな葉月ちゃん自身のためにもね」
　右足に続いて左足にも女児用ソックスを履かせ終えた園長は、ついさっきまで唯一つ身に着けていた男物の靴下を脱がされ、その代わりに女児用の純白のソックスを履かされた屈辱

に顔を歪める葉月に向かって、艶然と微笑みかけた。
それとほぼ同時に剃毛の方も終わったようで、剃刀をブラシと並べてソープカップに収めた皐月も、頬にかかった髪を振り払おうともしない葉月の顔をじっと見おろした。
二人の視線を浴びて何も言えず、ただ回数ばかりが多いだけで殆ど空気を吸っていない浅い呼吸を繰り返すばかりの葉月。
葉月の顔と股間と両脚のソックスとを交互に無遠慮な視線で舐め回す園長と皐月。
だが、葉月に対する二人の仕打ちがそれで済まむことはなかった。

【六】

飾り毛をすっかり剃り落とされ、幼い女の子が好んで履きそうなソックスを身に着けさせられた葉月の姿に満足そうな表情を浮かべて、園長がおもむろに立ち上がった。
「ちょっと準備する物があるから、その間に葉月ちゃんがむずがらないよう気をつけていてね」
葉月がむずがらないよう気をつけてね。立ち上がりながら優しげな声でそんなふうに言った園長だが、実のところ、葉月が逃げ出さないようしっかり見張っていなさいよと命じているのは明らかだ。
承知しました、園長先生。そういう皐月の言葉を背にして、園長は、部屋の一角に置いてある冷蔵庫の前に歩み寄った。来客用のオシボリや冷たい飲み物を用意するための冷蔵庫だが、庫内の奥まった場所には、人目を避けるようにして茶色の小さな薬瓶が収まっていた。
園長は薬瓶を取り出すと、ラベルに記載された文章に目を通し、ひとり納得して頷くと、さも大切な物を扱うように薬瓶を両手に包み込んで葉月のかたわらに戻ってきた。

「それ、何のお薬なんですか？」
園長が戻ってくるのを待ちかねて、興味津々といった態で皐月が尋ねた。だが、その瓶に入っている薬品の正体を前もって知ってでもいるかのような様子なのは否めない。
「これはね、高校時代の同級生で今は形成外科のお医者様になってる友達から譲ってもらったお薬なのよ。御崎先生には以前に話したと思うけど、私の高校時代の友達、特に女性陣は独身が多くて、今でも週末とかに大勢で集まってわいわいやっているの。ま、この年になっても独身を貫く人ばかりだから、わりと個性も強いし、ちゃんと自分で稼ぎを持っている人たちの集まりで、いろいろと面白い話題が飛び交って、なかなか飽きないのよ。その常連で、お医者様をしている人からもらったお薬なの」
園長は、いかにも不安げな表情で聞き耳を立てている葉月の様子をちらちら窺いながら、どこか芝居じみた口調で応じた。
「へーえ、形成外科の先生から直接いただいたお薬なんですね。それで、何に効くんですか？」
皐月が重ねて尋ねた。
「効くっていうか、手術とか怪我とかの傷口をくっつけちゃう接着剤みたいなものなのよ。

近ごろの手術は、二週間ほどで体に吸収されちゃって抜糸しなくてもいい糸とか、ホチキスみたいな感じで傷口を留めちゃう金具とか、いろいろ新しい技術が使われているそうだけど、このお薬もそういうのの一つで、人間の体にまるで害のない有機系の材料でできた接着剤みたいなものなんですって。それほど大きくない傷だと、わざわざ縫ったり金具で留めたりしくなても、傷口にこのお薬を塗って、その上から包帯で固定しておけばそれで何日か経てば治るんだそうよ」

園長は瓶の蓋をきゅっと回して開け、空いた蓋をそろりと瓶の上に持ち上げた。蓋の内側には細い刷毛のような物が付いていて、園長が蓋をもう少し高く持ち上げると、刷毛の先から透明の薬剤が瓶の中にとろりと滴り落ちた。

「でも、それを葉月ちゃんのここにどんなふうに使うんですか？　葉月ちゃん、どこも怪我なんてしてなさそうですけど」

皐月はわざと不思議そうな表情を浮かべて、薬瓶と葉月の顔とを見比べた。

不意に何かを察したのか、葉月の顔一面に怯えの色が浮かぶ。

「怪我用の接着剤だっていっても、怪我以外にも使えるのよ。例えば、こんなふうに」

園長は薬瓶の蓋を閉じ、そっと床の上に置くと、おねしょシーツをお尻の下に敷き込んだ時と同様、再び葉月の左右の足首を一つにまとめて持ち、そのまま高々と差し上げた。

そうして、皐月に向かって

「御崎先生、私がしているように、葉月ちゃんの足首を持ち上げていてちょうだい。御崎先生に足首を持ち上げてもらっている間に、薬の使い方を実際に説明してあげるから」と言って、自分が差し上げている葉月の足首を代わりに支えているよう指示を出す。

「ま、待って。園長先生、ちょっと待ってください！」

足首を高々と差し上げられ、腰から下が宙に浮いた姿勢を取らされたせいで、上半身、特に肩胛骨のあたりから肩、首筋を床に押しつけられ、体の自由を奪われてしまった状態で、それでも、自分の身に降りかかろうとしている異様な事態の気配に、葉月は悲鳴じみた声をあげた。

けれど、園長はそしらぬ顔だ。葉月の足首を皐月に手渡した後、自分は葉月のお尻を正面から覗き込める場所に移り、葉月の両脚の間を掻き分けるようにして右手を前に伸ばすと、体の前でだらんとだらしなく垂れ下がっているペニスと陰嚢をつかみ上げて、陰嚢の付け根のあたりを両手で入念にまさぐり、なにやら位置を確認したかと思うと、軽く頷いて、片方の陰嚢の皮膚を引っ張るようにして体の中に押し込んでしまった。

最初は少し手こずっていたみたいだが、片方の陰嚢が葉月の下腹部の皮膚にすっぽり隠れて見えなくなるまで押し込み、更にもう片方の陰嚢に対して同じ処置をする頃にはすっかり慣れてきたのか、今度は最初の陰嚢の三分の二ほどの時間で、やはり同じように下腹部の皮膚のたるみの中に押し込むことに成功した。

続けて園長は、すっかり萎え縮こまってしまっているペニスをそっと反らせ、そのまま後ろ向けに折り曲げると、皮膚の下に押し込んだ陰嚢に蓋をするみたいな感じで、先がお尻の方を向くように押さえつけて固定してしまった。

「これも形成外科のお医者様になった友達から教えてもらった方法でね、男性の股間を擬似的に女性の股間みたいに見せるやり方なのよ。完全な性転換手術を受けるのはどうしても躊躇われる人に緊急措置的に用いられることもある方法らしいんだけど、体質的にやりやすい

人とやりにくい人がいるんだって。私も説明を聞いただけで実際に試してみたのはこれが初めてだけど、それでもちゃんとできたところをみると、葉月ちゃん、体質的にこのやり方を受け入れやすいんでしょうね。こういうの、『タック』っていうんだそうよ」

葉月の足首を皐月に手渡してから、七～八分しか経っていないだろう。初めて試す『タック』という措置を短い時間で成功させた満足感に瞳を妖しく輝かせ、園長は声を弾ませた。

だが、それで終わったわけではない。園長がペニスを押さえつけている指を離せば、ペニスも陰嚢も元通りになってしまうのは言うまでもない。

「そこで、このお薬の出番なのよ。このお薬、傷口をくっつけるだけじゃなくて、皮膚と皮膚とをくっつける力も強いんだそうよ。だから、こんなふうにして――」

園長は左手の指で葉月のペニスを後ろ向けで下腹部に押しつけたまま、軽く閉めていた薬瓶の蓋を右手だけで開け、余分な薬剤を瓶の中に振り落としてから、刷毛の付いた蓋をそろりと持ち上げて

「余分な所にお薬が付いちゃわないよう注意して、おちんちんの皮とお股の皮にちょっと塗ってあげれば――ほら、この通り。これで、おちんちんを押さえている手を離しても大丈夫」

と、皐月にともなく葉月にともなく言って聞かせるように呟きながら、とろりとした薬剤を、皮かぶりのままのペニスの先の皮膚と、ペニスの先から半ほどあたりまでが触れるあたりの下腹部の皮膚とに塗りつけ、そのまま、ペニスをぎゅっと押しつけた。

「このお薬、人間の体温で温まるとすぐ効き目が最大になるのよ。だから、怪我もじきに塞がるってわけね。でも、瓶に入ったお薬だけだと、いくら体温と同じ温度になっても、勝手に固まっちゃうことはないんだそうよ。くっつける皮膚と皮膚との間の目に見えない隙間とか皮膚の表面や怪我口のすごく細かい組織の隙間にしみこんでくっつく力をつくるそうだから、勝手には固まらないんだって。とはいっても、長いこと保管しておくには冷たい所に置いとくのが一番らしいけどね」

手短に説明しながらしばらく待って、指をどけても葉月のペニスが下腹部の皮膚から離れないことを確認した園長は、薬瓶の蓋をぎゅっと閉じ、葉月の足を自由にするよう皐月に向

かって目で合図を送った。

第二章　～女の子に～

【一】

両脚に女児用のソックスを履かされ、下腹部の飾り毛を一本残らず剃り落とされた上にタックを施されて、前から見る限りでは股間を幼女のそれとまるで変わらぬよう変貌させられてから、葉月は皐月の手で腕を引っ張られ、体を引き起こされた。

だが、羞恥に満ちた責め苦はまだ残っている。

「さ、今度こそ、すっかり女の子になっちゃった葉月ちゃんのあそこにお似合いのパンツを穿こうね。さっきは勝手に駆け出してころんしちゃったけど、今度はおとなしくしてなきゃ駄目よ。また勝手に駆け出しちゃったりしたら、今度はどんなことになるかわからないから、おとなしくするよね？」

今度また逃げ出そうとしたりしたらどんな目に遭うか知れたものじゃないわよと言外に匂わせながら、皐月は、純白のソックスだけを身に着けた葉月の体を正面からじろじろ眺めまわした。

その間、葉月は羞恥に満ちた表情で目を伏せ、股間を左右の掌で覆い隠すことしかできないでいた。皐月の手で体の自由を奪われているわけではないものの、さっきは思わず逃げ出そうとして失敗し、その結果、スラックスに足を絡め取られて転んだことを口実に、下腹部の飾り毛を失うのみならず、ペニスと陰嚢を両脚の間に後ろ向けに折り曲げられ、強引に下腹部の皮膚の中に押し込まれて幼女めいた股間に仕立てられてしまうといった手ひどい扱いを受けたばかりだ。皐月に言われるもでまなく、今度また逃げ出そうとすればどんな仕打ちが待っているか知れたものではない。しかも、運良くこの部屋から逃げ出すことができたとしても、この姿で街中に駆け出すことなど到底かなわない。

「いいわよ、葉月ちゃん。恥ずかしそうにあそこを掌で隠しておどおどする様子、本当に小っちゃな女の子みたいで可愛いわよ。大人の女の人だったら胸も隠すところだけど、葉月ちゃんはまだ保育園の女の子だもん、胸にまで気がまわらないのよね。そんなとこもとっても子供らしくていい感じよ。このぶんなら、遠藤先生にたっぷり可愛がってもらえるに違ないね。早く明日にならないか、葉月ちゃんも待ち遠しいでしょ？」

皐月は、二人の視線を受けてもじもじと体をくねらせる葉月に追い打ちをかけるように言ってから、執務机に手を伸ばし、園長がセーラーワンピースの上に重ね置いたシナモロールの女児用ショーツをつかみ上げ、伏し目がちの葉月の顔を斜め下から覗き込むようにして続けた。

「さ、お待ちかねのシナモロールのパンツよ。葉月ちゃんみたいな小っちゃな女の子はみんな大好きな可愛いパンツよ。小っちゃい子でも男の子は恥ずかしがって穿きたがらないけど、葉月ちゃんは女の子だもん、こんな女の子パンツが大好きなんだよね？」

皐月が手にした、股ぐりのゴムのせいで今にもくしゅくしゅに丸まってしまいそうなコットンの女児用ショーツ。葉月は顔を伏せて見まい見まいとするのだが、なぜとはなしに視線がちらちらとそちらを向いてしまう。そうして、ショーツが目に映るたび、慌てて伏し目がちに視線をそらすといったことを繰り返すのだった。

「じゃ、ころんしないよう、今度は体を支えてあげるわね。ほら、右足を上げて。ちゃんとしないと、せっかくの可愛いパンツを穿かせてもらえないわよ」
スラックスとトランクスを脱がせる時は皐月が葉月の体を押さえていたが、今度は、転んでしまわないようにという口実で葉月の体を後ろから抱きすくめるのは園長の番だった。
「や……」
小さな女の子用のショーツを穿かされそうになる羞恥と、背中に感じる張りのある乳房の感触とに、葉月は、両腕を体の横にぴったりつけた状態で園長に背後から抱きすくめられたまま、ひどくなまめかしく聞こえる喘ぎ声を漏らした。同時に、園長の手でタックを施されるまではだらしなく縮こまっているばかりだったペニスが、どういうわけかぴくりと反応してしまう。
「ほら、園長先生もおっしゃっているでしょ、右足を上げなさいって。あ、そうか。葉月ちゃん、まだ小っちゃいから、どっちが右でどっちが左かわかんないんだっけ。じゃ、先生が教えてあげる。いい？　お箸を持つ手の方が右で、お茶碗を持つ手の方が左よ。さ、わかったら、右足を上げてちょうだい。ううん、大丈夫。葉月ちゃん、あんよは得意じゃないみたいだけど、ころんしちゃわないように園長先生が体を支えてくださってるからね。だから、ほら」
それこそ、まだ左右の区別もつかない幼児に教えるみたいに言って、皐月は葉月の足首をつかみ、床から右足を上げさせた。
「や、やだってば。そんな、女の子のパンツなんていやだってば……」
いくら足を踏ん張っても、体格でも体力でもかなわない姉に抵抗できるわけがない。それでも葉月は無理矢理に上げさせられた足をばたばたさせて、まるで聞き分けの悪い幼児そのまま地団駄を踏んで皐月の手を拒む。
「何を言ってるの、葉月ちゃんてば。女の子が女の子パンツをいやがるなんて、変なことを言うのね。――あ、そうか。葉月ちゃんは裸んぼうのままがいいのね。そうか、そうよね。小っちゃい子は、お洋服を着るのが窮屈で、裸んぼうのまま遊ぶのが大好きだもんね。やんちゃな男の子も、おとなしい女の子も、そこだけは同じなんだよね？」
皐月は葉月の抵抗の真意をわざと取り違えてみせ、にっと笑うと、手にした女児用ショーツを改めて執務机の上に戻した。
皐月の予想外の行動に、一瞬きょとんとした表情を浮かべる葉月。
けれど、それで羞恥に満ちた責め苦が終わったわけではなかった。
ショーツを執務机の上に戻した皐月が、園長に向かって
「園長先生、葉月ちゃんから手を離してあげていただけますか。どうやら葉月ちゃん、裸のままがいいみたいなので、このまま砂場で遊ばせてあげようと思います。もうすぐお昼でお日様は高いけど、砂場がある場所は丁度お向かいのマンションの日影になるから、裸んぼうでも、ひどい日焼けをする心配もありませんし。ええ、裸んぼうで砂場で遊ぶ葉月ちゃんのこと、お向かいのマンションに住んでいる人たちもベランダから眺めて、可愛いって言ってくれるに違いありません。二階よりも上だと、保育園の塀よりも高くて、視界が遮られることなんてありませんから。明日から保育園に登園する葉月ちゃんの、ご近所さんへの一日早いお披露目みたいなものですね」
と言い、それに応じて園長の手が離れると同時に、葉月の手を引いて今にも部屋から出て行

こうとするのだった。
「待って、待ってよ、姉さ……み、御崎先生。こんな格好で外へ連れてかれるだなんて、そんなの……」
ドアの方にずるずる引きずられて行きながら、葉月は必死の思いで両脚を踏ん張り、皐月の手を振りほどこうとして身をよじった。
それに対して、皐月の方は涼しい顔で
「あら、どうして？　葉月ちゃんは裸んぼうのままがいいんでしょ？　他の保育園や幼稚園でも裸んぼう保育とかって子供たちに窮屈なお洋服を着せないでお遊戯をさせたり体操をさせたりしている所もあるけど、子供たち、みんな楽しそうにしているわよ。だから、葉月ちゃんも裸んぼうがいいんじゃないの？　もっとも、他の保育園や幼稚園じゃパンツはきちんと穿かせているみたいだけど、うちは本当の裸んぼう保育を葉月ちゃんで試してみてもいいかなって思うんだ。葉月ちゃんも、その方が嬉しいよね？」
と応じて、葉月の抵抗などまるで知らぬげにずんずんと歩を進める。

「……ご、ごめんなさい。もう我儘なんて言わないから。御崎先生の言いつけを守るから。だから、裸のまま外へ連れて行くのだけは許してってば～」
とうとう観念したらしく、涙声でそう懇願して、葉月は激しく首を振った。
それはまるで、悪戯を叱られて家の外に放り出されんばかりになっている幼児が母親に許しを請う姿さながらだ。
「あら、おかしなことを言うのね、葉月ちゃんてば。先生は葉月ちゃんが裸んぼうのままが好きなんだと思ったからお外へ連れて行ってあげようとしただけなのよ。お仕置きなんてしてるわけじゃないから、許すも何もないと思うんだけどな」
自分の行為が葉月に対する屈辱と羞恥に満ちた『お仕置き』以外の何ものでもないことを充分に承知していながら、皐月はわざと不思議そうに言い、少し考えるふりをしてみせてから、こんなふうに付け加えた。
「でも、葉月ちゃんが裸のままお外へ出たくないのなら、それでいいわよ。マンションの日影に入っても少しは日焼けもしちゃうに違いないし、葉月ちゃんのすべすべのお肌が真っ赤に腫れちゃったら可哀想だものね。だけど、ちゃんとパンツを穿いて制服を着てお帽子をかぶったら、あまり日焼けしなくてすむのよ。明日になったら他の子供たちと一緒に元気にお外で遊ばなきゃいけないんだから、さ、園長先生が用意してくださった新しい制服を試しに着てみようね。でも、裸んぼうの上にすぐ制服だなんて変だから、その前にちゃんとパンツを穿かなきゃね」
教え諭すようにそう言って、皐月は更に続けた。
「さ、お願いしてちょうだい。『御崎先生、私、可愛いパンツを穿きたいの。でも、私、まだ自分じゃ穿けないから、先生に穿かせてほしいの。シナモロールのパンツ、穿かせてちょうだい、お願い、先生』って、ちゃんとお願いするのよ。そしたら、穿かせてあげる。でも、もしもお願いできないんだったら、やっぱり葉月ちゃんは裸んぼうでお外がいんだってことになるから、このまま砂場へ連れて行ってあげる。――どっちがいい？」
「……」
口調こそ優しげだが実は容赦のない選択を迫る皐月に、葉月は言葉を失ってしまう。

だが、皐月が
「さ、どっちがいいの？　決められないなら、最初の予定通りお外がいいってことになるわよ。それでいいのね？」
と責めたてるものだから、いつまでもそうしてはいられない。
「……パ、パンツ……」
何度か浅い呼吸を繰り返して、ようやく覚悟を決めたらしい葉月が、蚊の鳴くような声を絞り出した。
「……パンツを穿かせてちょうだい、先生。僕……わ、私、シナモ……シナモロールのパンツを穿きたい……から、だから、お、お願い、先生……」
ようやくのことそこまで言うのが精一杯だった。
「そう、シナモロールのパンツを穿かせてほしいのね、葉月ちゃんは。まだお喋りもあまり上手じゃないみたいで、たどたどしいお願いだったけど、可愛いパンツを穿かせてほしいっていう葉月ちゃんの気持ちはちゃんと伝わってきたわよ。だから、先生が穿かせてあげる。小っちゃな女の子だったら誰でも大好きなパンツを穿かせてあげる。でも、わかってるよね？　先生が無理に穿かせちゃうんじゃないのよ。葉月ちゃんが自分でお願いしたから穿かせてあげるの。そのこと、忘れちゃ駄目よ？」
皐月はくすっと笑ってそう言うと、改めて葉月の手を引いて元の場所に戻り、執務机の上に置いた女児用ショーツを再びつかみ上げて、わざとのような優しい声で続けて言った。
「葉月ちゃんが自分でお願いしたことだもの、私や園長先生のお世話にならなくても自分で足を上げられるよね？　さ、ころんしないように私の肩に手を置いて、最初は右足を上げてごらん」
園長に体を抱きすくめられ、皐月の手で強引に足を上げさせられて仕方なくショーツを穿かされるのではない。自ら進んで女の子パンツをねだったのだ。それを既成事実として葉月に受け入れさせるための皐月の言葉。しかし、今となっては、それを拒むことはできない。
葉月は屈辱に唇を噛みしめ、羞恥に胸をこがしながら、のろのろした動作で皐月の肩に手を載せた。
「最初は右足、お箸を持つ手の方よ。そうそう、葉月ちゃんはとってもお利口さんね」
命じられるまま葉月が上げた右足の甲に、皐月が両手で股ぐりを大きく広げた女児用ショーツの生地が触れた。
「ん……」
おねしょシーツや女児用ソックスに続いて覚える想像以上に柔らかな感触に、後ろ向けに折り曲げられ強力な接着剤で両脚の間に固定されてしまったペニスがぴくりと蠢く。
「うふふ。葉月ちゃん、たしか、お尻の下におねしょシーツを敷いてもらった時も、そんな声を出してたよね。大好きな女の子パンツを穿かせてもらう時と同じ声を出したっていうことは、園長先生のおっしゃる通り、葉月ちゃん、おねしょシーツの触り心地が大好きなのね」
葉月の口を衝いて出た微かな喘ぎ声を聞き逃すことなく皐月は含み笑いを漏らして言いながら、ショーツのウエスト部分に続いて股ぐりの部分を、床から僅かに浮いた葉月の右足に通し、そのまま、くるぶしの上あたりまで引き上げた。
そうして、葉月に命じて今度は左足を上げさせ、同様の動作を繰り返す。

「はい、もう左のあんよもおろしていいわよ。ちゃんとできて、本当にお利口さんだったわね。あ、でも、まだ動いちゃ駄目よ。パンツはまだきちんと穿けてないんだから」
女児用ショーツの左右の股ぐりをそれぞれの足に通し終えた皐月は、続いてショーツのウエスト部分のすぐ下あたりを両手の人差指と中指それに親指の腹でつかんで、左右に引っ張るようにしながらゆっくり引き上げ始めた。
ショーツの股ぐりがふくらはぎから膝にかけてのあたりを通過する時にはさほど抵抗も感じなかったが、膝の少し上、そろそろ腿にかかろうかという頃になってくると、股ぐりに入っているゴムが葉月の脚に食い込むようになって、少しずつ引き上げにくくなってくる。
女児用のショーツとはいっても、百五十サイズ以上になると、可愛い絵柄の付いた物は途端に種類が減ってしまから、園長が紙袋から取り出したような可愛らしいバックプリントが付いたショーツを探そうとすると、大きくてもせいぜい百四十サイズまでということになる。幾ら葉月が同年代の男の子と比べて小柄で華奢とはいっても、百四十サイズの女児用ショーツをゆったり穿けるわけがない。しかも、ショーツがいくら伸縮性に富んだ素材で仕立ててあるとはいっても、育ち盛りの少女が激しく動きまわっても簡単にはずり落ちないようウエストと股ぐりのゴムは幾らか強めになっているのが普通だから尚のことだ。
しかし、次第に抵抗を増すショーツを葉月の脚に沿って引き上げることは、皐月にとって決して面倒くさい作業などではなかった。皐月が両手でショーツをゆっくり引き上げるのに合わせて股ぐりのゴムが腿に食い込み、それまで葉月が一度も経験したことのない恥ずかしい刺激を与えていることを充分に承知しているからだ。男物のトランクスは、温度に弱い精嚢の機能を弱めさせないために、風通しが良くなるような仕立てになっている。それとは対照的に股ぐりに強めのゴムが入った女児用ショーツは、葉月の腿をきゅっと締めつけるのだ。しかも、男物のトランクスとはまるで違う、女児用ショーツ特有の肌触り。皐月が手を引き上げるに合わせて、葉月は、えもいわれぬ感触に下腹部を包み込まれようとしていることをいやでも実感せざるを得ず、股ぐりの絶妙の緊縛感と、肌をさわさわと撫でさすられるような感触とに熱い吐息を漏らしてしまうのだった。

「くう……」
ショーツが引き上げられるたびに腰と膝頭を小刻みに震わせていた葉月が、何かに耐えるような声をあげた。けれど、それは、苦痛に耐えかねて漏らす悲痛な呻き声などでは決してない。
「気持ちいいのよね、葉月ちゃん？　大好きな女の子パンツを穿かせてもらって、とっても気持ちよくなっちゃって、どうしていいのかわかんないのよね？」
葉月の胸の内を見透すかのように、皐月はねっとりした声で囁きかけた。
「ち、ちがう……女の子のパンツを穿いて気持ちよくなっちゃっただなんて、そんなわけない」
葉月は弱々しくかぶりを振った。
けれど、微かに首をのけぞらせ頬を熱く上気させている見れば、葉月が嘘を言っていると見抜くことなど雑作もない。
「あらあら、そんなこと言っちゃって。じゃ、これはどういうことなのかな？」

太腿の肌と股ぐりとの隙間に指を押し込み、ウエストの部分を引っ張ると同時に股ぐりを指で押し広げるようにしてショーツを最後まで引き上げた皐月は、葉月のお尻の膨らみに右手の掌を押し当てると、その手をお尻の丸みに沿ってゆっくりおろしてゆき、遂には両脚の間に指を差し入れて、さもおかしそうに言った。

皐月の指は、葉月の下腹部を包み込んだショーツの生地越しに、両脚の間で窮屈そうに蠢くペニスの先に触れていた。

普段は恥ずかしい皮をかぶっているくせに、今は図らずも怒張してしまい、接着剤によって下腹部の皮膚に固定されてしまっている皮の先からひくひくと蠢く本体の先端をさらけ出している醜悪なペニスだ。

「やだ！　そんなとこ触っちゃ駄目！」

皮から顔を出したペニスの先を女児用ショーツの柔らかな生地越しにつつかれて、葉月は思わず身をよじり、甲高い金切り声をあげた。

スラックスとトランクスを脱がされ、飾り毛を剃り落とされるところまでは、自分の置かれた状況の異様さや冷たく鋭い剃刀の刃への怯えのためにだらしなく縮こまっていたペニス。それが、女の子用のソックスを履かされ、女児用のショーツまで穿かされるうちに、それまで経験したことのない肌触りが奇妙な刺激になり、更に、剃毛とタックによって自分の股間が童女のそれに変貌させられてしまったことに起因する倒錯感や被虐感に体中を包み込まれて、いつしか、じんじんと下腹部を疼かせているのだった。

「触っちゃ駄目、か。つまり、触られたらどうにかなっちゃうくらい気持ちいいってことよね、葉月ちゃん？」

皐月は、葉月の両脚の間に中指の先をつんと突きたて、葉月の目を正面から見て言った。

「ち、違う。そんなじゃない……」

皐月の言う通りだ。けれど、自分でそれを認めるわけにはゆかない。葉月は恨みがましい目で皐月の顔を見上げ、喘ぎ声で反論した。

「それより、どうしてこんな意地悪をするのさ？　こんな、こんなひどいこと……こんなことが続いたら、僕……わ、私……」

「ふぅん、意地悪、ね。でも、園長先生も私も意地悪なんてしてるつもりはないんだけどな。ただ、遠藤先生が自信を取り戻してくれたらいいな、でもって、あんたと遠藤先生が仲良くなってくれたらいいなと思って、あくまでも善意のつもりでやってることなんだけど？」

皐月は、いつも通りのしゃべり方に戻って葉月に言い、僅かに肩をすくめて続けた。

「ま、でも、それだけじゃないのもは確かね。見た目はこんなでも、あんただって男の端くれ。遠藤先生を襲った元同じゼミ生と同じ、いつ何をしでかすかわかんない男の一人。同じ男として責任を取ってもらうって意味もあるから、あんたからみれば意地悪に感じられることもないわけじゃないかもね」

「そんな……責任って言われても、僕には関係ないことじゃないの!?」

葉月は唇を尖らせた。本当は怒りをあらわにしたいところだが、皐月の前だと、どうしても拗ねたような仕草しかできない。

「関係ないですって？　じゃ、これは何なのよ!?　女の子パンツの中でおちんちんをいやらしく大きくしてるのはなんて説明するつもりなの？　関係ないも何も、あんただっていやらしい男の一人だってことを自分で白状してるようなもんじゃない。それで充分なのよ。遠藤

先生は、同じゼミ生だった男に襲われかけた後、その男だけじゃなく、保育園の男の子にまでびくびくしなきゃならなくなっちゃったのよ。ゼミ生だった男とはまるで関係ない園児の男親と話すこともできなくなっちゃったのよ。だから、そいつと関係あるかないかなんて無意味なの。直接の関係があるかないかなんてどうでもいいことなのよ、要するに。男の一人として、あんたにも責任を取ってもらう。あんたにしかできない役割でね。つまり、それだけのことよ」

皐月は、さっきまでのねっとりした声とは打って変わった、一言の反論も認めない強い調子でそう決めつけた後、一歩二歩と体を後ろに退き、女児用ショーツに覆われた葉月の下腹部をじろじろと眺めまわすと、感心しきりといった口調で園長に話しかけた。

「それにしても、タックっていうのを初めて知ったんですけど、すごいものですね。触って調べてみたら葉月ちゃんのおちんちん、びんびんに固くなっちゃってるのに、パンツの上から見てるだけじゃ、そんなのちっともわからないんですから。パンツの前の下の方がちょっと膨らんで見えるけど、本当の女の子と比べても、注意して見るとほんのちょっと膨らみが大きいかなってだけで、何も知らずに見ても絶対にわかりませんよね、これだったら」

「そうね、それに、前からだけじゃなく、後ろから見ても絶対にわからない筈よ。後ろから普通に見た場合、どうしてもお尻の膨らみが邪魔になって両脚の間なんて見えるわけがないし、しゃがみこんで見たとしても、両脚の間の奥まった所まで覗き込めるわけじゃないから。ま、葉月ちゃんが道路を歩いていて、たまたまその下にマンホールがあったとして、その中で工事をしている人がいたと仮定すれば、その人は真下から葉月ちゃんの両脚の間を見上げることになるから、おかしな膨らみに気づくかもしれないけど、そんなことでもない限り、まず絶対にわからないでしょうね。私も実際に試したのはこれが初めてだけど、自分でもびっくりするほどうまくできたと思うわ」

実の弟が女児用ショーツの中でペニスを怒張させているという事実を臆面もなく口にする皐月に微かな苦笑を浮かべつつも、園長は自分が施したタックの成果をもういちど確認するかのように葉月の背後にまわりこむと、立ったりしゃがんだりを繰り返し、無遠慮な視線を葉月のお尻に投げかけながら満足げに頷いた。

二人の女性のまるで遠慮というものを感じさせない視線を浴びて、葉月は羞恥のあまり体をよじり続けた。だが、身じろぎするたび、柔らかなショーツの生地によってペニスが撫でさすられ、ますますいやらしく蠢く。皮膚は接着剤で固定されてしまっているからペニスの先だけが窮屈そうにショーツの中で悶え動き、その最も感じやすい部分がショーツのクロッチにこすられて、ますます狂おしくいきり勃ってしまう。だが、その様子は園長や皐月の目には映らない。前から見ても後ろから見ても、ソックスとショーツだけを身に着けて佇む葉月の姿は、頬をほんのりとピンクに染めて羞じらいの表情を浮かべる可憐な少女以外の何ものでもなかった。

【二】

「さ、パンツを穿いたら、次はこれを着せてあげなきゃね。エアコンが効いているから、早

くしないと風邪をひいちゃうかもしれないし」
ひとしきり葉月の体を眺め回し、皐月と互いに満足そうな目配せを交わし合った後、園長がそう言って紙袋から取り出したのは、セーラーワンピースよりもいくぶん淡い色合いのパステルピンクの綿素材でできたキャミソールだった。
「いくら夏用の制服は汗を吸いやすい素材でできてるといっても、裸の上に直接着せるわけにはいかないから、下にこれを着せてあげる。ちょっと前まではコットンのシャツかスリップだったのに、近ごろは小っちゃな女の子もお洒落をしたがるみたいで、こういうキャミの子ばかりになっちゃって。そんな中、葉月ちゃんだけシャツだと可哀想だから、ちゃんと用意しておいてあげたのよ」
園長は、肩紐を両手でさげて持ち、羞恥に身悶えする葉月の肩に押し当ててサイズを確認すると、キャミソールの胸元が葉月によく見えるように両手を上げて悪戯っぽく言った。
「ほら、よく見てごらんなさい。このキャミ、胸のところがちょっと膨らみ気味になっているでしょ？　これはね、そろそろお胸が膨らんでくる頃のちょっぴりお姉ちゃん用のキャミなの。保育園に通うような小っちゃな女の子には必要ないんだけど、葉月ちゃん、本当は十八歳だもの、胸が痛くならないよう気をつけてあげないといけないと思って、胸のところが二重生地のカップになっているキャミを選んでおいてあげたのよ。――でも、おかしな話よね。まるでじっとしてないお転婆さんで、なのにパンツも自分で穿けない甘えんぼうさんのくせして、キャミはちょっぴりお姉ちゃん用のが要るなんて」
園長がそう言うと同時に皐月が葉月の後ろにまわりこみ、肘をつかんで両手を上げさせた。抵抗しようにも、葉月の細っこい腕ではどうすることもできない。
「やめて、そんな女の子みたいな格好させないで！」
園長がキャミソールを頭の上からかぶせようとするのに対して、葉月はぶるんと首を振って体を固くした。
しかし、園長の方はまるでお構いなしで、
「女の子みたいな格好だなんて、何を変なこと言ってるの、葉月ちゃん。葉月ちゃんは女の子だもの、女の子の格好をするのは当たり前のことでしょ？」
と、さも当然のごとく言い、さっさとキャミソールを葉月の頭の上からすっぽりかぶせると、続いて肩紐の位置を整え、最後に裾をさっと引きおろした。
股ぐりのゴムが太腿をきゅっと締めつけるショーツとは違って体の動きを妨げることのないようデザインされたキャミなのだが、園長が用意していたのは百四十～百五十サイズくらいなのだろう、華奢な体つきの葉月にとっても幾らか窮屈な着心地なのは否めなかった。特に、二重素材のカップになっているという胸元のあたりは少なからず圧迫されるような感じがあって、ショーツと同じような緊縛感を覚えてしまう。しかも、こちらも女児用ショーツと同様にこれまで一度も身に着けたことのない柔らかな肌触りの素材でできているものだから、キャミの裾が首筋から胸元、脇腹を通っておへソのすぐ下まで体全体を撫でまわされるような気がしてたまらない。
「ふぅん。葉月ちゃん、パンツを穿かせてあげた時と同じだね。パンツの時と同じで、園長先生にキャミを着せてもらいながら、とっても気持ちよさそうな顔してるよ。どうやら、ちょっぴりお姉ちゃん用のキャミが気に入っちゃったみたいね」
園長が頭の上からキャミをかぶせる時は背後に立って葉月の手を上げさせていた皐月だが、

園長が肩紐の位置を合わせ始めた頃には再び前方に戻ってきて、キャミソールの裾の乱れを整える園長の手元と葉月の顔とを交互に見比べてひやかすように言った。
「そんな……そんなことないってば……」
葉月は弱々しく否定するのだが、柔らかな素材に上半身を包み込まれる奇妙なくすぐったさと、ちょうど乳首のあるあたりを中心にして胸元を圧迫される緊縛感とにペニスが更にいやらしく蠢くのを止められないでいるのは、紛れもない事実だった。

「そう、そんなことないの。ま、いいわ。葉月ちゃんがそう言うんだったら信じてあげる」
皐月は、ショーツ越しに葉月の下腹部の様子を見透かしてしまいそうな一瞥をじろりとくれながらも、それ以上は追求することもなく静かに口を閉ざすと、キャミソールの裾の乱れを整え終えた園長がこちらに歩み寄るのを待って声を弾ませた。
「それにしても、すっかり可愛い女の子になっちゃいましたね、葉月ちゃん。これなら、遠藤先生のそばにずっといても大丈夫ですよね？」
「そうね。ま、本当の保育園児に比べれば背は高いけど、丸っこい童顔もあどけない感じだし、なで肩だから体に比べて顔が大きく見えて幼児体型ぽいしね。背の高ささえ気にしなければ、うちの保育園で預かっているどの女の子と比べても負けないくらい可愛らしい女の子ね。あとは、あまりお転婆なことをしないようきちんと躾けてあげれば完璧ってとこかしら」
皐月と並んで葉月の体を頭の先から爪先まで眺め回し、にっと笑って園長は同意してみせてから、セーラーワンピースの方に目を向けると、
「さてと、残りはあの制服だけね。下着類を着せてあげただけでこんなに可愛い女の子になっちゃうんだもの、特製のセーラーワンピを着せてあげたらどれだけ可愛らしくなるのか、とっても楽しみだこと」
と期待に満ちた声で言い、特製の制服がが置いてある執務机に向かって歩き出した。

セーラーワンピースには飾りリボンが二つあしらってある。一つは背中の方、幼児用の衣類らしくハイウエストになっているウエストラインの高さに縫い付けてあるリボンで、もう一つは、背中のよりも一回り小さな、胸元を彩るリボンだ。こちらのリボンは胸元に縫い付けてあるわけではなく、蝶ネクタイと同じように、襟元のすぐ下で結ぶようになっている。ただ、制服を着てから自分でリボンを結ぶとなると幼児には難しいため、リボンと同じ生地を細長く延ばして一方の襟元から首筋をぐるりとまわし、もう片方の襟元へ出てくるようにしてあって、あらかじめ結んでおいたリボンをその生地の端にホックで留められるような仕組みになっている。このリボンを取ってしまえば、胸元からスカートの裾にかけて縦に五つ並んでいるボタンを外すことによって、セーラーワンピースは前開きになるわけだ。
体にぴったりしたサイズの制服を頭からすっぽりかぶって着るのは難しい幼児でも、全部のボタンを外してすっかり前開きにしてしまったり、下のボタンだけ外してゆったりした感じで頭からかぶったりと、いろいろな着方が工夫できるから、一人で着たり脱いだりできるようになるのも難しくはない。実際、ひばり保育園に通う園児の内、年中クラスや年長クラスの園児は一人残らず自分で着ることができるし、今年の春に入園した年少クラスの園児でも、夏までには半分くらいの子供が自分で着替えができるようになっていた。

園長は、執務机の上で前リボンと縦に五つ並んでいるボタンを全て外して前開きにしたセーラーワンピースを手にして戻ってきて、こともなげに
「さ、パンツは御崎先生に穿かせてもらったし、キャミは私が着せてあげたから、次は自分で制服を着る番よ。葉月ちゃん、お利口さんだもの、一人でちゃんと着られるよね？」
と言いながら、持ってきた真新しい制服を葉月に手渡そうとする。
が、葉月は頑として受け取ろうとしない。
ソックスからショーツ、キャミソールまで女児用の衣類を身に着けさせられた上に保育園に通う女の子の制服を身に着けなさいと（しかも、自ら進んで自分の手で身に着けなさいと）命じられて、おいそれとそれに従えるわけがない。
だが、園長は葉月が制服を受け取ろうとしない理由を充分に承知していながら、わざと
「あら、葉月ちゃん、自分で制服を着られないの？　ひばり保育園のお友達、年長さんも年中さんもみんな自分で着られるのよ。一人で着られないのは、年少さんのお友達の半分だけなのに、葉月ちゃんたら、体が大きいのに自分で着られないんだ。ふぅん、葉月ちゃん、体は大きいけど、本当は年少さんなのね。――そうか、そう言えば、急に駆け出してすぐにころんしちゃったくらいだから、まだあんよも上手じゃなかったっけ。だったら一人で着られなくても仕方ないわね。まだあんよも上手じゃない年少さんだもん、自分で制服を着られないのも無理ないわよね」
とからかい気味に言うと、いったんは葉月に手渡そうとした制服を改めて自分の両手で広げ持ち、背中に縫い付けてあるリボンを葉月の目の前で揺らしてみせながら笑い声で続けた。
「ひばり保育園には年長さんのクラスと年中さんのクラスと年少さんのクラスがあって、年長さんのクラスは大きな鳥の名前をとって『はと』組、年中さんのクラスは年長さんよりもちょっと小さな鳥の名前をとって『おうむ』組、年少さんは小さな鳥で『すずめ』組っていう名前が付いているの。でもって、はと組の年長さんが着る制服のリボンの色はブルーで、おうむ組の年中さんの制服にはイエローのリボンが付いてて、すずめ組の年少さんのリボンは薄いピンクになっているのよ。ま、リボンは女の子だけで、男の子の制服は前がクラスごとに色違いのスカーフになっていて背中には何も付いてないんだけどね。――ところで、葉月ちゃんのために用意しておいたこの制服に付いているリボンは何色かな？　葉月ちゃんはお利口さんで色の名前なんてたくさん知っていると思うから、ちゃんと言えるよね？」
「……ピンク……」
リボンが（男の子の場合はスカーフが）年長・年中・年少の発育別クラスを示しているという事実を初めて教えられ、自分のために用意したという真新しいセーラーワンピースの背中に縫い付けてあるリボンの色を改めて確認した葉月は、屈辱に唇を震わせながら、よく注意していないと聞こえないほど小さな声で応じた。
「そうね、ピンクね。ちゃんと答えられて、葉月ちゃんは本当にお利口さんだわ。お顔も可愛いし、お利口さんだし、このぶんだと、登園してすぐ人気者になれるわよ」
園長は、それこそ園児が算数の問題でも解いたかのように葉月を褒めそやし、大げさな仕草で手を打ってみせた。そうして、屈辱のために唇をわななかせる葉月の様子を面白そうに眺めながら、こんなふうに続ける。
「でも、葉月ちゃんの制服に付いているリボン、制服の色よりも濃いピンクでしょ？　他の

年少さんの女の子が着る制服に付いているリボンは、葉月ちゃんの制服の色と同じくらい薄いピンクなのよ。なのに、葉月ちゃんのは濃いピンク。どうして違うか、葉月ちゃん、わかるかな？」

「……」

謎々を楽しんでもいるかのような園長の問いかけに、けれど、自分に与えられた制服に縫い付けてあるリボンの色が何を示しているのかを教えられ、その意味を知った結果のいいようのない屈辱のためもあるが、二種類のピンクの違いが何を物語っているのか本当にわからせないせいもあって、葉月は無言だ。

やがて、口をつぐむ葉月の様子をしばらく眺めた後、もういちど制服の背中のリボンを揺すってみせながら園長がおもむろに口を開いた。

「わからない？　じゃ、教えてあげる。――年少さんのすずめ組は薄いピンク。でも、葉月ちゃんは、年少は年少でも、ちょっと違う年少さんなのよ。だから、すずめ組とは違う、濃いピンクなの。だって、葉月ちゃんが入るのは特別年少クラスの『ひよこ』組さんだもの」

比較的小さな鳥からとった『すずめ』という名前よりもまだ更に小さな鳥を意味する『ひよこ』というクラス名を園長から告げられた瞬間、葉月はひどい不安と、なんともいえない嫌な予感予感を覚ずにはいられなかった。

「どうして『年少』の前に『特別』っていう言葉が付いていると思う？　それはね、葉月ちゃんと遠藤先生のために特別に新しくつくったクラスだからよ。葉月ちゃん、他の年少さんの子供たちと比べると、とっても手間のかかる子なのよね。すぐに駄々をこねるし、お転婆だし、聞き分けはよくないし。でも、それって仕方のないことかもしれないわね。だって、葉月ちゃんは本当は大学生の男の子だもの。女の子らしくおとなしくなさいって言われても、言いつけなんて守れないわよね。そんな本当は十八歳の男の子の葉月ちゃんを可愛い保育園児の女の子に躾け直すためにつくったのが特別年少クラスの『ひよこ』組なのよ。それと、男の人の近くにいるのが怖くて怖くてたまんない遠藤先生に自信を取り戻してもらうためにつくった特別のクラスという意味合いもあるんだけどね。だから、普通の年少さんクラスのお友達と区別するためにリボンの色を少しだけ変えてあるの。あ、リボンだけじゃなかったわね。他のお友達はみんな、女の子の制服も薄いブルーだけど、葉月ちゃんだけ特別にピンクにしてあげたのよ。本当は男の子の葉月ちゃんが少しでも早く女の子の生活に慣れますようにって願いをかけて。でも、そんなこと、今はあまり考えなくてもいいわ。今は、せっかく特別に用意してあげた新しい制服を着ることだけ考えていればいいんだから。――ま、もっとも、着るとは言っても、自分で制服を着られない手間のかかる特別年少さんの葉月ちゃんには、ピンクのリボンが可愛い制服、私が着せてあげなきゃいけないんだっけ」

園長は面白そうにそう言って葉月の背後にまわり、両手で制服の袖を広げて背中に押し当てた。

葉月はびくんと体を震わせ、背中に羽織らされたセーラーワンピを振り払おうとして両手をばたつかせる。

「じっとしてなきゃ駄目よ、葉月ちゃん。園長先生が制服を着せてくださるんだから、おとなしくしてなきゃいけないわね。年少さんの葉月ちゃんでも、そのくらいのことはわかるでしょ？　もしもそんなこともわかんないんだったら、年長や年中のお兄ちゃんとお姉ちゃん

に笑われちゃうよ。ううん、お兄ちゃんやお姉ちゃんだけじゃなく、他の年少さんのお友達にも笑われちゃうんじゃないかな。そんなの、いやでしょ？――本当は大学生のお兄ちゃんが保育園の子供たちに笑われちゃうだなんて、そんなの、いやだよね？」

制服を拒む葉月の肘をつかみ、両手を強引に後ろへ伸ばさせながら、もうすっかり葉月のことを年端もゆかぬ（特別）年少クラスの園児だと決めてかかって皐月はわざと優しく言ってい聞かせた。

本当は十八歳の男の子なのに。本当は大学生のお兄ちゃんなのに。園長と皐月が繰り返し口にする言葉が葉月の羞恥を煽りたててやまない。

太腿をきゅっと締めつける女児用ショーツと胸元を圧迫する少女用キャミの緊縛感。思わず足を滑らせそうになる女児用ソックスのすべすべした感触。それらに加えて、背中に羽織わされ強引に袖を通されて体中を包み込まれてゆく夏用の制服のさらさらした肌触り。そのどれもが、「これから葉月ちゃんは保育園の年少クラスに入れられちゃうんだよ。保育園に通う年少さんの可愛い女の子になるよう葉月ちゃんは躾け直されちゃうんだよ」と無言で囁き続ける。

（ぼ、僕、保育園に通う子供になっちゃうんだ。それも、半ズボンで元気に走りまわる男の子じゃなくて、ちょっとでもお転婆なことをしたら叱られちゃう年少さんの女の子に。幼稚園の先生になるための資格を取って、できれば大学院へ行きたいと思ってる僕が、先生になるどころか、逆に、特製のピンクのセーラーワンピを着せられて、腕白な男の子にスカートめくりをされちゃわないようどきどきし続けなきゃいけない女の子の保育園児にさせられちゃうんだ）改めてそう実感するにつれ、なんとも表現しようのない、どこか甘美でさえある倒錯感が胸を満たしてゆく。上半身から足先まで一つ残らず女物の（というか、女児用の）下着を着けさせられた上に更に女の子の制服まで着せられたが最後、もう二度と引き返すことのかなわぬ道に足を踏み入れることになりそうな予感が脳裏をかすめる。

えもいわれぬ倒錯感と被虐感にふと心を奪われて、葉月の抵抗が一瞬だけ弱まった。その隙を見逃すことなく、園長と皐月が二人がかりで葉月にパステルピンクのセーラーワンピを手早く着せてしまう。

【三】

「最初はいやがっていたけど、すぐにおとなしくなったわね、葉月ちゃん。本当は女の子の制服を着たくて着たくてたまらなかったんじゃないのかしら？　女の子のソックスを履かせてもらって、女の子のパンツを穿かせてもらって、女の子のキャミを着せてもらって、女の子みたいなあそこにしてもらって、でもって、女の子の制服を着せてもらいたくて我慢できなかったんじゃないのかな、葉月ちゃん？」

最初は力尽くで、けれど後の方はさして抵抗もなく着せ終えたセーラーワンピのボタンを園長が一つずつ丁寧に留めてゆく様子を眺めながら、ひやかすように皐月が言った。

「そんな……そんなこと、あるわけ……」

そんなこと、あるわけないじゃないか！　皐月に向かってそう言い返そうとした葉月だが、言葉が途中で力を失い、遂には口をつぐんでしまう。
「あらあら、随分おしとやかになっちゃったじゃない、葉月ちゃんたら」
力なく途中で言葉を飲み込んでしまった葉月に、皐月は少し呆れたような表情を浮かべた。
だが、園長がセーラーワンピースのボタンを留め終え、襟元のリボンを結んで形を整える間も頬をピンクに染めるばかりで全く抵抗の素振りをみせない葉月の様子に、ふと思い当たる節がある。
「これですっかり年少さんの女の子ね、葉月ちゃん」
スカートの裾をきゅっと引っ張り、強引に着せた時にできた制服のシワを伸ばしてから葉月の前を離れた園長が自分のすぐ横に戻って来るのを待って、皐月は感心しきりといった声で話しかけた。
「ええ、そうね。あとは、通園用の帽子をかぶらせて靴を履かせてみなきゃいけないんだけど、このぶんだと、そっちの方もサイズは間違いさなそうだわ。これも御崎先生の見立ておかげよ。やっぱり、ずっと一緒に暮らしていると、細かなところまで観察が行き届くものなのね」
園長は、二人の目の前で身をすくめる葉月に視線を向けたまま、こちらも感心したように応じた。
それに対して皐月は、葉月にもちゃんと聞こえるよう幾らか声を強めて、どこか思わせぶりな口調でこう言う。
「それにしても、制服の色がピンクなのも理由の一つなんでしょうけど、うちの保育園の他の女の子たちと比べても、なんだか葉月ちゃんの方が幼い感じさえしますね。一番上の年長さんよりも本当は葉月ちゃんの方が一回り以上も年は上なのに」
「ああ、それは、色のせいもあるけど、他の女の子が着ている制服と比べて少しだけデザインも変えているからでしょうね、葉月ちゃんの制服の」
皐月の言葉に対して、少しだけ考えて園長が頷き応えた。
「デザインも変えてあるんですか？」
「そうよ、よく見ないとわからないような細かなところなんだけど、縫製業者さんにお願いして、きちんと変えてもらっているのよ。だって、本当は大学生の葉月ちゃんに、子供用の制服をそのままサイズだけ大きくして着せたりしたら、どうしてもおかしなことになっちゃうもの。今は子供用のが手元にないから実際に見比べることはできなくて言葉だけの説明になるけど、私が言うことを頭の中に思い浮かべて聞いてちょうだね」
園長は目だけを動かして皐月の横顔を見てから、もういちど葉月の姿に視線を投げかけて言った。
「一番わかりやすいのはウエストラインかしらね。小さな子供の体格というのは、大人をそのまま縮めただけじゃないの。その一番わかりやすいところが頭身なわけ。大人の場合はモデルさんとかだと八頭身の人もいるし、さほどスタイルがいいってわけじゃない人でも六頭身ってところでしょう。だけど、保育園児くらいの子供だと五頭身とかが普通なの。そんな小っちゃな子供の体にあわせて洋服をつくると、ウエストラインを下げ気味に仕立てても、なんだか上の方にあるように見えるのよ。それをそのままサイズだけ大人用につくり変えたりしたら、実際の腰まわりよりもウエストラインが下になって、全体が変なラインになっち

やうの。それを補正して、その上、子供っぽい可愛らしさを強調するために、葉月ちゃんに着せてあげた制服は、葉月ちゃんの本当の腰まわりよりも上にウエストラインがくるように変更してもらったのよ。あと、幼児体型の特徴っていうと、お腹がぽっこり出てるとこよね。その感じを出すために、葉月ちゃんの制服は、ウエストの部分をあまり絞り込まないようゆったりしたラインにして、そんな幼児特有の体型を再現してもらうようにしてあるの。他の部分も含めて、そんなふうに、実際の子供よりも子供らしさを強調するように手を入れてもらったから、幼い感じが強まっているんだと思うわ。ま、狙い通り、それで葉月ちゃんの可愛らしさが何倍にもなって引き出せれたわけだから、私としては大満足ってところね」

「じゃ、スカートの丈が短めに仕立ててあるのも、それと同じ理由で園長先生が業者さんに指示されたからですね？」

園長が手短に説明を終えると同時に、皐月が、目の前に佇む葉月の姿をじっと見つめて意味ありげに尋ねた。

「ええ、その通り。私が縫製業者さんに、スカートはなるべく短めに仕立てるようお願いしたのよ。スカート丈が短い方が、幼い感じが余計に強調されるから」

「ですよね。制服を着た葉月ちゃんが他の女の子たちよりも幼く見える理由をいろい考えていたんですけど、私が真っ先に思いついたのはスカート丈の短さでした。うちの保育園で預かっている女の子の制服のスカートの丈は膝頭のすぐ上くらいの長さなのに、葉月ちゃんの制服のスカートは膝上二十センチってとこでしょうか。太腿が半分くらい見えちゃって、それが、いつもじっとしていない活動的な子供らしさと、まだ恥ずかしさなんて感じない幼児のあどけなさを強調しているのかなって思いついたんです。園長先生の説明を聞いて、ウエストラインの高さとかウエストの絞り込みとか細かなところを工夫しているんだなってこともわかったけど、そういうのとスカート丈の短さとが相まって、とっても可愛らしくて幼い印象を強めているんでしょうね」

皐月は思案げにそこまで言ってから、園長にというよりも葉月に向かって、こんなふうに付け加えた。

「でも、スカートを短めに仕立てるよう業者さんに指示されたのは、そんな見た目の可愛らしさを強調するためという目的もあるとは思うんですけど、それだけじゃないようにも思えるんです。なんていうか、もっと実用的な意味があるんじゃないかなと思うんですけど、いかがでしょうか？」

そんなふうに重ね訊く皐月に対して、園長はすっと目を細めて軽く頷いた。

「いい勘をしているわね、御崎先生は。その通り、スカートを短めに仕立ててもらったのには実用的な意味合いもあります。――スカートを穿き慣れていない葉月ちゃんに少しでも上手にあんよをしてもらうためという立派な意味合いが」

何度か繰り返される質問と返答。実は、それは、前もって皐月と園長とが口裏を合わせておいたのを、葉月の目の前で、いかにも皐月が疑問に思ったことを園長に尋ねるといった態をとって演じているに過ぎなかった。その目的は、葉月がとても幼く見えること、女の子の制服が葉月にひどく似合っていること、そうして、葉月が今どんな装いに身を包まれているかといったことを葉月自身により強く実感させ、羞恥をこれでもかと煽りたてるところにあった。

そして、その煽りたては今、更に深い段階に進もうとしていた。

「うふふ。やっぱり、そんな意味合いがあったんですね。そうですよね、これまでスカートなんて穿いたことがない葉月ちゃんだもの、スカート丈が長いと裾がまとわりついて、ますますあんよが上手じゃなくなっちゃいますもんね。あんよのたびに転んじゃって、そのたびにスカートが捲れ上がってパンツを男の子に見られちゃうなんてことになったら可哀想ですもんね」

皐月は、丈の短いスカートの裾から見える葉月の腿をちらと見て納得げに頷いてから、毛足の長い絨毯の上を足音もなく歩き出した。

皐月の進む先には、頬を上気させ、二人と目を合わせまいとして視線を落とす葉月の姿があった。

目を伏せたままだった葉月だが、皐月が足早に近づいてくる気配に、はっとしたように顔を上げた。

「だけど、スカート丈が短い理由、それだけじゃないんですよね？　たとえば、スカートが短いと、こういうことを調べるのも簡単ですもんね」

葉月のすぐそばに歩み寄った皐月は、さっと背後にまわりこみ、太腿を半分ほどしか隠していないスカートの裾に右手をかけた。

葉月が慌ててスカートを押さえたが、既に手遅れだ。皐月が右手を振り上げると、スカートがぱっと捲れ上がって、シナモロールのパックプリントがあらわになった。

「やだ！　急に何すんだよ、姉さん！」

それまではおどおどしてばかりいた葉月だけれど、この時ばかりはさすがに怒気を含んだ声をあげてしまう。

しかし、皐月は澄ましたものだ。葉月の金切り声などまるで耳に届いていないかのような涼しい顔で、あらわになったショーツに包まれたお尻の膨らみに冷ややかな視線を向けたかと思うと、

「少しの間だけだから、腰を曲げて体を前に倒してごらんなさい。それで、お尻を後ろに突き出すのよ」

と有無を言わさぬ口調で命じるのだった。

途端に、葉月の顔に絶望的な表情が浮かんだ。金切り声をあげていた唇がわななき、体が小刻みに震え出す。

「な、何を……」

何をするつもりなのさと尋ねたいに違いない。けれど、その声さえ出てこない。

「お尻を後ろに突き出しなさいと言った筈よ。ぐずぐずしてないで、早くしなさい!!」

スカートの後ろを捲り上げたられた姿で身を固くするばかりの皐月に向かって葉月の怒声が飛んだ。決して乱暴な口調ではないものの、なかなか言いつけを守ろうとしない園児を叱る時の、威厳に満ちた声だ。

忙しい両親の代わりに子供の頃から面倒をみてくれていた皐月にそんなふうに叱りつけられては、葉月としてもたまったものではない。体をびくんと震わせ、涙目になりながらも、命じられるまま、のろのろと腰を折り、体を前屈みにして、おそるおそるお尻を後ろに突き出すしかない。

「そう、それでいいのよ。先生の言うことがきけて、葉月ちゃんはお利口さんね。でも、こ

れからは、先生に叱られる前に言いつけを守るようにしなきゃ駄目よ。葉月ちゃんだって、先生に叱られるのはいやだもんね？」
　両手を自分の膝について腰を折り脚をぷるぷる震わせながらようやくのこと後ろに突き出した葉月のお尻の膨らみを空いた方の手でぽんぽんと叩いて、つい今しがたの怒声が嘘みたいなわざとらしくも優しげな声で皐月は言った。
「じゃ、今からパンツが濡れてないかどうか確かめてあげる。そのままじっとしているのよ。暴れたりしたらお尻たたきのお仕置きだからね」
　皐月は、スカートの後ろを捲り上げられた状態でお尻を後ろに突き出すという惨めな姿で体を固くする葉月に対してそう言い聞かせると、スカートの裾をつかんだ右手を何度か上げ下げしてみせながら、にこやかな笑顔で園長に向かって言った。
「スカート丈が短いと、捲り上げる時に脚に絡まないからいいですね。これなら、葉月ちゃんがおもらしでパンツを汚しちゃってないかどうか調べるのも楽ちんです」
「お、おもらしだなんて……」
　おとなしくしているよう厳しく命じられ屈辱の姿勢を強要されながらも、皐月が口にした『おもらし』という言葉が耳に届いた瞬間、我を忘れて反論してしまう葉月。けれど、その声には、まるで力がない。
「粗相しちゃった子供はね、誰でも最初は、自分がおもらしでパンツを汚しちゃったことをなかなか認めようとしないのよ。でも、ちょっとパンツを見ればすぐにわかるの。その時になってやっとのこと、おもらしを認めて、ごめんなさいするのよ。葉月ちゃんも、そんな子たちと同じなのかな。他の子供たちと同じで、自分から進んでごめんなさいできないのかな」
　皐月は、片方の眉をぴくんと吊り上げて、葉月の弱々しい抗弁を遮った。
「ち、違う……そんなじゃ……」
「ふぅん、何が違うの？　僕は本当は十八歳です。十八歳の大学生だからおもらしでパンツを汚したりなんてしません。ひょっとすると、そう言いたいのかな？　だけど、大人になってもパンツを汚しちゃうこともあるよね。葉月ちゃん、眠っている間に汚しちゃったパンツを恥ずかしがって、ちゃんと洗濯カゴに入れてなかったことがあるんじゃなかったっけ。そんなパンツを私がみつけて内緒で洗っておいてあげたことが何度もあるんだけど、気がついてないのかな？」
　夢精で汚してしまったパンツのことを皐月は言っているに違いない。そう思いついた瞬間、葉月の顔がこわばった。
「あらあら、葉月ちゃんたら、びくびくした顔しちゃって。でも、先生は、葉月ちゃんがおねむの間にパンツを汚しちゃったことを叱るつもりはないのよ。こんな格好をしているけど、葉月ちゃんは本当は大学生の男の子だもん、夢精なんて自然な生理現象だよね。だから、それはいいの。ただ、先生が言いたいのは、おもらしでパンツを汚しちゃうのは小っちゃな子供だけじゃないのよってこと。現に、葉月ちゃんも汚しちゃったんだもんね？　ま、透明なおしっこか白いおしっこかっていう違いはあるし、昼間おっきしている時のおもらしなのか夜おねむの間のおねしょなのかっていう違いもあるけど、でも、子供でも大人でも女の子でも男の子でも、パンツを汚しちゃうことがあるってことには違いがないよね。――だけど、パンツを汚しちゃって、それを黙ったままにしとくのは感心しないな。濡れたパンツを穿い

たままだと、せっかくのすべすべのお肌がただれて真っ赤に腫れちゃうもの。だから、調べてあげるのよ。葉月ちゃんがパンツを汚しちゃってないかどうか。汚しちゃって、なのに恥ずかしがって正直にそのことを教えてくれないと困るから。叱るためなんかじゃないんだってこと、お利口さんの葉月ちゃんはわかってくれるよね？」

葉月の羞恥を煽ってやまない内容を口にしているのに、皐月の口調はあくまでも優しげだ。そのギャップが葉月を際限なく不安にさせる。

「園長先生、お手数をかけて申し訳ないんですけど、私がスカートを捲り上げていますから、その間に葉月ちゃんのパンツを調べていただけないでしょうか。特に、クロッチの部分、両脚の間から後ろにかけてのあたりを念入りに」

葉月が反論の言葉を全く失ったことを見て取った皐月は、いかにも恐縮した様子で園長に声をかけた。

「あ、いいわよ。明日からうちの保育園で預かることになっている年少さんの女の子が濡れたパンツのままでいてお肌が荒れちゃったなんてことになったら可哀想だものね。これも子供たちの健康管理の一環なんだから、喜んで調べさせてもらうわよ。だから、そんなに恐縮したりしないでちょうだい。今でこそ管理職だけど以前は私も現場に立っていたんだし、おやすいご用よ」

恭しく頭を下げる皐月に向かって園長は鷹揚に頷くと、葉月の正面を離れて背後にまわりこみ、両膝を床について葉月のお尻を斜め下から見上げるような姿勢をとった。

「いかがですか？」

葉月の身を包む制服のスカートの端を持ち上げたまま、軽く腰をかがめて皐月が気遣わしげに訊いた。だが、そこには、葉月のパンツが濡れている筈だという確信めいた様子がありありと見て取れる。

「ちょっと待っていてね。今、上の方から見ているから。――あら、これは……」

腰を曲げて後ろに突き出した葉月のお尻の膨らみの真ん中あたりからゆっくり視線を下におろしていた園長だが、葉月の両脚の後ろがわ、ちょうどペニスの先とおぼしき膨らみがあるあたりに目をやった途端、幾らか声を弾ませて

「そんなに大きくはないけど、シミがあるわね。よく見ないとわからないほど薄い色だけど、封を開けたばかりの新しいパンツにこんなシミがついているわけなんてないから、葉月ちゃんが汚しちゃったものに間違いさなそうよ」

と、すぐそばにいる皐月の顔を見上げて言った。

「そうですか、やっぱりね」

園長の言葉に、けれど、皐月はまるで驚く様子もなかった。保育園に通う女の子そのままの格好をさせられた実の弟が穿いている女児用ショーツのクロッチの部分にシミがあると聞かされても、全く動揺するふうもなく、まるでそのことをあらかじめ知ってでもいたかのように平然とし、あまつさえ、うすら笑いの表情さえ浮かべている。

「やっぱりねって――御崎先生、知っていたの？　ぐっしょりってわけじゃないけど葉月ちゃんがパンツを汚しちゃっているのを、確かめる前から知っていたわけ？」

僅かに首を反らし、皐月の顔と葉月のショーツのクロッチ部分とを交互に見比べながら、園長が怪訝そうな顔で聞き返した。

「はい、とっくに知っていました。園長先生、私に、『ずっと一緒に暮らしていると、細かなところまで観察が行き届くものなのね』とおっしゃいましたよね。そうなんです。子供の頃、それこそ生まれたての赤ちゃんの頃から両親の代わりに私が面倒をみてきて、私が短大を卒業して一人暮らしを始めてから今年の四月まではマンションと実家とで離れ離れで住むようになったけど、この春からまた一緒に暮らすようになった血のつながった弟のことだもの、私が知らないことなんて一つもありません。夢精で汚しちゃったパンツをどこに押し込んでいるのか、こっそり買ってきたエッチな本をどこに隠しているのか、オナニーでティッシュを一日に何枚くらい使っちゃうのか。そんなことも、好きな食べ物が卵焼きだってことやお気に入りのアイドルが誰かってことと同じくらい、よく知っているんです。葉月ちゃんと私とのそんな間柄だもの、葉月ちゃんがパンツにシミをつくっちゃったことなんて、とっくにお見通しだったんです」

皐月の顔に浮かんでいたうすら笑いが、いつしか、艶然とした笑みに変わっていた。

園長に向かってそういう皐月の言葉は、もちろん、葉月の耳にも届いている。

ただでさえ俯き加減に視線を落としていた葉月が、ぎゅっと唇を噛みしめて更に顔を伏せてしまう。

「園長先生と私とで制服を着せてあげようとした時、短い間だったけど、葉月ちゃんの手から力が抜けたことがあったよね？　あの時に出しちゃったんでしょ？　ああ、ううん、きちんと言うと、それまでもじわじわ溢れ出てたのが、その時に一番たくさん出てきちゃったんだよね？　でも、園長先生がみつけたシミ、葉月ちゃんがおねむの時に夢精でこぼしちゃったり自分で自分を慰めててティッシュを汚しちゃう精液なんかじゃなくて、その前にじくじく溢れ出してくる、我慢汁とかいうヤツなんでしょ？　もしも本格的に精液を出しちゃってたりしたら、その時には葉月ちゃん、あっとかいう呻き声をあげて体をのけぞらせて、その後、へなへなになって床にへたりこんじゃってた筈だもん。いくらなんでも私たちの目の前でそこまでいやらしいことはできなかったみたいだけど、でも、我慢汁を溢れ出させちゃうほど気持ちよかったんだよね。――お尻の下におねしょシーツを敷いてもらったことが、女の子用のソックスを履かせてもらったことが、お股を小さな女の子みたいにしてもらったことが、シナモロールのバックプリントの可愛いショーツを穿かせてもらったことが、胸にカップのあるキャミを着せてもらったことが、特製の園児用セーラーワンピを着せてもらったことが、でもって、保育園の女の子扱いしてもらったことが気持ちよかったんだよね。気持ちよくて気持ちよくて、そのたびに少しずつ我慢汁を溢れさせて、とうとうパンツに、表側からもわかるほどの我慢汁のシミをつくっちゃったんだよね？　でも、知ってる？　我慢汁はねばっこいから、すぐには乾かないんだよ。パンツを穿き替えないと、いつまでもべとべとしたパンツを穿いてなきゃいけないんだよ。ま、明日からは年少クラスの女の子の葉月ちゃんも本当は大学生の男の子だもん、そんなこと、とっくに知ってるに違いないけどさ」

それまで園長と並んで葉月の真後ろにいた皐月だが、スカートの端を持ち上げたまま葉月の体の横に場所を移して、羞恥のために真っ赤にほてる耳元にねっとりした声で囁きかけた。

それから皐月は、葉月の耳元に唇を近づけたまま目だけを動かして園長に向かって意味ありげな視線を投げかけた後、再び葉月の耳たぶにねっとりと絡みつくような声で囁きかけるのだった。

「だけど、いつまでもそんな中途半端なままじゃ嫌だよね？　イけそうでイけいなんて、そ

んなの困るよね。いつまでもあそこが疼き続けてちっともおとなしくならないなんて、気持ちがどうにかなっちゃうよね。うちの保育園でも、年少さんのちょっと気の弱い女の子だと、おしっこが出そうなのにトイレへ行くのを無理に我慢して、それでとうとう失敗しちゃうようなことが多いのよ。お家のトイレじゃなきゃできない子とか、おしっこが出そうなのはわかってるけど他の子供たちと遊んでる途中に抜け出せない子とか、トイレに入って便器に座るところまではできるのに外から聞こえる他の子供たちの声が気になっておしっこがなかなか出ない子とか、いろいろなのよ、小さな子供っていうのは。葉月ちゃんも、そんな子たちと一緒なのかもね。白いおしっこと本当のおしっこの違いはあっても、出そうになっているおしっこを自分でちゃんとできないとこなんて、まんま、そんな子たちと同じだよね。――それでね、おしっこが出そうなのに出せない子たちには、私たち保育士がちゃんとさせてあげなきゃいけないんだ。保育園のトイレを怖がる子は私たちが手をつないで連れて行ってあげなきゃいけないし、遊んでるお友達の輪から抜け出せない子は私たちが声をかけて連れ出してあげなきゃいけないし、トイレの外からドア越しに聞こえる友達の声が間になって仕方ない子は、おしっこが終わるまで私たちがトイレのドアのすぐ前に立って優しく話しかけてあげなきゃいけないの。だから、葉月ちゃんにも先生がちゃんとしてあげるわね。女の子の下着と女の子の制服が気持ちよくて女の子パンツの中に白いおしっこを出しちゃいそうなのに恥ずかしくてたまんなくて我慢汁しか出せない葉月ちゃんには、私が思いきりイかせてあげる。だから、心配しなくていいのよ。先生にまかせておけば大丈夫なんだから」

そう囁きかけた皐月は、再び葉月の背後に戻り、それまで持ち上げていたスカートの裾から手を離した。

空気をふくみながら、葉月のお尻の上にスカートがふぁさっと舞いおりる。

けれど、それで下腹部が全て覆い隠されてしまったわけではない。腰をかがめ体を前に倒し気味にしてお尻を後ろに突き出す姿勢を取らされているせいで、スカートの裾はお尻の膨らみの中ほどの所に引っかかってしまい、脚の付け根のあたりから下はまだ丸見えのままだ。

「スカートの丈が短いと、葉月ちゃんがパンツを濡らしてないかどうかを調べるのも簡単ですし、その後の処置も楽にできるから本当に助かります。適切な指示を業者さんに出してくださった園長先生には幾ら感謝しても足りないくらいです」

園長と葉月、どちらに向かってともなく言い、皐月は、葉月の両脚の間に右手を差し入れた。

「あ……」

身構えるひまもなかった。葉月の唇が半開きになって、あえかな呻き声が漏れ出る。

「葉月ちゃんがいつもどんなふうにして自分で自分を慰めているかは知らないから上手にできるかどうかわからないけど、優しくしてあげるから心配しなくていいのよ。どう、ここが気持ちいいの？　ほら、こんな具合にしてあげれば気持ちよくなるのかな？」

皐月は、中指の腹部をショーツ越しに葉月のペニスの先に押し当て、しばらくの間ぐりぐりと小さな円を描くように動かした後、人差指と中指の先でペニスの先端を軽く挟みこむと、二本の指でこくっこくっと揉みしだいた。

「くぅ、ん……」

後ろ向きに折り曲げられ接着剤によって下腹部に固定されてしまっている皮膚から窮屈そ

うに顔を覗かせた、体の中で最も感じやすい部分。そこをこねくりまわされ、これでもかとばかりに責めたてられては、どうすることもできない。決して手慣れているとはいえないものの、皐月の指の動きは執拗だ。これまで自分で慰めるしかなく、異性の手で弄ばれたことのない葉月のペニスは、ショーツ越しにとはいえ充分に感じ取れる皐月の柔らかな手の感触に見る見る怒張し、けれど皮を固定されてしまっているためにいきり勃つこともかなわずに、女児用ショーツのクロッチ部分に我が身をいやらしくこすりつけながら、ひくひくと蠢くばかりだ。

「いいのよ、出しちゃって。恥ずかしがらずに思いきり出しちゃっていいのよ。精液を溢れ出させちゃうことなんて、大学生の男の子にとっては、小っちゃな子供が我慢できなくなっておしっこをおもらししちゃうのと同じくらい自然なことなんだもの。それで誰にも迷惑をかけないのなら、少しも我慢することなんてないのよ。――ただ、遠藤先生を襲った男みたいなことさえしなきゃ、それでいいんだから」

最後のところを語気を強めて言うと同時に、葉月のペニスを責める皐月の指の力が増した。

「ひっ……!?」

葉月の口を悲鳴じみた喘ぎ声が衝いて出て、女児用ショーツの中でペニスがどくんと脈打った。

その直後、ショーツの生地がねとっと濡れる感触が皐月の指先に伝わってきて、独特の青臭い匂いが漂い出す。

「いいのよ、それで。もしも葉月ちゃんがおねだりするなら、先生、何度でも同じようにしてあげる。それで、葉月ちゃんが女の人に襲いかかったりしないならね。遠藤先生と同じゼミだった男みたいに、誰かに襲いかからなきゃいけなくなるほど胸の中にいやらしいもやもやを溜め込まなくてもすむように。そうして、葉月ちゃんが可愛い年少さんの女の子になれるように」

ショーツの中のペニスがゆっくり萎え縮こまってゆく様子をはっきり指先に感じながら、皐月は、瞳を涙で潤ませる葉月に向かって、これまで聞いたことのないようなとびきり優しい声で語りかけるのだった。

第三章　～通園バス～

【一】

それからしばらく後、もうすぐお昼という頃、ひばり保育園の通園バスの中に皐月と葉月の姿があった。

園児送迎用のマイクロバスを運転しているのは、古くから保育園に在職している水無月という初老の女性だ。先代の園長の時代から事務を一手に引き受けるかたわら、女性がてら早くから車の大型免許を取得し、送迎バスの運転も引き受けているという、ひばり保育園にはなくてはならぬ女性で、しかも人柄も良く、誰にでも優しく接するので、園児や保護者からも『水無月のおばちゃん』と呼ばれて慕われている。

「すみません、水無月さん、せっかくの日曜日なのに休日出勤なんてしていただいて申し訳ありません」

運転席のすぐ後ろの席に葉月と並んで座った皐月は、バスが信号待ちで停まるのを待って水無月に声をかけた。

「いいのよ、気にしないでちょうだい。どうせ独り身だし、家にいても暇を持て余すだけなんだから。それよりも、いつもと同じようにバスを運転したり、保育士さんたちとお話をしたりしていた方が気が紛れて丁度いいのよ。若い保育士さんや小さな子供たちと一緒にいると、なんだか自分も若返ったような気がして、もっと頑張らなきゃって気力が充実してくるし」

水無月は前方を注視しつつも、時おり視線をちらちらとルームミラーに走らせ、そこにに映る皐月と葉月の様子を確認しながら、にこやかな声で応じた。

「そう言っていただけると助かります。でも、葉月ちゃんのために明日から送迎コースが追加されることになって忙しくなるんじゃありません？　ま、もっとも、正直に言うと、私の方は送迎バスに便乗させてもらえることになるから毎日の通勤が楽になって喜んでいるんですけど」

皐月は気遣わしげに言って、隣に座っている葉月に視線を向けた。

ひばり保育園の場合、園児の三分の二ほどは保護者が送り迎えをし、残りが水無月の運転する送迎バスに乗って通園している。送迎のコースはだいたい決まっているのだが、たとえば町外れに家がある園児が通園に送迎バスを使わざるを得なくなった場合なども、持って生まれた人柄なのだろう、水無月はバスのルートを追加変更するに際して億劫がる様子をまるでみせない。むしろ、一人でも多くの園児と触れ合う時間が持てるといって進んで送迎コースを追加するくらいだ。だから、明日から登園することになっている葉月にも送迎バスを使わせるからといって園長がルートの追加を依頼し、明日からに備えて道順の確認がてら皐月と葉月をマンションまでバスで送り届けるよう指示した時も、穏やかな表情を浮かべてふたつ返事で引き受けたのだった。しかも、そのために日曜日なのに出勤し、園長室の隣の事務室で葉月の面談が終わるのを待つことも、ちっとも厭わない水無月だった。

「忙しいだなんて、とんでもない。これまでよりも少しだけ早起きすればいいだけだから、

なんてことないわよ。年を取ると朝が早くなるから、丁度いいくらい。それよりも、御崎先生が弟さん……ああ、いけない、妹さんって呼ばなきゃいけないんだったっけ……妹さんと一緒に私のバスに毎日乗ることになって、他の先生方も喜んでらっしゃるんじゃないかしら。だって、これまでは先生方がみんなでローテーションを組んでバス添乗の順番を代わる代わるこなしていたのが、明日からは御崎先生がずっと一人で添乗をしてくれることになるんだから」

水無月が葉月のことを『弟』と呼びかけ、それを慌てて『妹』と訂正するのを聞いて、皐月はなんともいいようのない笑みを浮かべながら改めて葉月の横顔を見た。大学生である弟がが年少クラスの園児、それも女の子として通園する手筈になっていることは、遠藤弥生の心のケアのためという理由と共に（そして、葉月と弥生が互いに憎からず想っている間柄だという事実も包み隠さず）とっくに園長が全ての保育士と水無月に告げていた（そう、そんなことになっていると知らなかったのは、実は、葉月だけだったのだ）。しかも水無月は、『面接』という名目で葉月がセーラーワンピースの試着を強要され、下着まですっかり女児用のものに着替えさせられる様子を、園長室のすぐ隣の事務室に置いてある防犯用のテレビモニターで確認していた筈だ。その間、水無月がどんな表情を浮かべていたかを想像すると、皐月はくすくす笑いを止められなかった。

「それにしても、妹さん――葉月ちゃん、とっても可愛らしいお子さんね。ちょっとしたことですぐ恥ずかしそうに頬を赤くしちゃうみたいだけど、そんなところもすごく可愛いし、お姉さんに叱られると何も言い返せないでしゅんとしちゃう気の弱そうなところも可愛いし。私の娘、ちょっと遠い所に嫁いじゃったんだけど、その娘が時々連れて遊びに来てくれる孫娘がこの春から保育園の年少さんで、やっぱりちょっと気が弱くて恥ずかしがり屋さんのところがあって、なんだか葉月ちゃんのこと、赤の他人とは思えなくて。だから、葉月ちゃんがこれから毎日、私の運転するバスに乗ってくれると思うと楽しみでならないのよ」

葉月が本当は大学生の男の子だということは充分に承知している筈なのに、時おり遊びに来るという孫娘とそれほど面影が重なるのか、葉月のことを半ば本気で年少クラスの女の子だと思っていそうなほど、それこそ祖母が実の孫娘と久しぶりに会ったかのように声を弾ませて、水無月はルームミラーの向こうで目を細めた。

一方、葉月は、皐月にじっと横顔をみつめられ、水無月から幼い孫娘扱いされて、居心地悪そうにバスの座席にちょこんと腰かけて顔を伏せるばかりだ。

葉月が居心地悪そうにしているのには幾つもの理由があった。

まず一つ目の理由が、園長室での面談やバスの中でのさきほどからの会話も含め、周囲の者から自分がまるで本当の幼女のように扱われることに起因する屈辱のせいなのは言うまでもないところだろう。

次に二つ目の理由として挙げられるのは、バスの座席の座り心地だった。いや、誤解のないように言っておくと、座席そのもののクッションが悪いとかバスの乗り心地が固いとかという意味ではない。葉月が座り心地の悪さを感じているのは、実は、園長の手で施されたタックのためだった。タックのせいでペニスと陰嚢が両脚の間に押し込まれ、座席につくとペニスや陰嚢に体重がかかり、たえず重心の位置を変えたり身をよじったりしていないと鈍痛を覚えてゆったり座っていられないのだった。

続いて三つめの理由は、頭にかぶせられたベレー帽にあった。ひばり保育園に通う園児は、通園の時や遠足の時はセーラースーツの制服を着ることになっているのだが、同時に、それと同じ色合いの生地でできたベレー帽を頭にかぶる決まりになっている。ベレー帽は頭をすっぽり覆ってしまうような大きな物ではなく、やや小ぶりの物を少し斜めにちょこんと頭に載せるようになっているのだが、これにも、制服の襟元や背中にあしらってあるのと同じ、発育別クラス分けをしめす色違いのリボンが縫い付けてある。制服を着ているだけなら、通園バスに乗せられていても外から窓越しに見られても、葉月が園児として乗っているのか、保護者として乗っているのか、それとも保育士として乗っているのか、ぱっと見には区別がつかない。それが、頭にベレー帽をかぶせられ、しかもそこに濃いピンクのリボンが縫い付けてあるとなると、少し離れた所から窓越しに見られても、葉月が保護者や保育士などではなく、ひばり保育園に通う園児、それも、一番下で手のかかる年少クラスの園児としてバスに乗っているのだとすぐに判断されてしまうことになる。おそらく、信号待ちで隣の車線にバスと並んで駐まっている車に乗っている者は、窓越しに見える葉月のことを、ひばり保育園の年少クラスの園児だと思っていることだろう。隣の車に乗っているのが見ず知らずの人間ならまだいいが、もしも顔見知りが乗っていたとしたら、葉月が園児のベレー帽をかぶっていることを訝しく思うに違いない。それがきっかけになって、自分が年少クラスの女児として保育園に通うことになると知られたらどうしようと思うと、気が気ではないのだった。

最後に四つ目の理由として挙げられるのは、肩にかけさせられた通園鞄と、右手に持たされた手提げ袋だった。どちらも鮮やかな黄色の素材でできていて、葉月の体に合わせるため本当の園児が肩にかけたり手に提げたりする通園鞄や手提げ袋に比べると二回りほども大きく仕立てた特注品ということもあって、ただでさえ目立つ黄色が更に鮮やかに感じられる。通園鞄の中に入っているのは、園長室で園長から手渡された、『せいかつれんらくちょう』と『けんこうれんらくちょう』という文字が表紙に大きく印刷された二冊のノートと、それらに比べると小ぶりな『えんじてちょう』というハンディサイズの手帳だった。　この内、『せいかつれんらくちょう』というのは、園児が家庭や保育園で生活する中で気になるところを保育士と保護者とが互いに連絡し合うためのノートで、忘れ物が多いみたいだから気をつけてあげてくださいとか、何月の何日に個別面談をお願いしたいとか、明日は暑そうなのでタオルを余分に持たせてくださいとかいった細々した連絡事項のやり取りを記入するようになっている。もう一冊の『けんこうれんらくちょう』というのは、やはり保育士と保護者との連絡に使うノートなのだが、こちらは主に健康管理とか持病とかに関する連絡をやり取りするするために使うことになっている。例えば、今日は遅刻しそうになって朝食を抜いているので激しい運動をさせる時は注意してやってくださいとか、最近は一週間ほどおねしょをせずにすんでいるからお昼寝の時は毛布だけでも大丈夫かもしれないとか、乳歯と永久歯との生え替わり時期になっているようなのでオヤツの後の歯磨きは念入りにさせてほしいとか、そういった類のことを記入するようになっている。そして葉月に手渡された『けんこうれんらくちょう』には早々と、「七月〇日（日曜日）午前十一時ごろ、おもらし（白いおしっこ）をしてしまいました。パンツを穿き替えさせて、濡れたパンツは『おみやげ』として持たせていますので、持ち帰ったら洗濯してあげてください。ただし、あまり叱りすぎるとおどおどしてしまって余計におもらしの癖がついてしまうかもしれませんから、なるべく優しく接してあげてください」という皐月の文字が最初のページにくっきりと記されていた。

葉月の場合、このノートを受け取って読む保護者も皐月自身ということになるのだが、葉月の羞恥を煽るため、わざと皐月は自分に宛ててこの文章を記入したのだった。

それと、『えんじてちょう』というのは、中学校とか高校でいうところの生徒手帳みたいなもので、ひばり保育園の園章が印刷された表紙をめくると、園児の写真が貼ってあるページになり、そこには、その園児が確かにひばり保育園に在籍しているという証明書きと共に所属クラス名が記載されている。学割で博物館に入館する高校生などと違って保育園児がこの手帳でどこかの入場料を割り引いてもらうということは少ないのだが、自治体が運営する一部の子供向け施設などの場合、地元の幼稚園や保育園の園児は無料で入場できるといった所もあるため、外出する時は子供にこの手帳を持たせる保護者も多い。もちろん、葉月が手渡された『えんじてちょう』には、前もって皐月が用意しておいた皐月の顔写真が貼ってあり、その下には、『ひばり保育園　特別年少クラス（ひよこ組）　みさきはづき』という文字が記載されていた。

そうして、通園鞄とは別に右手に持たされた手提げ袋。これは、プールでの水遊びがあったり楽器のお稽古があったりで、園児が保育園へ持って行く荷物が普段よりも多くなり、通園鞄に入りきらなくなる時に使う袋だ。園長室にあらかじめ用意してあった紙袋は三つとも皐月が持つことになり、葉月が手渡された物といえばノートが二冊と手帳が一冊だけだから全て通園鞄に収めることができ、本当なら手提げ袋は空っぽの筈だが、今は、そこに、恥ずかしくてたまらない物が入っていた。それこそが、健康連絡帳に「濡れたパンツは『おみやげ』として持たせています」と記された、皐月の手で弄ばれて遂に我慢できなくなり精液でべとべとに汚してしまったシナモロールのショーツのことだった。園児が保育園でトイレに間に合わなくて汚してしまった下着は、原則として、丈夫なビニール袋に入れて持ち返らせることになっている。これを大半の保育園・幼稚園や母親などは『おみやげ』と呼び習わしている。これが、例えば年少さんでまだおむつ離れできない園児の布おむつだと、持ち返らせるには枚数も多いし、おもらしをしてしまうことを前提に家庭から各々の布おむつやおむつカバーを預かることにしていることが多いため、保育園なり幼稚園なりで洗って昼間のうちに乾かしてしまう場合が殆どなのだが、パンツおもらしに関しては、とっくにおむつ離れできている筈の比較的年長の園児が粗相してしまった際の処置ということで、教育的指導の目的もあって、おもらしの事実を園児自ら保護者にはっきり伝えさせるために、園児に持ち返らせるケースが大半だ。

今は『つばめ保育園で葉月ちゃんのパンツを穿き替えさせてあげた優しい御崎先生』として振る舞っている皐月が、マンションへ戻ると同時に、『これまで葉月の面倒をみてきた姉である皐月』に立場を変えておみやげのパンツを見、健康連絡帳に書かれた（御崎先生としての自分自身からの）葉月の恥ずかしい粗相に関する連絡事項を読むことになるのだ。その時、皐月がどんな態度を取るか、それを想像するだけで葉月にしてみれば気が気ではない。いっそこのまま手提げ袋をバスの窓から放り投げてしまいたい気分だが、そんんなことをしたらしたで、それを口実にどんな仕打ちが待っているのかしれたものではない。

「あら、いけない」

葉月が陰鬱な思いで窓の外に力ない視線を投げかけるのと殆ど同時に、水無月の少し慌てたような声が聞こえた。バスと並んで駐まっていた隣の車線の車が先に行ってしまっている

ところをみると、皐月とのお喋りに興じていたあまり、信号が青に変わったのを見落としていたらしい。
普段は決してそんなことはしないのだが、後ろの車にクラクションを鳴らされてはたまらないという思いと、いつもとは違って乗客が二人しか乗っていないという気の緩みとが重なってのことだろう、慎重な運転を心がけている水無月にしては珍しく、少し乱暴な発進になってしまった。
「あっ、と」
一瞬、皐月の体が大きく揺れた。が、敏捷な皐月のことだ。すぐに体勢を立て直して、きちんとした姿勢で席に座り直す。
「ひゃん……」
一方、心ここにあらずといった風情で窓の外に弱々しい視線を向けるばかりだった葉月は、もともと体を動かすことが得意ではない上に、座席が幼児用で背もたれが低く背中を押しつけることのできる部分が狭いということも相まって、思いきり体をのけぞらせてしまった。そのせいで予想外に体重が移動し、だだでさえ鈍い痛みを覚えてやまないペニスと陰嚢に、瞬間、鋭い痛みが走る。
同時に、丈の短いスカートの裾がはらりと捲れ、いやらしいお汁でべとべとに汚れたシナモロールのショーツの代わりに穿き替えさせられたハローキティのショーツが三分の一ほどあらわになってしまった。
「やだ！」
慌てて両手でスカートを押さえ、慣れない手つきで裾を引っ張る葉月。その時に発した声は、自分では意識していないだろうが、どこか少女めいた羞じらいを確かに含んでいた。
盛んにスカートの裾を引っ張り、ショーツのみならず、少しでも腿の露出を少なくしようともがきながら、葉月は、股間に妙な違和感を覚えた。いや、それは、実は、今になって急に覚えるようになった違和感などではなかった。本当のことをいえば、バスに乗せられる以前から感じていたくせに、そのあまりの恥ずかしさのために意識の外に追い出そうと努め、忘れたつもりになっていた感覚だった。それが、ペニスと陰嚢に鋭い痛みを覚えると同時に新しいショーツがあらわになったことで、改めて意識の表面に浮かび上がってきてしまったのだ。
両脚の太腿に触れ、ペニスの先を包み込むようにして、夏のこの時期、蒸れ蒸れした不快感さえ与える違和感の正体を、もちろん葉月は知っている。知っているのに、気づかないふりをしていただけだ。なのに、水無月の少し乱暴な運転のせいで改めてそれに気づいてしまった今、園長室でのできごとが鮮やかな映像となって脳裏によみがえってくるのを止められない。

＊

「出ちゃったのね、葉月ちゃん？　でも、恥ずかしくなんてないんだよ。年少さんクラスにはまだおもらしの治らない子がたくさんいるし、年中さんや年長さんでもしくじっちゃう子がいるから、明日から年少さんになる葉月ちゃんがおしっこでパンツを濡らしちゃっても、ちっとも恥ずかしくないんだよ」

実の姉の手で精液を搾り取られ、女児用のショーツをぬるぬるに汚して床にへたりこんでしまった葉月。皐月は、それが自分の仕組んだ結果だということなどまるで知らぬげに、面倒見のいい保育士という役割を巧みに演じつつ、自分の足元で膝と両手を床について無力にうずくまる皐月に向かって、わざとらしくも気遣わしげな声をかけた。

だが、皐月からの反応はない。感情にまかせて金切り声をあげることはおろか、弱々しく首を振る気配もなかった。

けれど、まるでそんな葉月の様子を楽しんでででもいるかのように、皐月は尚も

「駄目だよ、そんなにしょんぼりしてばっかじゃ。年中さんや年長さんのお兄ちゃんとお姉ちゃんでもパンツを汚しちゃうことがあるんだもん、まだ年少さんにもなっていない葉月ちゃんがパンツを濡らしちゃっても、ちっとも変じゃないよ。無理におしっこを我慢して病気になっちゃうくらいなら、粗相でパンツを汚しちゃう方が何倍も何万倍もいいんだから。それに、葉月ちゃんがパンツを濡らしちゃっても、そのたびに私や遠藤先生や他の先生方が優しくパンツを穿き替えさせてあげるんだから。葉月ちゃん、まだ自分でパンツを穿けない小っちゃな子だけど、でも、心配しなくていいのよ。先生たちがみんなで穿き替えさせてあげて、濡らしちゃったパンツはちゃんとビニール袋に入れたおみやげにして持たせてあげて、でもって、健康連絡帳に、葉月ちゃんは保育園でおもらししちゃったけどあまり叱らないであげてくださいって書いてあげる。だから、心配することなんてないの。めそめそしちゃ駄目なのよ」

と、表面上は慰めているかのように聞こえるくせに、その実、『おもらし』『パンツを汚しちゃって』『自分じゃパンツも穿けない』というような葉月の羞恥を煽ってやまない語句を幾つも含む言葉を投げかけ、葉月のことをこれでもかと幼女扱いし続けるのだった。

「さ、いつまでも濡れたパンツのままだと葉月ちゃんのすべすべのお肌が真っ赤に爛れちゃうから、ほら、立っちしようね。立っちして、新しいパンツを穿くのよ。葉月ちゃん、園長先生がみせてくれた二枚のショーツ、どっちがいいか選べなかったよね。シナモロールとハローキティ、どっちも大好きだから、どっちかを選びなさいって言われても迷って選べなかったんだよね。それで、最初はシナモロールのパンツを穿かせてあげたんだけど、そのパンツ、おもらしで汚しちゃったんだよね。だから、今度はハローキティのパンツだよ。よかったね、葉月ちゃん。シナモロールのパンツとハローキティのパンツ、どっちも穿けてよかったね」

葉月は、自分でパンツを穿けないような幼児ではなく、ましてや、年少クラスの女の子などであるわけがない。保育園に通っている児童は一人残らず葉月からみれば一回り以上も年下の年端もゆかぬ小さな子供だ。いくら年長クラスでも、葉月のお兄ちゃんやお姉ちゃんでは決してない。ショーツを汚してしまったのも、我慢できずにおしっこを漏らしてしまってのことではなく、葉月の手でペニスをいたぶられた結果だった。なのに、皐月は、葉月が自分では何もできない幼女で、年長クラスや年中クラスの園児をお兄ちゃん・お姉ちゃんと呼ぶのが当たり前で、トイレを教えられずにパンツを濡らしてしまったのよと甘ったるい声で囁きかけるのだ。

しかも、囁きかけるだけではなく、弟とは比べものにならないほど引き締まった体でもって葉月の体を強引に引き起こし、ショーツのウエストに指をかけてさっと引きおろしてしまうのだった。

「くちゃい、くちゃい。葉月ちゃんが汚しちゃったパンツ、葉月ちゃんの白いおしっこの匂いでくちゃいくちゃいになっちゃってるよ。可愛い女の子がいつまでもこんなパンツを穿いてちゃ可哀想だもん、早く新しいパンツを穿こうね。あ、でも、その前に、お股についてるおしっこの滴を綺麗綺麗してあげなきゃいけないね。でないと、せっかく新しいパンツを穿かせてあげても、お肌に残っているおしっこでまた汚しちゃうもん」

床に膝立ちになった皐月は、脱がせたばかりのショーツの匂いを嗅ぐふりをしてみせ、葉月の羞恥を存分に煽ってから、すっと顔を上げて、スカートの裾から覗く葉月の股間に目をやった。

と、その目に、葉月のペニスの先からとろりと滴り落ちる薄く白濁した雫が映る。

まだ尿道の中に残っていた精液がペニスの先端からじくりと溢れ出し、うっすらと白い雫になって垂れ落ちているのだ。

「タックのせいね、きっと」

床に膝をついた皐月と目の高さを合わせて膝を折った園長が、一目で事情を見て取ったらしく、面白そうな口調で言った。

「タックの……？」

「精液っていうのはおしっこなんかよりもずっと粘りけがあるから、本人は全部出しきったつもりになっていても、後から溢れ出してくることが少なくないのよ。――普通でもそうなのに、葉月ちゃんのおちんちんは私が後ろ向けに折り曲げて固定しちゃったから、精液の通り道が狭くなって、いつもみたいに勢いよくは出せなくなっているじゃない？　だから、イっちゃった後、じわじわ時間をかけてじくじく溢れ出てくるのよ。精液の通り道がどれくらい細くなっているかにもよるけど、全部出しきっちゃうにはかなり時間がかかるんじゃないかしら」

要領を得ない表情を浮かべて聞き返す皐月に向かって、園長は、しゃがむ場所を少しずつ変えて葉月の股間をいろいろな方向から見上げ、ペニスの先端からやむことなく滴り続ける精液の様子を確認しながら言った。

「あ、そういうことですか」

園長の説明に納得の表情を浮かべる皐月。それが、すぐに、困ったような顔になったのだが、いかにも取って付けたような表情なのは否めない。しかも、

「でも、そうだとすると、お尻拭きでいくら綺麗に拭き取ってあげても、きりがありませんね。どうしよう、いつになったら出しきっちゃうかわからないから、新しいパンツを穿かせてあげられない」

と困り顔で言ったのはほんの短い間で、じきにまた悪戯めいた顔つきに変わったかと思うと、腰に付けていたポーチの蓋を開いて中の様子を探りながら

「じゃ、仕方ないから、これを貸してあげようかな。いつも念のためにと思って持ってるんだけど、まさか、こんな所で役に立つとは思わなかったわ」

と、独り言というにはいささか大きな声で呟いた後、三つ折りになった生理用ナプキンを取り出した。

それを見た葉月はぎょっとしたように両目を大きく見開き、弱々しく首を振って体を退きかけたのだが、引きおろされたばかりのショーツがまだ両脚の足首に絡みついていて、自分

のペニスからじくじくと溢れ出る精液の雫がそのショーツの上に滴り落ち、吸水性のいい生地にシミをつくっていることに気がつくと、このまま下手に動いて精液を園長室の絨毯の上にこぼしてしまったりしたら、それを口実に二人からまたどんな『お仕置き』を受けるかしれたものではないという怯えが先に立って、まるで身動きが取れなくなってしまう。

「はい、おとなしくしていようね。勝手に動き回って綺麗な絨毯を汚しちゃ駄目よ。新しいパンツを穿けるよう先生がちゃんとしてあげるからじっとしていてね」

皐月は葉月の胸の内を見透かしたかのように言って、身をすくめる弟のすぐ後ろに立ち、小刻みに震える両脚の間、もうすっかり萎え縮こまってしまいながらも絶えず精液の白い雫を滴らせているペニスの先があるあたりに、封を解いたナプキンを押し当てた。

男物のトランクスは勿論のこと、女児用のショーツとも異なる、さらっとしているのにねっとりとまとわりついてくるような独特の感触に、葉月の背中がぞくりと震える。

「じゃ、ナプキンが落ちないよう押さえてくれている御崎先生の代わりに私がパンツを穿き替えさせてあげるわね。ううん、心配することなんてないのよ。葉月ちゃんは本当は男の子で、こんなナプキンを使ったことなんてないわよね。でも、大丈夫。御崎先生と私とでちゃんとしてあげる。それに、使い方も丁寧に教えてあげるわね。葉月ちゃんが一人できちんとナプキンをショーツに重ねて穿けるようになるまで、手取り足取り教えてあげる。今はまだ小っちゃな年少さんの葉月ちゃんも、いつかは、毎月ナプキンのお世話になるお姉ちゃんに成長するのよ。その時になって困らないよう、ちゃんと教えてあげるからね」

お尻の方にまわりこんだ皐月の代わりに、いつのまにか園長が葉月の目の前に膝をついていた。そうして、下腹部を屈辱の感触に包まれて力なく顔を伏せる葉月の潤んだ瞳を真下から見上げつつ、足首に絡まったままになっているシナモロールのショーツを手際よく脱がせてしまった。このあたりは、今は管理職的な立場にありながらも日ごろから小さな子供に接してあれこれと面倒をみていることもあり、実際の園児と比べて随分と体の大きな葉月が相手でも手慣れたものだ。

「さ、次は新しいパンツを穿くのよ。はじめは右のあんよね、そうそう、お箸を持つお手々の方よって御崎先生に教えてもらったから葉月ちゃんにもわかるよね。はい、お箸の方のあんよを上げて――うん、お上手よ。じゃ、次はお茶碗を持つ方よ。そうそう、本当に葉月ちゃんはお利口さんだわ。これなら、すぐに、年少さんのお友達たちと仲良しになれるし、年中や年長のお兄ちゃん・お姉ちゃんにも可愛がってもらえそうね」

ちょっと聞いただけではとても優しそうなくせに、その中に、自分の言葉に逆らうことは絶対に許さないという威圧的なトーンを含んだ声で園長は葉月に話しかけながら、シナモロールのショーツを脱がせた時と同様に手慣れた手つきでハローキティのショーツを穿かせ、股ぐりのゴムが太腿に食い込むようになるあたりまでさっと引き上げた。

と同時に、皐月が、葉月の股間に押し当てているナプキンの外側に付いている粘着テープのシールを剥がして、相変わらずペニスの先からとろとろと滴り落ちてくる精液をこぼさないよう注意を払いながらそろりと手をおろし、ナプキンをショーツのクロッチに重ねた。

「わかったわね、葉月ちゃん？　こういうナプキンの外側には粘着テープが付いていて、それでパンツとくっつくようになっているの。こうしておけば、普通に体を動かしたくらいじゃナプキンがずれたりしないから安心なのよ。でも、それだけだとちょっと心配かもしれないから、ほら、こうして――」

園長は、優しくも威厳のある声で簡単に説明し、皐月に目で合図を送った。
それを受けた皐月が軽く頷いて、ショーツの内側に粘着テープで固定したナプキンの左右に広がっている羽根を、ショーツのクロッチ部分を両側から抱え込むような形に折り曲げてみせた。
「ね、こうしておけば安心でしょ？　体を動かしたりパンツを上げ下げしたりしても、これで大丈夫よ。ただ、激しい運動をしたりするとナプキンが体の動きについてこれなくなってヨレたりしちゃうから、ナプキンを使っている時は恥ずかしがらずに先生に相談しなきゃ駄目よ。お友達にひやかされたらどうしようとか思って黙ったまま体操をしてナプキンがずれたりしたら、パンツを汚しちゃって、もっと恥ずかしい目に遭うことになるんだから」
皐月がナプキンのずれを細かく調整し終わるのを待って園長はすっとその場に立ち上がって言い、葉月のうなじにほんのりと朱がさす様子を面白そうに眺めながら
「あらあら、なんだか、大人の体になってナプキンを使い始めることになったお姉ちゃんに注意するようなことを葉月ちゃんに話しちゃったわ。いつかは必要になることだけど、考えてみたら、年少さんの葉月ちゃんにはさすがにまだ早すぎたわね。そうよね、葉月ちゃんたら、きょとんとしたお顔なんてしちゃって。いいわ、まだちゃんと憶えなくていい。葉月ちゃんはまだ自分でパンツも穿けないような小っちゃな女の子だもん、ナプキンを使う時も、御崎先生や遠藤先生にちゃんとしてもらえばいいのよね。私から遠藤先生にお願いしておいてあげるから心配しないでね。今度から受け持ってもらうことになった御崎葉月ちゃんはちょっと事情があって小さいうちからナプキンのお世話にならなきゃいけないから、ちゃんと面倒をみてあげてちょうだいねってお願いしておいてあげる」
と付け加える。
ナプキンを着ける手順をわざわざ園長が説明したのは、葉月に使い方を教えるためなどではない。男子大学生である身にはまるで無縁な生理用品を着用させ、その手順をあれこれと説明することで、葉月の羞恥をくすぐるのが目的だった。そんな園長の狙い通り、葉月は屈辱にまみれた表情を浮かべながらも、いいしれぬ羞恥と倒錯感とに顔を真っ赤に上気させ、うなじをピンクに染めていた。
その姿に、園長の胸が妖しくざわめき出す。

＊

脳裏によみがえってきた園長室での出来事に葉月は下唇を噛みしめ、スカートの裾から覗く腿の上に置いた掌をぎゅっと拳に握りしめて、股間から伝わってくる恥ずかしい違和感に耐えるしかなかった。
おずおずと落とす視線の先に、黄色の通園靴があった。履いているのは、勿論、葉月自身だ。この通園靴も、園長室を出る寸前に、ピンクのリボンが付いた帽子をかぶせられ、連絡帳と園児手帳を入れた通園鞄を肩にかけさせられ、ビニール袋に押し込んだ濡れたショーツをおみやげとして入れた手提げ袋を持たされた時に一緒に履かされた、十八歳の男の子である葉月を年少クラスの女児に変身させるための羞恥溢れる道具の一つに他ならない。通園鞄や手提げ袋と同じ鮮やかな黄色は、本来は夕暮れの下園時に車や自転車を運転している者からの視認性を高めて園児が安全に歩けるようにという配慮で選ばれた色だが、本当は大学生

の葉月にとっては、まわりの者からの庇護がなければ通園もままならない園児とまるで同じに扱われているという事実を改めて思い知らされる屈辱の色だし、雨に濡れても大丈夫なようにと選ばれたビニール素材も、それが、雨上がりの水溜まりをみつけたらたまらずに水遊びをしてしまうがんぜない幼児と同様に自分が扱われているのだと無言のうちに物語っているように思えてならない。更に、靴の甲のところがスナップ留めのベルトになっているのも、自分では満足に靴の脱ぎ履きさえできない幼い子供にふさわしいつくりで、尚のこと屈辱と羞恥が煽りたてられる。

「随分、女の子らしい仕草が板についてきたじゃない。黄色い声で悲鳴をあげながらスカートの裾を押さえるところなんて、そこいらの小学生や中学生の女の子より可愛らしい仕草だったんじゃないかな。ま、もっとも、小学校や中学校の女の子なんて、成長期のまん中だし、日焼けも気にしないで走り回るしで、男の子とあまり変わらないから、気の弱い葉月ちゃんの方が控えめでおとなくして可愛らしいのは当たり前かもしれないけどね。それに、それよりも小さな幼稚園や保育園の女の子は、恥ずかしいっていう感覚そのものをまだ持ち合わせてないから、少しくらいスカートが捲れ上がっても平気で、とてもじゃないけど葉月ちゃんみたいな可憐な羞じらいの表情なんて見せないもん。そりゃ、実の姉としての身贔屓を差し引いても、まわりのどんな女の子よりも葉月ちゃんが一番女の子らしいってもんよね。こんなに可愛い男の娘を妹に持てるなんて、姉冥利につきるわね、ほんと」

重っ苦しい溜息をつきそうになる葉月の耳元に囁きかける声があった。もちろん、皐月だ。実の弟をこんな目に遭わせて嬉しそうに声を弾ませる者が皐月の他にいるわけがない。

それに対して葉月は、さっきから噛みしめている下唇を更に強く噛みしめるばかりだ。

「せっかく褒めてあげてるのに、そんな顔しちゃ駄目じゃない、葉月ちゃん。せっかくの形のいい唇が切れて血が出てきちゃうわよ」

視線を落とし無言で唇を噛みしめる葉月に向かって、おかしそうに皐月が言う。

「……姉さんのせいだ。姉さんのせいで、僕、僕……」

葉月が恨めしげな声を絞り出した。だが、その後は涙で言葉が続かない。これまで、あまりの羞恥と屈辱のせいで自分の身に起こっている異様な出来事がどこか遠い世界のことのように思えていたのが、次第次第にそれが実際に自分の身に降りかかっている悪夢じみた事実だと実感せざるを得なくなってきたのだろう。

けれど、実の弟に表現しようのない羞恥と屈辱を与えた当の本人である皐月は澄ましたものだ。ごめんなさいの一言を口にするわけでもなく、まるで自分が受け持っているクラスの中の機嫌が悪い園児をあやすみたいに

「あらあら、葉月ちゃんは何をそんなにむずがっているのかしら。お腹が空いちゃったのかな、それとも、お喉が渇いたのかしら。ううん、ひょっとしたら、おねむなのかもしれないわね。あ、お腹が痛いのかな、ひょっとして、上手にあんよができないのが悔しいのかしら。さ、どうしたのかな？　どうしてほしいか先生にちゃんと教えてちょうだい」

と言って、よしよしと頭を撫でるばかりで、葉月に対する子供扱いを決してやめようとはしなかった。

【二】

保育園から皐月のマンションまで、通園バスで二十分間ほどしかかからなかったが、路線バスだと、最短距離を走らない上に乗り換えが必要になって、倍以上の五十分間はかかることになる。皐月は通勤のために毎日のように路線バスに乗っているわけで、それが、葉月の送迎のために水無月が運転する送迎バスがマンションの前まで来てくれて、それに便乗させてもらえることになったから、明日からの通勤は時間だけを考えれば楽になりそうに思える。しかし、その代わり、葉月を迎えに来るのが送迎コースの一番目のルートに当たっているから今までよりも早く起床しなければならなくなる上、車内で子供たちの面倒みる送迎バス添乗係を毎日こなさなければならないから、結局のところ、どちらかといえば損な役回りを引き受けたことになるかもしれない。

とはいえ、可愛くて可愛くてたまらない弟が更に（倒錯的な）可愛い格好をしてバスに乗っているところにずっと一緒に居合わせることができるわけだし、バスの中で葉月が他の子供たちとどんなふうに時間を過ごすのかを眺めていられるわけだから、皐月にとっては、単純な損得にかえられない役得ということもできる。

そして皐月は、そんな”役得”の旨味を早くも得ようとしていた。

「――というわけで、園長先生のお許しもいただいていますから、水無月さん、ここで待っていてくださいね。なるべく早く戻ってきますし、ここならバスのエンジンをかけてエアコンをかけたままにしていても周りから苦情を言われるようなことはありませんから」

皐月が水無月に道順を案内してバスを駐めさせたのは、マンションの前を少し行き過ぎた所にある空き地の一角だった。ひばり保育園や皐月のマンションがある街は、中心付近こそ賑わっているが、街の中心部から少し離れると急に寂しくなって田園風景が広がるといった典型的な地方小都市で、皐月の住むマンションが建っているあたりでも、あちらこちらに造成途中の（あるいは、造成が放棄された）空き地が点在している。皐月はバスをそんな空き地の一つに誘導し、ここで葉月と一緒におりることにしたのだ。普段の送迎ならマンションのすぐ前でバスを駐めてもらえばいいのだが、二人でバスをおりた後、マンションで着替えて、また再びバスに乗ることになっているから、その間を水無月に待ってもらうために、長いことバスを駐めていても差し支えない空き地までわざわざ誘導したというわけだ。

保育園のバスをプライベートで使うことに関して、皐月が水無月に言った通り、既に園長の許可は貰っている。面談を終えた二人を送迎バスでマンションまで送るよう園長が水無月に指示した時に皐月は既にそれとなく申し入れをしておいたし、ついさっきも、葉月が唇を噛めたまま涙をこぼし続けている間に携帯電話で園長に許可の再確認をしたところだ。

皐月が園長から許しを得ているのは、皐月と園長とのやり取りをそれとなく耳にしていたから、言われるまでもなく水無月も充分に承知しているものの、葉月と共に着替えを終えて再びバスに乗り込んだ皐月がどこへ行こうとしているのか、それはまだ知らされていなかった。

そして、勿論のこと、それを知らされていないのは葉月も同じ。

ただ、葉月にとっては、これからまだどこかへ連れて行かれることになりそうだというこ

とよりも、もっと切羽詰まった、考えるだけで絶望の縁に立たされるような試練が目の前に迫っていた。

「え……？　こ、ここから歩くの!?」

葉月は、さんざ泣きはらしたのにまだ諦めきれないのか（ま、そうそう簡単に観念できるわけがないのが普通だけど）尚も涙で潤む瞳をきょときょとさせ、涙の雫が残る長い睫をしばたたかせて、身軽に座席から立ち上がる皐月の顔を見上げた。

「あらあら、なんて顔してんのよ、葉月ちゃんてば。歩くったって、ここからお家まで五分もかからないのよ。それくらい、あんよの苦手な葉月ちゃんでも大丈夫でしょ？　さ、お手々をつないであげるから、元気にあんよでお家に帰りましょ」

葉月が怯えの表情を浮かべているのは、この空き地からマンションまでちゃんと歩き通せるかどうかを心配しているのではなく、その間に誰かの目に自分の恥ずかしい姿をさらしはしないかという不安からだった。言うまでもなく、そんなことは皐月も充分にわかっている。わかっていながら、わざとそんなふうに言って葉月の反応を楽しんでいるにすぎない。

「でも……でも……」

「ほら、さっさとなさい。もうそろそろお昼なんだし、いつまでも水無月さんに待っていてもらうわけにいかないのよ。いい子だから、さ、立っちして」

差席の肘掛けにしがみつこうとする葉月の手首をつかみ、少し強い調子で皐月は言った。

「や、やだ。……痛いから離してよ、姉さ……御崎先生」

座席から引き離されまいとして身を固くし、葉月は、今にも消え入りそうな声で訴えかけた。

けれど、体格にも明らかな差がある悲しさ、葉月の体はいとも簡単に座席から引き離され、皐月のすぐ横に立たされてしまう。

「はい、それでいいのよ。ちゃんと立っちできて、本当に葉月ちゃんはお利口さんだわ」

皐月は、自分の手で強引に葉月を立たせておきながら、さも、自ら言いつけを守った園児を褒めそやすように言った後、わざと大げさな仕草で大きく頷いてみせながら、いかにも感心といった口調で付け加えた。

「それに、私のこと、ちゃん『御崎先生』って呼べるようになったしね。やっと、ひばり保育園の年少さんとしての自覚ができてきたのかな。うん、いい子いい子」

葉月の頬がさっと紅潮する。

そんな葉月の様子を面白そうに眺めながら、皐月は尚も幼児をあやすように続けた。

「でも、もうバスをおりてお家に帰るんだから、『先生』って呼ばなくてもいいのよ。もうお家だから、いつもと同じように『姉さん』でいいわ」

が、そこまで言って皐月は意味ありげに少し間を置き、皐月の言葉が途切れたことにどこか不安そうな表情を浮かべる葉月の顔を正面から覗き込んだ。

「あ、だけど、『姉さん』じゃ、いかにも男の子っぽい呼び方よね。葉月ちゃんは可愛い女の子だもん、『お姉ちゃん』っていう呼び方の方がいいかな。ううん、けど、それだとありきたりよね。どんな呼び方がいいかなぁ。――うん、そうそう。『お姉ちゃま』がいいわね。年の離れた甘えんぼうの妹がお姉さんを呼ぶ時って、そんなふうに呼ぶのがお似合いよね。うん、『お姉ちゃま』にしましょう。いいわね。葉月ちゃん。私のこと、保育園じゃ『御崎

先生』で、お家じゃ『お姉ちゃま』って呼ぶのよ。わかったわね？　じゃ、試しに呼んでみようか。さ、『お姉ちゃま』って呼んでごらん」
　けれど、腰に手の甲を押し当ててそう迫る皐月に対して葉月は唇を噛むばかりだ。頬を羞恥に染めたまま弱々しく首を振る。
「あら、葉月ちゃんはお利口さんねって褒めてあげたところなのに、本当はそうじゃなかったのかな。へーえ、葉月ちゃん、本当は聞き分けのわるい困ったちゃんだったんだ。ふぅん、そうなんだ」
　無言を押し通す葉月の瞳を見据えて皐月は片方の眉をぴくんと吊り上げ、ふんと鼻を鳴らした。
「そんなに聞き分けの悪い子には、幾ら言って聞かせても無駄よね。言葉で言ってもわからない子には、体に教えてあげないといけないんだよね。いいわ、お家に帰っても、お部屋には入れてあげません。聞き分けの悪い困ったちゃんを入れてあげるお部屋なんてありません。葉月ちゃんみたいな子は、お家の外に立っているといいわ。困ったちゃんには、お外に立って反省するのがお似合いよ」
「そ、そんな……」
　皐月の言葉に、ようやくのこと葉月が口を開く。
　けれど、皐月は容赦しない。少しばかり嘲りを含んだ声で
「お外に立たされている葉月ちゃんを見て、たくさんの人が心配そうに話しかけてきてくれるでしょうね。可愛い女の子が保育園の鞄を肩にかけたままお外に立たされてるんだもの、みんな心配してくれるでしょうね。たくさんの人が『どうしたの？　どうして、こんな所に立たされてるの？』って訊いてくれるでしょうね。でもって、その内の何人かは、こんな所に立たされてるのがどこの子なのか調べようとして鞄の中を見たり手提げ鞄の中を見たるするかもしれないわね。それで、鞄の中から『みさきはづき』って名前の書いてある園児手帳をみつけて、手提げ袋の中からは、おみやげのパンツをみつけてくれるかな。そしたら、みんな、納得するよね。ああ、ひばり保育園で保育士をしてる御崎先生のとこの葉月ちゃんがおもらしでパンツを濡らしちゃって、それで、そのお仕置きにお外に立たされてるのねって、きっと納得するよね。よかったね、葉月ちゃん。そしたら、誰かにお部屋の中まで連れて来てもらえるかもしれないわよ。私も一緒に謝ってあげるから、さ、お部屋に入ってお姉さんにごめんなさいしようねって、誰かがお家の中まで一緒について来てくれるかもしれないわね」
と、葉月のことを脅しあげる。
　葉月の脳裏に、パステルピンクのセーラーワンピースを着て肩に黄色の通園鞄をかけ、大きなシミのついた女児用ショーツの入った手提げ袋を持ってマンションの外に呆然と佇む自分の姿が浮かび上がった。そして、そんな自分を取り囲んで口々に何やら言葉を交わす大勢の人々。
「どうするの、葉月ちゃん？　誰か親切な人が一緒に謝ってくれるまで待つ？　それとも、ごめんなさいって一人で言える？」
　皐月は葉月の顎先に人差指をかけ、くいっと引き上げた。
「……ご、ごめんなさい。僕……わ、私、いい子にする。言いつけを守るから、お外になんて立たせないで……」

葉月にはそう言うしかなかった。

「うふふ。ちゃんとごめんなさいできたわね。それに、自分のことも『わたし』って言えるし、やっぱり葉月ちゃんは聞き分けのいいお利口さんだったのよね。葉月ちゃんが困ったちゃんだなんて、私の思い違いだったのよね。じゃ、ちゃんと呼んでちょうだい。私のこと、どう呼べばいいんだったっけ？　お利口さんの葉月ちゃんはもう呼び間違ったりしないよね？」

強引に顔を上げさせられ目だけを動かして視線をそらす葉月に、嵩にかかって皐月は言った。

「……ごめんなさい、お姉ちゃま。わ、私、お姉ちゃまの言いつけを破ったりしません。だから……だから、お外に立たせたりしないで……」

「駄目よ、ちゃんとお姉ちゃまの目を見てお願いしなきゃ駄目。心からごめんなさいする気があるなら、お姉ちゃまの目を真っ直ぐ見なさい」

蚊の鳴くような声で哀願する葉月の顎先を尚も自分の方に引き寄せながら皐月は軽く首を振り、ふと何かを思いついたのか、含み笑いを漏らして言った。

「ああ、それと、自分のことは『葉月』って呼ぶようにした方がいいわね。自分のことを『わたし』って呼ぶようになるのは小学生くらいのお姉ちゃんになってからで、小っちゃい女の子は自分のこと、下の名前で呼ぶことが多いもの。いいわね？　葉月ちゃん本人の呼び方と私の呼び方、両方に気をつけながら、どうして欲しいかお願いするのよ」

「……」

「どうしたの？　葉月ちゃん、やっぱり、聞き分けの悪い困ったちゃんだったのかな？　誰かと一緒じゃなきゃお姉ちゃまにごめんなさいできない聞き分けのない子だったのかな？」

皐月の瞳が妖しく輝いた。

その光に射すくめられたかのように、葉月が身を固くして、ようようのこと口を開く。

「……は、葉月、お姉ちゃまの言いつけをちゃんと守る。ごめんなさい、はづ……葉月、困ったちゃんなんかじゃない。葉月、いい子にする。だから、お願い。葉月のこと、お外に立たせないで。お願いだから、お姉ちゃまぁ……」

最後の方は、それこそ本当の保育園児が母親に許しを請うてでもいるみたいな、どこか甘えたような涙声になってしまう葉月。
「うん、わかった。ちゃんとごめんなさいもできたから、葉月ちゃんのお願いを聞いてあげる。お願いを聞いて、お外に立たせるのは無しにしてあげる。だから、お家に帰りましょう。お家に帰ってお着替えをして、またバスに乗っていい所へ行こうね」
皐月はようやく納得したように、葉月の顎先を持ち上げていた手をおろし、背中をぽんぽんと優しく叩きながら、慈母の顔になって言った。
けれど、少しばかり意地悪な慈母なのは否めない。

第四章　～マンション～

【一】

「……もういいんだよね？　もう、着替えていいんだよね？」
まわりの立地条件や昼下がりという時間帯が幸いして、バスを駐めた空き地からマンションまでだけでなく、建物に入ってからも誰にも会わずに部屋まで戻ってこられたことにあからさまな堵の表情を浮かべ、玄関のあがりがまちにお尻をおろして通園靴を手早く脱ぎながら、葉月は皐月の顔を見上げて念を押すように言った。
葉月の願いはたった一つ。一刻も早くこの羞恥に満ちた衣類を脱ぎ捨てて自分の洋服に着替えることだ。雇用契約書にサインをしてしまっから両親に迷惑をかけないようにするためには園長に命じられるまま明日から園児として保育園に通うしかないが、とりあえず、今から今日が終わるまでの僅かな間だけでも大学生としての生活を取り戻したいというのが偽らざる心境だ。
「もちろん、着替えていいわよ。明日から毎日着なきゃいけない制服だもの、汚さないようにするためには、お家に帰ってきたら少しでも早く着替えなきゃいけないんだしね」
皐月は、葉月がセーラーワンピースを脱ぐことを意外とあっさり認めた。園長室やバスの中での皐月の行動を思い起こし、自分が制服を脱ごうとするのを何かと理屈をつけて妨害するかもしれないぞと覚悟していた葉月にしてみれば、皐月の返答は予想外だったが、ここは、皐月の気持ちが変わらないうちに着替えなきゃという思いに急かされて、通園靴を行儀悪く脱ぎ散らかして廊下に上がり、通園鞄と手提げ袋を放り出しながら小走りで自分の部屋に向かうしかなかった。
（やれやれ、あんなに急いで走るからスカートが捲れてパンツが見えちゃってる。それに、靴は脱ぎっ放しだし。ほんと、小っちゃな子と同じね、葉月ったら。でも、ドアが開かないって知ったら、どんな顔をするかしら）園長から手渡された紙袋をおろし、廊下を駆けて行く葉月の後ろ姿を苦笑交じりに見送る皐月だったが、やがて葉月が自分の部屋の前で立ち止まり、ドアのノブに手をかけた直後に首をひねる様子を目にすると、胸の中で赤い舌をちろっと突き出し、今にも笑い出しそうになるのを止められないでいた。

スカートの裾が空気をふくんで舞い上がり、ハローキティのショーツがあらわになるのを気に留めるゆとりもなく足早に自分の部屋に向かい、ようやくの思いでドアのノブに手をかけた葉月。だが、その直後、あれ？というような顔つきになってノブと自分の右手とを交互に見比べては、その後も何度かノブを廻そうとし、そのたびに首をかしげるといった動作を繰り返してしまう。
「どうしたの、葉月ちゃん？　なんだかとっても不思議そうな顔をしているけど、何かあったのかな？」
悠揚迫らぬ様子で靴を脱いで廊下に上がり、いったん廊下の端に置いた紙袋を再び手にした皐月が、葉月のすぐ後ろに立って声をかけた。
「ドアが……ドアが開かないんだよ。僕の部屋のドアが、どうやっても開かないんだ。ノブ

がびくとも廻らないんだよ」
少しあせり気味の声で葉月が応じた。マンションのエントランスホールに足を踏み入れるまでは自分のことを葉月、皐月のことをお姉ちゃまと呼んでいたのに、もうすぐにでも自分の洋服に着替えることができるとなると現金なもので、すっかり男子大学生の口調に戻っている。もっとも、それは、気の緩みのせいだけではなく、どうやっても自分の部屋のドアを開けられない苛立ちのせいもあるのだろうが。

「ドアが開かないって、そりゃ、このお部屋のドアには前もってお姉ちゃまが鍵をかけておいたんだもの、開かないのが当たり前よ。今朝お出かけする時に、お姉ちゃまが戸締まりを確かめていたこと、葉月ちゃんも憶えてるでしょ？　あの時、このドアが開いていたから鍵をかけておいたのよ」
うわずった声の葉月とは対照的に、皐月の方は落ち着き払ったものだ。さも当然のことといった口調でことの成り行きを手短に説明する。
「どうして？　どうして、僕の部屋のドアに勝手に鍵なんかかけるんだよ!?」
皐月の説明に、葉月ははっとしたような顔で振り返り、金切り声で問い返した。
「僕の部屋ですって？　あらあら、何をおかしなこと言ってるのかな、葉月ちゃんは。ここは『葉月お兄ちゃん』のお部屋で、『葉月ちゃん』のお部屋なんかじゃないわよ」
皐月は、廊下に投げ出されていたのを拾ってきた通園鞄を再び葉月の肩にかけさせ、手提げ袋を右手に持たせながら、わざと不思議そうな顔をして言った。
「ここは『葉月お兄ちゃん』のお部屋って……いったい何を言ってるんだよ、姉さん。その『葉月お兄ちゃん』って誰のことを言ってるんだよ。僕が葉月だよ、ここは僕の部屋なんだよ!?　何おかしなこと言ってるのさ？」
皐月の手で再び強引に通園鞄を肩にかけさせられ、手提げ袋を持たされながら、葉月はまるで要領を得ない顔で聞き返した。
「おかしなことを言ってるのは葉月ちゃんの方よ。もういちど言うから、ちゃんと聞いてなさい。いい？　ここは、大学生で十八歳の男の子『葉月お兄ちゃん』のお部屋で、私の目の

前にいるのは、つばめ保育園に通う年少クラスの女の子『葉月ちゃん』なのよ。『葉月お兄ちゃん』は今、どこかにお出かけしているから、その間に誰かが勝手にお部屋に入らないよう鍵をかけておいてあげたの。『葉月ちゃん』みたいな悪戯盛りの小っちゃな子が勝手に入って部屋の中を滅茶苦茶にしちゃわないようにね」

そこまで聞かされて、ようやくのこと葉月も理解せざるを得なかった。皐月はもう葉月に自分の部屋を使わせるつもりはないのだ。大学生本来の衣類を詰めたタンスや衣装ケースが置いてある部屋のドアを開けられないようにして、葉月が自分の下着や洋服を身に着けられないよう仕組んでいるのだ。

「やっとわかったみたいね？　そう、ここは葉月ちゃんのお部屋なんかじゃないのよ。何度も言うけど、ここは、大学生の葉月お兄ちゃんのお部屋。保育園児の葉月ちゃんのお部屋はこっちよ」

葉月の顔色が変わったのを見て取った皐月は、ドアのノブを握りしめたままの葉月の右手を強引に引き離し、手首をつかんで、廊下の更に奥へ歩き出した。

「ここよ、年少さんの葉月ちゃんのお部屋は」

皐月が葉月を引っ張って行ったのは、ドアに鍵をかけられて今は開けられない葉月の部屋のすぐ隣の部屋の前だった。もともとは、葉月の部屋と皐月の部屋との間にある、二人の部屋よりも一回り小さな、これまでは使い途を決めていなかった部屋だ。

皐月たちの住んでいるマンションが建っている場所は街の中心部に比べると土地の価格もかなり安く、一戸建てにしても集合住宅にしても敷地が広い。そのため、皐月が借りたマンションも一世帯あたりの専有面積に恵まれ、有り体に言って無駄に部屋数が多かったりする。だから普段は使わない部屋もあるのだが、皐月が葉月を連れて行ったのは、そんな部屋の内の一つだった。

「いい？　今日からここが年少さんの葉月ちゃんのお部屋よ。葉月お兄ちゃんのお部屋と間違えないように目印を付けておいてあげるから気をつけなさい」

言うが早いか、皐月は、葉月が見ている前で思いきり背伸びをして、ドアの一番高い所にネームプレートを貼り付けた。花を摘む少女のイラストが描かれ、そのすぐ下に『はづきのおへや』という濃いピンクの文字が記された、厚手のプラスチックでできたネームプレートだ。葉月よりも頭一つ背の高い皐月がわざわざ背伸びをした貼り付けたものだから、どう足掻いても皐月がそのネームプレートを外すことはできそうにない。

しかも、皐月がドアに取り付けたのはネームプレートだけではなかった。

「それと、ネームプレートだけだと殺風景だから、これも付けておこうね」

ネームプレートの貼り付き具合を確認してから皐月が手にしたのは、葉月が身に着けているのとそっくりなセーラーワンピースを着て、やはりこれも葉月が頭にちょこんと載せているのと瓜二つの通園帽をかぶり、まん丸な顔が葉月自身にそっくりな小ぶりの人形だった。人形は両手で白い伝言板を抱え持っていて、その伝言板には、ネームプレートと同じ色で『ここは、はづきのおへやです。おとこのこは、はいっちゃだめ♪』という、どうやら皐月が書いたらしい丸文字が並んでいた。皐月は、人形の通園帽から伸びている丈夫な紐をドアのノブに引っかけ、そのまま思いきり力を入れてきゅっと結んだ。

ネームプレートとノブの人形を付けただけなのに、ドア周りが、いかにも小さな女の子の

部屋らしい雰囲気に飾りたてられる。
葉月は、自分の本当の居場所がどんどん狭められ、しまいには針の先ほどもなくなってしまいそうな予感に、ぞくりと身震いをしてしまった。
「さ、できた。今からここが葉月ちゃんのお部屋よ」
皐月は満足そうに両手をぱんぱんと打ち鳴らした後、喋り方を大学生の葉月に対する口調に変えて言った。
「あんた、夏休みが始まったら、土曜日も日曜日もなしで大学の図書館に籠もってたよね。その間に、空いている部屋の模様替えをしておいてあげたのよ。業者さんにお願いしてかなり本格的にやってもらったんだけど、あんた、ずっと出かけたままだったから気づかなかったでょ？」
が、それは一瞬の間だけだった。じきにまた幼い妹に対する口調に戻って、わざとのように優しく話しかける。
「じゃ、入ってみようか。葉月ちゃんも、新しいお部屋がどんなのか、早く自分のお目々で見てみたいよね」
そう言いながら、皐月の手が、人形をぶら下げたばかりのノブを軽くひねった。

【二】

「……！」
入ってみようかと言われ、皐月に背中を押された葉月だが、開いたドアから見える部屋の雰囲気に圧倒されて足が一歩も進まない。それほどまでに、今朝まで自分が生活していた殺風景な部屋とは様子が違っていた。
コンクリートの打ち放しだった元の部屋とは対照的な、一部の隙もなくパステルカラーの壁紙で装った壁。まるで飾り気のない実用本位の家具ばかりだった元の部屋など比べものにならない、ファンシーな色遣いが明るい印象を強調する、有名な通販のカタログから抜け出してきたような調度品ばかりが整然と並んだ室内。万年床の薄っぺらな布団が嘘みたいな、まるで絵本に出てきそうな可愛らしい造りのふかふかのベッド。教科書や専門書をぎゅうぎゅうに詰め込んだ金属製の書架が別世界の物のように思える、カラフルな絵本や童話集ばかりを並べた木製の本棚。
そのどれもが、葉月にとっては生まれて初めて目にするような物ばかりだった。
「びっくりした？　そうだよね、古っちいマンションの中のお部屋だなんてまるで思えないくらい素敵なお部屋だもん、びっくりしちゃうよね。でも、ここが葉月ちゃんのお部屋なのよ。明日からひばり保育園に通う年少さんの女の子の葉月ちゃんのお部屋なのよ。びっくりしちゃうけど、嬉しいよね。さ、遠慮なんてしなくていいから、ほら、自分のお部屋に入ろうね」
皐月が葉月の背中をとんと押した。
それまで部屋の雰囲気に気圧され、半ば自失していた葉月だが、体格にも体力にも勝る皐月に背中を押されたものだから、機械仕掛けの人形みたいにぎくしゃくと部屋の中に足を踏

み入れてしまう。
「それでいいのよ。そう、それでいいの」
葉月を先に入れ、続いて自分も部屋に入ってきた皐月が、なにやら含むところのありそうな声で言って、後ろ手にドアを閉めた。
微かな軋み音にはっとして葉月が振り返ったのは、ドアが完全に閉じた後のことだった。

葉月はいいようのない不安を覚え、おずおずと皐月の顔を見上げた。
「よかったね、葉月ちゃん。これからずっと、こんなに素敵なお部屋で過ごせるのよ。これなら、保育園のお友達に遊びに来てもらっても、ちょっぴり自慢できちゃうよね。こんなに素敵な自分のお部屋を持ってる子、あまりいないんじゃないかな。だから、葉月お兄ちゃんのお部屋に入ろうなんて思っちゃ駄目よ。葉月お兄ちゃんのお部屋、埃っぽくて、お布団が敷きっ放しで、難しいご本しかないんだから。そんなお部屋に行っても、ちっとも楽しいことなんてないでしょ？　だから、葉月お兄ちゃんのお部屋には近づかないこと。お姉ちゃまと約束できるよね。葉月ちゃん、お利口さんだもん、指切りげんまん、できるよね」
こちらを見上げる葉月の顔を正面から見据えて皐月は言った。
口調こそ優しげだが一切の反論を許そうとしないその威圧的な様子は、ひばり保育園の園長にそっくりだった。
「どうしたの？　ほら、指切りげんまんよ」
皐月は、思わず身をすくめる葉月の手首を左手でつかみ、強引に腕を伸ばさせると、その細く白い小指に自分の右手の小指を絡ませた。
「じゃ、いいわね？　はい、指切りげんまん、指切った。嘘ついたら針千本呑〜ます。うん、これでいいわ。葉月ちゃんとお姉ちゃまの女と女の約束なんだから、ちゃんと守らなきゃ駄目よ」
強引に小指どうしを絡ませたかと思うと、勝手にさっさと指切りげんまんを済ませてしまって、皐月はにっと笑った。
ようやくその時になって指切りで交わした約束の意味を悟った葉月が、はっとして皐月の目を見る。
葉月お兄ちゃんのお部屋に入っちゃ駄目よ。葉月お兄ちゃんのお部屋なんかに近づかないよね。皐月が口にしたそんな言葉は、葉月に対して『あんたが元の部屋に戻ることはもう二度とないのよ。あんたはこれからずっと、この女の子の部屋で暮らすのよ。もちろん、保育園の年少さんとしてね』と告げているのだ。
「やっとわかったみたいね、葉月。そう、あんたはずっとこの女の子の部屋の住人になるのよ。ちゃんと指切りまでしたんだから、絶対に約束は守ってもらうわよ。もしも約束を破ったりしたら、その時は、保育園に子供を預けているお母様方みんなに、あんたの正体をばらしちゃうからね」
皐月は、葉月の大きな瞳をみつめ返し、唇の端を僅かに吊り上げるような笑みを浮かべて言った。
「いくらセーラーワンピを着て小っちゃな女の子向けの可愛いパンツを穿いても、あんたが本当の保育園児だなんて思う人は一人もいないよね。いくらあんたが小柄だっていっても、それは同じ年代の男の子と比べた時の話。身長が百六十センチの保育園児なんているわけが

ないんだから、いくら格好に気をつけても、あんたが本当は保育園児なんかじゃないってことは誰にもすぐわかっちゃうよね」
皐月は冷徹な口調でそこまで言うと、不意に葉月のスカートの裾を捲り上げ、あらわになったショーツ越しに葉月の股間をさわっと撫でて続けた。
「それに、ほら、生理用ナプキンなんか着けちゃって。いくら今どきの子は発育が早いっていっても、背の高さが百六十センチで、もう初潮を迎えた保育園児なんているわけないよね」
葉月は慌ててスカートを押さえようとするのだが、皐月はその手を払いのけ、右手を葉月の両脚の間に差し入れると、ショーツのクロッチ部分の外側に出ているナプキンの羽根を指先でつっと撫でながら言葉を重ねた。
「でも、あんたにはどうしても保育園に通ってもらわなきゃいけないの。遠藤先生の心のケアのためにね。そのために園長先生は雇用契約書まで用意してくださったんだから、どうしても通ってもらうわよ。計画じゃ、園児のお母様方には、あんたのこと、私の妹で小学校の五年生だって説明する手筈になっているの。小学五年生なら、大柄な私の妹だもの、身長が百六十センチあっても変に思われないし、そろそろナプキンを使い始める子も出てくるからね。それで、私の小学五年生の妹が私と同じ保育士になりたがっているから、夏休みの間に職場体験をさせてもらうことにしたって説明する予定なのよ。ただ、保育士の仕事がどれだけ大変なものか体でもって経験させるために、子供たちがどんな行動を取るのか、保育士としての立場だけじゃなく、子供たちに混じって生活させることで身近に接してもらうことにしたっていう説明も併せてね。これなら、あんたが園児として保育園に通うことになった経緯をどうにかこうにか保護者に納得してもらえそうだから。――でも、あんたが約束を破ったら、あんたが通園するようになった後で、あんたが本当は大学生の男の子だってこと、お母様方にばらしちゃうから、そのつもりでいなさい。大学生の男の子が保育園の女の子の格好をしてお遊戯やお絵描きをしているところを見て、お母様方、なんて思うかしら。気の弱いあんたが、そんなお母様方の視線に耐えられるかしらね。でも、あんたは、それを我慢して通園し続けなきゃいけないのよ。父さんや母さんに迷惑をかけないようにするためには、雇用契約書に従わなきゃいけないんだから」
そこまで言ってようやく皐月は葉月の股間から手を離し、捲り上げていたスカートの裾をおろして、それまでの冷たい口調とは打って変わった、幼い妹の面倒をみるしっかり者の姉の口調に戻ると、
「あらあら、スカートがシワになっちゃったわね。いいわ、お姉ちゃまがちゃんとしてあげる。いい子だから、そのままじっとしているのよ」
とわざと優しく囁きかけて、自分が捲り上げてシワにしてしまったスカートの乱れを、いかにも甲斐甲斐しく整えてやるのだった。だが、その後に
「ちゃんと約束を守れたら、私はいつまでも、可愛い葉月ちゃんの優しいお姉ちゃまでいてあげる。だけど、約束を破ったりしたらその時はどうなるか、お利口さんの葉月ちゃんだもの、もうわかったよね」
と念を押すように付け加えるのを忘れない。
逃げ道がどんどんなく塞がれてゆくのを痛いほど思い知らされて、葉月の唇が、ぱっと見

ただけでわかるほどわなわなと震え出す。
「あらあら、そんなに心配しなくていいのよ、葉月ちゃん。葉月ちゃんが約束を守りさえすれば、心配しなきゃいけないことなんて何もないんだから」
約束を守らないとひどいからねと言外に匂わせつつ皐月は諭すように言って、自分の人差指の先を葉月の唇に押し当て、すっと目を細めると、
「さ、いつまでも鞄を肩にかけてちゃ重いでしょ。ほら、お姉ちゃまに貸してごらん。あ、でも、明日からは自分でちゃんとするのよ。パンツを穿いたり制服を着たりはまだ自分でできないけ年少さんの葉月ちゃんだけど、鞄や手提げ袋をしまうくらいはできるよね」
と言い聞かせて通園鞄を葉月の肩からおろし、壁際に置いてある、鉢植えのサボテンを模した形のカラフルな小物ハンガーにかけてやる。
それに続いて手提げ袋を葉月の手から受け取って、これも通園鞄と同じ小物ハンガーにかけようとしたが、不意に何かを思い出したように手提げ袋に手を突っ込むと、ビニール袋に入ったショーツを取り出した。そうして、取り出したビニール袋をこれみよがしに葉月の目の前で振ってみせながら
「ああ、あぶないあぶない。もう少しでこれを忘れるところだったわ。あとでちゃんと洗濯しておいてあげないとね。でも、今は水無月さんを待たせているから、お洗濯は帰ってきてからにしようね」
とおかしそうに言ったのだが、その時、『水無月さんを待たせている』という言葉を耳にした瞬間に葉月の両目が大きく見開くのを見逃さなかった。
バスをおり、マンションに戻ってくるまで、葉月は、ようやくのこと羞恥に満ちた装いから解放されるものだとばかり思い込んでいた。これから再び水無月の運転するバスでどこかへ連れて行かれるにしても、保育園の女児用の制服を脱いで、いつものトレーナーとジーンズに着替えることができるものだとばかり思っていた。それが、自分の部屋に入ることを禁じられ、空き部屋だったのをいかにも小さな女の子向けといった感じに模様替えを施した部屋に連れ込まれ、そこがこれから自分の部屋になるのだと告げられたのだ。整然と並んだ整理タンスや衣装ケースはどれも子供向けのカラフルな色遣いの物ばかりで、その中に十八歳の男子大学生にふさわしい衣類が収めてあるとはどうしても思えない。
再び出かけるに際して、どんな装いに着替えさせられるのだろうか。大きく見開いた葉月の目には、明らかな怯えの色が浮かんでいた。

【三】

「さ、どれにしようかな。葉月ちゃんが女の子になって初めてのお出かけだから、うんと可愛い格好をさせてあげなきゃね」
皐月はそんなふうに呟きながら、壁際に置いてある整理タンスの一番上の引出を開け、しばらく中身を探っていたが、やがて一着の衣類を取り出すと、左右の肩紐を両手に引っかけるようにして葉月がいる場所に戻ってきた。
この時の葉月は、通園帽と制服だけではなくソックスも脱がされて、キャミソールとショ

ーツだけの下着姿に剥かれ、目の前にある大きな姿見の鏡に映る自分の姿に羞恥で胸をこがしている最中だった。そうして、皐月がタンスの前から戻ってくる気配に、これでやっとのこと恥ずかしい下着姿を隠すことができるかもしれないと一縷の期待を託し、姉が広げ持った衣類に目を向けたのだが、それは儚い望みにすぎなかった。

「そ、それ……なの？　制服の代わりに着る洋服って、それなの？　僕、制服を脱いだ後も、そんな洋服を着なきゃいけないの、姉さん!?」

葉月は、皐月が両手で広げ持っている衣類を目にした途端、悲痛な叫び声をあげた。

それは、十八歳の大学生にはおよそ似つかわしくない、スカイブルーとライトスカイブルーとのギンガムチェックの生地でできたサンドレスだった。それも、大人用のややタイトなラインに仕立ててあるようなものではなく、少しハイウエスト気味のウエストラインから下がふわりとした感じで丸く広がったラインの、ついさっきまで着せられていたセーラーワンピース同様、いかにも子供向けに仕立てたという印象の強いサンドレスだ。しかも、ウエストラインにはサンドレスと共布でできたウエストリボンがあしらってあって、更に可愛らしさを引き立てているという念の入れようだった。

「ほら、また呼び方を忘れちゃってる。バスの中じゃお利口さんだったのに、お家に帰ってきたら途端に困ったちゃんになっちゃうんだから。――葉月ちゃん、明日から保育園に通うことになってるけど、本当は小学校の五年じゃなかったっけ？　だったら来年は六年生で最上級生なんだよ。なのに、いつまでも、お姉ちゃまや自分の呼び方を間違えるような困ったちゃんじゃいけないよね。それとも、葉月ちゃんは本当は五年生なんかじゃなかったのかな？　ううん、でも、ひょっとしたら、葉月ちゃんが間違ったんじゃなくて、お姉ちゃまの聞き違いだったのかもしれないわね。じゃ、どっちだったか確かめなきゃいけないから、もういちどさっきと同じように呼んでごらん」

葉月と並んで大きな鏡の前に立った皐月は、僅かに首をかしげ、鏡に映る葉月の大きな目を見て言った。

バスの中で教えた通りの呼び方をしないなら、あんたが本当は大学生の男の子だってことをお母さん連中にばらしちゃうわよ。皐月が暗にそう告げているのは明らかだ。

「あ……ご、ごめんなさい。は、葉月、お利口さんにする。葉月、もう間違えない。だから……」

皐月が口にした言葉の意味を読み取った葉月は、これ以上ないくらい弱々しく首を振り、ようやく絞り出した掠れ声で応じた。

「だから、もういちど、今度はちゃんと言うんでしょ？　ほら、さっき言ったこと、もういちど言ってごらん」

「……それなの？　制服の代わりに着るお洋服って、それなの？　は、葉月、制服を脱いだ後も、そんなお洋服を着なきゃいけないの、お姉ちゃま!?」

皐月に急かされ、さっき口にした言葉を思い返しながら、屈辱にまみれつつ幼い女の子の口調を真似る葉月。

だが、皐月はまだ満足しない。

「うん、呼び方は間違ってないみたいね。でも、『制服を脱いだ後も、そんなお洋服を着なきゃいけないの!?』だなんて、まるで、お姉ちゃまが選んであげたサンドレスが気に入らないみたいじゃない？　いいわよ、これが気に入らないんだったら、どんなのがいいか、葉月

ちゃん自身に選ばせてあげる。このサンドレスを買ったお店に連れて行ってあげるから、どれがいいか自分で選ぶといいわ。可愛いお洋服がたくさんあるから、いっぱい試着して楽しめるわよ。もちろん、試着室にはお姉ちゃまも一緒に入ってアドバイスしてあげる。でもって、お洋服がいっぱいありすぎて選びきれない時は、お店の人に葉月ちゃんのキティちゃんのパンツを見てもらって、こんな可愛いパンツを穿いている妹ちゃんに似合うのはどんなお洋服でしょうかって訊いてあげるわね」

皐月は、ようようの思いで葉月が言い直した言葉の一節を責めたて、鏡の中の葉月の瞳を再び覗き込んで言った。

「でも、もしも葉月ちゃんがこのサンドレスを気に入ってくれてるんだったら、暑い中をわざわざお店まで出かけなくてすむんだけどな。だから、もういちど訊くわね。葉月ちゃん、お姉ちゃまが選んであげたサンドレス、あまり好きじゃないのかな？」

そんなふうに迫られては、もう返す言葉などない。

「……だ、大好きだよ、お姉ちゃまの選んでくれたサンドレス。保育園の制服も可愛いけど、それに負けないくらい、とっても可愛いよ、そのサンドレス。せっかくの可愛い制服を脱いじゃって、葉月ちょっぴり寂しかったんだけど、その代わりにお姉ちゃまが選んでくれたサンドレスを着せてもらえるなんて夢みたい。は、葉月、早く着てみたいな、そのサンドレス。……お、お願い、お姉ちゃま。早く葉月にそのサンドレスを着……着せてちょうだい」

皐月が自分に言わせようとしているに違いない言葉を、姿見の鏡から目をそらしながらそんなふうに口にするのが、葉月にできるただ一つのことだった。

「そう、本当は気に入ってくれていたのね、お姉ちゃまが選んであげたサンドレス。なのに、葉月ちゃんは恥ずかしがり屋さんだから、照れちゃって本当のことを言えなかったんだ。うふふ。なんて可愛いのかしら、葉月ちゃんは。小学五年生にもなって恥ずかしがり屋さんで本当の気持ちもちゃんと言えないだなんて、なんて可愛い妹なのかしら、葉月ちゃんてば」

ようやくのこと皐月は満足げに微笑むと、顔をそむけた葉月の耳元に唇を寄せて甘ったるい声で囁きかけた。

「でも、恥ずかしいのが当たり前だよね。葉月ちゃん、年少さんの女の子なんかじゃないし、小学五年生の女の子でもなくて、本当は大学一年生の男の子だもん、恥ずかしくてサンドレスなんて着られないよね。だけど、葉月ちゃん、自分で言ったんだよ。『お姉ちゃま、早く葉月にそのサンドレスを着せてちょうだい』って言っちゃったんだよ。そう言いなさいって、お姉ちゃま、命令なんかしてないよね？　お姉ちゃまは、ただ、『可愛いお洋服がいっぱいあるお店に連れて行ってあげようか？』って言っただけ。なのに、葉月ちゃん、自分から言ったんだよね。『早くサンドレスを着せてちょうだい』って、おねだりしたんだよ？」

笑いを含んだ声でそこまで囁きかけた皐月は、葉月の耳元からすっと唇を離して、勝ち誇ったように続ける。

「いいわよ、着せてあげる。葉月ちゃんが着たくて着たくてたまんないサンドレス、すぐに着せてあげる。お姉ちゃまも、葉月ちゃんが喜ぶお顔、少しでも早く見たいもん。だから、ほら、お手々を上げて。園長先生のお部屋でキャミソールを着る時はお姉ちゃまがお手々を上げさせてあげたけど、今度は自分で上げるのよ。だって、早く着せてって葉月ちゃんが自分からおねだりしたんだもの。お姉ちゃまは葉月ちゃんのおねだりをきいてあげるだけなんだもの」

それに対して、葉月は何も言い返せない。ただ、皐月に言われるまま、のろのろと両手を上げるだけだ。
「そう、それでいいのよ。お姉ちゃまの言いつけ通りにできてお利口さんね、葉月ちゃんは。ま、でも、葉月ちゃんが自分でおねだりしたことなんだもの、それも当たり前なんだけど」
皐月はくどいほど『葉月ちゃんが自分からおねだりした』と繰り返し言いながら、両手で広げ持ったギンガムチェックのサンドレスを葉月の頭にすっぽりかぶせた。
「はい、もうお手々をおろしていいわよ。お手々をおろして体の横にぴったり付けていてね、肩の紐を結ぶのに邪魔にならないように」
皐月はいったん上げさせた葉月の両手を、サンドレスがずり落ちないよう押さえる形で体の両側におろさせ、サンドレスの左右の胸当がそのまま上に伸びてホルターネックの留め布になっている箇所を首筋の後ろにまわし、大きなリボンみたいにきゅっと結んだ。
「もうすぐだから、ちょっとの間だけじっとしているのよ。あとは、ここをこうして、と」
皐月は葉月の首筋の後ろでリボンに結んだ留め布の長さを細かくいじることでサンドレスを微妙に上げ下げし、キャミソールのバストラインを縁取るフリルのレースがサンドレスのざっくり開いた胸元から僅かに見え隠れするように調節してから、裾の乱れを整えた。
「うん、これでよし。とっても可愛くできたから、葉月ちゃん、自分のお目々で見てごらん。すっごく似合ってるから、ほら」
皐月は、葉月の全身を眺めまわして満足そうに頷くと、手を上げている間もホルターネックの留め布を結ばれている間も裾の乱れを直してもらっている間も決して自分の姿を見まいとしてそむけていた葉月の顔を強引に鏡に向けさせ、優しくも威圧的な口調で命じた。
「こ、これが……！」
皐月に命じられるまま鏡に向かって顔を向け、おそるおそる瞼を開いた葉月の口を感嘆の声が衝いて出る。
「そうよ、これが葉月ちゃんよ。すっかり女の子になっちゃった葉月ちゃんなのよ」
瞳に妖しい炎を宿した皐月が大げさな仕草で頷いてみせた。

二人の目の前に置いてある大きな鏡に映っているのは、どこからどう見ても男子大学生などではなかった。仕事着であるジャージに身を包んだ大柄な皐月の横に佇んでいるのは、肌が透けて見えそうな薄手の生地でできたキャミソールの上にホルターネックのサンドレスを着た、華奢で可憐で清楚な少女だった。それも、夏だというのに肌は磁器のように滑らかで白く、眉の上でざっくり切り揃えた髪があどけなさを引き立て、まるで膨らんでいない胸が却って無垢な色香を漂わせる、滅多にお目にかかれないほどのとびきりの美少女だ。サンドレスがホルターネックになっているため、脇の下や背中が大きく開いていて、下に着ているキャミソールのバストラインやサイドラインが見え隠れするのだが、それも決してだらしない感じを与えず、幼くしどけない奇妙な淫靡さを感じさせて、それが男性であれ女性であれ見る者の目を例外なく虜にしてしまうほどだ。そう思って見れば、まるで袖がないどころか肩布さえないサンドレスのせいであらわになった撫で肩に微かに食い込むキャミの肩紐さえもが、その美少女の儚げな佇まいに彩りを添える繊細なアクセサリーにさえ思えてくる。

保育園の制服であるセーラーワンピースに身を包まれていた時はあどけないだけだった葉月が、露出の多いサンドレスに着替えると、本当の性別や年齢を想像することさえ困難な、子供用のファッション誌のグラビアを何ページもソロで飾ることさえ難しくないほどの蠱惑的な少女に変身してしまっていた。

「やれやれ、妹がこんなに可愛くなっちゃうと、同じ血をひく姉さんとしちゃちょっぴり妬けちゃうな。こっちは年がら年中子供たちと一緒に走りまわってるから、どうしてもがさつになっちゃうし、日に焼けてばっかなのに」

皐月は、『妹』という部分をわざと強調して呆れたように言い、ひょいと肩をすくめてみせた。

「これが、ぼ……あ、ううん、葉月!?」

思わず「これが僕!?」と呟きそうになり、皐月に睨みつけられて慌てて「葉月」と言い直しながらも、どこか陶然とした表情を浮かべて、葉月の目は鏡に釘付けになってしまった。

恥ずかしい着姿を見まいとし、サンドレスを着せられる様子を直視しまいとして、あれほど頑なに顔をそむけ瞼をぎゅっと閉じていたのに、いざ自分の幼女姿を目にすると、今度は一転、どうしても視線を外すことができなくなってしまったのだ。しかも、いいようのない下腹部の疼きさえ覚えてしまう。

「そうよ、何度も言うけど、これが葉月ちゃんなのよ。セーラーワンピースを着せてあげた時も可愛かったけど、サンドレスもとってもよく似合ってるわね。制服の時は葉月ちゃんに自分がどんな格好をしているのか見せてあげられなかったけど、今はこうしてちゃんと見せてあげられるからお姉ちゃまも嬉しいのよ。自分で見てみてどう思う？　自分でもびっくりしちゃうほど可愛いよね、葉月ちゃん。もしも葉月ちゃんが男の子だったら、自分で自分に恋しちゃうくらい可愛らしいよね」

皐月は悪戯っぽくそう言うと、頬をうっすらとピンクに染めて尚も鏡に見入っている葉月の両脚の間にさっと右手を差し入れた。

そうして、差し入れた右手の中指と人差指をさわさわ動かして、ショーツとナプキン越しにペニスの様子を探ろうとする。

「や……」

思いがけない皐月の行動に、葉月は反射的に腰を退いた。だが、そのせいで却って皐月の指によってペニスを押さえつけられ、じんじんと疼き始めていた下腹部が尚のことかっと火照りだしてしまう。

「可愛い声を出すのね、葉月ちゃん。可愛いお顔にお似合いの、とっても可愛いお声ね。その可愛いお声、お姉ちゃまにもっともっと聞かせてちょうだい」

ナプキンの中でもぞもぞと蠢くペニスの様子をはっきり指先に感じながら、皐月は熱い吐息を葉月の耳たぶに吹きかけた。

「くぅ……」

皐月は葉月のペニスを激しく揉みしだいているわけでは決してない。さっきは皐月が急に腰を退いたから二本の指の腹部でペニスを押さえつけてしまったが、少し力が入ったのはその時だけで、あとは、指先で軽くペニスの様子を探っているだけだ。なのに、葉月はあえかな呻き声を漏らしながら、はしたなくペニスをエレクトさせている。それは、これまで一度も目にしたことのないような美少女に自分が変貌させられてしまったという倒錯感と、自分が変身した美少女に自身が心ときめかせてしまったという背徳感と、美少女さながらの格好を強要された上で感じやすい部分を実の姉に責められているという被虐感とがない混ぜになった、いいようもなく奇妙な、甘ったるい腐臭にも似たフェロモンを嗅いだ時のような、異様な感情の昂ぶりのせいに違いない。

「そ、そんなところ、いじっちゃ……」

発議は「そんなとこ、いじっちゃ駄目」と言って皐月の手を振り払いかけた。けれど、下腹部の切ない疼きが、「駄目」という言葉を途中で押しとどめさせてしまう。

「いいのよ、出しちゃって。遠慮なんかしないで、存分に出しちゃっていいのよ。葉月ちゃんのおちんちんからいやらしいお汁が幾ら溢れ出しても、お姉ちゃまの貸してあげたナプキンがちゃんとしてくれるから。でも、用心のために持ち歩いているナプキンが『弟』の役に立つなんて今まで考えたこともなかったわ――ああ、ううん、今は可愛い『妹』だったっけ。

だったら、不思議でもなんでもないのかしら。でも、体の大きさとか出血の量とか人によっていろいろだから、ナプキンもどれがいいか、自分に合うのをきちんと選ばなきゃいけないのよ。いいわ、今度、薬屋さんに連れて行ってあげる。ちゃんと薬剤師の資格を持っている店員さんに相談して、葉月ちゃんに合うナプキンを選んでもらおうね。経血じゃなく白い澱り物でパンツを汚しちゃう葉月ちゃんに合うナプキンを」

ナプキンの中で窮屈そうにのたうつ醜悪なペニスの持ち主である葉月だが、外見だけは女の子だ。姉に付き添ってもらってやって来たドラックストアで生理用ナプキンの選び方を相談する小学五年生の少女など、特に目を惹く存在ではない。しかし、可憐で清楚そうな少女の口から「精液でパンツを汚さないようにしたいんですけど」というような言葉が発せられたら、相談にあたった薬剤師はどんな顔をするだろう。そんな情景をちらりと脳裏に浮かべて、葉月の顔は歪み、一方、皐月は舌なめずりせんばかりの表情を浮かべていた。

「は、葉月、薬屋さんなんて行かない。葉月を薬屋さんなんかに連れて行ったりしないでね、お姉ちゃま」

下腹部の疼きに息を荒げながら、葉月は必死の思いで女の子らしい言葉遣いを真似つつ懇願するしかなかった。

「そう、薬屋さんへ行って店員さんに相談するのが恥ずかしいのね、葉月ちゃんは。ま、それも仕方ないかな。お姉ちゃまだって、初めての時はとっても恥ずかしくて、ナプキンを買うのだって自分でできなかったくらいだもん、内気な葉月に急に店員さんに相談しなさいって言っても無理だよね。うん、わかった。じゃ、自分で買いに行けるようになるまで、お姉ちゃまのを貸してあげる。貸してあげて、パンツに付けるのもお姉ちゃまが手伝ってあげる。だって、葉月ちゃん、本当は小学五年生のくせに、自分でパンツも穿けない年少さんになるんだもん」

皐月は葉月の股間をまさぐり続けながら、『本当は小学五年生』という部分を殊さら強調して言った。

「ち、ちがう……葉月、本当は……本当は……」

本当は大学生。けれど、この状況でそれを口にするのは、却って自分の羞恥を煽る結果にしかならない。

「お姉ちゃまのナプキンだから、ひょっとしたら葉月ちゃんの体に合わなくて、パンツを汚しちゃうこともあるかもしれないわね。でも、心配しなくていいのよ。葉月ちゃんが汚しちゃってもいいように、パンツはたくさん買っておいてあげたから。園長先生もパンツを用意しておいてくれたけど、あれは、制服を試しに着てみるためのものだから二枚しかなかったよね。でも、お姉ちゃまは、うんとたくさん買っておいてあげたのよ。お部屋の模様替えが終わって可愛いタンスを並べたら、タンスの中に入れておく下着やお洋服もいっぱい買っておいてあげなきゃって思って、お給料をはたいちゃったの。葉月ちゃん、背の高さは百六十センチだけど、華奢で全体に線が細いから、百五十サイズのでも窮屈じゃない筈だし、パンツとか伸縮性のいい生地でできてるのだったら百四十サイズでも大丈夫どころか、物によっては百三十サイズくらいでも穿ける筈だから、本当に小っちゃい子が身に着けるのと同じような可愛いのを選んであげられたのよ。もちろん、今着てるサンドレスもね。買ってきた時に数えたら、パンツは三十枚くらいあったし、シャツやキャミは十五枚くらいあったかな。それと、ソックスも綿や絹を合わせて二十足はあるし、あ、そうそう、冬になっても大丈夫

なように、毛糸のパンツとかオーバーパンツとかも買っておいてあげたのよ。まだ夏なのにって思うかもしれないけど、必要な物は思いついた時にさっさと買っとかないと、その時になって買い忘れに気づいて慌てちゃうことが多いから。もちろん、上に着るお洋服なんかも、秋物や冬物も買っておいてあげたから心配しないでね。シックなワンピースも、ふかふかのフード付きコートも、元気に走り回れるようにデニムのサロペットスカートも、お友達の誕生日パーティーに呼ばれてもいいようにふりふりのドレスも、みんな買っておいてあげたんだから」

皐月は、ショーツとナプキン越しに葉月のペニスを弄びながら舌なめずりせんばかりにして言った。言われる方が本当の幼女なら、自分のために優しい姉が買い揃えてくれた衣類の種類と数の多さに目を輝かせることだろう。けれど、皐月が声を弾ませて話しかけているその相手は、大学生の男の子なのだ。

そして皐月は、ほんの短い間を置いた後、こんなふうに付け加えて言った。

「葉月ちゃんが本当に年少さんだったり五年生だったりしたら、こんなにたくさんまとめ買いなんてできなかったのよ。だって、保育園に通ってる子とか小学生とかは育ち盛りで、今買った洋服や下着がいつ窮屈になっちゃうかわかんないもん。だから、成長に合わせて少しずつ買い足していくのが普通なの。でも、葉月ちゃんはもうこれから大きくなることなんてないよね。だって、十八歳の男の子だもん、成長期なんてとっくに終わっちゃってるもん。だから、安心してまとめ買いできたのよ。これ以上おっきくならないから、今年の夏に買ったお洋服は来年の夏にも再来年の夏にも着れるし、今年の冬のために買っておいた物もやっぱりこれから何年経っても冬になるたびに着れるんだから。それに、まとめ買いをするからって店員さんに交渉してちょっぴりだけど値段をひいてもらえて安くすんだし。うふふ。お姉ちゃま、お買い物上手でしょ？」

そんな皐月の言葉に、葉月は何か引っかかるものを感じた。切なく疼く下腹部。皐月の指にいじられながらも皮膚が接着剤で固定されてしまっているせいでもぞもぞと蠢くしかないペニス。自分が本当は男子大学生なのだと改めて思い起こさせられ、煽りたてられる羞恥と屈辱。まともに物事を考える余裕などない筈の中、葉月の意識にちくりと突き刺さる細い針のような違和感。

「お、お姉ちゃま……」

下腹部の疼きに耐え、皐月の言葉を何度も頭の中で反芻を繰り返すうちに、その言葉のどこに自分が引っかかりを覚えたのかを唐突に理解した葉月は、今にも消え入りそうな声で言った。

「お姉ちゃま、今、『今年の夏に買ったお洋服は来年の夏にも再来年の夏にも着れる』とか、『今年の冬のために買っておいた物もやっぱりこれから何年経っても冬になるたびに着れる』とか言ったよね？　それって……それって、どういうことなの？　葉月、保育園に通うの、夏休みの間だけなんでしょ？　遠藤先生が元気になるようにって葉月が一緒にいるの、この夏休みの間だけなんでしょ？　夏休みの間だけのアルバイトなんでしょ？　なのに、どうして、来年や再来年のことまでお姉ちゃんは言ったりするの!?」

葉月の声は、注意していないと聞こえないほど小さく弱々しい。だが、その響きは悲痛だ。

「あら、私は『夏休みの間だけ』なんて言ってないわよ。『いいバイトの口があるからやっ

てみたら』とは勧めたけどね。たしか、契約書にも、期間を夏休みに限定するとは書いてなかったんじゃないかな。たしか、遠藤先生のケアに必要な間とか、そんな表現だったと思うけど？」

葉月の問いかけに、皐月はわざとのような冷たく事務的な口調で応じた。

「じゃ、じゃ……遠藤先生が元気にならなかったら、夏休みが終わっても保育園に通わなきゃいけないの？　葉月、ずっとずっと保育園のままなの？」

葉月の脳裏を、夏用の制服を合い服に替え、更に冬服に着替えた上にふかふかのコートを着て保育園の送迎バスに乗り込む自分の姿がおぼろげに浮かんだ。

とても屈辱的な光景の筈なのに、なぜだか、その姿にさえ下腹部が疼く。

「さあ、それはどうかしらね。でも、そうなったらそうなったでいいじゃない。明日から保育園に通うようになったら、葉月ちゃん、きっとたくさんお友達ができるわよ。こんなに可愛い年少さんの女の子だもん、年上の子に可愛がってもらえて、他の年少さんとも仲良しになって、いっぱいいっぱいお友達ができるわよ。お友達がたくさんできた後、ばいばいしちゃうなんて寂しいでしょ？　だったら、ずっと保育園でいいんじゃないかな」

葉月が重ねて訊くのに対して皐月は皮肉めいた口調でそう言い、人差指と親指でペニスの先をきゅっと挟んだかと思うと、

「それに、ほら、葉月ちゃんは女の子の格好をしておちんちんをおっきくしちゃうようなはしたない子なんでしょ？　なのに、男の子に戻って大学へ行くようになったら、大好きな女の子の格好なんてできなくなっちゃうんだよ？　だけど、保育園に通ってる間は、好きなだけ女の子でいられるの。葉月ちゃんが女の子でいる間はお姉ちゃまも葉月ちゃんが喜びそうなお洋服やパンツをもっとたくさん買ってあげる。だから、それでいいんじゃないのかな。――でも、今はそんなこと気にしてないで、気持ち良くなっちゃえばいいのよ。ほら、こんなふうに」

と甘ったるい声でねっとり囁きながら、二本の指をペニスの付け根の方へつっと動かした。

「や、やだ……」

とうとう我慢できなくなって葉月が身をよじると同時に、ペニスが激しくどくんと脈打った。

けれど、ペニスを後ろ向けに折り曲げられ接着剤で固定されてしまっているため、普段のマスターベーションのように精液が勢いよく噴き出ることはない。なんだか、トイレが近くに見あたらなくて我慢しているおしっこがいつの間にか少しずつ溢れ出る時みたいにじくじくとしか出てこない。それでも、さんざ弄ばれなぶられた後の絶頂感は一際だった。あまりの昂ぶりのため、全身から力が抜け、その場にへなへなとへたりこんでしまう。

「園長先生のお部屋でもそうだったけど、白いおしっこを出しきっちゃうまでには時間がかかるのよね。いいわ、しばらくそうしてなさい。葉月ちゃんがそうやって白いおしっこを全部出しちゃうまでの間にお姉ちゃまも着替えてお出かけの準備をしておくことにするわ。ちょっと遅くなっちゃいそうだけど、水無月さんにはお姉ちゃまが謝ってあげる。だから、葉月ちゃんは何も心配しないで、白いおしっこでナプキンをべとべとにしちゃえばいいのよ。自分の準備が終わったら、あとできちんとお姉ちゃまがナプキンを取り替えてあげる。だから、だ・い・じょ・う・ぶ」

いわゆる『とんび座り』とか『女の子座り』とかいう姿勢で床にお尻をつけてへたりこみ、

僅かに首を反らせて喘ぐ葉月。そんな実の弟の顔をちらと見おろして、皐月は真新しい部屋をあとにした。

第五章　～お出かけ～

【一】

「ずいぶん待たせちゃって、本当に申し訳ありません。この子が面倒ばかりかけるものだから、すっかり手間取っちゃって」

空き地に駐まって待っているバスに再び乗り込んだ皐月は、運転席の水無月に向かってぺこりとを頭を下げてみせ、皐月に手を引かれておぼつかない足取りでようやくバスのステップを昇りきったばかりの葉月の方に振り返った。

それこそまるで本当の幼児みたいに『この子』と呼ばれた葉月だが、窓ガラスにうっすらと映る自分の姿を目にすると、一言の反論もできなかった。窓ガラスやルームミラーに映っているのは、キャミソールとサンドレスを重ね着して、つばの広い麦わら帽子をかぶった、夏休みの最中のお出かけに心弾ませる少女そのままの姿をした葉月だった。しかも麦わら帽子はお澄ましした感じで少し斜めにかぶるのではなく、強い日差しから真っ白の肌を守るためにまっすぐ目深に、そして、少しくらいの風では飛んでしまわないよう顎紐をしっかり結んだ、いかにも小さな子供がそうするようなかぶり方だった。その上、やや大ぶりのポシェットを肩にかけているのだが、それも、肩紐を右の肩にかけ、ポシェット本体が左の脇腹あたりにくるようにした、通園鞄と同じようなかけ方だから、いっそう幼さが強調されてならない。

「あらあら、すっかりおめかししちゃって。とっても可愛いわよ、葉月ちゃん」

皐月に手を引かれてバスに乗り込んだ葉月の姿を見るなり、その正体を充分に承知しているくせに、まるで久しぶりに会う幼い孫娘の面影と重ね合わせてでもいるかのように水無月は顔をほころばせた。そうして、じきに心配そうな表情を浮かべ、

「でも、どうしたの？　皐月お姉ちゃまに面倒かけてばっかりだそうだけど、どんなふうに

お手間を取らせちゃったの？　だけど、ま、葉月ちゃんはまだ小っちゃいんだもの、自分でできないことも多いわよね？　面倒をかけてばっかりだって皐月お姉ちゃまはおかんむりだけど、年少さんの葉月ちゃんにできないことを無理矢理させようとして皐月お姉ちゃまが勝手に怒っいてるだけかもしれないし、何があったのか、おばあちゃまに話してごらんなさい。おばあちゃまが、どっちがいけないのか考えてあげるから」

と、日ごろから園児たちに『水無月のおばちゃん』どころか、最近は『水無月のおばあちゃん』と呼ばれることもあり、それこそ、厳しい母親に叱られる可愛くて仕方のない孫娘を不憫がる祖母さながら、これ以上はないくらい優しく話しかけるのだった。

そんな水無月の様子に、皐月がくすくす笑いながら応じる。

「やだ、水無月さん。すっかり葉月ちゃんのおばあちゃま気分じゃないですか。このぶんだと、私が葉月ちゃんに自分でできるわけのないことを無理にさせようとした意地悪なお姉ちゃまにされちゃいそう。ああ、こわいこわい」

「だって、仕方ないわよ。孫娘と会える機会なんてあまりないし、たまに会ったと思っても、一泊するだけで帰っちゃうのよ。そんなところへ孫娘によく似た葉月ちゃんのおでましだもの、ついつい甘やかしたくなっちゃうのよ。ここは私のためだと思って、御崎先生には意地悪なお姉ちゃまの役を引き受けてもらえると嬉しいんだけどね。そうしてくれたら、私は優しいおばあちゃまになって葉月ちゃんの味方になってあげられるもの」

水無月もくすりと笑い冗談めかしてそう言ったのだが、その口調が半ば本気めいて聞こえたのは否めなかった。

「いいですよ、そのくらい、お安いご用です。でも――」

皐月は笑い顔のまま鷹揚に頷いたが、そのすぐ後、肩をすくめて続けた。

「でも、私は葉月ちゃんに無理なことをさせようとしたわけじゃありませんよ。着替えの途中で葉月ちゃんがナプキンを汚しちゃったから、それを取り替えてあげただけなんです。ただ、葉月ちゃんの場合、なんて言うか、ナプキンを汚しきっちゃうのに時間がかかって、それで遅くなっちゃったんです」

そんなふうに説明して最後の方は悪戯めいた顔つきになる皐月に向かって、園長室での一連の出来事を事務室に置いてある防犯モニターでつぶさに観察していた水無月は、苦笑交じりの表情を浮かべて軽く頷き返した。

「ああ、そういうことだったの。そう、皐月お姉ちゃまにナプキンを取り替えてもらっていたのね、葉月ちゃんは。じゃ、仕方ないかな。まだ小っちゃな葉月ちゃんに『自分で取り替えなさい』って言ったのなら皐月お姉ちゃまがいけないけど、皐月お姉ちゃまに取り替えてもらって遅くなっちゃったのなら、仕方ないわね」

葉月がナプキンを使うことがさも当たり前のことのような調子で言葉を交わす二人。

そんな二人のやり取りに対して、けれど葉月は沈黙を守るしかなかった。いやらしい白いお汁でナプキンをべとべとに汚してしまったのは事実だし、それを理由に、用心のためという名目で、替えのショーツが入ったポシェットを肩にかけさせられているのだ。しかも、マンションの『はづきのおへや』で取り替えられたばかりの真新しいナプキンさえもがもう既に小さなシミになっていた。それは、部屋を出てここへ歩いて来るまでの間、葉月が歩を進めるたびに両脚の内腿にペニスがこすれて、自分の意識とは裏腹に我慢汁がとろりと溢れ出たせいだった。バスをおりてマンションへ向かう時はそんなことはなかったのに、着替えを

終えて部屋を出る時には踵の高いサンダルを履かされたため、これまでスニーカーしか履いたことのない葉月はぎくしゃくした歩き方しかできなくなって両脚に余計な力が入ってしまい、そのせいで両脚の間に後ろ向けに固定されたペニスが、脚を動かすたびに撫でさすられて、皐月の手で精液を搾り取られてさほど時間が経っていないというのに、我慢汁をじわじわ溢れ出させてしまったのだ。

そんな葉月が二人に対して何を反論できるだろう。

【二】

じくじく湿っぽい感触が下腹部から伝わってくるのを歯咬みして耐える葉月を乗せたバスがやがて着いたのは、皐月のマンションと保育園との中ほどから街の中心方向へ少し走った場所にある公立の水族館だった。こじんまりした建物だが、園児手帳や職員証を提示すれば地元の保育園と幼稚園の園児と付き添いの保育士は無料で入園できる上、敷地の中に様々な深さのプールが併設されているため、春や秋の遠足だけではなく、ひばり保育園のように自分のところにプールが設置されていない保育園や幼稚園だと、暑い盛りに園児たちに水遊びをさる場合もここに連れて来ることも多く、皐月にとってはすっかりお馴染みになった水族館だ。

しかし、この水族館の特徴はそれだけではない。水族館の直営というわけではないのだが、広い駐車場の一角を借りて営業しているレストランが、なかなか美味しい料理を出すことで地元では有名なのだった。建物は地味で、料理も派手さはないのだが、地元出身のシェフの材料に対する目利きが確かな上、和食やフレンチ、イタリアンや中華といった既存の枠組みにとらわれない自由な発想で旬に合わせた調理をすることで素材の持ち味を引き立てたランチを提供してくれ上、まるで気取った様子がなく、デパートの大食堂みたいな気楽さもあって、大勢の客で混み合っているのが常だった。

皐月は、園長室での面談を終え、バスに乗り込むと同時にこのレストランに予約の電話を入れて、かろうじて三人分の席を確保してもらっていたのだ。せっかくの日曜日にわざわざ出勤してもらった水無月へのささやかなお礼に昼食をご馳走するためだった。

大型車専用レーンにマイクロバスを駐め、レストランに足を踏み入れた三人は、窓際の席に案内された。アスファルトで舗装された駐車場だが、レストランのまわりはちょっとした花壇になっており、ほどよく利いたエアコンと相まって、夏の日の昼過ぎでも、窓を通して見る風景に暑苦しさはまるで感じない。

「本当は冷たいワインが欲しいところですけど、水無月さんにバスを運転してもらっている手前そうもいきませんから、とりあえず、ペリエで乾杯しましょう」

オーダーを済ませた皐月は、ワインの代わりに注文したよく冷えた発泡性のミネラルウォーターが運ばれて来ると、びっしり汗をかいたグラスを高々と持ち上げた。

そこへ、うきうきした顔の水無月と、おどおどした様子の葉月がグラスを合わせる。細かな泡が絶えず浮かび上がるグラスが三つ軽く触れあって涼やかな音をたてた。

「ああ、よく冷えていておいしいこと。それに、誰かと一緒に食事をすることなんて滅多にないから楽しいわ。誘ってくれた御崎先生にお礼を言わなきゃね」
一口二口とペリエを飲んで、水無月はグラスをテーブルに戻しながら嬉しそうに目を細めた。
「そんな、お礼を言うのはこちらの方です。お休みの日にバスを出していただいた上、勝手なお誘いにつきあっていただいて感謝しています」
皐月は恐縮しきりの態で言ってから、にこやかな笑顔になった。
「それに、このお店、私も来てみたかったんです。子供たちを連れて遠足や水遊びに来るたび、バスをおりるとすぐに気になって、入り口に立てかけてあるメニューを見ていたんですよ。でも、園の行事の途中に入るわけにはいかないし、夕方はやってないし、日曜日のランチくらいしか来る機会はないけど、外へ出るのが好きじゃない弟はつきあってくれないしで、なかなかチャンスがなかったんです。それが、こうして水無月さんや妹と来ることができて、私自身が一番楽しんじゃってるんじゃないかしら」
「そうだったの？　実を言うと、私も子供たちや先生方を送り迎えしているたびに気にはなっていたんだけど、やっぱり、仕事の途中に一人で入るわけにはいかなくて」
水無月は更に目を細めて頷いた。
通園バスは朝夕の送り迎えだけではなく、遠足や水遊びで水族館へ行く時にも活躍している。ただ、送迎バスの定員は水無月を除けば付き添いの大人が一人と園児が四十人ということになっているから、年長・年中・年少クラスが全員で移動するとなると水無月は往復で大忙しだ。しかも、やっと園児たちを送り届けたと思っても、水無月は事務作業も一手に任されているから、そのままとんぼ返りで園に戻って帳簿の整理ということになる。そのため、やはり皐月と同じようにレストランの存在を気にしながらもこれまで店の中に足を踏み入れる機会には恵まれなかったらしい。
「その点、葉月ちゃんは幸せね。保育園に通うことが決まった途端、評判のお店で入園祝いをしてもらえるんだから」
三人は、葉月と皐月が横に並び、二人の向かい側に水無月という形で座っているのだが、それまで向かい側の水無月と言葉を交わしていた皐月が、不意に葉月の横顔を見て言った。
「そんな、入園祝いだなんて……」
思ってもいなかった言葉を急にかけられた葉月はどう応じていいのかわからず、途中で口をつぐんでしまう。

まわりの客たちに自分の正体を知られまいかとまるで針のむしろに座らされているような気分で待つ中、やがて運ばれてきた料理も葉月には屈辱の一品だった。
皐月がオーダーしたのは、本人と水無月の分はシェフのお薦めランチコースだったが、葉月の分は、お子様ランチだった。それも、このレストランのメニューには、比較的年齢の高い子供向けと、低年齢向けという二種類のお子様ランチが掲載されているのだが、皐月が葉月のために注文したのは、その内の低年齢向けのお子様ランチだった。高学年向けのお子様ランチは、普通のコースではボリュームがありすぎて食べきれないという小食の客向けのいわゆるレディースランチも兼ねているため、料理ごとにそれぞれきちんと別皿に盛って出てくるし、料理の内容も普通のコースとさほど変わらないのだが、低年齢向けのお子様ランチ

の方は、プラスチック製の一枚のプレートにハンバーグもケチャップライスもサラダもフルーツもまとめて盛り合わせて出てくる上、小さな子供でも食べやすいように、フォークとナイフや箸ではなく、やはりプラスチック製の先の割れたスプーンがついてくる。しかも、星の形に型抜きしたケチャップライスの上には紙製の旗が立っているといった具合だから、それを目の前に置かれた葉月としては羞恥の極みだ。

しかも、プレートを運んできたウエイターと入れ替わりでウエイトレスが運んできた飲み物に葉月の羞恥は更にくすぐられる羽目になる。皐月と水無月のランチコースにはスープと食後のコーヒーがついているし、高学年向けのお子様ランチの場合は冷製スープとオレンジジュースのどちらかを選べるようになっているのに対し、低年齢向けのお子様ランチにはオレンジジュースしかついていなかった。それも、高学年向けお子様ランチのオレンジジュースはちゃんとしたガラスの大ぶりのゴブレットに入っているのに対して、ウエトレスが葉月の目の前に置いたオレンジジュースは、幼児がこぼさないようにという配慮だろう、左右に取っ手が付いた丸い透明のプラスチック製の容器に入っていたのだ。しかも丸い容器には蓋が付いていて、蓋の真ん中に開いた小さな丸い穴にストローを差し込んでジュースを飲むようになっているといった具合だ。

それに加えて、料理を盛りつけたプレートの横にウエイターが置いた純白の大きめの紙。葉月はそれを、皐月や水無月が膝の上に広げたのと同じペーパーナプキンだとばかり思っていた。けれど、その白い紙を皐月がつかみ上げ、葉月の目の前ですっと広げてみせると、それがペーパータオルなどでないことは一目瞭然だった。

「あら、小っちゃい子向けのお子様ランチにはいい物が付いてくるのね。うん、これなら、せっかくの新しいサンドレスを汚さなくていいわ。それに、ほら、葉月ちゃんの大好きなキティちゃんの絵が描いてあるし。よかったね、葉月ちゃん、パンツとお揃いのエプロンよ。さ、これを着けてお洋服を汚さないよう上手にごはんを食べようね。ほら、キティちゃんのエプロンよ」

そう。皐月がわざとのように声を弾ませて言う通り、葉月がペーパーナプキンだとばかり思っていた物は、純白の生地にハローキティの顔をプリントした紙製のエプロンだった。それも、小学校の給食係が着用するような割烹着タイプのエプロンではなく、胸当ての部分から伸びている紐を首筋の後ろと背中で結んで留めるような仕組みの、ぱっと見には大きなよだれかけみたいな形のエプロンだ。

エプロンを見るなり、皐月は「あら、いい物が付いてくるのね」と驚いたように言った。しかし、エプロンがセットになっていることを皐月がこの時になるまで知らなかったとは思えない。きっと、前もってメニューを入念に調べておいて、葉月がどんな恥ずかしそうな様子をみせるか、それを期待してこのメニューをオーダーしたに違いない。

「やだ。そんなエプロン、やだってば、お姉ちゃま。葉月、もう……もう、五年生なんだよ。小っちゃな子じゃないんだから、そんなエプロン要らないってば」

紙製のエプロンを目の前に突きつけられた葉月は、まわりの客が不審に思わないよう少女めいた話し方を意識し、だだでさえ高い声が更に高くなるよう注意を払いつつ、小さく首を振った。

「ふぅん、葉月ちゃん、エプロンなんて要らないんだ。そっか、もう五年生だから要らないんだ」

葉月の訴えに対して、皐月は、『もう五年生』という部分を殊さら語気を強めて言い、くすっと笑って続けた。
「でも、お家でごはんを食べる時、ごはん粒やお野菜をぽろぽろこぼしちゃう子は誰だったかな。もう五年生なのにお箸もスプーンも上手に使えなくて、せっかく買ってあげたブラウスにソースをべっとり付けて汚しちゃった子は誰だったっけ。お家にはお姉ちゃまと葉月ちゃんしかいないんだよ。お姉ちゃまがそんなことするわけないもん、残りは誰だかわかるよね？」
からかうようにそう言う皐月の言葉は、もちろん、本当のことではない。小さい頃から行儀の良かった葉月が食事のたびにごはんをこぼすなどということはあり得ない。あり得ないのだが、皐月は、葉月がエプロンを着けざるを得ないよう仕向けるために、周囲の客に葉月は食事の仕方が下手だと思わせようとしているのだ。
そこへ、水無月が割って入った。
「そうよ、葉月ちゃん。おばあちゃま、葉月ちゃんが聞き分けのいい、とってもお利口さんだってこと、よぉく知っているわよ。それはよく知ってるけど、でも、お箸やスプーンの使い方が小っちゃい子と同じくらいお上手じゃないってことも知ってるわよ。だって、おばあちゃまんちと葉月ちゃんちとはお隣どうしで、おばあちゃまがベランダで洗濯物を干していると時々お姉ちゃまも一緒になるんだけど、そのたびに、葉月ちゃんのブラウスの胸元に残ったミートソースの跡や、トレーナーの袖口についたお醤油の跡なんかをみせてくれるんだもの。それで、お姉ちゃま、溜息交じりに言ってるのよ、『いくら注意しても妹がこぼしてばかりだから、どんなに丁寧にお洗濯しても跡がとれなくなっちゃって』って。忙しいお姉ちゃまのお仕事を余計に増やしたりするの、あまり感心できないわね。だから、今も、せっかく買ってもらったサンドレスを汚さないように、きちんとエプロンを着けた方がいいんじゃないかな」
むろん、水無月が言っていることも嘘だ。水無月が皐月と同じマンションに住んでいて隣どうしなどということは決してない。だから、当然、皐月が洗濯物を干しているところに出くわしたこともないし、皐月がごはんをすぐにこぼしてしまうのかどうか知っているわけもない。だが、それとなく皐月の胸の内を察した水無月は、皐月の企みに荷担することにしたのだ。さして悪気があるわけではなく、たまにしか会えない孫娘の面影を宿す葉月をもっともっと子供扱いしてみたくて。
「ほら、水無月のおばあちゃまもこう言ってくれてるでしょ？　だから、エプロンをしようね。葉月ちゃんがケチャップライスやハンバーグをこぼしてもサンドレスを汚さないように、ちゃんとエプロンを着けようね」
水無月の加勢を得て、皐月は僅かに腰を浮かした姿勢でエプロンの上の紐を葉月の首筋に巻き付け、簡単にほどけないようきゅっと結んだ。それから、シワを伸ばしながらエプロンで胸元を多い、下側の紐を背中にまわして、こちらも強く結んでしまう。
「これでいいわ。これならお洋服を汚すことはないから、こぼす心配なんてしないで、おいしいお子様ランチを思いきり食べられるわね」
まるで大きなよだれかけみたいなエプロンで胸元を覆われた葉月の姿に皐月は満足そうな笑みをたたえ、同意を求めるように水無月の顔をちらと見た。
「そうね、これで大丈夫ね。あ、そうだ、葉月ちゃん。どうせだから、お家でもエプロンを

してごはんを食べるようにしたらどうかしら。そうすればブラウスやトレーナーを汚すこともなくなって、お姉ちゃまも助かるんじゃないかしら？」

人の好さそうな笑顔で相槌を打つ水無月には悪気などない。しかし、その邪気のなさが却って葉月を屈辱と羞恥の罠に追い込んでゆく。

「本当ね。葉月ちゃんがお家でもエプロンを着けてくれるようになったら、お姉ちゃま、大助かりだわ。早速、帰りに赤ちゃん用品のお店に寄ってみようか。大きめのよだれかけならエプロンの代わりになるわよ、きっと」

皐月は満更でもなさそうな表情で言って、エプロンに覆われた葉月の胸元を人差指の先でつっとなぞった。

「そんな……よだれかけだなんて、冗談だよね、お姉ちゃま!?」

葉月は今にも泣き出しそうなって弱々しく首を振る。

「さ、どうかしらね。でも、よだれかけがいいのかどうかは別にしても、エプロンを着ける習慣はつけておいた方がいいと思うわよ。葉月ちゃんが明日から通う保育園、年少さんの子供はお弁当を食べる時にみんなエプロンを着けることになっているんだもの。葉月ちゃんも年少さんクラスのひよこ組に入るんだから、お弁当は毎日エプロンをして食べるのよ。だったら、少しでも慣れておいた方がいいんじゃないかな」

皐月は半ば真剣な口調で言って、おもむろにテーブルに目をやると

「あらあら、せっかくのお料理が冷めちゃうわね。大変大変、早く食べちゃわないと。でも、スプーンの使い方がお上手じゃない葉月ちゃんに早く平らげちゃいなさいって言っても無理よね。いいわ、お姉ちゃまが食べさせてあげる。とりあえず、ケチャップライスとハンバーグは温かいうちに食べちゃわないといけないものね。で、温かいお料理を食べさせ終わって、サラダとか果物とかを葉月ちゃんが自分で食べている間にお姉ちゃまも自分のランチを食べちゃうことにするわ。うん、そうしましょ」

と強引に決めつけ、葉月の目の前に置いてあるプラスチック製の先割れスプーンを、葉月が慌てて制止するのもまるで無視してさっさとつかみ上げて、星形に型抜きしたケチャップライスの一角を手早く掬い取った。

「はい、あーんして」
皐月は、いかにも妹思いの姉を演じ、日ごろ園児を相手に出しているのだろう、とびきり優しい声で言って、ケチャップライスを掬い取ったスプーンを葉月の口のすぐ前に突きつけた。
けれど、大勢の客で混み合うレストランの中、まるで本当の幼児そのまま誰かの手でごはんを食べさせてもらうという羞恥に葉月は耐えられない。皐月が何度も「あーんするのよ」と言いながらスプーンを突きつけてくるのだが、頑なに口を閉ざしたままだ。
それに対して、皐月は、強引に葉月の口を開かそうとはせず、あくまでも優しい仕草でスプーンを葉月の口に近づけ、もう少しで唇に触れようかというところでわざとスプーンを傾けるというような行動に出た。そのせいでスプーンからケチャップライスが半分ほどこぼれ落ち、そのまま、葉月の顎先から胸元へと伝い落ちる。葉月の胸元を覆うエプロンは、下の方が表側への折り返しになっていて、子供が食べそこねた食物をキャッチする幅広のポケットみたいな作りになっていた。
スプーンからこぼれ落ちたごはん粒の大半をそのポケットが受け取ってくれたおかげでサンドレスは汚さずにすんだものの、まわりの客たちはまさか皐月がわざとスプーンを傾けたなどと思う筈がないから、傍目には、優しい姉にごはんを食べさせてもらったのに食事の仕方が下手で、せっかくのケチャップライスをこぼしてしまい、紙製のエプロンにうっすらと赤いシミをつけたのは全て葉月自身のせいだというふうに映っていた。

「ママ、あのお姉ちゃん、ごはんをこぼしてキティちゃんのエプロン汚しちゃってるよ。キティちゃんが可哀想だよね」
突然、甲高い幼児の声が店内に響き渡った。
見れば、小学校の低学年くらいだろうか、おしゃまな感じの小さな女の子が葉月と同じお子様ランチを食べながら、少し得意げな表情で、隣の席に腰かけている母親に話しかけていた。自分は全くエプロンを汚していないのを自慢したいだろう、まるで遠慮のない大きな声だ。
「え？　ああ、そうね。エプロン、汚しちゃってるわね、あのお姉ちゃん。うん、キティちゃんのお顔がケチャップで汚れちゃって可哀想かもね。でも、ごはんの食べ方が上手とか下手とかは人それぞれだから、そんなことで大声を出しちゃ駄目なのよ。もしも美亜がエプロンを汚しちゃって、そのことを大勢の人の前で大きな声で言われちゃったら恥ずかしいでしょ？　だから、そんなこと、大きな声で言っちゃ駄目なの」
美亜というのがその子の名前なのだろう、若い母親は愛娘の不躾を優しくたしなめつつ、気遣わしげな視線を葉月に向けた。
けれど、小さな子供に理屈が通じるものではない。美亜は拗ねたように頬を膨らませると、自分のエプロンと葉月のエプロンとを見比べ、勝ち誇ってますます大きな声を出すのだった。
「でも、美亜、エプロン汚してないもん。ごはんだってハンバーグだってレタスだってちゃんと食べられるから、エプロンのキティちゃん、ちっとも汚れてないもん。だから、美亜、恥ずかしくないもん。美亜、あのお姉ちゃんじゃないから恥ずかしくないもん」
母親と美亜がそんなやり取りを交わす中、葉月は今度はハンバーグの上に載った目玉焼きを食べさせてもらっていた。けれど、今度もまた皐月が他の客たちに気づかれないようそっ

とスプーンを傾けたものだから、半熟の黄身が流れ出て葉月の唇の端を汚してしまう。
　それを見た母親は
「ま、確かにそうだけど、でも、駄目なことは駄目なのよ。とにかく、よその子が恥ずかしがるようなことを言うのは駄目なの」
と、美亜よりも遙かに体の大きな葉月の食事風景に苦笑交じりに再び我が娘をたしなめるしかなかった。
「なによ、ママったら。いつもいつも、これは駄目、あれも駄目って、駄目駄目ばっか言っちゃって。美亜、もう小学生なんだよ。いつまでも幼稚園のガキンチョじゃないんだから、たまには美亜のイケンを聞いてくれてもいいじゃないのよ。美亜、もう、ごはんのたびにエプロンを汚しちゃうようなお子ちゃまじゃないんだから」
　いつも口で言い負かされているのが悔しいのだろう、美亜はぷいっと唇を尖らせた。
　それに対して母親の方も少し思案顔になり、しばらくの間なにやら考えた後、やれやれ仕方ないといった表情を浮かべて、こんなふうに応じる。
「そうね、確かに、美亜の言うことにも少しは耳を傾けてあげなきゃいけないかもね。たしかに美亜、小学校に通うようになって給食が始まったら、途端にごはんの食べ方も上手になったし、近所の小っちゃい子供たちの面倒をみるようになって、急にお姉さくらしくなってきたもんね。うん、わかった。じゃ、美亜の言うことを聞いて、これからは駄目駄目ばかり言わないように気をつける。で、ママはなんでも駄目って言わないように気をつけるから、美亜はよその子が恥ずかしがるようなことを言わないように気をつけること。これでどう？
　これでおあいこだよね？」
「ほんと？　美亜、お姉さんらしくなってる？　うふふ。美亜ね、気をつかってるんだよ。もう幼稚園のガキンチョじゃないから、保育園や幼稚園に行ってる小っちゃな子たちのお姉ちゃんだから、お手本になるよう頑張ってるんだよ。ママ、ちゃんと美亜のことわかってくれてたんだ。やっぱ、美亜のママ、最っ高だよ。うん、わかった。よその子が恥ずかしがるようなこと、美亜、もう言わない。美亜、もうお姉ちゃんだもん、よその子のことを考えてあげられるもん」
　母親の言葉に、美亜は最初のうち少しはにかむような表情を浮かべたが、すぐにぱっと顔を輝かせて言い、声を弾ませて続けた。
「でも、その前に一つだけママにお願いしていい？　ママと美亜、おあいこだけど、その前に一つだけどうしてもお願いを聞いてほしいの」
「いいわよ、どんなお願い？」
　それまでの拗ねた様子とは一転、娘の殊勝な態度に母親の顔がほころぶ。
「うん。あのね……エプロン、外してもらえないかな？　美亜、もう小学生なんだから、こんなエプロン恥ずかしくてたまんないよ。絶対にお洋服を汚したりしないから、こんなお子ちゃまエプロン、外してもいいでしょ？　このお店だけじゃなくて、別のお店でお子様ランチを食べる時でも、エプロンは着けさせないでほしいの。それが美亜からのお願い。いいでしょ、ママ？　美亜、お姉ちゃんだから、絶対にごはんこぼさないから」
　美亜は少し照れくさそうに、けれど半ば真剣な表情で母親の顔を見上げた。
　母親は再び思案顔になったものの、点々とケチャップの汚れが付いている葉月のエプロンと、シミ一つ付いていない自分の娘のエプロンとを見比べると、やがて根負けしたように小

さく頷き、その後もういちど大きく頷き直してから、美亜の首筋の後ろで結わえた紐に指をかけながら言った。
「いいわ、わかった。美亜のお願いを聞いて、エプロンを外してあげる。でも、ちょっとでもお洋服を汚したら、またエプロンに逆戻りよ。いいわね？」
「うん、約束する。絶対にお洋服を汚さない。でもって、もしも汚しちゃったら、ちゃんとエプロンする。それでいいんだよね、ママ」
「そう、それでいいのよ。ちゃんと約束できるなんて、本当に美亜はお姉ちゃんになったわね。――はい、いいわ、エプロンを外してあげたわよ。だから、美亜も約束を守ってね」
短い言葉のやり取りの間に手早くエプロンを外した母親は、それを丁寧に折りたたんでテーブルの隅に置き、改めて美亜の目を覗き込んだ。
「まっかせといてよ、ママ。美亜、聞き分けの悪い小っちゃい子じゃないもん、ちゃんと約束を守れるお姉ちゃんだもん」
ハローキティの顔が描かれたいかにも幼児向けといったデザインの紙製のエプロンから解放され、自分がまた少しお姉さんになったんだという自信に顔をほころばせた美亜は母親に向かってにまっと笑ってみせた後、どこか自慢げに胸を張って葉月の方に振り向いた。
「あの美亜ちゃんっていう子、エプロンを外してもらえたみたいね。お母さんと美亜ちゃんとのお話を聞いてると、あの子、この春から小学校に通うようになって急にお姉ちゃんらしくなって、それでエプロンも外してもらえたみたいね。なのに、うちの葉月ちゃんときたら――」
皐月は、葉月の唇の端に付いた目玉焼きの黄身をエプロンの端で拭い取り、ジュースの入った丸いプラスチックの容器を半ば強引に持たせながら、すっと目を細めた。
「まだちゃんとスプーンを使えなくて、お姉ちゃまが食べさせてあげても上手に食べられなくて、ごはん粒や目玉焼きをこぼしてばっかなんだよね？」
「ち、ちがう。あれは葉月のせいじゃない。お姉ちゃまがスプーンをかたむ……」
お姉ちゃまがスプーンを傾けたせいだ。思わず反論しかけた葉月だが、ジュースの容器に差し込んだストローを咥えさせられたせいで、あとは言葉にならなかった。
だが、それでも口を開こうとするものだから、ストローから口の中に流れ込んだジュースが唇の端から溢れ出て顎先から胸元に滴り落ち、ケチャップの跡がうっすら残る紙製のエプロンに今度は黄色のシミを付けてしまう。
「ほら、言ってるそばからまたエプロンを汚しちゃって。美亜ちゃんは小学校の一年生だけどエプロンはちっとも汚してないのよ。なのに、葉月ちゃんは五年生のくせに、ごはんだけじゃなくジュースもちゃんと飲めないなんて、困ったお姉ちゃんだこと。――あ、でも、そうね。葉月ちゃんは明日から保育園の年少さんだもん、エプロンをごはんやジュースで汚しちゃってもちっとも変じゃないんだっけ。そうだよね、だったら、ごはんの食べ方が上手じゃなくても仕方ないよね。うん、そうだよね。年少さんの葉月ちゃんより小一の美亜ちゃんの方がずっと年上のお姉ちゃんだもん、小っちゃな妹の葉月ちゃんがエプロンを汚しちゃうのも無理ないよね。葉月ちゃんよりも美亜ちゃんの方がずっとずっとお姉ちゃんのしっかり者なんだもんね」
皐月は、ジュースをエプロンの端で拭ってやりながら皮肉めいた口調で言い、葉月の耳元にそっと唇を寄せて囁いた。

「だけど、本当は葉月ちゃん、大学一年生のお兄ちゃんなんだよね。大学生のお兄ちゃんのくせにキティちゃんのエプロンを汚しちゃってるんだよね。やれやれ、いつになったら美亜ちゃんみたいなお姉ちゃんになれるのかな、葉月ちゃんは。あ、そうだ。困ったお兄ちゃんの葉月ちゃんが早くしっかり者のお姉ちゃんになれるよう、美亜ちゃんが要らなくなったエプロンを貰ってかえろうか。でもって、エプロンに『早く葉月ちゃんを美亜ちゃんみたいなお姉ちゃんにしてください』ってお願いするの。どう？　こんなマジナイ、とっても効きそうに思わない？」

【三】

そんなふうに羞恥に満ちた昼食を終えてようやくレストランをあとにし、穿き慣れない踵の高いサンダルのためおぼつかない足取りでバスに向かって歩き出した葉月だが、皐月に手をつかまれ、くるりと体の向きを変えさせられてしまう。

「どこへ行くつもりなのよ、葉月ちゃんてば？」

葉月の手をつかんだ皐月は、どことなく意地悪そうな笑みを浮かべて言った。

「え？　どこへ行くつもりって……帰るんでしょ？　お家に帰るんじゃないの？」

レストランに出入りする客や駐車場を行き来する人々に怪しまれないよう少女めいた口調を意識しながら、葉月はきょとんとした顔つきになって聞き返した。

「なに言ってるの、葉月ちゃんたら。せっかく水族館まで来たのに、ごはんを食べただけですぐに帰っちゃうような勿体ないことするわけないでしょ？　ほら、これを首にかけるのよ」

皐月はにやっと笑い、自分のポーチから小ぶりの手帳を取り出すと、手帳の背に開いている丸い穴に丈夫そうな紐を通し、その紐を固く結んで葉月の首にかけさせた。

まだきょとんとした表情のまま葉月が視線を落とし、紐で首にかけさせられたばかりの手帳を確認すると、それは、園長室で手渡された園児手帳だった。

「あ、これ……」

「そう、葉月ちゃんの園児手帳よ。お出かけ前に、小物ハンガーにかけた鞄から取り出して持って来てあげたの。これがあれば水族館に只で入れるから、ごはんの後の散歩を兼ねてお魚を見てまわろうね。ほら、お姉ちゃまもちゃんと保育園の職員証を持ってきたんだから」

皐月は笑顔でこともなげに言って自分の職員証を見せ、かたわらに立つ水無月の方をちらと見た。

それに合わせて水無月も自分の小物入れから職員証を取り出す。

「ほら、おばあちゃまもちゃんと持って来たわよ。これで、三人揃って水族館に入れるわね。おばあちゃま、遠足や水遊びのために子供たちを何度もバスで送り迎えしてきたけど、これまで中に入ったことがなかったの。孫娘がお泊まりに来るたびに連れてってあげようかとも思っていたんだけど、孫娘はデパートでのお買い物の方がお気に入りで、こっちに来るチャンスがなくてね。それで葉月ちゃんと一緒にお魚を見てまわるのが楽しみで楽しみで」

水無月は葉月の目の前で自分の職員証をいかにも嬉しそうに振ってみせ、皐月がつかんで

いるのとは反対側の葉月の手をとって、さっさと歩き出した。

「あら、珍しい。日曜日に来園なんて、今日は保育園で特別の行事でもあるの？」

皐月の顔を見るなり、すっかり顔馴染みになってしまった受付の女性職員が話しかけてきた。保育園の行事で何度も訪れているから、今や、その若い女性職員とは、皐月がわざわざ職員証を見せなくても顔パスで入園できる程の仲だ。

「うん、ちょっとね。いつもバスで子供たちを送り迎えしてもらっている事務係の人にも一度は水族館の中を見てもらっておいた方がいいと思ってつきあってもらったのよ。紹介するわね、こちら、水無月さん」

少し遅い昼食を終えたこの時間帯、水族園への客の出入りも落ち着いたようで、比較的空いているゲートのすぐそばで皐月は受付の職員に水無月を紹介した。

「あ、じゃ、こちらが『水無月のおばちゃん』ですか。子供たちからいつも聞いています。今日も水無月のおばちゃんがバスで送ってくれたんだよって。今日は楽しんでいらしてくださいね」

職員はにこやかな笑みを浮かべ、水無月の職員証を形ばかり確認すると、ぺこりとお辞儀をした。

「そうですか、子供たち、私のことを話してくれているんですか。嬉しいことですね。ええ、今日はこの葉月ちゃんと一緒に存分に楽しませていただくことにします。ほら、葉月ちゃんも水族館のお姉さんにご挨拶なさい」

水無月の方もにこやかな表情で会釈を返し、皐月の後ろに身を隠そうとする葉月の手を引いて職員の前に連れ出した。

「えーと、こちらのお子さんは？」

自分の目の前に立って身をすくめる葉月の様子に一瞬だけ表情を固くした職員だったが、葉月が首にかけている園児手帳に気がつくと、今度は、どう見ても保育園児には思えない葉月の背の高さに困惑の顔つきになり、皐月にともなく水無月にともなく、葉月の顔と園児手帳とをちらちら見比べながら訊いた。

「実は私の妹なのよ。明日から私が勤務する保育園に通うことになっているの。はい、これ」

皐月は職員の困惑ぶりに胸の中で面白そうにぺろっと舌を突き出しながら、葉月の首にかけさせた園児手帳を広げてみせた。

「あ、御崎先生、妹さんがいたんだ。たしか、弟さんがいるとかって前に聞いたことがあるけど、妹さんもいたのね。弟さんは大学生だって聞いけど、妹さんとはだいぶ年が離れているのね。――はい、お名前はみさきはづきちゃんね。クラスは特別年少クラス、ひよこ組……え、年少さんなの、葉月ちゃん!?」

皐月の背後から姿を現した自分とあまり背の高さが変わらない少女が首に園児手帳をかけているのだけでも当惑の極みなのに、しかも年少クラスだというのだ。これで驚かない方がどうかしている。

「うん。ま、年少クラスっていっても、職場体験での仮の年少さんだけどね。実は――」

皐月は職員が記載事項を確認するのを待って園児手帳を閉じ、保護者たちに説明する手筈になっている偽りの経緯を口にした。

「はぁ、なるほどね。ふぅん、そういうこともあるのかな」
皐月の説明に職員は半信半疑に呟きながらも、相手が顔なじみの皐月ということもあって
「うん、まぁ、園児手帳は本物だし、いいわ、入ってちょうだい。普段は園児たちのお世話で大変でしょうから、今日はゆっくり楽しんでいってね」
と応じて頷き、親子連れの入園客がゲートに近づいて来るのに気づくと、事務的な顔つきに戻ってもくるりと体の向きを変えてしまった。

「じゃ、行こうか、葉月ちゃん。ひばり保育園の子供たちは、この春に入園した年少さんのお友達も含めて、みんなここに来たことがあるのよ。なのに葉月ちゃんはまだだから、保育園でお魚の話になってもみんなについていけないでしょ？　そんなことになったら可哀想だから、今日のうちに連れて来ておいてあげたかったの。それで、水無月さんへのお礼も兼ねて三人で来ることにしたってわけ。だから、どんなお魚がいるのか、ちゃんと見ておくのよ。みんなが綺麗な熱帯魚のお話をしてるのに、葉月ちゃんだけ、そんなお魚見てないよなんて言ったら、葉月ちゃん、みんなからバカにされちゃうかもしれないんだから。だから、どんなお魚がいたのかちゃんと憶えておいて、晩ごはんを食べながら、どのお魚が綺麗だったかお姉ちゃまに話してちょうだいね。さ、行きましょう」
皐月は職員に向かって軽く頷いてみせてから、葉月の右手を引いて歩き出した。

＊

皐月の体に異変が起きたのは、水族館の展示棟に足を踏み入れて大小様々な水槽を見てまわり始めてから三十分ほど経った頃だった。それまで、穿き慣れない踵の高いサンダルでおぼつかない足取りになりながらも、他の入館者たちに正体を見破られないまいと、皐月や水無月に手を引かれるまま、たとえば色とりどりの熱帯魚が群れになって泳ぎ回る水槽の前では魚に見入る少女のふりをし、たとえばウツボの水槽の前では怖そうに身を固くする少女を演じていたのが、急に足取りが重くなり、二人が促してもなかなか歩を進めようとしなくな

ってきたのだ。
「どうしたの、葉月ちゃん？　あんよが痛いのかな？　だったら、カフェかどこかで休んでいこうか？」
二階の展示場へ向かうスロープに足をかけた後なかなか歩き出そうとしない葉月に、水無月が心配そうな表情で話しかけた。
けれど、葉月は無言で首を振るだけだ。
「駄目じゃないの、葉月ちゃん。水無月さんが心配してくれているのに、何も話さないで首を振るだけだなんて。もう五年生なんだから、もっとちゃんとしなきゃ駄目よ」
口をつぐんだまま視線を落とす葉月に、皐月は、幼児に対して言って聞かせるというよりも、小学校高学年の児童に対して少し強い調子で叱責するといった感じで声をかけた。時によっては保育園の年少さん扱いで羞恥をくすぐられ、時によっては今みたいに小五の女の子扱いで屈辱を煽られといった手練れで皐月に弄ばれ、葉月の心は千々に乱れ、瞬間的ではあるれけど自身が本当は何者なのか、自分に対する自信といったものが揺らぐのを止められない。
「……あ、あんよじゃないの……」
思わず口にしてしまった幼児言葉に、葉月はおずおずと視線を床に落とす。
「そう、あんよが痛いってわけじゃないのね。じゃ、どうしたの？　どうして欲しいのか、ちゃんとお姉ちゃまに教えてちょうだい。年少さんでも、そのくらいは教えられるよね」
皐月は、今度は保育園の幼女をあやすように言った。
「さ、寒いの……寒くて、それで……」
葉月は、まるで皐月の視線から逃れようとでもするみたいに麦わら帽子のつばを下げ、今にも消え入りそうな声で応じた。
「あ、そっか、寒かったんだ、葉月ちゃん。そうだよね、レストランの中もこの建物の中もよく冷房が利いてて、外は真夏だなんて思えないほどだもん」
皐月はようやく納得したような表情を浮かべ、くすっと笑っておかしそうに言った。
「それに、本当は男の子の葉月ちゃんだもん、今までノースリーブのお洋服なんて着たことがないよね。それが急にホルターネックのサマードレスとかキャミソールなんだから、余計に寒く感じちゃうよね」
「や、やだ……葉月のこと、男の子だなんて、そんなこと言っちゃやだ」
麦わら帽子の広いつばで顔を隠したまま、葉月は幼児がいやいやをするみたいに小さく首を振った。
「あら、葉月ちゃん、自分のこと、男の子だって言われるのがいやなんだ。ふぅん。そろそろ、自分が年少さんの女の子だっていう自覚が出てきたのかな」
皐月がからかい気味に言う。
「ちがう。……葉月、男の子だよ。男の子だけど、他のお客さんたちに男の子だって知られたらどうしていいかわかんないもん。男の子のくせに……十八歳の男の子のくせにこんな格好してるだなんて他の人たちに知られたらどうしていいかわかんないんから……」
葉月が声を絞り出すのに合わせて薄い胸が動き、細い肩が震えて、麦わら帽子にあしらった小花の飾りが揺れる。その様子は、確かに、誰かの庇護のもとでなければ何もできない幼い女の子そのままだった。

「わかった。葉月ちゃんのこと、男の子だって言わない。これからはもうずっと年少さんの女の子のつもりで話しかけてあげる。それでいいんだよね？」
僅かな間も置かず、皐月はいかにも恩着せがましく応じた。
「……うん……」
スロープにかけた自分の足をじっと見つめて、葉月は蚊の鳴くような声で応えた。
「じゃ、これからずっと葉月ちゃんは年少さんの女の子で決まりね。いい？　これは葉月ちゃんが自分で言い出したことなんだから、そこんとこ忘れちゃ駄目よ」
葉月が麦わら帽子を揺らしながら弱々しく頷くのを見て有無を言わさぬ強い調子で決めつけた後、まるでそれが嘘だったかのようにころりと口調を変えて優しく訊いた。
「葉月ちゃん、さっき、寒い寒いって言ってたよね。それで気分が悪くなっちゃったの？」

「……あ、あの……あのね、葉月、寒くて元気がなくなってたんじゃないの……」
葉月は何かを訴えかけるかのようにおそるおそる口を開いたが、すぐに羞じらいの表情を浮かべて言葉を飲み込んでしまった。
「じゃ、どうしたの？　どうして、急に歩くのが遅くなっちゃったの？　寒くて元気がなくなったわけじゃないって、だったら、どうしちゃったのかな？」
皐月はキャミソールの上から葉月の背中をぽんぽんと優しく叩き、様子を探るように言った。
だが、どうして葉月の歩みが遅くなったのか、その理由について実は皐月には思い当たる節があった。おそらくそうだろうと思い当たるところがありながらも、それを葉月自身の口から聞きたくて、わざと気づかないふりをして何度も繰り返し尋ねているのだ。
「……あのね……あのね、葉月……」
葉月は何度も最後まで言葉にしようと唇を動かすのだが、そのたびに口をつぐんで目を伏せてしまう。
けれど、それが長くは続かないだろうということも皐月にはわかっていた。葉月の歩みが遅くなった理由が皐月の想像通りなら、もうそろそろ限界の筈だ。
「どうしたの、葉月ちゃん？　何か言いにくいことなのかな？　お姉ちゃまに教えるのが恥ずかしいことなのかな？」
皐月は重ねて訊きながら、葉月の背中に添えていた手をゆっくり下におろし、お尻の膨らみをスカートの上から二度ぽんぽんと叩いた後、更にその手を葉月の体の前にまわして、おへソの下のあたりをぐっと押した。
「や！　そんなとこ触っちゃやだ。……出ちゃう、出ちゃうから、そんなところ触らないでってば、お姉ちゃま」
葉月は反射的に腰を退き、僅かに前屈みになって、ぶるっと腰を震わせた。
「出ちゃうって、何が出ちゃうの？　園長先生のお部屋や葉月ちゃんの新しいお部屋で出しちゃったのと同じ、白いおしっこが出ちゃうのかな？」
切ない喘ぎ声で懇願する様子に、葉月の歩みが遅くなった理由が自分の想像していた通りだという思いをますます強くし、皐月は満足げな声で確認するように言った。
「……違う。白いおしっこじゃない。……白いおしっこじゃない方のおしっこが出ちゃいそうなの。だから、そんなとこ押しちゃやだってば……」

皐月の手は、体をくねらせ、どこか甘えるようにそう言う葉月の膀胱のあたりをショーツの上から押さえつけていた。ただでさえ尿意の高まりを覚えて足の運びが滞りがちになっていた葉月だから、そんなところを力まかせに押されたりしたらどうなってしまうかしれたものではない。

「そうなんだ。葉月ちゃん、おしっこを我慢してたんだ。でも、そうだよね。着慣れないノースリーブのお洋服で冷房の利く所にずっといたんだもん、体が冷えておしっこが近くなっちゃっても変じゃないよね。でも、どうして黙っていたの？　もう出ちゃいそうになるまで、どうしてお姉ちゃまに教えなかったの？　教えてくれたらすぐにトイレへ連れて行ってあげたのに」

それまで言い澱んでいた葉月が自ら「おしっこ」という言葉を口にしたことに皐月は思わずほくそ笑み、意地悪な質問を重ねた。

「だって……だって、恥ずかしかったんだもん」

葉月はようやくのこと皐月の手を振りほどき、再び麦わら帽のつばで顔を隠すようにして視線を落とした。

「恥ずかしい？　トイレへ行くのが？　どうして恥ずかしいの？」

葉月の胸の内を充分に承知していながら、皐月は矢継ぎ早に質問を投げかける。

「だって……初めて会った水無月おばあちゃまもいるのに、おしっこに行きたいだなんて、そんなの……」

そうしている間にも次第に高まってくる尿意に耐えるためただろう、葉月は左右の内腿をもじもじと擦り合わせながら、うなじまで赤くしてぽつりと言った。

「ふぅん。水無月さんがいる所でおしっこを教えるのが恥ずかしかったんだ。そっか、そうだよね、初めて会った人の前でトイレへ連れて行ってほしいだなんて恥ずかしくて言えないよね。特に葉月ちゃんみたいな可愛い子は、大声でおしっこだなんて言って、はしたない子だって思われたらどうしようかって心配しちゃうよね」

皐月は納得したような表情を浮かべてわざと大げさな仕草で同意してみせたが、すぐに、どことなく疑わしそうな顔つきになって尚も問い詰めた。

「でも、それだけかな？　おしっこをしたいってお姉ちゃまに教えなかったの、水無月さんに知られるのが恥ずかしかったからっていう理由だけだったのかな？　――この水族館の展示棟、あまり大きな建物じゃないくせに、狭い敷地にいろんな展示品を詰め込もうとしたせいで、ちょっとした迷路みたいになっちゃってるのよね。しかも展示品は年々増えているから、一応の案内板はあるんだけど、初めて来た人にはわかりづらいんじゃないかな。お姉ちゃま、通路のあちこちに立っている案内板を葉月ちゃんがじっと見てたの、気がついてたんだよ。特に、トイレの場所を描いた案内板なんて、まるで睨みつけるみたいにして真剣な目つきで見てたよね。でもって、案内板が指し示す方にちらちら目を向けて、なのに、その方向にお目当てのトイレが見あたらなくてがっかりしてたのよね？　でも、それも仕方ないんだ。いつのまにか迷路みたいになっちゃった展示棟だから、案内板が指し示す場所まで行って、そこからちょっと壁をまわりこむみたいにしないとお目当ての場所へ行けないんだから。うん、そう。初めて来た人は慣れた人に案内してもらわないとトイレへ行くのも難しいんだよ。――もういちどだけ訊くけど、葉月ちゃんがおしっこを教えなかった理由、本当に、水無月さんに知られるのが恥ずかしかったからってだけだったのかな？」

本当の理由を教えないと、ややこしい場所にあるトイレへ連れて行ってあげないわよ。もう我慢もぎりぎりの状態で、迷路みたいなこの展示棟のトイレに自分だけで行けるのかな？
皐月の言葉の最後の方は、明らかにそんなふうに脅していた。
「……あ、あのね……」
葉月は、心の奥底まで見透かしてしまいそうな皐月の鋭い眼光を浴びてぴくりと頬をこわばらせ、胸の内に隠し抱いていた本当の理由を口にするしかない状況にいつしか自分が追い込まれていることを痛いほど思い知らされた。
「……葉月、恥ずかしかったの。トイレへ行ってパンツを脱がなきゃいけないんだと思うと、それがとっても恥ずかしかったの。脱いだパンツ、おしっこをしてる間、膝のところまで下げてなきゃいけないでしょ。それがとっても恥ずかしいの。おしっこをしてる間ずっとパンツが見えてて、それが葉月の穿いてるパンツだって改めて実感しなきゃいけないのが恥ずかしかったの。だから……」
「だから、トイレへ行くのが辛くて、お姉ちゃまにもおしっこを教えなかったわけね。自分が女の子パンツを穿いてること、そして、女の子パンツの内側にナプキンを着けてることを改めて思い知らされるのが恥ずかしくて、それに、そんな本当の理由を自分自身で認めるのが辛くて、それで水無月さんに知られるのが恥ずかしいっていうもっともらしい言い訳で自分をごまかして」
皐月は、少し呆れたような表情と、やっぱりねとでも言いたげな表情とがない交ぜになった顔つきで言葉を継いだ。
「……ごめんね、お姉ちゃま。ごめんなさい、水無月のおばあちゃま。本当はみんな葉月自身のことなのに、おばあちゃまのせいにして。こんなこと、もう二度としない。しないから許して」
皐月の言葉を認め、再び許しを請う葉月だったが、それこそもう本当に限界が近いのだろう、両手で下腹部を押さえんばかりにしている。
つばの広い麦わら帽子を目深にかぶり、ポシェットの肩紐を斜めがけしたサンドレスとキャミの重ね着姿の少女がもじもじと内腿を擦り合わせ、両手を下腹部の前で組んでいる様子を見て、それが実は十八歳の男子大学生だと見抜く者など一人もいるわけがない。

「いいわよ、わかった。葉月ちゃんがちゃんと話してくれたから、今回は許してあげる。でも、もう一つ、お姉ちゃまにおねだりしなきゃいけないことがあるよね？　葉月ちゃのこと許してあげるから、ちゃんとおねだりしてごらんなさい。でないと、間に合わなくなっちゃうんじゃないのかな？」
皐月は、それこそ本当の幼児さながら尿意に耐えるために今にも地団駄を踏みそうにしている葉月の姿に胸の中でほくそ笑みながら、言葉だけは優しく応じた。
皐月が自分に何を言わせようとしているのか、もちろん、葉月にもわかっている。わかっているのだが、それはあまりにも羞恥に満ちた『おねだり』だった。
けれど、
「どうしたの？　間に合わなかったら、もっと恥ずかしい目に遭うことになるのよ」
という皐月の言葉通り、いくら踏ん張ってもどうにもできなくなってきているのは紛れもない事実だった。しかも、皐月は追い討ちをかけるように

「遠足で保育園の子供たちを連れて来てあげると、何度か来たことがあっても、トイレへの道順を間違っちゃう子が必ず何人かはいるのよね。こっちが気づいて大急ぎで連れて行ってあげられればいいんだけど、子供っていうのは遊びに夢中で本当のぎりぎりになるまでトイレへ行こうとしないから、途中で迷っちゃうと私たちがいる場所へ戻ってくる余裕もない場合が殆どで、結局、トイレの近くまで行ってながら、しくじっちゃうことが珍しくないの。だから、遠足の時は絶対に替えのパンツを持たせてくれるよう連絡帳に書いてお母様方にお願いしてるんだけど――あ、そうだった。葉月ちゃんにも替えのパンツを持たせてあげてたんだっけ。そうだよね、肩にかけてるポシェットに新しいパンツとナプキンを入れといたげたから、もしも間に合わなかったとしても大丈夫なんだっけ」

とも言って、なかなか『おねだり』をしようとしない葉月をどんどん追い詰めてゆく。

「……お姉ちゃま……」

下腹部を両手で押さえて何度か浅い呼吸を繰り返し、おずおずと皐月の顔を見上げた葉月が、ようようのこと決心を固めたのか、こわばった表情で弱々しい声を絞り出した。

「葉月をトイレへ連れて行って。葉月、もう我慢できないの。だけど、どうやってトイレへ行ったらいいかわからなくて……だから、連れて行って。おしっこが出ちゃう前にトイレへ連れて行って、お願い、お姉ちゃま」

自分では何もできない幼い妹さながらトイレへ連れて行ってくれるよう実の姉にせがまざるを得ない、それはどれほど羞恥に満ちた『おねだり』だろう。けれど、今の葉月には、そうするしかなかった。

「お願い、お姉ちゃま。もう出そうなの。葉月、おしっこ出ちゃいそうなの。だから、早くってば、お姉ちゃま」

一度おねだりの言葉を口にするとそれまでの緊張の糸がぷっつり切れてしまったのか、尿意が急に高まってきた。しかも、踵の高いサンダルを履かされているため体のバランスを崩しやすく、倒れまいとするたび下腹部に余計な力が入って、今にもしくじってしまいそうになる。

「うん、わかった。そうやってちゃんと事情を話してお願いしてくれたら、いつでも葉月ちゃんのおねだりをきいてあげる。ふぅん、葉月ちゃん、トイレへ連れて行ってほしいんだ。でも、そうだよね。葉月ちゃん、年少さんだもん、まだ一人じゃトイレへ行けないもん、誰かに連れて行ってもらわなきゃいけないよね。だったら、すぐにお姉ちゃまが連れて行ってあげる。――だから、一つ約束してちょうだい。明日から通う保育園でも、おしっこをしたくなったら、誰かにお願いしてトイレへ連れて行ってもらうようにしなきゃ駄目よ。まだ年少さんの葉月ちゃんが勝手にトイレへ行って便器にお尻をぶつけちゃったりドアが開かなくなってトイレの中に閉じ込められちゃったりしたら大変だから、保育園でも一人でトイレに行っちゃ駄目。葉月ちゃんの受け持ちは遠藤先生だから、おしっこしたくなったら遠藤先生にお願いして連れて行ってもらうのよ。もしも遠藤先生がいなかったり忙しそうだったりしたら、誰か近くにいる他の先生にお願いしなさい。でもって、他の先生方が誰も近くにいないみたいだったら、年長さんのお兄ちゃんかお姉ちゃんにお願いするといいわ。ひばり保育園の子供はみんな面倒見がいいから、葉月ちゃんがきちんと『葉月、一人でトイレへ行けないから、連れて行ってちょうだい』ってお願いすれば優しく手を引いて連れて行ってくれるからね。約束できるよね。葉月ちゃん、まだ年少さんだけど聞き分けのいいお利口さんだも

ん、こんな簡単なこと、ちゃんと約束できるよね？　約束できたら、お姉ちゃまがすぐにトイレへ連れて行ってあげる」
でも、もしも約束できないようだったらトイレへ連れて行っていげないわよ。皐月がそう仄めかしているのは明白だった。
「そんな……」
自分よりも一回り以上も年下の保育園児に手を引かれてトイレへ連れて行ってもらう自分の惨めな姿が脳裏をよぎり、一瞬、とめどなく高まってくる尿意のことさえ忘れて葉月は言葉を失った。
けれど皐月は容赦しない。
「どうするの？」
決して荒々しくはない冷ややかで短い言葉が却って重々しく葉月に決断を強いる。
「……約束する。葉月、保育園に通うようになったら勝手にトイレへ行ったりしない。遠藤先生にお願いして連れて行ってもらう。遠藤先生がいなかったら、他の先生にお願いする」
迷っている時間など一刻もなかった。葉月には、唇を噛みしめ、肩を震わせてそう応えるしかなかった。
そこへ、嵩にかかって皐月が重ねて問いかける。
「他の先生方もいない時はどうするんだったかな？」
「……年長さんの……お、お兄ちゃんかお姉ちゃんにお願いして連れて行ってもらう。葉月、年少さんだから、年上の年長さんにおねだりしてトイレに連れて行ってもらう」
唇を「へ」の字に曲げてそう約束する葉月は、限りなく高まる尿意のためだけでなく今にも泣き出しそうな顔をしていた。

【四】

通路の途中にあるベンチで待つことにした水無月と別れ、皐月に手をつないでもらい、おぼつかない足取りでやっとのことトイレに辿り着いた時には、もういつしくじってしまってもおかしくないほどになっていた。
「さ、着いた。よく我慢できたわね。年中さんや年長さんでも失敗しちゃう子がいるのに、年少さんの葉月ちゃんが我慢できたなんて本当にお利口さんだこと。保育園に通うようになっても、こんなふうにお利口さんにして、誰かにおねだりしてトイレへ連れて行ってもらうのよ」
トイレの入り口で、皐月は、保育園で勝手にトイレへ行かないよう改めて葉月に釘を刺してから手を離した。
弱々しく頷き、少しでも余計な力を入れたらすぐにでも失敗してしまいそうになるのをかろうじて堪えつつトイレの入り口に足を踏み入れた葉月だが、つい、いつもの癖で男性用トイレがある方に向かってしまう。
「ちょっと、葉月ちゃん、そっちは……」
慌てて呼び止める皐月だったが、葉月がふらふらと男性用トイレに入ってしまうと、さす

がにそこから先は追いかけられない。

限界ぎりぎりの尿意のせいで呼び止める皐月の声も耳に届かず男性用トイレに入った葉月は、壁に沿って並ぶ朝顔型便器の前に立ち、いつも通りジーパンのファスナーを開けるつもりで自分の下腹部に手を伸ばしたところで、指先に触れるのが穿き慣れたデニムの感触とはまるで違うふわったしたサマードレスの素材なのに気がついて、はっと我に返った。

直後、慌てて周囲を見回し、自分以外に誰もいないことを確認して、思わず安堵の溜息を漏らす。

その後、葉月は男性用トイレの様子を改めておそるおそる見渡し、三つ並んでいる個室の方も、使用中か未使用かを示すためにドアに設けられた小窓が『空き』を示す青色の表示ばかりなのに気がついて、思わずそちらの方に駆け出しそうになった。

が、そこへ、小さな男の子を連れた若い父親らしき男性が入ってきて、小花をあしらった麦わら帽子にサンドレスといういでたちの、どう見ても小学生の女の子にしか思えない葉月の存在に一瞬ぎょっとした顔になった。父親は自分が間違って女性用トイレに入ってしまったと思ったのか、慌てて踵を返しかけたのだが、壁際に朝顔型便器が並んでいるのを見て、ようやくのこと、自分の間違いではないことを確認すると、そのすぐ後、どことなく遠慮がちな様子で葉月に話しかけた。

「よっぽど慌てていたのかもしれないけど、ここは男の人のトイレだから、お嬢ちゃんみたいな可愛い女の子が入ってきちゃいけないね。あ、ううん、お嬢ちゃんみたいな子が男の人のトイレで何か悪いことをするわけがないよ。それはよくわかってるさ。でも、お嬢ちゃんみたいな可愛い子がいると、男の人の方が逆に恥ずかしくなっちゃってちゃんと用を足せないんだ。だから、ね？　それに、たぶん、お嬢ちゃんのお姉さんなんじゃないのかな、入り口の所で心配そうな顔でこっちを見ている女の人がいたんだけど、たぶん、間違って男の人のトイレに入っちゃったお嬢ちゃんのことを心配しているんだと思うよ。ほら、おじさんがお手々を引いてあげるから、さ、お姉さんの所に戻ろうね」

見るからに人の好さそうな若い父親は優しくそう言い聞かせると、右手で自分の息子の手を引いたまま、空いている方の左手で、男性用トイレの中ほどに立ちすくむ葉月の手をそっと握って歩き出した。

父親の手を振り払うこともできず、尿意を堪えながらとぼとぼ歩き出す葉月。そんな葉月の顔を見上げて、少し前を歩く父親の体を挟むようにして葉月と並んで歩く小さな男の子がにっと笑った。まるで邪気のない、文字通り天使のような笑顔だ。それはひょっとしたら、葉月のことを（体こそ大きいものの）自分と同じくらいの年代の新しい友達ができたと思って、その喜びを表している笑顔かもしれない。いや、男の子だけではなく、父親もまた、葉月のことを自分の小さな息子と同じくらい手のかかる幼い女の子そのままに扱っているのは明かだった。そうでなければ、わざわざ葉月の手を引いて皐月のもとに送り届けるという手間のかかることなどするわけがない。そう思うと、隣を歩く男の子の笑顔に、葉月の胸は激しい屈辱と羞恥とに張り裂けそうになるのだった。

「まぁ、わざわざすみません。この子ったら、もういつ失敗してしまうかもしれないくらいおしっこを我慢していて、それで慌ててトイレに駆け込んだものですから、男性用と女性用

との確認もしないまま入ってしまって。本当にお世話をかけて申し訳ありません」
共用入り口で様子を窺っていた皐月は、若い父親に手を引かれて男性用トイレから出てきた葉月の姿を見るなり、手首をつかんで自分の近くに引き寄せ、深々と頭を下げて礼を言うと、右手で葉月の頭を押し下げさせながら強い調子で命じた。
「ほら、葉月もちゃんとお礼を言いなさい。もう五年生なんだから、どう言えばいいかくらいわかるでしょ？　だから、ほら」
「……あ、あの……ありがとうございました、……おじちゃま。……間違って男の人のトイレへ入っちゃった葉月をお姉ちゃまのところに連れて来てくれてありがとうございました。葉月、もう五年生なのに恥ずかしい失敗をしちゃったけど、これからは気をつけます。でも、みつけてくれたのが……お、おじちゃまみたいな優しい人で嬉しかったです。おじちゃま、本当にありがとうございました」
皐月に命じられるままお礼の言葉を口にする葉月。決して滑らかな口調ではなく言葉が途切れがちなのが、いかにも小学生の女の子が自分の知っているまだ数少ない語彙の中から言葉を探しているようで初々しく可憐だ。　だが、それは、葉月が自らの意志で発しているのではなく、葉月の頭を右手で押し下げさせると共に耳元に口を寄せて小声で囁きかける皐月が口移しで言わせている偽りのお礼の言葉だった。でなければ、実は男子大学生の葉月がまだ三十歳にもなっていないだろう若い父親のことを『おじちゃま』などと呼ぶわけがない。
しかし、そのことに父親はまるで気づいていない。葉月の途切れがちの言葉を訝しむどころか、相好を崩して
「あ、いいんだよ、そんな、お礼だなんて堅苦しいことをしなくても。それに、お嬢ちゃんみたいな可愛い子から『おじちゃま』なんて呼ばれると照れちゃうし。でも、女の子もいいもんだね。今は息子しかいないけど、お嬢ちゃん、ええと、お名前は葉月ちゃんっていうんだっけ、葉月ちゃんみたいな可愛い子を見てると、女の子も欲しくなってきちゃったよ。息子も葉月ちゃんみたいな妹ができたら喜ぶだろうしね。――あ、でも、本当にこれからは気をつけるんだよ。世の中には悪いヤツもいるんだから、葉月ちゃんみたいな可愛い女の子が男の人用のトイレなんかに入っちゃったら何をされるかわからないこともあるんだよ。そんなことになったら、間違っちゃったなんて言ってるだけじゃすまないんだからね」
と照れくさそうに、そして最後の方は少しばかり説教口調で言って手を振るばかりだった。

＊

「やれやれ、あんたのことをすっかり気に入っちゃったみたいね、あの若いパパさん。ひょっとしたら、ロリコンの気があるんじゃないかしら。『世の中には悪いヤツもいる』なんて言ってたけど、実は自分のその一人だったりして」
親子連れが男性用トイレに戻り、二人の姿が見えなくなると、皐月が声をひそめて悪戯っぽい口調で言った。
「駄目だよ、お姉ちゃま、そんなこと言っちゃ。親切で葉月のことをここまで連れて来てくれたのに」
一方、葉月の方は、姿が見えなくなったとはいえ、コンクリートの壁に反響して皐月の声が父親の耳に届いてしまうのではないかと冷や冷やだ。

が、それに対して皐月は尚も冗談めかした口調で
「へーえ。あんたがお姉ちゃまに逆らうなんて珍しいこともあるじゃない。どういう風の吹き回しかしら。ひょっとして、間違って入っちゃった男性用トイレでどうしていいかわかんなくておろおろしてるところを助けてもらって、素敵なおじちゃまにめろめろになっちゃったとか？　でも、それもいいんじゃない？　あんたみたいな可憐な美少女に好意を寄せられたりしたら、ロリっ気のあるおじちゃまとしちゃ絶対に放っとけないと思うわよ。それにしても、女の子になってまだ半日も経ってないのに、早速おじちゃまを虜にしちゃうなんて、そのままロリっ子アイドルになれちゃうんじゃないの、あんたって。いいじゃん、おじちゃまキラーとしてデビューしちゃいなよ」
と冷やかすことをやめない。
「そんな……」
皐月にからかわれて葉月はどう応じていいかわからず口をつぐんでしまう。
すると、皐月が今度は真面目な顔になって
「だけど、間違って男性用トイレへ入っちゃうところを見ると、まだまだ女の子としての自覚が足りないって言われても仕方ないわね。ちょっと踵の高いサンダルを履いただけで歩き方がぎこちなくなっちゃっうし、もっともっと女の子修行が必要みたいね。いいわ、葉月ちゃんがちゃんと女の子らしくできるよう、お姉ちゃまが徹底的につきあってあげる。先ず、手始めはトイレからよ。さっきは一人でトイレへ行かせたから男の人用の方に行っちゃったけど、もう間違えないよう、今度は最後までお姉ちゃまが面倒みてあげる。さ、おいで」
と有無を言わさぬ強い口調で言い、葉月の手首をつかんでさっさと歩き出した。
もちろん、向かう先は女性用のトイレだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ、お姉ちゃま。そんなに早く歩いちゃやだ。もっとゆっくり歩いてよ」
足早にずんずん歩いて行く皐月に引きずられるようにして後を追う葉月が、体のバランスを崩して倒れそうになり、そのたびに粗相してしまいそうになるのを必死の思いで耐えながら、悲鳴じみた声で懇願した。
「ん？　どうして、急いじゃいけないの？　葉月ちゃん、もうすぐにでもおしっこが出ちゃいそうなんでしょ？　だったら少しでも急がなきゃいけないじゃない」
皐月にしてみれば葉月の心情などすっかりお見通しだ。けれど、歩速を緩める気配はまるでみせない。
「で、でも、速すぎるよ。葉月、そんなに速く歩けないよ。そんなに急いで歩いたりしたら、葉月、葉月……」
皐月の手を振りほどこうとして両脚を突っ張ったりしたら余計な力が下腹部にかかって却ってしくじってしまうことは明かだ。葉月は、足早の皐月に付き従うしかなかった。
「だから、急いで歩いたらどうなっちゃうの？　きちんとお姉ちゃまに説明してごらんなさい」
「こ、このままじゃ、葉月……お、おもらししちゃうよぉ。トイレへ行く前におしっこが出ちゃうよぉ。小っちゃい子みたいにおもらししちゃうから、もっとゆっくり歩いてよ、お姉ちゃまってば」

もうとてもではないが我慢できそうにない。思いあまって葉月は金切り声をあげた。
が、じきに、自分が口にした『おもらし』という言葉に耳たぶの先まで真っ赤にして口をつぐんでしまう。
「あらあら、そっか、葉月ちゃん、あまり早く歩くと『おもらし』しちゃうんだ。でも、そうだよね。葉月ちゃん、体はおっきいけど、年少さんだもん、すぐに『おもらし』しちゃうのよね。ごめんごめん、お姉ちゃま、もっと気をつけてあげなきゃいけなかったわね」
それまで葉月のことなんてまるでお構いなしに早足で歩みを進めていた皐月だが、悲鳴じみた金切り声にちらりと後ろを振り向き、葉月が顔を真っ赤に染めて唇を震わせている様子を目にすると、くすくす笑いながら『おもらし』という言葉を繰り返し言って、ようやく歩く速度を緩めた。
けれど、皐月が歩速を緩めたのは葉月のことを慮ってのことなどではなく、単に、幾つも並ぶ女性用トイレの個室の内、皐月が目指していた一番奥の個室が目の前に迫っていたからだった。
一応、説明しておくと、皐月が葉月をわざわざトイレの一番奥まで連れて行ったのは、少しでも長く葉月を歩かせて尿意に耐える様子を楽しむためと、葉月が勝手に女性用トイレから逃げ出さないようにするためなのは言うまでもない。

【五】

「さ、ここよ。ちゃんと連れて来てあげたから、今度こそ間違わずにここでおしっこするのよ。いろいろあったけど、今までちゃんと我慢できてお利口さんだったわね」
おもむろに足を止めた皐月は目の前の扉を手前に引き開け、ぴかぴかに磨きあげられた見るからに清潔そうな和式の便器を指差した。
やっとの思いで辿り着いたトイレ。そこは女性用の個室なのだが、もうなりふりを構ってなどいられない。葉月はトイレの個室に飛び込むと同時に、扉の取手をつかんで内側に引いた。
しかし、個室の扉はびくりとも動かない。
はっとしてこちらに振り向いた葉月の目に映ったのは、扉を外側に向かって引っ張っている皐月の姿だった。
「な、何してるの、お姉ちゃま？　そんなことしたら扉を閉められないじゃない!?」
一瞬きょとんとした顔つきになった葉月だが、じきに明かな狼狽の表情を浮かべると、普段からは想像もできない、まるでなじるような鋭い声を皐月にぶつけた。
しかし、皐月の方は落ち着き払った様子で
「いいのよ、扉なんて閉められなくても。葉月ちゃんが上手におしっこできるかどうか見ていてあげなきゃいけないから、扉を閉めちゃ駄目なの」
と言って、ますます大きく扉を引き開けてしまう。
「だって、見えちゃう。扉を開けたままだったら見えちゃうよ」
葉月は悲痛な表情でそう叫び、再び扉の取手を内側に引いた。

しかし、二人の体力の差が歴然な上、体に余分な力を入れたが最後すぐにでもしくじってしまいそうになる葉月だから、扉を引っ張る力もたかがしれている。
「見えちゃう？　何が見えちゃうのかな？」
葉月が閉めようとする扉を片手で悠々と開け放しにしたまま、葉月はからかうように尋ねた。
「それは……」
葉月が「見えちゃう」と言ったのは、自分のおしっこ姿も勿論だが、それよりも、和式の便器にしゃがんでおしっこをするとなるとどうしてもお尻を上げり気味にせざるを得ないから、両脚の間に接着剤で固定されているペニスが丸見えになってしまうのではないかと、それを心配してのことだった。けれど、そんなこと、とてもではないが口に出しては言えない。
「大丈夫よ、他のトイレはどれも『空き』になっているから、今は誰もいないわ。それに、今から誰かが入ってきたとしたらお姉ちゃまがすぐに扉を閉めてあげる。だから、おちんちんを誰かに見られちゃうかもって心配なんてしなくていいの。それに、うちの保育園に通ってる子でも、年少さんだとおしっこ姿を誰かに見られても恥ずかしがらない子が多いのよ。さすがに年中さんとか年長さんになるとそうもいかないけど、小っちゃい子はまだ恥ずかしいっていう感覚を持ってない場合もあるし、一人でトイレに入って扉を閉めると狭い所に閉じ込められちゃったような気持ちになるみたいで、扉を開けたまま外で見ててねってお願いする子も珍しくないのよ。葉月ちゃんも年少さんなんだから、本当は扉を閉められちゃうのが怖いんじゃないかな。本当は、おしっこをするところ、お姉ちゃまに見ていてもらいたいんじゃないのかな？」
顔を真っ赤にして口ごもる葉月の様子を目にした皐月はますますからかい気味に言い、今度こそ扉を最後まで引き開けてしまった。
そうなると、個室の中からでは扉の取手に指が届かない。

「……こっち見ちゃやだよ……」
とうとう観念せざるを得ないところまで追い詰められた葉月は、扉を閉めることを渋々諦め、その代わりにとでもいうように、皐月に向かって目をそらしていてくれるよう哀願するしかなかった。
だが、葉月にとっては最後の一線とも言えるその懇願をも皐月はあっさり拒絶してしまう。
「そのお願いはきけないわね。何度も言うけど、葉月ちゃんが上手におしっこできるかどうかきちんと見ていてあげなきゃいけないもの。さ、他の年少さんのお友達と同じくらいちゃんとできるかな。上手にできるところ、お姉ちゃまに見せてちょうだいね」
皐月はこともなげにそう言うと、わざとらしく大げさな仕草で葉月に向かってじっと目を凝らした。
葉月はもういちどだけ扉の取手と皐月の顔とに絶望的な視線を交互に向けた後、すっと息を吸い込んでから、のろのろと脚を動かして純白の便器を跨いだ。清楚な少女そのままの可憐な顔つきと、見るからに痛々しい表情との対比が皐月の妖しい加虐的な悦びを煽ってやまない。
白い便器を跨いだ葉月は再び浅く息を吸ってから、自分の手でおずおずとスカートを捲り上げ、ハローキティのショーツに指をかける。

「パンツ、自分で脱げるかな？　もしも駄目だったら脱ぎ脱ぎさせてあげるから、ちゃんとお姉ちゃまにお願いするのよ。葉月、自分でパンツ脱げないから、お姉ちゃま脱ぎ脱ぎさせてっておねだりすればいいんだから」

踵の高いサンダルを履かされて足首を小刻みに震わせながら僅かに膝を折り、前屈みの姿勢になって、ウエストの部分を丸めるようにしてゆっくりショーツをおろしてゆく葉月。実の弟の倒錯的なその姿に、皐月の胸が妖しくざわめいた。

やがてショーツを膝のすぐ上まで引きおろした葉月は、長い睫を震わせながら更に膝を折り、ショーツのおろし具合を確認するためだろう、自分の下腹部にちらりと目をやった。いつもなら（といっても、おしっこの時は立って済ませるから、大きい方の時に限った話だが）無造作にジーパンとトランクスをまとめて足首のあたりまで引きおろすところだけれど、ついさっきまで自分の下腹部を包み込んでいた女児用のショーツを正視するのに耐えられず、膝の上まで引きおろすのが精一杯だった。それでも、スカートの裾の少し先にコットンのショーツは確かに見えているし、クロッチ部分に留めたナプキンの存在を無視することもできはしなかった。

ナプキンの内側に我慢汁の小さなシミがうっすらと付いているのを目にした葉月は慌てて顔をそむけ、個室の壁を睨みつけるようにしてそろりと腰をおろした。当然といえば当然のことだが、皐月の方に視線を向けるようなそぶりは微塵もみせない。

「そうそう、お上手よ、葉月ちゃん。そのまま、ころんしないよう気をつけて」

深く膝を折り、おそるおそる前屈みになって幾らかお尻を浮かせ加減の姿勢をとった葉月に向かって、個室のすぐ外から皐月が声をかけた。それこそ、ようやくのこと自分でパンツを脱いで便器を跨いでしゃがむことができるようになった年少クラスの園児を励ます時の口調そのままだ。

けれど葉月は皐月の励ましなどまるで耳に届いていないかのように無視を決め込んだまま、おしっこがあらぬ方向に飛んでトイレの床を汚してしまうのを防ぐためなのか、そうすることが便器の上にしゃがんだ時の癖になっているようで、ごく自然に、右手を股間に伸ばしてペニスをそっと下向きに押さえる仕草をみせた。

しかし、伸ばした右手は虚しく空を切るばかりだ。葉月は反射的にもういちど股間をまさぐったが、そこにあるべき物はやはりない。頭ではわかっているつもりだったし、下腹部に覚える皮膚の微妙なひきつり感からも、便器にしゃがんだ時にはいつもそこに垂れ下がっている筈の物が今は目に見える所にはないことは実感されていたのに、ついそうしてしまう自分の癖がどうしようもなく惨めに思えて仕方ない。

「いいわよ、もう出しちゃっても。ずっと我慢してきたけど、もう出しちゃっていいのよ。あとは、パンツを汚さないよう上手にできるかどうかだけど、葉月ちゃん、年少さんだもん、上手にできなくても、お姉ちゃま叱らないから心配しなくていいのよ。だから、ほら」

小さな子供を甘やかすような口調でそう言う皐月の声が随分と近くから聞こえてきた。

それまでその存在を無視しようと努めていた葉月だったが、声のあまりの近さにはっとして顔を上げると、いつの間に個室の中まで入ってきていたのか、軽く膝を折り、折った膝の上に両手をついた姿勢で僅かに前屈みになってこちらの様子を覗き込んでいる皐月の姿が自分のすぐ後ろにあった。

「どうしたの？　もう出しちゃってもいいのに、なかなか出ないのかな？」

皐月は、葉月のお尻の膨らみを斜め上から見おろしながら、なにやら含むところのありそうな口調で言った。

「……」

それに対して葉月は口をつぐんだままだ。けれど、その様子が、却って皐月の指摘が図星だと告げている。

水族館の入園ゲートをくぐった時から感じ始め、着慣れない袖無しの子供服と冷房のせいでますます強くなってきて、展示棟の通路の半ばではもう堪えきれないほどに強くなってきた尿意。トイレに入ってからも男性用トイレから女性用トイレへと連れ戻される間に、もうどうしていいかわからないほど、我慢の限界は目の前に迫っていた。なのに、ショーツを引きおろすのももどかしく便器にしゃがみこんでみれば、あまりの尿意の高まりのために下腹部はじんじんと痛いほどのくせして、おしっこが溢れ出す気配はまるでなかった。

もっとも、それも仕方のないことかもしれない。小さい頃からの、おしっこは朝顔型の便器に向かって立ってするものだという習慣がすっかり体にしみついてしまっている上、僅かな風にさえふわりとそよいで腿のあたりを撫でまわすサンドレスの感触に倒錯的で淫靡なくすぐったさを覚えるのに加えて、自分の膝のあたりに目をやればコットンの女児用ショーツと、男性の身には本来ならまるで必要ではない筈のナプキンが見えている。しかも、体のバランスを崩しそうになりながらかろうじて跨いでしゃがみこんでいる純白の便器にはうっすらと自分の股間が映っているし、それだけではなく、その便器があるのは、ドアが大きく開け放たれた女性用トイレの個室の中という状況だ。そんな中、そうおいそれとおしっこが出てくるわけもない。

かといって、いつまでもそうしていられる筈もない。穿き慣れない踵の高いサンダルのせいで足首といわずふくわはぎといわず、もう随分と痛みに耐え続けていて、いつトイレの床にへたりこんでしまってもおかしくない状態だし、ドアを外側に開けたまま丸見えのお尻をさらして便器にしゃがみ続ける姿に、屈辱と羞恥はもう耐え難いほどに強まってじりじりと葉月の胸を焼いていた。なのに、ショーツを引き上げ、個室から出ることもかなわない。そんなことをすれば、膝を伸ばして立ち上がり、ショーツを引き上げた途端に恥ずかしい粗相

をしてしまうだろうという予感が惨めなくらい明瞭に感じられてならなかった。
「いいわよ、心配しなくても。出ないんだったら、出るようにしてあげる」
「え……？」
思ってもいなかった皐月の言葉に、葉月は困惑の声を漏らすだけだ。
だが、皐月はこともなげに
「保育園でもいるのよ。特に、初めて保育園のトイレを使う年少さんに多いんだけど、おしっこがしたくてトイレに入ったのに、なかなか出ない子が。男の子は何人も並んで立ったまますることに慣れているから問題ないんだけど、それまでお家のトイレしか使ったことのない女の子の場合、初めての保育園のトイレっていう緊張感がある上、ドアや壁越しに他の子供たちの声が聞こえてきて、なんだか自分がおしっこをする様子をどこかで見られてるんじゃないかって不安になっちゃうことがあってね、なかなか出ないことがあるのよ。だけど、そういう子の場合、おしっこをするのを諦めてパンツを上げてトイレから出ても、きちんと済ませていないものだから、当た前のことだけど、すぐにまたおしっこをしたくなって、でも、つい今しがたトイレでできなかったっていう思いが胸に残っているから、トイレへ戻るのをいやがって、それで、結局しくじっちゃうことになるの。一度そんなふうに失敗しちゃうと、今度はおしっこをしたくなるともうどうしていいかわからなくてパニック状態を引き起こしちゃうのよ。だから、そうならないよう、先生方はそれとなく気配を察して、そんなことになりそうな子には最初の何度かは一緒にトイレへ行っておしっこがちゃんとできるように手伝ってあげるの。――そう、ちょうど、今の葉月ちゃんみたいな子の場合はね」
と言ってくすっと笑い、葉月の反応を楽しむかのようにわざとゆっくりした動作で自分のポーチに手を入れると、ポケットティッシュを取り出して、これみよがしに葉月の目の前で二度三度と振ってみせるのだった。
だが、皐月が何をしようとしているのか、葉月には予想もつかない。
便器にしゃがみ首だけをめぐらせてこちらの様子を窺っている葉月の当惑の顔つきがよほどおかしいのか、皐月はもういちどくすっと笑ってから、ポケットティッシュを一枚さっと

引き抜くと、それを両手の指で手早く捻って細いコヨリに仕上げた。
そうして、そのコヨリをそっと自分の唇に近づける。
「あ……」
ティッシュで仕上げたコヨリが簡単にばらけないようその先端を口にふくんで唾で湿らせる皐月の姿を見て、ようやく葉月は、自分の背後に立っている姉が何を企んでいるのかを理解した。

「んっふふ、お姉ちゃまが何をしようとしているのかわかったみたいね。やっぱり葉月ちゃんはお利口さんだわ。お利口さんのご褒美に、ちゃんとおしっこを出させてあげるね」
葉月の顔に怯えの色が浮かぶのを見て取った皐月は、対照的に満面の笑みを浮かべると、葉月にぴったりと体を寄り添わせるようにして膝を折り、自分の舌で湿らせたばかりのコヨリの先を葉月の脚の付け根よりも少しお尻側のあたりにそっと押し立てた。
「やだ。そんなことしちゃやだってば、お姉ちゃま」
ペニスの先に触れる湿ったコヨリの感触にぶるっと身震いしながら、葉月は弱々しくも甲高い金切り声をあげた。
「やだ、じゃないわよ。あんたも初等教育の免許を取る時には保育実習だって経験するんでしょ？　その時、ひょっとしたら、こんなこともしなきゃいけなくなるかもしれないじゃない。それを前もって、それも、される方の立場で経験させてもらえるんだから感謝してほしいくらいなのに、『そんなことしちゃやだ』って、なにフヌケたこと言ってんの」
皐月は優しい『お姉ちゃま』ではなく厳しい『姉さん』に戻って葉月のお尻を軽くぴしゃりと叩いてそう言い、改めて立場を面倒見のいい『お姉ちゃま』に変えると、
「ほら、しー来い、しー来い。葉月ちゃんのおしっこさん、恥ずかしがってないで出ておいで。いつまでも恥ずかしがってるとくすくっちゃうぞ、ほら、おいで」
と妙な鼻歌みたいなメロディを付けて言いながら、手にしたコヨリを、葉月のペニスの先に開いている縦の割れ目の真ん中にすっと突き立てた。
「ひゃん！」
葉月の口からまるで言葉にならない喘ぎ声とも悲鳴ともつかない声が漏れ出て、お尻がぴくんと浮いた。
「なんて声を出すのよ、葉月ちゃんてば。あまり大きな声を出したりしたら、何があったのかと思って誰か駆け込んでくるかもよ。ま、お姉ちゃまはそれでもいいけどね。お外のトイレに慣れていない妹におしっこをさせてあげてるだけですって説明すればいいんだし。でも、あ、そうか。葉月ちゃんにとってもその方がいいかもね。だって、よその人に見てもらいながらおしっこをするお稽古をしておけば、保育園で初めてのトイレを使わなきゃいけなくなった時に少しでも早く恥ずかしさに慣れることができるもん。そうね、それがいいわね。だったら、遠慮しないで声を出していいわよ。ほら、可愛い声で啼いてごらん」
葉月の悲鳴にまるで手を緩める気配などなく、むしろ、ペニスの先の割れ目に押し立てたコヨリを尚もぐりぐりと捻り込みながら、皐月はねっとりと絡みつくように言った。
「ん……」
足首の痛みにもう立ち上がることもかなわず、ペニスの先をコヨリでいじくられて、いよいよおしっこが溢れ出しそうになり、葉月は首をのけぞらせ、恨みがましい目で皐月の顔を

睨みつけるばかりだ。けれど、その瞳が潤んでいるのは、決して悔し涙のせいばかりではない。

「もうそろそろいいかしらね」

葉月の下腹部がぶるんと震えるのを見た皐月は、もう頃合いだと判断し、ペニスの先に押し当てていたコヨリをすっと離した。

「ぁ……！」

なんとも表現しようのない喘ぎ声が葉月の口から漏れると同時にペニスの先がぐじっと濡れたかと思うと、生温かい雫がすっと浮き出て後ろの方に流れ出し、気がつけば、ひとまとまりの滴りになって溢れ出し始める。

けれど、それはいつものおしっこの出方とはまるで違っていた。男性の場合、トイレで大の方の用足しをする際に小の方も一緒に出してしまう者が多い。葉月もそうだから一日に一度は便器にしゃがんでおしっこを出す習慣が身についているのだが、その時のおしっこの出方と、今こうして女性用トイレの便器にしゃがんでするおしっこの出方とがまるで違っているのだ。言うまでもなく、それは、園長が葉月に施したタックのせいだった。ペニスを両側の間で後ろ向けに折り曲げられて皮膚を接着剤で固定されてしまっているために、普段なら斜め前方下向けにほとばしりでるおしっこが、今はお尻の方に向かって、それも、尿道が不自然な形に折り曲げられ細くなっているものだから、勢いよく流れ出るのではなく、じわじわといった感じで溢れ出すのだった。

「や……」

再び弱々しい喘ぎ声が葉月の口を衝いて出た。

ペニスから溢れ出たおしっこの内の幾らかが下腹部の皮膚を伝い滴り流れて自分の肛門の周囲をじわっと濡らす、そんな、これまで味わったことのない惨めな感触に思わず身悶えしてしまう。

「わかった？　女の子はね、おしっこをすると、そんなふうに後ろの方から濡れるのよ」

皐月は、自分の眼下で便器にしゃがんで腰から下を小刻みに震わせている葉月に向かって笑い声で言った。

「ま、とはいっても、本当の女の子だって、そんなふうに辺り構わずって感じにおしっこが飛び散るわけじゃないけどね。男の子ほどじゃないにしても、ちゃんと条になって一定の方向に向かって溢れ出るから、お尻のまわりをびしょびしょにしちゃうなんてことはないし。でも、葉月ちゃんはまだ年少さんで、やっと一人でトイレを使えるようになったばかりの小っちゃな子だから、おしっこの仕方が上手じゃなくても仕方ないよね。お外のトイレに慣れてなくて、コヨリできゅってしてあげないとおしっこが出始めないくらい小っちゃな子だもん、どんなふうにすれば上手におしっこできるか、これからゆっくりお姉ちゃまが教えてあげる。なんたって葉月ちゃんは、男の子としては十八年間も生きてきたけど、女の子としては生まれたての赤ちゃんと同じなんだもの」

そんな皐月の一言一言が、両脚の付け根からお尻の穴にかけてのあたりを自分のおしっこで濡らし続ける葉月の胸に鋭く突き刺さる。

立ってする時は無論のこと、しゃがんでする時でもペニスに手を添えて方向を調整し、便器の縁を汚したこともなかった葉月。男の子は誰でもそんなものなのかもしれないが、小さ

い頃は、そうやっておしっこの向きを自在に操れることがちょっとした自慢で、珍しく大雪が降った時などは皐月の目の前でわざわざズボンとパンツをおろして純白の雪におしっこで悪戯描きをしてみせたこともある。それが、今は、園長の手で折り曲げられたペニスの先からおしっこを後ろ向けにじくじくと溢れさせ、為す術なく自分のお尻のまわりを濡らしてしまっているのだ。皐月の言う通り、男の子のおしっこの仕方では決してないどころか、ちょっと大きくなった女の子でさえそんなみっともないことはしないに違いない。たしかに、まだやっとのこと一人でトイレへ行けるようになったばかりの幼い女の子おしっこの仕方だと決めつけられても仕方ところだ。やっとのこと膀胱の堰の緊張を解くことができた妙に甘美な悦びと、自分のお尻を自分のおしっこで汚す屈辱の感触とに、葉月の下腹部が熱く火照る。

やがて、ペニスからじくじく溢れ出るおしっこがお股間の皮膚に伝い広がり、それが幾つもの雫に合わさりあって、お尻の真下にある便器に滴り落ち始めた。

ぴちゃん。

ぴちゃん、ぴちゃん。

便器の中に浅く残っている水の上におしっこの雫が続けざまに滴り落ち、扉を開け放った個室の中に恥ずかしい音が響き渡る。

葉月はぎゅっと瞼を閉じ、お尻のまわりの惨めな感触と、両耳を打つ屈辱の響きに耐えるしかなかった。

けれど、突然。

「え……!?」

生温かい液体の雫が内腿の皮膚を伝い落ちる感触に、葉月の唇がぴくんと震えて両目が大きく見開かれた。

それまで瞼を閉じたり壁を睨みつけたりして自分の下腹部を直視しようとしなかった葉月だが、思ってもみなかった感触に、思わずスカートの裾をつかんで捲り上げ、焦点の定まらない視線をおそるおそる向けてしまう。

きょときょと揺れる大きな瞳に、膝頭の上まで引き下ろしたショーツと、内腿の皮膚をお尻の方から伝い落ちて来る幾つもの雫が映った。

本当の女の子なら、いくら男の子に比べておしっこの向きを自由にできにくいとはいっても、お尻のまわりをびしょびしょにしてしまうことはない。けれど葉月は、その見た目とは裏腹に、まがいもの女の子でしかない。だから、本当の女の子よりも尚のこと、おしっこをあたりに飛び散らかしてしまい、その上、お尻のまわりを濡らしてしまったおしっこの大半は便器の中に滴り落ちるにしても、残りの幾らは皮膚に沿って股間から内腿へと伝い流れて来てしまうのだ。伝い流れて来たおしっこの雫は、膝のすぐ上の所にひっかかっているショーツの股ぐりの部分に触れ、吸水性のいい生地にじわっと吸い取られてゆく。

「……」

腿のあたりに比べれば膝のすぐ上は脚が細い。それでも、放っておけばショーツがくしゅくしゅになってしまうくらいに張りのあるゴムが縫い込んであるから、細い部分とはいえ、幾らかは股ぐりの生地が皮膚に食い込むような感じになっている。そこへ、ゴムを縫い込んだ周囲の布地がおしっこでじとっと湿るものだから、ゴムが食い込んだ皮膚のまわりが心なしむず痒くなってきて仕方ない。

今や葉月は、思う存分おしっこを迸らせる快感を奪われ、自分の意志でというよりもどちらかというと思わぬ粗相めいてじくじくと溢れさせたおしっこで自らの肛門のまわりを濡らした上に、便器の中に落ちることなく皮膚を伝い流れてきた生温かい雫で女児用ショーツの股繰りの布地を濡らしてしまうという、幾重もの屈辱に身悶えしながらも、いったん溢れ出したおしこっこを止めることもかなわず、ただ己の惨めさをこれでもかと思い知らされながら、いつ終わるともしれない恥ずかしい液体の流れに身を任すしかない無力な存在になり果てていた。

【六】

「出ちゃったみたいね。我慢して我慢してやっとだったもの、気持ちよかったでしょ？」
葉月の腰が最後に大きくぶるんと震えるのを見て、いたわるように皐月は言った。
けれど、それに対して葉月は無言だ。
そんな葉月のかたわらに皐月は再びすっとしゃがみ、手早くトイレットペーパーをちぎり取って、それを手渡しながら言った。
「おしっこの後、男の子はおちんちんを振るだけでいいけど、女の子はそうはいかないのよ。ま、言わなくてもわかってるでしょうけど、お尻のまわりをびしょびしょにしたままパンツを穿こうだなんて、女の子になったばかりの葉月ちゃんでも思わないよね？」
トイレットペーパーが手に触れた瞬間、びくんと肩を震わせ、そのまま立ち上がりそうになった葉月だが、皐月に言われ、改めて自分のお尻から股間にかけてのあたりから伝わってくる感触に気づくと、僅かに顔を歪めて便器の上にしゃがみ直すしかなかった。
「男の子だと、おちんちんの先に付いてるおしっこを振って落とせばそれでおしまいだけど、女の子は、ちゃんとトイレットペーパーで拭いて綺麗にしなきゃいけないの。あ、でも、拭くっていっても、力任せにごしごし拭いたりしたら大事なところに傷がついちゃうかもしれないから、慣れないうちは、拭くんじゃなくって、優しくぽんぽん叩くようにするといいわ。ほら、こんな感じで」
皐月は、トイレットペーパーをもう一枚ちぎり取って丁寧に四つ折りにし、それを今度は自分が持って、便器の上にしゃがんでいる葉月の脚の付け根のあたりにさっと手を伸ばした。
皐月が手を伸ばした向こうには葉月のペニスの先端があった。コヨリを突き立てた時には僅かながら縦の割れ目が見えていたのに、惨めな姿でおしっこを強要された屈辱のせいで、今は元の皮かぶりに戻ってしまい、貧相にすぼんだ皮膚の先におしっこの小さな雫が付着しているだけの、日ごろ保育園で面倒を見ている男の子たちのと見紛わんばかりの可愛らしいペニスだ。
皐月は、先ずペニスの先にトイレットペーパーをそっと押し当て、自分で言った通り優しく二度ぽんぽんと叩くようにしてから、
「それと、トイレットペーパーは絶対に前から後ろへ動かさなきゃ駄目よ。うんちをした後、最初にお尻を拭いて、それでトイレットペーパーを前に動かしたりしたら、うんちが女の子の大事なとこに付いて、それが原因で恥ずかしい病気になっちゃうこともあるんだからね。

そんなことにならないよう、トイレットペーパーを動かす時は前から後ろへっていう癖をつけとくこと。わかったわね？」
と最後の方は少しきつい調子で言って、トイレットペーパーを持つ手をゆっくりお尻の方に動かした。
小さい頃は、忙しい両親の代わりに六つ年上の皐月に面倒をみてもらっていた葉月。もちろん、おしっこをしくじってしまった時の処置も例外ではなかった。その時の記憶がおぼろげながら蘇ってきて、余計に惨めになる。しかも今は、当時のまだ物心つかぬ幼い子供などではない上に、女の子としておしっこの後の面倒をみてもらっているのだ。
「どうしたの？　お利口さんの葉月ちゃんにはちっとも難しくない筈よ？　それとも、年少さんの葉月ちゃんには難しいことだから、お家のトイレや保育園のトイレでも、お姉ちゃまがお世話してあげなきゃいけないのかな？　だったら、いいわよ、それでも。どうせ、おしっこが出るようにコヨリでこちょこちょしてあげなきゃいけないんだから、おしまいまで一緒にいてちゃんとしてあげる。まだ自分じゃ何もできない小っちゃな可愛い妹のお世話だもん、お姉ちゃま、ちっとも苦にならないんだから」
唇を噛みしめるばかりで一向に手を動かそうとしない葉月の耳元に、皐月はわざとらしい優しげな声で囁きかけた。
それが、私の命令に従わないようならこれから先も自由にトイレを使わせないわよと脅しているのは明かだ。
そこまで言われては、葉月としてもいつまでも愚図愚図してはいられない。それに、このままお尻を濡らしたままでは立ち上がることもできず、いつ何時、誰の目に自分の惨めな姿をさらす羽目になるともしれないのだ。
葉月は一度だけすっと息を吸い込んで、トイレットペーパーを渡された右手をのろのろと動かし始めた。
最初は、皐月の指示通り、トイレットペーパーをペニスの先にそっと押し当て、おそるおそるといった感じでぽんぽんと叩き、それから、ゆっくり後ろの方に動かす。
「そうそう、お上手よ、葉月ちゃん。お尻をびしょびしょにしちゃったから最初はどうなる

か心配したけど、後片付けはちゃんとできそうだから安心だわ。これなら、保育園のトイレで、何度か、おしっこが出るようにこちょこちょしてあげれば、あとは一人でなんとかできそうね」

葉月がぎこちない手つきでおしっこの後の措置をする様子をしげしげと眺めながら、皐月は、まるで、年少クラスの園児が初めて自分の手でパンツを引きおろすところからトイレットペーパーで綺麗に拭き清めるところまでできるようになった場面に立ち会ったかのように大げさに褒めそやした。

しかし、これで全てがおしまいになる由もない。

「え……？」

どこか呆然としたような弱々しい声が葉月の口から漏れたのは、慣れない手つきでやっとのことお尻のまわりを拭き清め、足首が痛むのを我慢してのろのろと立ち上がって両手でショーツを引き上げた直後のことだった。

「どうしたの？　何か困ったことになったのかな、葉月ちゃん？」

ショーツを引き上げた両手をぶるぶる震わせて大きな瞳に絶望の色を浮かべる葉月に向かって、いかにも気遣わしげな様子で皐月が声をかけた。けれど、この時、葉月の身に何が起こったのか、皐月にはすっかりお見通しだった。

「ん？　……ううん」

皐月に声をかけられた葉月は最初、心ここにあらずといった風情で頷きかけたが、不意にはっとしたような顔つきになって、慌てて首を横に振った。それは、まるで、なにやら粗相をしでかしながらもそれを保育士に気取られまいとして咄嗟にごまかす園児さながらの仕草だった。

「ううんじゃないでしょ？　なんでもないんだったら、どうしてパンツをちゃんと穿いちゃわないの？」

葉月が幼児めいた仕草をみせるのに合わせてか、皐月の方は、まずいことをごまかそうと

する園児をたしなめる時そのまま、優しく、それでいて言い逃れを許さない厳しさを含んだ口調で問い詰める。
皐月の言う通り、葉月がのろのろ引き上げたショーツは完全に下腹部を覆い隠してはいなかった。ショーツを最後まできちんと引き上げて下腹部を包み隠そうとしたのだが、もうちょっというところで、なぜか呆然とした表情を浮かべ、手を止めてしまったのだ。
「どうしたの？　どうして、パンツを最後まで穿かないの？」
後ろめたげな表情で視線を落とす葉月に向かって、皐月は重ねて問い質した。
だが、それでも、葉月のからの返答はない。
「ナプキン、汚しちゃったんでしょ？」
不意に皐月が表情を緩め、短く言った。
「……！」
葉月が大きく両目を見開き、唇を半開きにして皐月の顔を見返した。
「わかるわよ、そんなことくらい」
驚きの表情を浮かべる葉月とは対照的に、皐月の方は澄ましたものだ。
「園長先生のお部屋と、葉月ちゃんの新しいお部屋とで、葉月ちゃんは合わせて二度も白いおしっこでナプキンを汚しちゃったよね？　その時と同じように、葉月ちゃんはみんな出しきっちゃったと思っていたかもしれないけど、おしっこがおちんちんの中にまだ残っていて、お腹に力を入れたり脚を動かしたりした拍子に、こぼれてきちゃうんじゃないかなって予想するのは簡単なことよ」
皐月の言う通りだった。
お尻のまわりについたおしっこの雫をトイレットペーパーで拭き取った葉月は、丸裸の下腹部を少しでも早く隠そうとして無我夢中で立ち上がり、じっとり濡れた股ぐりが太腿にいやらしく絡みつくのも構わず、両手でショーツを引き上げた。けれど、ショーツの内側に貼り付けたナプキンがペニスの先に触れるか触れないかというところで、両脚の間がじくっと湿る感触を覚えた。一瞬なにが起きたのかわからなかった葉月だったが、その直後、園長室とマンションの新しい部屋での痴態が脳裏に蘇ってきて、両脚の付け根に感じるのが、尿道に残っていたおしっこがペニスの先から溢れ出し、ショーツの内側に装着したナプキンを濡らした結果だという恥ずかしい事実を理解せざるを得なかった。
「ほら、お返事はどうしたの？　お姉ちゃまは葉月ちゃんに『ナプキンを汚しちゃったんでしょ？』って訊いたのよ。そうなら、そう。違うなら、違う。どっちにしても、ちゃんとお返事しなきゃいけないわね」
何があったのかすっかりお見通しのくせして、皐月は葉月を問い詰める。
「……」
だが、葉月はショーツをそのまま最後まで引き上げることもできず、かといって再び引き下げることもできずに、ただおどおどと皐月の顔を見上げるばかりだ。
「ちゃんとお返事しなきゃ駄目でしょ、葉月ちゃん。お姉ちゃま、葉月ちゃんがパンツを汚しちゃったことを叱っているんじゃないのよ。葉月ちゃんはまだ年少さんで、しかも女の子になったばかりなんだから、パンツを汚しちゃうのは仕方ない。それはお姉ちゃま、よぉくわかってる。でも、パンツを汚しちゃったら汚しちゃったで、ちゃんと教えなきゃ駄目じゃない。葉月ちゃん、明日から保育園に行くんでしょ？　保育園でトイレが間に合わなくてお

もらししちゃって、それでパンツを汚しちゃったら、どうするつもりなの？　葉月ちゃんがおもらしでパンツを汚しちゃったこと、先生が誰も気づかなかったら、ずっと濡れたパンツのままになっちゃうのよ。そんなことになったら、せっかくのすべすべのお肌が真っ赤に腫れちゃうじゃない？　それに、ずっと濡れたパンツのままお友達と遊んでたりしたら、遊んでる間におしっこの雫が幾つも落ちてきちゃうんじゃないかな。そしたら、葉月ちゃんがおもらししちゃったってお友達に囃したてられちゃうのよ。そんな恥ずかしい目に遭うのはいやだよね？　だから、パンツを汚しちゃったら、どうしたのってお姉ちゃまや先生たちが訊く前に、自分でちゃんと教えなきゃいけないの」

皐月は、園児に接する時そのまま噛んでふくめるように言って、やおら、ショーツと葉月のお尻との間に右手を差し入れた。

「ひゃ！」

思いがけない皐月の行動に、葉月は思わず甲高い悲鳴をあげてびくんと体をのけぞらせてしまう。

「じっとしてなさい。どれくらい濡れているか調べてあげるんだから」

身をくねらせる葉月の肩を左手で押さえつけながら、皐月は右手をショーツの中に尚も深く差し入れた。

しばらくの間ショーツの中をもぞもぞと這い回っていた皐月の手が、やがてペニスの先に届いたかと思うと、そのまますっと下におり、ペニスと軽く触れ合っているナプキンの内側を何度か軽く撫でた。

その後、皐月の右手はクロッチ部分から離れ、太腿に軽く食い込んでいるゴムの周囲をなぞるようにして股ぐりの様子を探り始める。

皐月がショーツとナプキンの濡れ具合を調べている間、葉月は、体を焼き尽くす業火のような羞恥に耐えるしかなかった。物心つく前の幼児ならともかく、もうすぐ十九歳、更に一年経てば成人するという身で、それこそ、まだおしっこを教えられない小さな子供そのまま、パンツをどれほど濡らしてしまったか実の姉の手で調べられているのだ。それも、男物のブリーフやトランクスなどではない、可愛いアニメキャラのバックプリントをあしらい、その上、クロッチの部分にナプキンを固定した女児用のショーツなのだから、それがどれほどの羞恥なのかは想像もつかない。

「やれやれ、思っていた以上にびしょびしょね。これじゃ、とてもじゃないけどこのまま穿かせてなんかいられないわ」

とても短い時間で済んだような気もするし、ひどく長い時間が過ぎたような気もする。いつのまにかショーツから右手を引き抜いていた皐月の声にはっとして葉月は我に返った。と同時に、皐月が口にした『このまま穿かせてなんか』という言葉が何度も頭の中にこだまする。

「あ、あのね……お姉ちゃま……」

皐月の言葉に嫌な予感を覚え、葉月はショーツのウエストゴムに指をかけたまま、いかにも不安げな表情でおずおずと話しかけた。

「ん？　どうしたの、なんだかとっても心配そうな顔をしてるけど？」

葉月が不安にかられているのが自分の発した言葉のせいだということはわかっているくせ

に、皐月は、わざと不思議そうな顔をして聞き返した。
そうして、これもまたわざとらしく何かに気がついたように大げさな仕草でぽんと手を打って頷いてみせる。
「あ、替えのパンツのことを心配してるのかな。そうよね、股ぐりのところもナプキンも思った以上にびしょびしょになっちゃってお尻が気持ち悪いから新しいパンツに穿き替えたいよね。心配しなくても大丈夫よ。だって、ほら、お家を出る前に念のためにと思ってお姉ちゃまがポシェットに入れておいてあげたのがあるじゃない。お姉ちゃまがタンスから新しいショーツを出してポシェットに入れるとこ、葉月ちゃんも見てたでしょ？」
あっけらかんとした顔でそういう皐月の言葉は、ある意味、葉月の予想通りだった。どうか、そんなことになりませんように。お願いだから、とんでもないことを言い出しませんように。そんなことになりそうだなと直感しつつ、けれど心の中でそれが自分の思い過ごしでありますようにと天にもすがるような思いで葉月が祈った予感。
そう。皐月は葉月に、女性用トイレでおしっこをさせるだけでは飽き足らず、おしっこでショーツとナプキンを汚したことを口実に、ショーツを穿き替えさせようとしているのだ。しかも、おそらく、どこかちゃんとした更衣室などではなく、いつ誰が入ってくるかもしれない、ここ、この場で。
「や……やだ。そんなの、絶対やだ！」
葉月の悲痛な叫び声がコンクリートの壁に反響する。
「やだじゃないでしょ？　お姉ちゃま、さっき言った筈よ。濡れたパンツのままだとおしっこの雫が伝い落ちて、それをみつかったりしたら葉月ちゃんが余計に恥ずかしい思いをするのよって。それでもいいの？」
感情にまかせて叫ぶ葉月とは対照的に、皐月はつとめて冷静な声で応じた。そんな二人の様子は、六つ違いの姉弟というよりも、しっかり者の保育士と駄々をこねてやまない園児といった間柄の方が確かにふさわしく思える。
「それは……」
皐月に諭され、思わず葉月は口をつぐんでしまった。
けれど、すぐに、もうこれが最後の頼みの綱とでもいうような形相で尚も食いさがる。
「じゃ……じゃ、せめて、どこか人目のつかない所で穿き替えさせてよ。こんな、いつ人が来るかわからないトイレの中なんかじゃない所で」
「ああ、それは、葉月ちゃんがその方がいいって言うんだったら、お姉ちゃまもそれでいいわよ」
皐月から予想外の言葉が返ってきた。
「ほ、本当？　本当に、どこか別の場所で穿き替えていいの？」
思いがけない返答に葉月の顔がぱっと輝いた。
ショーツを穿き替える場所が女性用トイレではなくなったというだけで喜色満面の葉月だが、十八歳の男子大学生がキャミソールとサンドレスを着せられ、その下にはハローキティのバックプリントが愛くるしい女児用ショーツを穿かされているわけだから、皐月の目には、その喜びようが滑稽に映る。
「いいわよ、本当に」
皐月は意味ありげな笑みを浮かべてわざとらしく大きく頷いてみせてから、念を押すよう

に続けた。
「でも、本当に葉月ちゃんもそれでいいのね？　今パンツの中に留めてるナプキン、もしもの時のために持ち歩いている非常用のサイズだから、吸水量はあまりないのよ。それに、パンツの股ぐりのところもだいぶ濡れちゃってるから、トイレを出てどこかパンツを穿き替えられるような所まで歩いている間に、パンツやナプキンが吸い取ったおしっこが沁み出てきちゃうんじゃないかな。そしたら、おしっこの雫をぽたぽた落としながら歩くことになるわよね。今日は夏休みで日曜日だから、普段よりもずっとお客様が多いのよ。その中でも、特に子供たちが多いんだけど、子供って大人より視線が低いから、葉月ちゃんがおしっこの雫を滴らせながら歩いてたらすぐに気がつくでしょうね。それに、子供って遠慮がないから、そんな葉月ちゃんのこと、指を差して大声で笑ったりお友達に教えたりするに決まってるよね。――もういちど訊くけど、本当に葉月ちゃん、それでいいのね？」
「あ……」
僅かに首をかしげてそう言う皐月に、葉月は二の句を告げられなかった。
小さめのサイズとはいってもそれなりの吸水性はあるし、いったん吸い取ったた経血（この場合はおしっこだが）は高分子材料でゼリー状に固めてしまうから、ナプキンからおしっこが沁み出すことはあり得ない。それに、ショーツにしても、よほどのことがない限り、いちど吸収した水分が雫になって滴り落ちるなどということはない。皐月には充分すぎるほどわかっている事実だが、初めて身に着ける女児用ショーツの素材がどれほどおしっこを吸い取ってくれるものなのか、まさか自分がお世話になるなんて思ってもみなかった生理用ナプキンがどんな仕組みになっているものなのか知っているわけのない葉月にしてみれば、皐月の言葉が全てだった。
「どうするの？」
皐月は、これ以上はないくらい優しい声で、もういちど訊いた。
「……ここ……」
葉月には、蚊の鳴くような声でそう応えるのが精一杯だった。
「ここだけじゃわからないでしょ？　ううん、お姉ちゃまは葉月ちゃんが『ここ』って言うだけで、どうしてほしいかわかるわよ。なんたって、これまでずっと一緒に暮らしてきて、葉月ちゃんのことならどんな小さなことでも知っているもの。でも、保育園の先生方は『ここ』って言われても、葉月ちゃんがどうしてほしいかわからないじゃない。だから、自分の気持ちをちゃんと伝えるお稽古だと思って、もういちどきちんと言ってごらんなさい。さ、どうしてほしいのかな、葉月ちゃんは？」
皐月は、優しい声はそのまま、葉月自身の言葉による返答を強い調子で求めた。
「……ここ……ここでパンツを穿き替えたいの……どこへも行かなくて、ここで……」
葉月は、ショーツのウエスト部分をつかんだままの自分の指と皐月の顔とをちらちら見比べた後、明かな諦念の色を浮かべて弱々しく言った。
「そう、ここでパンツを穿き替えさせてほしいのね、葉月ちゃんは。保育園でも、パンツを汚しちゃった時は、そんなふうにきちんと先生に教えるのよ」
葉月が口にした『穿き替えたい』という言葉をさりげなく『穿き替えさせてほしい』と言い直した皐月は、トイレットペーパーを思いきり長くちぎり取ると、それを何度か折り返し

てから個室から出たすぐの所に敷いて、
「さ、こっちへいらっしゃい」
と手招きしてみせた。
「え……？」
こともなげに手招きする皐月に対して、葉月の方は、姉の行動が何を意味しているのか咄嗟にはわからず、きょとんとした顔つきになってしまう。
「ほら、何をしているの。いつまでも濡れたパンツのままじゃお肌が荒れちゃうでしょ」
皐月は、ショーツに指をかけたままのせいで「く」の時に曲がっている葉月の肘をつかんで、通路側にぐいっと引っ張った。
「ちょっ、ちょっと待ってよ、お姉ちゃま。中で穿き替えるんじゃないの!?」
力まかせに肘を引っ張られてようやく皐月が何をしようとしているのか理解した葉月は顔色を変えて体をよじった。
「あらあら、何を言ってるの、葉月ちゃんてば。そんな狭い所で穿き替えさせてあげられるわけないじゃない。ちょっと油断したら便器の中に足を突っ込んじゃうかもしれないんだから、ほら、出てらっしゃい」
皐月は呆れたように言って、葉月の肘をますます強く引っ張った。
皐月の言う通り、小さな子供のパンツを穿き替えさせるくらいのことならできるかもしれないトイレの個室だが、大人が二人も入れば窮屈で仕方ない。しかも、履き慣れないサンダルのせいで足取りのおぼつかない葉月に片方ずつ足を上げさせようとしたら、容易に体のバランスを崩してしまうだろう。それは葉月にもわかる。わかるのだが……。
「でも、でも……通路でパンツを穿き替えてる途中に人が入ってきたらどうするの？　中だったら扉を閉めて隠れられるけど、通路でだなんて……」
葉月の不安はもっともだ。通路でパンツを穿き替えている最中に誰か人が入ってきたりしたら、身を隠すこと術など一切ない。
「その時はその時よ。それとも、倒れそうになって、便器に溜まっている自分のおしっこで足を濡らしちゃっても平気なのかな、葉月ちゃんは？　ああ、そうか。自分のおしっこでお尻のまわりをびしょびしょにしちゃって、内腿をおしっこが伝い落ちてパンツを濡らしちゃっただけじゃ物足りなくて、おちんちんに残っていたおしっこでナプキンまでぐっしょり濡らしちゃった葉月ちゃんだもん、今さら足が濡れても気にならないのかな」
必死の思いで両脚を突っ張る葉月に向かって、どこか嘲るような口調で皐月は言った。
「そ、そんな……」
葉月は恨みがましい目で皐月の顔を睨みつけた。しかし、まるで迫力を感じさせない、どちらかというと拗ねたような表情なのは否めない。
「ほら、いつまでも愚図愚図してないの。さっさとこっちへいらっしゃい」
皐月は有無を言わさぬ調子で叱りつけるように言い、葉月の肘を改めて思いきり引っ張った。
ただでさえ体格と体力に差がある上、おぼつかない足取りの葉月だから、力まかせに引き寄せられてはたまらない。あっという間に、前のめりの姿勢で、たたらを踏むようにして通路に引っ張り出されてしまう。

「ほら、サンダルを脱がせてあげるから、通路に敷いたトイレットペーパーの上に立つのよ。サンダルを履いたままじゃパンツを脱いだり穿いたりできないでしょ」
個室の中から通路へ引っ張り出された後も、葉月はどうしていいかわからず、まだショーツに指をかけたままだ。皐月は呆然と立ち尽くす葉月の足元にしゃがんで甲のベルトを留めているスナップボタンを手早く外すと、足首をつかんで片方ずつサンダルを脱がせ、背中をぐいっと押して、足の裏が汚れないよう通路に敷いたトイレットペーパーの上に立たせた。
「はい、そのままじっとしているのよ。全部お姉ちゃまがやってあげるから、葉月ちゃんはおとなしくしてればいいの」
皐月は、トイレの個室から通路へ引き出され抗弁する気力さえ失って身をすくめる葉月の指をショーツから引き離すと、その代わりに自分の指を葉月の肌とショーツの間に差し入れ、ウエストの部分を外側へくるりと丸めるようにして一気に引きおろした。
尿道に残っていたおしっこはもうすっかりナプキンに吸収されてしまったようで、ペニスの先から滴り落ちる雫は一つもなかった。
「そのまま待っているのよ。すぐに新しいパンツを穿かせてあげるから」
倒れないよう壁に手をつかせ、サンダルを脱がせたのと同じ順番で葉月に足を上げさせて、足首まで引きおろしたショーツをすっかり脱がせた皐月は、個室の中に設けられた小さな棚に置いてあるポシェットを手に取って蓋を開けた。
皐月がポシェットから取り出したのは、やはりハローキティのイラストなのだが、たった今脱がせたばかりのショーツがハローキティの顔だけなのに対して、今度のはピンクの全身像のバックプリントをあしらった真新しいショーツだった。
皐月は、ポシェットから取り出したばかりのショーツをひらひらと葉月の目の前で振ってみせてから、脱がせた時の順番通りに足を上げさせ、膝のすぐ上までするりと引き上げた。
そこでいったん手を止めたのは、ポシェットから新しいナプキンを取り出すためだ。
が、ショーツの内側にナプキンをセットしようとする皐月を、葉月が今にも消え入りそうな声で制止する。
「あ、あのね、お姉ちゃま……ナ、ナプキンはもういいよ。葉月、ナプキンがなくても大丈夫だから」
その言葉に、ナプキンを持った手を止め、腰をかがめた姿勢で皐月は葉月の顔を斜め下から見上げた。
「ナプキンは要らないって、白いおしっこと普通のおしっこで汚しちゃったくせに何を言ってるのよ葉月ちゃんてば。ちゃんとしとかないと、パンツを汚しちゃうくせに」
「だ、だって……」
「ま、気持ちはわかるけどね。生まれてからずっと女の子してた私でも、小学校四年生の時だったかな、あれが始まっちゃって、母さんからナプキンとあれ用のショーツを渡された時はとっても恥ずかしかったもん。今日から大人なんだっていう照れくささもあったけど、それよりなにより、とにかく恥ずかしかったっけ。女の子を十年間もやってきた上に前もってそれなりの知識も持っていた私があんなに恥ずかしかったんだから、急に女の子になって何の知識も心構えも持っていない葉月ちゃんにしてみたら、そりゃ、恥ずかしくて仕方ないよね。それはわかる。わかるけど、恥ずかしさを我慢してちゃんとしとかないと、パンツを汚してもっと恥ずかしい目に遭うのも葉月ちゃんなのよ」

「あ、ううん……は、恥ずかしいってのもある。それもあるんだけど……」
「それもあるんだけどって、じゃ、それ以外の理由もあるわけ？　何よ、言ってごらんなさい。恥ずかしいからっていう以外の理由を」
ナプキンを拒む理由を言いかけたものの気後れしたように途中で口をつぐむ葉月に対して、好奇の色を満面にたたえたて皐月が言った。
「……む、蒸れちゃうの。蒸れて、ちょっぴり痒くなっちゃうから、だから……」
一瞬言い澱んだ葉月だが、すぐに意を決したようにぶるんと首を振ると、右手をぎゅっと拳に握って、か細い声で応えた。
「蒸れちゃう？　ああ、そういうことか。たしかに蒸れちゃうよね。特に葉月ちゃんの場合は蒸れやすいよね」
葉月の返答に、皐月はいかにもおかしそうにくすくす笑いながら、『蒸れる』という言葉を何度も繰り返した。
女の子の格好をさせられるまで、葉月の下着はトランクスだった。同じ男物の下着の中でもブリーフより風通しのいいトランクスに慣れ親しんできた葉月が、太腿とウエストをゴムでぴっちり締め付けられる女児用ショーツを穿かされたのだから、それだけでも窮屈で通気性がよくないのに、その上、生理用のナプキンで局部を覆い包まれてしまうのだから、ただでさえうだるような真夏の午後、たまったものではない。しかも、ナプキンの内側は汗でじっとり湿ってくるのではなく、ペニスに残っていた精液やおしっこで肌に触れた瞬間からぐすぐずに濡れてしまうのだから、時間をかけて慣れることもかなわないのだ。
「わ、笑わないでよ。笑ってないで、『ナプキンはもう無しにしましょう』って言ってよ、お願いだから、お姉ちゃま」
皐月のくすくす笑いに顔を真っ赤にしながらも、葉月はすがるようにして訴えかけた。
しかし、皐月の返答はあっさりしたものだった。
「駄目よ。蒸れるのは仕方ないから、慣れるまで我慢なさい」
皐月はこともなげに葉月の訴えを却下した後、替えのショーツに改めて新しいナプキンをセットしながらこう付け加えた。
「それに、これくらいで『蒸れちゃうよ、痒いよ』なんて弱音を吐いてちゃ先が続かないわよ。そのうち、もっと蒸れ蒸れになっちゃうかもしれないんだから」
「え……？　ど、どういうことなの、それって!?」
ぎょっとしたような顔つきになって葉月が聞き咎める。
が、皐月は曖昧な笑みを浮かべて悪戯っぽく
「うふふ。今はまだヒ・ミ・ツ。楽しみに待っているといいわ」
と言うばかりで、自分が今しがた口にした言葉がどういう意味を持っているのか、葉月に説明しようとはしなかった。
「そんな……教えてよ、どういうことなの、お姉ちゃま。あ……！」
皐月の真意を図りかねて、もちろん葉月は説明を求めるのだが、その時、トイレの入り口に人影が立つのが見えて、思わず両手で口を覆ってしまう。
「そのうちわかるわよ。だから、そんなに急がなくていいの。さ、誰かトイレに入ってきたみたいだから、葉月ちゃんの恥ずかしいところを急いでないないしちゃおうね」
皐月は、トイレの入り口に向かってちらと視線をやり、葉月が口をつぐんだ隙に、手際よ

くナプキンをセットしたショーツをさっと引き上げた。
「……！」
おしっこをする間だけ感じずにすんでいた女児用ショーツとナプキンの妙に柔らかな肌触りに再び下腹部を包みこまれる葉月。さっきすっかりおしっこを出しきったばかりで今はまだナプキンが汗も吸っていず、その内側がさらさらなのが唯一の救いだ。

【七】

採光のために天井や壁の一部がガラス張りになっている建物の構造のせいでトイレの入り口のあたりが眩しくて、こちらに近づいてくる人影が逆光になって顔つきまではわからない。ただ、ほっそりした全身のプロポーションや太陽の光を透き通してふわっと浮かび上がる薄手の衣服のシルエットから、それがどうやら若い女性らしいということだけは見て取れる。
葉月が履いているのと同じようなサンダルなのだろう、革靴のような硬さをまるで感じさせない軽やかな足音と共に近づいてくる人影だったが、通路の一番奥にいる皐月と葉月に気がつくと、そんな所で何をしているのだろうと訝しむように立ち止まり、こちらの様子を窺って無遠慮な視線を投げかけた。
見知らぬ女性の視線を浴びて体を固くする葉月。
だが、葉月にショーツを穿かせ終えた皐月は、
「あら、あの子……」
と独り言めいた呟き声を漏らしたかと思うと、眩しさを我慢して入り口の方をじっとみつめ、やがて、トイレに入ってきた人影に向かっていかにも親しげな様子で話しかけた。
「菅原さん、菅原芽衣さんでしょ？　芽衣さんも水族館に来てたの!?」
それに対して、菅原芽衣と呼ばれた女性も、逆光の中でもそれとわかるくらいぱっと顔を輝かせて嬉しそうな声で応じた。
「あ、やっぱり御崎先生だ。そうじゃないかなと思ったんだけど、知らない女の子が一緒だし、人違いだったらどうしようと思って声をかけられなかったんです。でも、よかった、人違いじゃなくて」
いったん足を止めた人影だが、弾んだ声でそう言うと、再び歩き出し、見るからにうきうきした足取りで二人のすぐそばまでやって来た。
ここまで近づくと、眩しい入り口を背にしていても、まだ幼さの残る顔が葉月の目にくっきり映る。

「今日は卯月ちゃんと一緒に来たの？　それとも、誰かお友達と一緒？」
皐月は、顔見知りということがありありとわかるほど親しげな様子で、葉月よりも幾らか背の低い女性――いや、女性というよりも少女と呼んだ方が正確だろう――に向かって話しかけた。
「あ、クラスの友達と一緒です。夏休みの理科の宿題、共同で海辺の生物の観察をしようよってことになって。如月は、近所に住んでいる伯母の家へ遊びに行ってます」

芽衣と呼ばれた少女は、ちらちらと葉月の顔を覗いつつ、人なつっこそうな微笑みを浮かべて応えた。
芽衣の視線に気づいた皐月は、これみよがしに葉月のサンドレスの乱れを整えてから言った。
「あ、私の妹で葉月っていうの。小学校の五年生なんだけど、なかなか手のかかる子でね、いろいろ苦労しているのよ」
「あ、妹さんなんだ。私、てっきり、どこかよその子がトイレで困ってるのを御崎先生が助けてあげてるんだとばかり思ってました。だって、先生、弟さんがいるってことは何度か話してくれたけど、妹さんがいるなんて教えてくれなかったもん」
芽衣はちょっと驚いたような表情になって葉月の顔と皐月の顔を何度も見比べた後、ふっと溜息をついて言った。
「でも、そう言われると、たしかに顔がよく似てますね。いいな、御崎先生は。弟さんだけじゃなくて、こんな可愛い妹さんもいて」
「ありがとう、葉月のことを可愛い妹って褒めてくれて」
皐月はいかにも嬉しそうに芽衣に言ってから、僅かに表情を変え、意味ありげな笑みを浮かべて次は葉月に言った。
「こちらは、お姉ちゃまの保育園で預かっている菅原卯月ちゃんっていう年長さんの女の子のお姉さんで、芽衣さんよ。忙しいご両親の代わりに卯月ちゃんの送り迎えをしてくれる、とっても優しくて面倒見のいいお姉さん。卯月ちゃんを迎えに来てくれるたびにお姉ちゃまといろいろ話すようになって、今じゃ私たち、お友達みたいな関係になっているの。まだ中学一年生だけど、卯月ちゃんが入園してからずっと送り迎えをしていて、今じゃ、卯月ちゃんにとっては、お姉さんっていうより二人目のお母さんってとこかしらね。すごくしっかりしているし、卯月ちゃんが保育園でどんなふうに一日を過ごしたのかちゃんと聞いてくれるし、このぶんなら、いつでも保育園勤めができるんじゃないかなってくらいなんだから。――さ、ご挨拶なさい。それに、葉月ちゃんのこと可愛いって言ってくれたんだから、お礼も忘れずにね」
「あ、あの……」
皐月に促されても、咄嗟には言葉が出てこない。本当は自分の方がずっと年上の男子大学生なのだが、ここで正体を知られるわけにはゆかないし、正体を知られないようにするためには、芽衣は中学校一年生でそれに対して自分は小学校の五年生ということになっていて、だから……と、そんなふうに年回りや間柄を改めて思い起こさなければならないから尚更だ。
「御崎先生、妹さん――葉月ちゃんから『お姉ちゃま』って呼ばれてるんですか。先生が葉月ちゃんに話しかけている時、自分のことを『お姉ちゃま』って言ってるからそう思ったんですけど、いいなぁ、お姉ちゃまっていう響き。うちなんて生意気な妹だから、『お姉ちゃん』なんて呼ばれることも少なくて、普段は『お姉』だもん。いいな、お姉ちゃまだって」
視線を床に落として両手の指をもじもじと絡み合わせるばかりでいつまでもちゃんと挨拶をしようとしない葉月に助け船を出すつもりなのだろう、横合いから芽衣がふっと割り込んで話題を変えた。しっかり者の上に機転の利く少女だということが一目で見て取れる行動だ。
「ふぅん、そんなに羨ましいの、葉月ちゃんみたいな妹が？」
皐月は『妹』というところをわざと強調して芽衣に尋ねた。

「はい、羨ましいです。お姉ちゃまっていう甘えんぼうな響き、大好きです」
芽衣は何のてらいもなく応えて大きく頷いた。
「そうなの、そんなに羨ましいの。それじゃ――」
あまりに正直な芽衣の言いように苦笑混じりの顔つきになった皐月は、すぐに悪戯っぽい笑みを浮かべてこんなふうに続けて言った。
「うちの妹に、芽衣さんのこと、『芽衣お姉ちゃま』って呼ぶよう言いつけてあげる。芽衣さんは中一で、うちの妹は小五。実の姉妹でもおかしくない年回りだから、それでいいわよね？」
「え、本当ですか？　葉月ちゃんに私のこと『芽衣お姉ちゃま』って呼んでもらえるんですか。うわっ、やった～」
思いがけない皐月の提案に無邪気に歓声をあげる芽衣。
一方の葉月は唇を噛みしめ、救いを求めるように皐月の顔を力なく見上げるばかりだ。
だが、皐月はすがるような葉月の視線などまるで無視して
「ほら、芽衣お姉ちゃまにご挨拶なさい。もう五年生なんだから、ちゃんとご挨拶できるでしょ？」
と言って、葉月のかたわらからすっと身を退いてしまった。
サンダルを履いていれば葉月も慌てて歩を進め、皐月の体のかげに身をひそめるところだが、ショーツを穿き替えさせてもらうために素足になっているものだから、トイレットペーパーの上から通路へ足を踏み出すことが躊躇われる。
「うふふ。葉月ちゃん、とっても恥ずかしがり屋さんなのね。でも、そんなところもとっても可愛いよ。男の子だったらもっと元気な方がいいけど、女の子だもん、おとなしくて少し恥ずかしがり屋さんなくらいが丁度いいのよね」
ひとりトイレットペーパーの上に取り残されてただおろおろするばかりの葉月に向かって、身を退く皐月と入れ替わりにすっとこちらに体を寄せてきた芽衣が、面倒見の良さをいかんなく発揮して優しく言った。その口調は、葉月のことを自分よりも二つ年下の女の子だと信じて疑わない様子がありありだ。
「あ、あの……」
実のところ、葉月の方が芽衣よりも幾らか背が高い。しかし、葉月にしてみれば、自信たっぷりといった感じで眼前に立ちはだかる芽衣に気圧おされるような感じで、それこそ、中学生の姉を目の前にした保育園児になってしまったかのような思いにとらわれてならない。
「恥ずかしがり屋さんの葉月ちゃんはご挨拶が苦手なのかな。じゃ、私の方から先に自己紹介しとくわね。その後で葉月ちゃん。それでいいよね？」
葉月がなかなか口を開こうとしないのを恥ずかしがっているせいだとすっかり思い込んでしまった芽衣は、いかにも中学生のお姉さんが小学生の女の子に教え諭すふうに言って、面映ゆそうにくすっと笑った。
「じゃ、改めて――初めまして、葉月ちゃん。私は、葉月ちゃんのお姉さんの御崎先生に保育園で妹の卯月の面倒をみてもらっている菅原芽衣です。中学一年生で、誕生日は五月に済んだから、今、十三歳です。好きな教科は家庭科で、苦手な科目は数学。将来、御崎先生みたいな優しい保育士さんになりたいと思っています。だから、妹の送り迎えはちっとも苦にならないの。どっちかっていうと、御崎先生や他の先生方といろいろお話できるから、卯月

を保育園へ送って行ったり迎えに行ったりするのが楽しみです。――んーと、すっごく簡単だけど、こんなとこかな、私の自己紹介は」
「は……葉月、御崎葉月です。しょ……小学校の五年生で、まだ誕生日が来てないから、今……十歳で、その、お、お姉ちゃと一緒にマンションに住んでいます。は、葉月も幼稚園とか保育園の先生になりたくて……だから……」
だから、今、大学で初等教育を勉強しています――さすがに、それは口にできない。葉月はもともとの撫で肩をいつもよりすぼめて、それだけ言うのが精一杯だった。
そこへ、皐月の声が飛んでくる。
「それじゃ駄目でしょ？　ちゃんと『これから仲良くしてください、芽衣お姉ちゃま』って言わなきゃ」
「……あ、あの……これから、仲良くしてください、芽衣さ……芽衣お姉ちゃま。葉月、小学五年生で、まだまだ知らないことが多いからいろいろ教えてください。お願いします……芽衣お姉ちゃま」
視線を落としたまま屈辱の面持ちで途切れ途切れにそう言う葉月の体を、突然、芽衣が力まかせに抱きしめた。
「かっわいい！　なんて可愛いのかしら、葉月ちゃんてば！　そうよ、これが妹ってやつなんだわ。うちの卯月みたいな生意気な妹とは大違いの、可憐で清楚で内気で甘えんぼうの妹なんだわ！」
「あ……」
思いがけず中学一年生の少女に抱きすくめられて、それまで屈辱のあまり顔色を失っていた葉月の頬にさっと朱が差した。
「いいわよ。うんと仲良くしてあげる。葉月ちゃんにわからないことがあったらなんでも教えてあげる。困ったことがあったらどんなことでも私の相談するといいわ。なんたって、私、内気で恥ずかしがり屋さんの葉月ちゃんの新しい『お姉ちゃま』だもの」
どう対応していいかわからず両手の指先を絡める仕草を、内気な葉月が恥ずかしがっての

ことだと思い込んだ芽衣は、自分よりも幾らか背の高い新しい妹分の体をいとおしげに抱き寄せて頬擦りをした。
「や……」
小学校の時はともかく中学校に入ってからは殆ど女の子と接した経験のない葉月はひたすら戸惑うばかりだ。が、そんな葉月の反応が内気な少女の羞じらいとしか映らないのだろう、芽衣はますます強く頬を擦り合わせてやまない。

「よかったわね、芽衣お姉ちゃまに仲良くしてもらえて。これなら、これから毎日、保育園で顔を会わせた時にもいろいろと話が弾みそうね」
しばらく体を絡み合わせていた二人の耳に、横合いから皐月の声が届いた。
その時になってようやく芽衣は葉月の体から手を離し、きょとんとした顔で皐月の方に振り向く。
「あの、それって、どういうことなんですか？　葉月ちゃんと私が保育園で顔を会わせるって。私は卯月の送り迎えがあるから保育園には行くけど、葉月ちゃんは保育園に用事があるわけじゃないんでしょう？」
「そうね、普通だったら葉月には保育園へ行く用事なんてないわよね。でも、さっき自己紹介で言っていたように、葉月、芽衣さんと同じように保育士になりたがっているの。それで、小学校が夏休みの間、うちの保育園で職場体験をさせようと思って、両親と一緒に住んでいる家から私のマンションに呼び寄せたのよ。だから、当分の間は葉月、私と一緒に保育園にいることになるの」
皐月と葉月にとってはもうすっかり馴染みになってしまった偽りの説明だ。
けれど純真な芽衣は一片の疑いも持たず、皐月の説明をすっかり信じ込んでしまう。
「あ、そうなんだ。葉月ちゃん、夏休みの間、ひばり保育園で見習いの保育士さんになれるんだ。いいなぁ」
皐月の説明を聞いた芽衣は、心の底から羨ましそうに言って葉月の顔を見た。
「職場体験をする葉月のこと、そんなに羨ましい？」
しげしげと葉月の顔をみつめる芽衣に向かって、なにやら含むところのありそうな口調で皐月が声をかけた。
それに対して芽衣が
「はい」
と応えて大きく頷くと、皐月は少し前屈みになって顔の高さを合わせ、芽衣の耳元に口を寄せて、ひそひそと何やら囁きかけ始める。
皐月の囁き声は葉月の耳には届かなかった。しかし、皐月が囁きかけるのに合わせて何度もこくんと頷く芽衣の様子や、芽衣にひそひそと囁きかけながら時おりこちらに目を向ける皐月の悪戯めいた表情に、葉月の心中は穏やかではいられない。
「――ということだから、そのつもりで準備しておいてね」
ひとしきり低い声で囁いてから、最後は葉月の反応を楽しもうとでもするみたいに意味ありげにわざと大きな声で言って、皐月は芽衣の耳元から口を離した。
それに対して、芽衣の方も葉月の様子を窺うようにちらちらと視線を投げかけながら、満面の笑みをたたえて

「わかりました、先生。忘れないよう、家に帰ったら、すぐに準備しておきます」
と応じ、それに続いて
「でも、このことを知ったら卯月、びっくりするだろうなぁ。ううん、卯月だけじゃないや、パパやママもびっくりするに決まってる。んふふ、どんな顔するかな。今から楽しみだなぁ」
と独りごちるのだった。
（な、何を話してたのさ？　何を話してたのか、僕にも教えてよ）芽衣の反応になぜとはなしに嫌な予感を覚えた葉月は、皐月に向かってしきりに目で訴えかけた。
だが、皐月は悪戯めいた表情を浮かべたまま無言で首を振るばかりだ。
そこへ、いかにも嬉しそうな顔をした芽衣が割って入った。
「葉月ちゃん、今日、女の子になったばかりなんだって？　たった今、御崎先生に教えてもらったの」
葉月の視線を遮って二人の間に立った芽衣は、とんでもない言葉を口にした。

芽衣に抱きすくめられて頬をピンクに染めた葉月の顔から再び血の気が退く。
（正体がばれちゃったんだ。僕が小学五年生の女の子なんかじゃなくて男の大学生だってこと、この芽衣って子に知られちゃったんだ）咄嗟にそう思った葉月は唇をわなわなと震わせ、両手を握りしめて、次に芽衣が何を言うのかと怯えつつ、身構えるように体を固くするしかなかった。
けれど、それは葉月の思い過ごしだった。
言葉を失った葉月を気遣うように芽衣は
「パンツが血で汚れちゃったんだもん、びっくりしたでしょ？　お腹は痛くない？　でも、始まっちゃった時にお姉ちゃまが一緒にいてくれてよかったね。一人でお出かけの時に始まっちゃったりしたら、それも、初めてのことだったらどうしていいかわからないもんね。まだ慣れてないんだから、ナプキンの使い方も上手じゃないし、パンツを汚しちゃっても仕方ないよ。だから、気にしちゃ駄目だよ。これまで小っちゃい子の体だったのが、とうとう女の子の体になって、おっぱいも膨らんできて、今度は大人の女の人の体になってくんだよ。恥ずかしくて鬱陶しくてお腹も痛いかもしれないけど、大人になってく階段を昇るつもりで、堂々と胸を張らなきゃ駄目だからね」
と言い、葉月の足元に丸まっているショーツに向かって、いたわるような視線を投げかけたのだ。
どうやら芽衣は、初潮を迎えたという意味で『女の子になったばかり』と言ったらしい。
だが、正体を知られたのではないということがわかっても、それで葉月の心が鎮まるなるわけではなかった。皐月が声をひそめて芽衣の耳元に囁きかけた言葉の中に「うちの妹は今日の昼前、初めてナプキンを使ったのよ」という内容が含まれていたのだろう（もっとも、皐月が芽衣の耳元に口を寄せていた時間の長さや、芽衣が頷く回数から判断するに、皐月が芽衣に話した内容がそれだけだったとはとても思えないが）。それは決して嘘ではない。たしかに、細くなった尿道の中に残っていた精液に対処するためにナプキンを使わされたのは事実だ。けれど、見た目は小学生の女の子そのままの葉月がショーツの中に醜い肉棒を隠し持っているなどと思う筈のない芽衣にしてみれば、皐月の言葉を聞いて、葉月が今日の昼前

に初潮を迎えたのだと偽りの理解をしてしまったとしても無理からぬところだ。そうして、おそらく、トイレの通路に敷いたトイレットペーパーの上に立った葉月の足元にショーツが丸まっているのを見て、自分がトイレに入った瞬間に目にした二人の様子を考え合わせ、ナプキンに慣れていないせいで葉月が初めての経血でショーツを汚してしまい、それを皐月の手で処置してもらったと判断したのだろう。芽衣の目には、実は十八歳の男子大学生である葉月が、初めての月経に戸惑い恥ずかしそうに身をよじる無力な年下の少女として映っているに違いない。

まるで邪気のない限りなく優しい芽衣の視線に、葉月は羞恥に身を焼かれる思いだった。

「でも、パンツは穿き替えさせてもらったみたいだし、サンドレスもちゃんとしてもらったみたいだから、もう大丈夫ね。あとはサンダルを履けばおしまいかな。じゃ、サンダルは私が履かせてあげる。葉月ちゃんの新しいお姉ちゃまになった記念にね」

頼りない妹を慈しむしっかり者の姉そのまま、芽衣はいとおしげにそう言って、トイレの個室から出てすぐの所に置いてあるサンダルをさっと揃えて葉月の目の前に置いた。

「よかったじゃない、優しいお姉ちゃまができて。芽衣お姉ちゃまだったら、初めて女の子の体になった時のこと、まだよぉく憶えているでしょうから、いろいろ相談するといいわ。私はもうすっかり慣れっこになっちゃって、初めての葉月ちゃんがどんなことに困るか、適切なアドバイスができないかもしれないし。――ほら、サンダルを履かせてもらいなさい。それと、ちゃんとお礼を言うのを忘れちゃ駄目よ」

困惑の視線でこちらをみつめる葉月に向かって皐月はしれっとした顔で言い、トイレットペーパーの上に丸まっているショーツを拾い上げた。

「……あ、ありがとう……芽衣お姉ちゃま……」

怪しまれないようにしようと思えば、見た目通り小学校五年生の女の子のふりをするしかない。それはわかっているのだが、あまりの屈辱と羞恥のため、言葉が途切れ途切れになり、身のこなしがぎこちなくなって、時おり声が裏返ってしまう。

だが、皮肉なもので、そんな仕草が幼く見えるのか、却って芽衣の母性本能をくすぐり、持って生まれた保護欲を煽る結果になるのだった。

「いいって、いいって、そんな、お礼なんて言わなくても。私の方こそ、葉月ちゃんみたいな可愛い子と知り合えてとっても嬉しいんだから。――はい、これでいいわ。じゃ、甲のベルトを留めるからじってしててね」

たどたどしくさえ聞こえる葉月の言葉に満更でもなさそうな表情を浮かべながら芽衣はサンダルを履かせ、ふっと顔を上げた。

と、葉月の足元にしゃがみこんでいるものだから、ちょうど真下からスカートの中を仰ぎ見るような形になって、真新しいショーツが丸見えになってしまう。

「あはっ、可っ愛いパンツ穿いてるんだ、葉月ちゃん。やっぱ、小学生はこういうお子ちゃまパンツがお似合いだよね。さすがに中学生になると恥ずかしくて穿けなくなっちゃうから、こういうパンツ、今のうちにたくさん穿いて楽しんでおくといいよ」

芽衣は葉月の足元にしゃがみこんでいるとはいっても体の前側だから、バックプリントのハローキティまでは見えない。ただ、今度のショーツにはバックプリントだけではなく、前の方にも左上に小ぶりのハローキティがプリントしてあって、おヘソのすぐ下のあたりには飾りリボンがあしらってあるから、後ろからでも前からでも、その愛くるしいデザインがい

やでも目につくのだ。
「う……きゃっ」
芽衣にショーツを覗かれ、思わず『うわっ』と叫びそうになるのをかろうじて少女めいた『きゃっ』という悲鳴に変えて、葉月は慌ててサンドレスの裾を両手で押さえた。
「本当に葉月ちゃんたら恥ずかしがり屋さんなんだから。私が小学校の時なんて、男の子に見られた時はともかく、女の子どうしだったらパンツの見せっこなんて平気だったわよ。でも、葉月ちゃんが恥ずかしがり屋さんっていうより、今の子がみんな私たちの頃よりもオマセさんになってるのかな。オマセさんになって、大人の女の人はパンツが見えたら恥ずかしがるもんだって知ってて、それの真似っこしてるのかもしれないな」

大げさに体をよじってサンドレスの裾を押さえる葉月の行動を少し呆れたような顔で眺めながら、芽衣は誰にともなく呟いた。
「たしかに、子供たちが年々オマセさんになる傾向はあるわね。この調子だと卯月ちゃんたちが大きくなる頃にはどんな感じになるのか、ちょっぴり楽しみだけどちょっぴり怖いかなって私も思う時があるもの。ま、でも、葉月はそういうのとは違うと思うわよ。もっと単純に心の底からただただ恥ずかしがっているだけだと思うわ」
葉月にサンダルを履かせ終えて体を起こした芽衣の肩にぽんと掌を載せて、皐月が笑いを含んだ声で言った。
その笑いが何を意味しているのか、葉月には痛いほどわかっている。そりゃ、恥ずかしいよね。大学生の男の子が中学生の女の子にサンダルを履かせてもらいながらキティちゃんのお子ちゃまパンツを見られたりしたら、そりゃ恥ずかしいよね。しかも、本当はずっと年下の女の子から『オマセさん』なんて呼ばれたら、恥ずかしくて恥ずかしくてたまんないよね。
――皐月は葉月に向かって笑い声でそう囁きかけているに違いない。
そうして皐月は、葉月の羞恥を更に煽るように、こんな言葉を付け加えた。
「それと、葉月、今日の昼前からナプキンを使い始めたばかりじゃない？　あれ用のショーツだったらナプキンの羽根が外から見えないように二重のクロッチになってるけど、普通の

パンツだったら、どうしても羽根が見えちゃうのよね。それで、パンツの中にナプキンを着けてることを誰かに知られるのが恥ずかしくて仕方ないんだと思うわ。もうあと何回か使えば段々慣れてきて、お友達ともあっけらかんとした顔でどこのナプキンがいいとか、タンポンの方が使いやすいよとか情報交換し合うようになるんでしょうけど、今日のところは、ね？」

「あ、そうか。言われてみれば、そうですよね。やだ、私ったら、お姉ちゃまぶってたくせに、葉月ちゃんの気持ちに気づいてあげられなかったんだ」

最後の方は同意を求めるように言った皐月に向かって小さく頷いてみせた芽衣は、葉月の方に向き直ると、その細っこい体を再び力まかせに抱きしめた。

「ごめんね、葉月ちゃん。私、葉月ちゃんのことオマセさんなんて言っちゃって、葉月ちゃんの恥ずかしさに気づいてあげられなくて、本当にごめんね。ナプキンの着け具合、どう？　ちゃんと大事なとこに当たってる？　お腹は痛くない？　可愛いお洋服もいいけど、薄手の生地のばかり着てお腹を冷やしたりしちゃ駄目よ。とにかく、何か困ったことがあったら、どんな小さなことでも、お姉さんに相談するのよ。でもって、年の離れたお姉さんに相談しにくいことがあったら、この芽衣お姉ちゃまに相談していいからね。芽衣お姉ちゃまだったら葉月ちゃんと年が二つしか違わないから、葉月ちゃんがどんなことに困っているのか、すぐにわかってあげられるから。いいわね？　遠慮なんてしちゃ駄目よ。あとでお姉さんに私のケータイの番号を教えといてあげる。葉月ちゃん、小学生だからまだケータイなんて持ってないかもしれないけど、とにかく、困ったことがあったらお家の電話からでも公衆電話からでもいいから私にケータイしてちょうだい。いつでもすぐに相談に乗ってあげるから。いいわね、約束よ」

「い、痛いよ。そんなに力いっぱい抱かれたら痛いってば、芽衣……芽衣お姉ちゃま」

がりがりとは言わないものの決してふくよかとも呼べない芽衣の体のどこからそんな力が出てくるのか、無遠慮に抱きしめられた葉月は、思わず悲鳴をあげた。

だが、それは、決して苦痛に耐えかねての悲痛な悲鳴などではなかった。どこか甘えるような、満更でもなさそうな、だけど自分がなぜとはなしにうっとりしたような表情を浮かべているのを皐月に気取られまいとして漏らした、熱い吐息の混じった喘ぎ声じみた悲鳴だった。

「あ、ごめんね。そうだよね、葉月ちゃん、背は私より高いけど、こんなに華奢なんだもん、力いっぱい抱いたりしたら痛いよね。そんなこともわからないなんて、さっきもそうだけど、今も、ほんと、私、お姉ちゃま失格だね」

悲鳴を耳にした芽衣は、大慌てで身を捻り、葉月の体から手を離した。

と、汗混じりの芽衣の体臭がぷんと葉月の鼻をくすぐる。

汗混じりではあるけれど、育ち盛りの男の子の体臭とは違って、決して汗臭いというわけではない。乳房はまだ発育の途中だし、腰のくびれも曖昧だ。それでも、初潮を迎えて何年か経つ芽衣は、もう子供を生むことができる体の持ち主になっている。見た目は女の子と成人した女の人との境にあっても、少女や女性という区別の更に根源にある、生物としての『雌』としての存在を既に確立しているのだ。汗混じりの体臭さえ、『雄』を誘因してやまないフェロモンを含んだ蠱惑的な『匂い』（それは、心地よい『香り』などというような弱々しい響きを持つ言葉では決して表現できない、もっと荒々しいだ）そのものだった。次の

世代を担う新しい生命を生み育み、その新しい生命が危険にさらされた時には自らの命を投げ出すことさえ厭わずに危険の源に対して容赦ない闘いを挑む、神聖にして冒されざるべき性である『女性／雌』。

そんな性の発露を体中にみなぎらせ艶然と微笑む芽衣を目の前にすると、葉月は、自分がどれほど弱々しくちっぽけな存在なのかを思い知らされてならない。もともと、男性の方が女性に比べて病気や怪我に弱い。ちょっと熱が出たといっては寝込んでしまい、包丁で指先を僅かに切って少量の血が流れ出ただけで顔色を失ってしまう男性に対して、新しい生命を生み出す仕組みを体の中に備え、毎月のように出血を経験する女性は、滅多なことでは動じない。本当の年回りでいえば六つも年下の中学生の少女を眼前にして、葉月が知らぬまに身をすくめてしまうのには、そんな理由があることも否めなかった。

しかも今の葉月は、生物学上の『雄』としても中途半端な存在だった。或る意味ではそれだけで完結している性である『雌』が、連れ合いとしてもう一つの性である『雄』を求めるのには大きく分けて二つの理由がある。一つは、次の世代を担う新しい生命のバリエーションを増やす目的で遺伝子をシャッフルするためのツールとしてであり、もう一つは、自ら狩りに出られなくなり、生命の危機に対して闘いを挑むことが難しくなる妊娠の中期以後における食料の調達係を兼ねたボディガードとしてだ。なのに、今の葉月はペニスをお尻の方に折り曲げられて射精の自由を奪われているせいで遺伝子をシャッフルする役割を果たすことなどかなわず、華奢な体つきと内気で引っ込み思案な性格とのため、社会に出て生活に必要な物品を手に入れて巣に戻ってくることも難しい、『雌』から見れば、まるで役に立たない、どうしようもない存在に過ぎない。

そんな葉月にもしも役割が与えられることがあるとすれば、それは、新しい生命を生み育てる性である雌が持つ母性本能や保護欲を満たすための『愛玩の対象』ということになるのだろう。そう、芽衣が葉月のことを今まさにそのように扱っている役割そのままの。

「本当にごめんね。これでお詫びになるわけじゃないけど、はい、これ」

芽衣は何度も「ごめんね」を繰り返しながら、個室の中の棚に置いてあった麦わら帽子を葉月の頭にかぶせさせ、ショーツとナプキンを取り出したあとのハンカチとティッシュしか入っていないポシェットを肩にかけさせた。

けれど、芽衣が口にする「ごめんね」は、本気で謝罪しているというよりも、たとえば、お気に入りのヌイグルミを冗談半分で放り投げて表面に鉤裂きをつくってしまい、慣れない手つきで補修をする時に何気なくヌイグルミに対して投げかける「ごめんね」の方が近いのだろう。

「あ、あの……ううん、いい……」

こんな時、本当の小学五年生の女の子だったらどんなふうに応じるのだろう。そんなことを考えながら、けれど適当な言葉を思いつかない葉月は、曖昧に首を振って言葉を濁すだけだった。

第六章　～再びマンション、そして～

【一】

それから何時間か後、夕食を終えた葉月は、浴室と隣り合った脱衣場に居心地悪そうな顔をして立ちすくんでいた。素っ裸になる場所に皐月と二人なのだから、居心地がいいわけがない。

「……どうして姉さんがここ来るのさ？」

夕飯の後片付けをしているものだとばかり思っていた皐月が自分のあとを追って脱衣場に入ってきたのに気づいて、葉月は思わず咎めるような口調で言った。

「どうしても何も、葉月ちゃんの着ている物を脱ぎ脱ぎさせてあげるために決まってるじゃない。他に何か理由があるっていうの？　それより、お外ではちゃんと『お姉ちゃま』って呼んでいたのに、また『姉さん』だなんて呼び方をして。せっかくのいい子ちゃんがどうしちゃったのかな？」

困惑というよりも怯えと言った方が近い、なんともいいようのない表情を浮かべる葉月に向かって、皐月はしれっとした顔で聞き返した。

「いいじゃないか、『姉さん』で。ここには僕たちしかいないんだし、いくら壁が薄いったって、脱衣場の声が外まで漏れる心配はないんだし。僕は大学生の男の子なんだよ。それがどうして小さな女の子みたいに『お姉ちゃま』なんて呼ばなきゃいけないのさ。外だったら誰かに聞かれて僕の正体がばれるかもしれないから仕方ないけど、家の中だったらそんな心配なんてないんだし、普段の呼び方でいいじゃないか」

気圧されて目を伏せがちになるのを必死の思いで励まして、葉月は虚勢を張った。ここで退き下がったが最後、四方八方から絡みつく姉の手から今後もう二度と逃れられなくなりそうな気がしてならない。今にもくじけてしまいそうになる気持ちに抗って、ここは踏ん張るしかなかった。

「大学生の男のですって？　葉月ちゃんが？　ふぅん、上手におしっこをできなくてキティちゃんのパンツとナプキンを汚しちゃった葉月ちゃんがねぇ。女の人用トイレの通路に敷いたトイレットペーパーの上でパンツを穿き替えさせてもらった葉月ちゃんがねぇ」

皐月は、葉月にずいっと歩み寄りながら面白そうに言った。

「そ、それは……」

皐月は反射的に腰を退きながら弱々しく呻いた。

そこへ皐月がとどめを刺すように付け加え言った。

「たしかに、大学生の男の子だったかもしれないわね、葉月ちゃん、今日の昼前までは。でも、セーラーワンピを着てシナモロールのパンツを穿いた時から女の子になっちゃったのよ」

「……」

「ま、そんなことはどうでもいいから、ほら、逃げちゃ駄目。すっかり汗でびしょびしょになっちゃったキャミとサンドレスを脱がせてあげるからこっちへいらっしゃい。葉月ちゃん、バスの中でも二回ほどくしゃみしてたでしょ。だから、ほら、少しでも早く入って温まらな

きゃ」
友達と一緒に海辺を模した水槽で生物観察をするという芽衣と別れてから、トイレを出た後も水無月と皐月に手を引かれて水族館の中をぐるりと連れ回され、ようやくの思いでバスに戻った時には、じりじり照りつける夏の太陽に焼かれての汗と、大勢の入館者の誰かに正体を気づかれてるのではないかという不安による冷や汗とで、キャミソールもショーツもびしょびしょだった。それが、しばらくしてバスの冷房が利いてきたものだから、ぞくりと体を震わせてしまったのだ。しかし、皐月はそんな葉月のことを気遣うどころか、トイレの中で何があったのかを事細かに水無月に報告しては、二人で葉月の様子をちらちらと窺いながらおかしそうに笑い合っていた。くしゃみは冷気のせいなどではなく、二人のひそひそ話のせいだと拗ねた表情で言ったりしたら、それは八つ当たりになってしまうだろうか。
「で、でも……」
「いいから、こっちへ来なさい。汗臭いままじゃ、大好きな卯月お姉ちゃまに嫌われちゃうわよ」
皐月は更にずいっと歩を進め、葉月が壁に阻まれてもうそれ以上は体を退けなくなるのを見て取ると、肘をつかんでぐいっと引き寄せ、首筋の後ろで結わえたサンドレスの肩紐の結び目を手早くほどいた。
ホルターネックになっていて、ウエストラインの絞りもないサンドレスは、肩紐を解かれると、まるで抵抗なく、葉月の足元にふぁさっと落ちてしまう。
皐月はサンドレスに続いてキャミソールも手際よく脱がせた後、力ない抵抗など物ともせずに、葉月の足首をつかんで両方のソックスも脱がせてしまった。

「とっても可愛いわね、葉月ちゃんは。どこからどう見ても、可愛い女の子だわ。本当は男の子、それも大学生の男の子だなんて信じられないくらい可愛いいんだから」
葉月を壁際に追い詰め、ショーツ一枚を残すだけの裸に剥いた皐月は、瞳をきらきら輝かせて言った。
皐月の言う通り、女児用ショーツしか身に着けていない葉月を見て、それが男の子だと思う者はいないだろう。本来なら葉月の性を明確に示す筈の平らな胸板さえ、まだ生育の途上にある幼い女の子のぺたんこの胸にしか見えないし、微妙なくびれの腰回りも、第二次成長期を迎える前の少女の体つきのようだし、タックのせいで僅かな膨らみしかない股間にいったっては、恥丘の発達もまだの控えめなうっすらしたスジでしかない幼女の秘部そのままだ。お腹が少し凹み加減だけれど、これがぽっこり丸く膨らんだお腹の幼児体型だったりしたら、それこそ、年端もゆかぬ小さな女の子そのままの外見と言っていいくらいだ。
「さ、あとはパンツだけね。でも、その前にお姉ちゃまも自分の着ている物を脱いじゃうから、ちょっとの間だけ待っていてね」
まるで舐めまわするようにして葉月の体を眺めながら皐月はにっと笑って言うと、自分が着ているジャージのファスナーに指をかけ、さっと引きおろした。
「あんたは昔から私の自慢の弟だったのよ。すべすべのお肌にさらさらの髪。ぱっちりした大きな目に、真っ赤で薄い唇。小さい頃から、あんたのことを初めて見る私の友達は、決まって妹だと勘違いしてた。でも、それも仕方ないよね。それだけ可愛くて、まるでお人形さんだったもん。だけど、友達があんたのことを弟じゃなくて妹だって間違うのを見て、私、

面白がるだけじゃなくて、それがとっても自慢だったのよ。世の中、どこを探しても、こんなに可愛い弟を持った姉さんなんていやしないってね。保育園でたくさんの子供たちの面倒をみているけど、今まで、小さかった頃のあんたより可愛い子に出会ったことなんてなかった」

皐月は上着に続いて薄手のシャツも手早く脱ぎ去り、ブラジャーを無造作に外して脱衣カゴに投げ入れた。そうして、ボトムスに指をかける。

「小学校に入っても中学校に上がっても、それに、高校に通うようになっても、あんたは可愛いままだった。中学校の制服も高校の制服も、なんだか、女の子が無理して男の子の格好をしているふうにしか見えなかった。だから、私、こっちに就職が決まって独り暮らしを始めるのが辛かった。あんたと離れ離れになるのが、どうしようもないほど寂しくてたまらなかった」

皐月はそう言いながら葉月と同じようにショーツだけを残す姿になったかと思うと、そのまま、まるで躊躇う様子もなく、たった一枚残っているショーツもさっと脱いでしまった。

「でも、やっぱり、神様の思し召しっていうのがあるのね。私があんたのことを想ってばかりいたからなのか、それとも、あんたが私のことを慕ってくれたせいなのか知らないけど、こっちにある大学を選んだおかげで、あんたと私はまた一緒に暮らすことができるようになったもんだもの。あんたが私のマンションに来るって聞いた時から実際に引っ越して来るまでの間がどんなに長かったことか。父さんと母さんは寂しがってるでしょうけど、あんたのことを独り占めできるようになった私がどんなに嬉しかったことか、誰にもわかんないでしょうね」

皐月は僅かに首をかしげて、なす術なく立ち尽くしている葉月の目を覗き込んだ。

「だけど、そんなにまでして待っていたあんたも、ま、そりゃそうなんだけど、やっぱり、男の子だった。見た目は女の子、それもとびっきりの美少女で通じるあんたなのに、でも、中身は男の子だった。私のマンションに来て何日も経たないうちにパンツを夢精で汚しちゃうし、エッチな本やＤＶＤを買ってくるし、それも、汚れたパンツやいやらしい本をあっちこっちに押し込んで隠したりしてさ。やーらしいお汁で汚したティッシュも、ゴミ袋にぎゅう詰めにするだけじゃ匂いでわかっちゃうのに、そんなこと気にする様子もなくってさ。いつの間に、こんなにだらしなくていやらしい子になっちゃったんだろうって、私がどんな気持ちになったか、あんたにはわかんないよね」

皐月は、一糸まとわぬ姿で、けれどまるで臆するふうもなく自分の裸体をさらして、どこか哀しげに言った。

「そんな時に、遠藤先生が――弥生がバカな男に襲われる事件が起きたのよ。幸い未遂に終わったけど、弥生の心には深い傷が残った。それで私は思ったのよ。可愛い弟がそんなバカなことをしでかさないよう、きちんと躾け直してあげなきゃいけないって。見た目はどんなに可愛い弟でも、中身は、そのバカと同じ、何をしでかすかしれたもんじゃない、危なっかしい男っていう醜い生き物だから、きちんと躾けてあげなきゃいけないってね」

皐月は、後輩の保育士である遠藤弥生のことをいかにも親しげに『弥生』と下の名前で呼んで言い、退路を断たれた葉月の体におおいかぶさるようにして、こちらもたった一枚だけ残っていたショーツを強引に剥ぎ取った。

そうして、小刻みに体を震わせる両脚の間にすっと右手を差し入れる。

「ほら、今もそう。血のつながった肉親の裸に欲情しちゃうなんて、ほんと、男っていうのは、いやらしくてどうしようもないケダモノなんだから」
両脚の間で後ろ向けに折り曲げて固定されながらもひくひくと蠢く葉月のペニスに触れながら、呆れたように、そしてどこか嘲るように皐月は言った。
それに対して、葉月は一言も言い返せない。まさか血のつながった姉に襲いかかるほど理性を失ってしまうことはないし、万が一襲いかかったとしても、園長によって施されたタックのせいでペニスは自由にならず、最後の行為にまで至ることはできないのだが、それでも、大学に入ったばかりという、自分でもどうしていいのかわからないほど人生の中で最も性欲を持て余しているこの時期、張りのある乳房とみずみずしい肌をあらわにした女性の裸体を目の当たりにして、いくらそれが実の姉なのだと自分に言い聞かせてみても、いきりたつ若い肉棒を鎮めることは不可能なのだから。
今の葉月には、脱衣場の壁に背中を押しつけ、挑発するかのような姉の裸体からおずおずと目をそらすことしかできなかった。

「わかる？　ケダモノみたいなそんないやらしいあんたをちゃんと躾け直してあげるために、園長先生にお願いして保育園に通わせてもらうことにしたのよ。あんたがバカ男と同じになっちゃわないよう、見た目通りの可愛い女の子になれるように」
皐月は、鈎型に曲げた人差指で葉月の顎先を持ち上げるようにして言った。
「……そんな、躾け直すって……ぼ、僕、遠藤先生の心の傷を癒すために雇われた筈だよ？　な、何わけわかんないこと言ってんのさ、姉さんたら」
「確かに、それもあるわよ。でも、それだけじゃないの。それだけじゃないっていうか、どっちかっていうと、弥生の心のリハビリよりも躾け直しの方が主な目的ね。それと、バカ男の代わりに責任を取ってもらうっていう意味合いもあるし」
皐月は葉月の顔を引き寄せ、互いの唇を触れ合わせんばかりにして言った。
「責任……？」
「そう、責任よ。弥生を襲ったバカ男は警察に捕まった後、公判中だから、向こうからも弥生の方からも連絡を取れない状態なの。ま、もういちど襲われる心配がないから安心なんだけど、でも、このままだと、こっちから仕返しをするチャンスをつくることもできないってことになるわけよね。弥生本人もそうだと思うけど、私としても、それじゃ気が済まないのよ。可愛い弥生をひどい目に遭わせた最低野郎に復讐できないだなんて、それって、あんまりだよね。いつか、絶対に仕返ししてやる。でも、そのチャンスがいつ来るかわからない。――だから、その間、手っ取り早いとこであんたで間に合わせることにしたの。バカ男と同類のあんたを恥ずかしい目に遭わせることで気持ちをまぎらわせようってことよ、簡単に言えば。もちろん、協力してくれるわよね？　お気に入りの遠藤先生の傷付いた心を慰めるめだもん、喜んで、バカ男の代わりになってくれるよね？」
皐月は更に葉月の顔を引き寄せた。
「な、なに身勝手なこと言ってんだよ。そんなの、僕には関係な……」
「関係ないですって？　冗談じゃない。関係はおおありよ。あんたはあの最低野郎と同じケダモノじみた男の一人なんだし――だいいち、ここをこんなにしちゃって、それなのに自分は関係ないだなんて、よくそんなことが言えるものね」

皐月は葉月の言葉を途中で遮り、空いている方の手を再び葉月の両脚の間に差し入れた。
思わず皐月の体を突き飛ばして身を退こうとした葉月だが、明かな体力差がある上に脱衣場の壁に阻まれて、それはかなわない。
「体は正直なものよね。僕は関係ないなんて生意気なこと言ってるけど、こんなにビンビンにしちゃってるんだもの。ああ、やだやだ。可愛かった弟が醜い男どもの仲間入りしちゃうなんて、姉さん、そんなの我慢できない。だから、思いきり厳しく躾け直す必要があるわけよ」
葉月の両脚の間をまさぐりながら、皐月は、いかにも嘲るように言った。
「……」
皐月の口を衝いて出た嘲りの言葉に、けれど葉月は何も言い返せない。実の姉とはいえ目の前にさらされる若くみずみずしい女性の裸体に疼きをおさめられないペニスが、皐月が体を寄せてきたせいで自分の胸に乳房が触れ、ぷりんと張った弾力のある肌触りと、ぴんと勃った乳首のこりこりした感触とに責められて、ますますいきりたってならない。もちろん、強力な接着剤のせいで実際には醜い鎌首をもたげることはかなわないのだが、お尻の方に折り曲げられ固定されたままでも、窮屈そうに蠢くのを決してやめようとしなかった。

「ほら、こうしてあげたらどうなるかな。ほら――」
前から見れば無毛の童女のそれにしか見えない葉月の股間に伸ばした手でますますいやらしくペニスを責めたてながら、皐月は舌なめずりせんばかりにして言った。
「や、やだ！　やだってば、姉さん……」
葉月は、それ以上は後ろにさがれないことを痛いほど承知していながら、それでもまだ諦めきれない表情で背中を壁に押し当てた。
「何をそんなに嫌がってるのよ。あんた、自分の手で自分のおちんちんを慰めてるんでしょ？　エッチな本とかやーらしいＤＶＤとかをオカズにして、ティッシュをたくさん汚してるんでしょ？　おちんちんをいじってもらうのが好きで好きでたまんないんでしょ？　どうしようもない男っていう下等な生き物の仲間なんだもん、昼も夜も、どうやっておちんちんを慰めようかってことばかり考えてるんでしょ？　なのに、どうしてそんなに嫌がるのよ？
いつも自分で自分を慰めてばかりじゃ可哀想だから優しい姉さんが可愛がってあげようっていうのにさ」
皐月は、窮屈そうに蠢くペニスをなぶり続けながら、熱い吐息を葉月の耳たぶにふっと吹きかけた。
「そ、そんな言い方……」
「どんな言い方でもいいでしょ。やってることは変わらないんだから」
皐月は吐息を更にもう一方の耳に吹きかけてから、ふと気づいたように
「あ、でも、このままだと脱衣場の床を汚しちゃうわね。そんなことになったら後のお掃除が大変だから、続きはお風呂場でしないとね」
とわざと大げさに顔をしかめてみせて、葉月を浴室に急かすのだった。

【二】

「さ、ここなら、いくら床を汚してもいいわよ。あんたがいやらしいお汁でどんなに床を汚しても、お風呂場ならシャワーですぐ綺麗に洗い流せるから」

皐月は、浴室に連れ込んだ皐月にぴったり寄り添うようにして囁きかけ、ぱっと見は童女そのままの股間に向かってそろりと右手を差し伸べた。

「や、やめてよ。駄目だったら、姉弟どうしでそんなことしちゃ」

葉月は、思わせぶりにそろそろと伸びてくる皐月の右手を力なく払いのけた。

「ふぅん、してもらいたくないんだ。姉さんにしてもらっちゃ困るんだ。――つまり、自分でしたいってことね。部屋に隠れてこそこそやってるみたいに、自分の手で気持ちよくなりたいってことね。いいわ、じゃ、やってみせてごらん。あんたがいつもどんなふうにして自分で自分を悦ばせてるのか見てみたいから、私の目の前でやってごらんよ」

皐月は、振り払われた自分の手をちらと見て、唇の片方の端を吊り上げるようにして艶然と微笑むと、一糸まとわぬ姿でこれみよがしに胸を張った。

「そんな……そんなこと……」

「そんなことできないって言うの？　別にいいわよ、私の方は、それならそれでも。ただ、いつまでもこのままじゃ、あんたが困るんじゃないのかな」

皐月は自分の腰に手の甲を押し当てて葉月の顔を正面から見据えた。

「あんた、水族館でトイレへ行ったきり、一度もおしっこに行ってないよね。もうそろそろだと思うんだけど、大丈夫なの？　可愛い弟のことを思っていつも気にかけている優しい姉さんとしちゃ、だいたいどれくらいの間隔でおしっこに行くかってことも知ってるから心配になっちゃうんだけど、まだ大丈夫なのかな？」

「そ、それは……」

「男って、おちんちんをいやらしく大きくしてるままだと、おしっこをしたくなっても出ないんじゃないの？　いやらしいおちんちんをおとなしくさせてあげないと、おしっこを出せないんじゃなかったっけ？　したくてしたくてたまんないのに、いつまでもおしっこが出ないんじゃ、さぞ辛いでしょうね。そのうち、お腹のあたりが痛くて痛くてたまんなくなってくるかもしれないよね。なのに、魅力的な私の裸を目の前にしてちゃ、おちんちんがおとなしくなるわけないよね。でも、それは罰の一種かな。実の姉に対して欲情しちゃうような情けない存在である男として生まれついたことへの罰なんじゃないかしらね。だったら、おとなしく受け容れるしかないんじゃない？」

皐月の言う通りだった。水無月が運転するバスで水族館からマンションに帰ってきて、皐月が夕食の準備をしているうちにトイレへ行きたくなってきて、夕飯を食べ終える頃にはもう我慢できるかどうかというところまできていた葉月だが、幼い女の子みたいに変貌させられてしまった自分の下腹部を目にすることに耐えられなくて、今までトイレへ行くのを我慢していたのだ。けれど、限界は目の前に迫っていた。しかも、皐月がわざと裸体をさらすして挑発するものだからペニスがいきりたってしまい、もうどうすることもできない状態だ。

「どうするの？　自分でできるの？　それとも、私にしてもらいたい？」

皐月はねっとり絡みつくような口調で重ねて訊いた。
「……」
「そう、いつまでもだんまりを続ける気なの。ま、いいわ」
口をつぐんだままの葉月の顔を小馬鹿にしたような目で見て、皐月はその場をすっと離れた。
「え……？」
面食らったかのように驚きの目を向ける葉月の視線の先で、皐月は浴室の床に片膝をつき、大ぶりのスポンジにボディソープをたっぷりふくませてから、再び葉月の体にぴったり身を寄せた。
「あんた、昔からそうだったよね。私がいなきゃ何もできない、頼りない子だったよね。でも、私、そんなあんたが大好きなのよ。どんな小さなことでも私が面倒をみてあげなきゃいけないあんたのことが」
皐月は、いい香りのするボディソープをふくませた後きゅっきゅっと何度か握って盛大に泡をたてたスポンジを自分の体に押し当て、あっという間に、体中を真っ白な泡で包みこんだ。
そうして、再びスポンジにボディソープをふくませて泡立て、今度は葉月の体に押し当てる。
「だから、思いきり気持ちよくさせてあげる。自分だけじゃできないことを私がしてあげる。これまで経験したことのないほど気持ちよくさせてあげるから、ちょっとの間だけ待っているのよ」
皐月は葉月の体を手際よくきめの細かい無数の泡でふわっと包み込むと、ますます体を密着させた。
「ひぁ……」
皐月が体をくねらせるたび、形のいい乳房やぴんと張った腰が葉月の胸や腹につるんと触れて、体中をぞくぞくさせる。

「ふふ、気持ちいいでしょ。あんた、小っちゃい頃、こんなふうにしてあげると、とっても嬉しがっていたのよ。いつもぐずって、せっかくお風呂に入っても頭とか体とかなかなか洗わせてくれなかったけど、私が最初に自分の体を泡だらけにしてあんたを抱っこしてあげたらきゃっきゃ言って喜んじゃって、自分の体にも泡をたててってせがんでさ。憶えてる？」
自分の体と葉月の体をどちらも泡だらけにしてしまった皐月は、まだぷくぷくと泡をたてているスポンジを洗面器のそばに放り投げると、なんの躊躇いもなく葉月の体を正面から抱いて、両手をぎゅっと背中に絡ませた。
「や、やだ……そんなことしちゃ……」
「そんなことしちゃやだって、どうなっちゃうのかな、そんなことされたら？」
皐月は無数の細かな泡にまみれた乳房を葉月の薄い胸に押しつけ、背中にまわした両手の内、右手を背中に沿ってそろりとおろして、葉月のお尻の下に差し延べた。
そこにあるのが窮屈そうにのたうちペニスなのは今更いうまでもない。
「い、言えないよ、そんなこと……」
さも面白そうに訊いてくる皐月に、葉月は言葉を濁すしかなかった。

けれど、皐月の方は追い討ちをかけるように
「あんた、小っちゃい頃は、お風呂場でおしっこをするのが癖だったよね。どうしてそんな癖が付いちゃったのかは知らないけど、私があんたをお風呂場に連れて入って掛け湯をしてあげると、決まってすぐに可愛いおちんちんでおしっこをして、お風呂場の床におしっこの泡をたててたっけ。ひょっとしたら、今でもあの時の癖、治ってないんじゃないの？　治ってないんだったら、遠慮しなくていいから出しちゃいなさい。もしも治ってるんだったら、あの時のことを思い出して、ここでおしっこを出しちゃえばいいのよ。もっとも、最初は白いおしっこからだけどね」
皐月は、泡だらけの手で皐月のペニスを優しく揉みしだいた。
「や、やぁ……」
びくんと体をすくめた葉月の口を衝いて、今にもとろけてしまいそうな喘ぎ声が漏れ出た。
「やだやだ言いながら、こんなによがってんだから世話ないわね。意地にならないで、もっと正直になればいいのよ、ほら」
接着剤で固定されながらも醜く怒張するペニスの先を、皐月は人差指の腹部ですっと擦った。ぬるぬるに溢れ出している我慢汁とボディソープの泡とが絡み合って、これまで経験したことのない刺激が男性の最も敏感な部分をいやらしく責めたてる。

皐月の手にペニスをなぶられ続けるにしたがい葉月の両脚から力が抜けてゆき、次第に、その場に立っていることも難しくなってきた。
そして、とうとう、へなへなと体が崩れ落ち、膝立ちの姿勢になってしまう。
幸い、浴室の床には発泡ウレタンのバスマットが敷いてあったから膝頭に痛みを覚えることはなかったものの、実の姉にペニスをなぶられて我慢できずにへたりこんでしまうなど、惨めなさまにもほどがある。
けれど、皐月の手が動きを止める気配は微塵もなかった。
「あらあら、急に座りこんだりして、どうしちゃったのかしら。あ、そうか。白いおしっこが出そうになったから、立ったままじゃお行儀が悪いと思って、ちゃんとしゃがもうとしたのかな。そうよね、葉月ちゃんは女の子だもん、立ったままおしっこしちゃうだなんてはしたないことはしないよね。うふふ、早速、躾け直しの効き目が出てきたのかしら。ほんと、葉月ちゃんは聞き分けのいいお利口さんなんだから」
皐月は、それまで『あんた』と呼んでいたのを、がらりと口調を変えて『葉月ちゃん』と甘ったるく呼び直し、なおも執拗にペニスを責めたてるために、葉月がへたりこんだのに合わせて自分も床に膝立ちになった。
皐月が両膝をバスマットについて体を伸ばしたものだから、豊かな飾り毛に彩られた秘部が葉月のすぐ目の前に迫る。ボディソープの泡に覆われているため、完全にあらわになるわけではないのだが、その見えそうで見えないといったところが、まだ若い葉月の欲情をそそってならない。
「あれ？　さっきよりもまたおっきくなってきたよ、葉月ちゃんのあそこ。でも、変だよね。葉月ちゃんは女の子なのに、あそこをおっきくしちゃうなんて、とっても変だよね」
皐月は泡にまみれた手でペニスの皮膚を撫でまわし、最も感じやすい先端の部分を挟んだままの人差指と中指とをすっすっと前後に滑らせながら、わざと不思議そうな表情をつくっ

て言った。
　そうして、葉月が何も応えられないでいると、耳元に唇を寄せて
「ほんっと、どうしうもない生き物なんだから、男ってやつは。血のつながった姉さんの手になぶられておちんちんをおっきくしちゃうだけじゃ足りなくて、姉さんの恥ずかしいところを見てますます悦んでおちんちんをはちきらせちゃうんだから。他のバカな男どもと違ってあんただけはそんなことないって思いたかったけど、そうじゃなかったんだね。ま、躾け直し甲斐がたっぷりあるってことだからそれでもいいけどさ。弥生と二人できっちり躾け直してあげるから楽しみしているといいわ」
と辛辣な口調で囁きかけてから、改めてわざとらしい優しげな笑みを浮かべ、受け持ちの園児に接する時そのまま、幼児をあやすように続けた。
「でも、その前におしっこしちゃおうね。葉月ちゃんは白いおしっこと普通のおしっこの両方しちゃわないといけないから時間がかかるけど、急ぐことはないから、ゆっくり出しちゃっていいのよ。その間、お姉ちゃま、ここで待っていてあげる。葉月ちゃんが上手におしっこできるかどうか、ここでしっかり見ていてあげる。だから、頑張ってしっかり出しちゃおうね」
　そう言ってから皐月は、ますます両脚から力が抜けて膝立ちの姿勢を続けることさえ難しくなってきた葉月の背後にまわりこみ、今にも床につきそうになっているお尻の下に自分の膝頭を強引に差し入れた。けれど、それは、葉月の体をいたわってのことではない。そのまま放っておけば葉月がその場にへたりこんでお尻を床に落としてしまうのは明らかだ。そうなれば、ペニスをいたぶるために葉月の両脚の間に手を差し入れることができなくなってしまう。そうならないようにするためでしかなかった。
「葉月ちゃん、憶えてる？　おむつ離れするかしないかくらいの小っちゃい頃は、母さんや父さんに後ろから抱っこしてもらっておしっこさせてもらっていたのよ。おむつを外してもらったりトレーニングパンツを脱がせてもらったりした後、お尻の下に伸ばした母さんや父さんの両手の上にちょこんと座らせてもらうような格好をして、『しー来い、しー来い』って言ってもらって、そうやっておしっこをさせてもらっていたのよ。あの時の葉月ちゃん、とっても可愛くてさ。お姉ちゃまも父さんや母さんの真似をして葉月ちゃんにおしっこをさせてあげたくてたまんなかったんだけど、お姉ちゃまもまだ子供だったから、葉月ちゃんを後ろから手だけで抱っこするなんてできなくてさ。大きくなったら絶対に私がさせてあげるんだって思って諦めてたんだけど、私が大きくなったら、それと一緒に葉月ちゃんも大きくなるってこと、その時は気がつかなくってさ。笑っちゃうけど、子供って、そんなもんだよね。今もお姉ちゃまの方が体は大きいけど、やっぱり、葉月ちゃんを手だけで抱っこしてあげることはできないんだよね。――でも、膝の上に葉月ちゃんのお尻を載せてだったら後ろから抱っこしてあげられるよ。ちゃんと抱き上げることは無理だけど、抱っこの真似ならできるよ。だから、上手におしっこしようね。母さんや父さんにさせてもらった時のことを思い出しながら、お姉ちゃまの膝の上でおしっこしてちょうだいね」
　皐月は、葉月のお尻の下に差し入れた膝頭をゆっくり上げながら、空いている方の手を葉月の太腿の下に差し伸べ、膝頭を上げるのに合わせて、その手をゆっくり持ち上げた。
　そうすると、葉月は、爪先こそ床についているものの、皐月の膝にお尻を載せた状態で体全体を後ろから抱き上げられるような姿勢をとらされ、それこそ、母親の手に抱かれておし

っこをさせてもらう幼児みたいな姿を強要されることになる。
そんなふうにして皐月は葉月を後ろから抱きかかえながらも、尚もペニスをなぶり続けるのをやめない。
「ぁ、はぁ、ん……」
ボディソープのきめこまかい泡越しに、皐月の豊かな乳房が葉月の背中に触れる。こりこりした乳首の感触に加え、すべべした泡に包まれた乳房の感触。はからずもペニスがますます窮屈そうにのたうち、葉月の口を、熱い吐息そのままの喘ぎ声が衝いて出た。
「さ、もう、そろそろでしょ。脱衣場から今まで、よく我慢したわね。ほんと、葉月ちゃんはお利口さんだこと」
皐月は、半皮かぶり状態になっているペニスの先端の皮膚を中指と親指でそっと押し広げると同時に、人差指の先を、我慢汁を溢れさせている赤黒い割れ目に押し当て、これでもかとばかりに、けれど決して力任せにはならないよう細心の注意を払いながら、つっと擦りあげた。
「ひ……」
悲鳴じみた喘ぎ声が聞こえて葉月の腰がぶるんと震え、ペニスがどくんと脈打つ。
「そう、それでいいのよ。これまで我慢してきたけど、もういいの。お姉ちゃまに抱っこしてもらったまま最初に白いおしっこを出して、それから、普通のおしっこを出せばいいのよ。こんなふうにして葉月ちゃんにおしっこをさせてあげられる日が来るのをお姉ちゃまはずっと待っていたんだから、なにも遠慮することなんてないのよ」
強引に後ろ向けに折り曲げられたペニスの先からとろりと溢れ出す精液の雫を掌に掬い取り、それを皐月の目の前にかざしてみせながら、葉月はねっとりした声で囁きかけた。
皐月は慌てて目をそらしたが、一瞬目にした、純白の泡との対比で微かなコントラストをつくる乳白色の雫が網膜にしっかり焼き付いて、瞼を閉じると、却って鮮やかに浮かびあがってくる。

皐月の膝にお尻を載せて座る姿勢をとらされたせいで、太腿を持ち上げられ、肛門がペニスの先端よりも下になってしまう。そのため、勢いなくとろとろ溢れ出る精液は、両脚の間の皮膚を伝って肛門のあたりへ滴り落ちてゆく。

自分の放出した精液で自らの肛門を汚される屈辱に葉月は身をよじるのだが、皐月の手で腿をおさえつけられているところに、射精直後の脱力感とが相まって、その場から逃げ出すことはかなわない。

やがて、肛門のまわりに集まった精液の雫が、葉月の下腹部を包み込んだ細かな泡が弾け元のボディソープを溶かしたぬるま湯に戻って、次第次第にお尻から床に滴り落ちる始めた。

「園長先生のお部屋と、お家の新しいお部屋、それに、今。葉月ちゃんは今日だけで三回もお姉ちゃまに白いおしっこをさせてもらったことになるのよ。わかる？　昨日までは自分でおちんちんをいじって白いおしっこをしていた葉月ちゃんだけど、今日からは違うのよ。これからはずっとお姉ちゃまがさせてあげる。白いおしっこも普通のおしっこも、おしっこはどっちも、お姉ちゃまがさせてあげる。――ううん、お姉ちゃまだけじゃないわね。お家じゃお姉ちゃまだけど、保育園じゃ遠藤先生だもの。それに、他の先生方も。よかったね、葉月ちゃん。これからはずっと、優しい保育士さんたちにおしっこをさせてもらえるのよ。これもみんな、葉月ちゃんを保育園に通わせてあげることにしたお姉ちゃまと、それを許してくださった園長先生のおかげなんだから、そのことを忘れないで、可愛い年少さんになれるようしっかり頑張ろうね」

皐月は、勢いよく射精することを許されず、力なくじくじくと精液を溢れさせながら時おりびくんと身を震わせる葉月のペニスを指先でぴんと弾いて、小さな子供に言い聞かせる時の口調そのままに囁きかけた。

そう、葉月は、今日だけで三度も皐月の手で精液を搾り取られたのだ。実の姉の手でペニスをいたぶられ、とうとう我慢できなくなって精液を溢れさせてしまうのがどれほど惨めなことか、それは、とてもではないが、本人以外には想像もつかない屈辱だろう。しかも、三度ともが、年相応の男性として扱われるのではなく、成人した男の象徴たる『精液』ではなく、幼児めいた『白いおしっこのおもらし』として処理されてしまったのだから、その絶望感は殊更だ。

「全部出しきっちゃうまで、お姉ちゃま、葉月ちゃんを抱っこしていてあげる。だから、寂しくなんてないのよ。水族館のトイレじゃ、お姉ちゃまは葉月ちゃんが一人で上手におしっこできるかどうか近くで見ていてあげただけだったよね。だから、葉月ちゃん、おしっこでパンツもナプキンも濡らしちゃったんだよね。でも、今からは違うのよ。もう二度とあんな可哀想なことにならないよう、これからはずっとお姉ちゃまや他の保育士さんたちがちゃんとおしっこさせてあげる。だから、無理して一人でしなくてもいいのよ。葉月ちゃんは年少さんになったばかりの小さな女の子だもん、おしっこをするのが上手じゃなくても、ちっともおかしくないの。――いいわね？　おしっこをしたくなったら、ちゃんと先生方に教えるのよ。もしも一人で勝手に保育園のトイレへ行って、水族館の時みたいにパンツを汚しちゃったら、替えのパンツの用意ができないかもしれないんだから。そんなことになったら、パンツを穿かずにお友達と遊ばなきゃいけなくなって、恥ずかしい思いをするのは葉月ちゃんなのよ。だから、ちゃんと言いつけを守れるよね？」

葉月の体を後ろから抱きかかえて慈母のように優しく教え諭す皐月。けれど、その口調とは裏腹に、皐月の言葉は、葉月にとっては、体の自由を奪うためにがんじがらめに巻き付く鋭い棘の付いた鎖以外の何ものでもなかった。おしっこをしたくなって勝手に保育園のトイレへ行ったりしたら、下半身丸裸にして他の子供たちの中に放り込むわよと、皐月は告げているのだ。排泄の管理は私や私の同僚の保育士たちに委ねなさい。さもなきゃ、これ以上はないくらい恥ずかしい目に遭わせてあげるからね――つまり、皐月は、冷酷にそう宣告しているのだった。

それに対して、葉月は一言も発せない。うんと言って頷くことができるわけもなく、かといって、皐月の膝にお尻を載せたままペニスの先から精液を滴らせている姿では抵抗することもかなわない。

「お返事はどうしたの？　葉月ちゃんはお利口さんなんじゃなかったっけ？　年少さんとはいっても、もう保育園のお姉ちゃんなのよ、葉月ちゃんは。お喋りのできない赤ちゃんじゃないんだから、きちんとお返事できるよね？　それとも葉月ちゃんは簡単なお返事もできない赤ちゃんだったのかな？　ふぅん、だったら、パンツを穿かずにお友達と一緒にいても平気だよね。だって、赤ちゃんは裸んぼうでいるのが大好きだもの。へーえ、葉月ちゃん、明日から保育園のお姉ちゃんだと思ってたのに、本当はまだ、裸んぼうでいるのが大好きな赤ちゃんだったんだ。だったら、上も下も丸裸でお友達と遊ばせてあげた方がいいのかな」

屈辱にまみれた表情で唇を震わせる葉月に向かって、皐月は、口調こそ優しげだが容赦のない言葉を投げかけた。

「や、やめて……丸裸だなんて、そんなの……」

首をうなだれた葉月の口から、よく注意していないと聞こえないようなかすれた声が漏れ出た。

「あら、裸んぼうは嫌なんだ。そうよね、葉月ちゃんはもう赤ちゃんじゃないんだもん、保育園のお姉ちゃんだもん、裸んぼうは恥ずかしいよね。だったら、お返事できるかな。保育園のお姉ちゃんらしく、きちんとお返事できるかな」

皐月は葉月のお尻をぽんぽんと優しく叩いて返答を促した。

「……お、おしっこしたくなったら、せ……先生に教える。葉月、おしっこしたいからトイレへ連れて行ってって先生にお願いする。……それで、先生に、お、おしっこさせてもらう。……葉月、勝手にトイレへ行ったりしない。……だ、だから……だから、裸んぼうは……」

葉月は身を固くし、決して後ろを振り向こうとはせず、首をうなだれたまま、蚊の鳴くような声で言った。

「はい、よくできました。最初からそんなふうにお返事をしていればよかったのに、どうして葉月ちゃんはだんまりをしていたのかしらね。でも、もういいわ。ちゃんとお約束できて、葉月ちゃんが本当にお利口さんだってこと、お姉ちゃま、よぉくわかったから。せっかくできたお約束だもん、ちゃんと守って、明日からは保育園の先生方におしっこをさせてもらうのよ」

葉月の返答に皐月は満足そうに微笑み、一時に比べれば幾らか縮こまってきたペニスをそっと撫でさすった。

「白いおしっこはもうすぐおしまいかな？　じゃ、次は普通のおしっこね。おねむの間におねしょしちゃわないように、しっかり出しておこうね」

そんなふうにして葉月はまるで幼児扱いのままおしっこをさせられた後、改めて真っ白の泡に包まれて体を洗われ、シャンプーハットをかぶせられた幼児めいた姿で頭を洗われてから、ようやく、羞恥に満ちた入浴シーンから解放されたのだった。

第七章　～初登園の朝～

【一】

そうして、いよいよ、葉月が保育園に行く日の朝がやって来た。
「葉月ちゃんはもうおっきしてるかな。それとも、まだおねむかな」
かちゃりという微かな音と共にドアのノブがまわり、まるで遠慮する様子もなく皐月が葉月の部屋に入って来た。
七月終わりの太陽はもうかなり高い所まで昇っているようで、レースのカーテン越しに差し込んでくる光が眩しい。けれど、葉月が頭まですっぽり毛布の中にもぐりこんでいるのは、その眩しさに耐えかねてのことでは決してない。
「……葉月、まだ眠いの。もう少し寝かせてよ、お姉ちゃま……」
起床時間になったのに、（そうしないと皐月からどんな折檻を受けるかしれたものではないため）保育園に通うようになったばかりの幼女の口調を真似て、まだ眠気が残っているからと言い訳をし、なかなか起きようとしない葉月。
だが、葉月がなかなか起きようとしない本当の理由を、皐月は前もって知っていた（もっとも、本当の理由を皐月が知っているということを、葉月自身は気づいていないのだが）。
「いつまでもぐずってちゃ駄目よ、葉月ちゃん。今日から保育園なんだし、せっかく水無月のおばちゃまがバスで迎えに来てくれるんだから、もう起きなきゃ。最初の日から遅刻だなんて、お友達に笑われちゃうわよ。それに、水無月のおばちゃまに迷惑をかけることになるでしょ」
保育園の園章が入ったジャージを着た皐月は、毛布の端に指をかけて、あやすように言った。これまでは路線バスで通勤していたからマンションを出る時はブラウスにスカートといういでたちだったが、今日からは葉月のお伴を兼ねた添乗係として保育園の通園バスでの通勤になるため、最初からジャージ姿だ。
「……だ、だって、まだ眠いんだもん……それに、なんだか体がだるいし……」
葉月は毛布越しのくぐもった声でそんなふうに言い訳を繰り返してから、少し間を置いて、おそるおそるといった様子で続けて言った。
「……葉月、今日、保育園お休みしたい。体がだるくて動けないから……」
それに対して、皐月の方は、葉月がそう言い出すのを予想していたかのような平然とした口調で
「ふぅん、体がだるいんだ。お熱があるのかな、葉月ちゃん」
と言ったかと思うと、毛布の端を葉月の首のあたりまで捲り上げ、自分の手の甲を額に押し当てた。
咄嗟のできごとにはっと体を固くする葉月。
だが皐月はいたって落ち着き払った様子でしばらく待ってから、わざと怪訝そうな表情を浮かべて、問い質すような口調で話しかけた。
「あら、おかしいわね。お熱はないみたいよ、葉月ちゃん。本当に体がだるいの？」

まるで胸の内を見透かされてしまいそうな皐月の視線に、身をすくめるばかりの葉月。
弟のそんな様子をじっと窺ってから、皐月は訝しむような表情を更に深くして言った。
「お熱がないとすると、お腹が痛いのかしら。ひょっとしたら寝冷えかな。じゃ、今度はぽんぽんの具合をみてみようね」
怪訝そうな顔つきながらも口調はわざと優しく言って、皐月は毛布を強引に剥ぎ取った。
「やだ、駄目！」
葉月は悲鳴をあげて毛布を押さえようとするのだが、もう手遅れだ。
夏用の毛足の短い毛布を剥ぎ取られ、子供用ベッドのマットの上に重ねた敷布団に体を丸めるようにして横たわる葉月の姿があらわになった。

「ふぅん、そういうことか。体がだるいっていうのは嘘だったのね？　それに、まだ眠いっていうのも嘘なんでしょ、葉月ちゃん？　本当は、敷布団に広がった黄色い地図を見られるのが恥ずかしくて、それで嘘をついちゃったってことよね、葉月ちゃん？」
皐月は、向こうをむいた皐月の横顔をちらと見おろしてから、おもむろに視線を動かし、葉月のお尻の下にうっすらと広がるシミに目を留めると、わざと大げさに頷いた。
昨夜、屈辱と羞恥に満ちた入浴を終えた葉月が着せられたのは、パイル地の生地でできたパフスリーブワンピースのナイティだった。ワンピースとはいっても、裾が膝まで届くわけではなく、せいぜい、お尻の膨らみが全て隠れるか隠れないかといった丈しかなくて、その下にショートパンツを組み合わせて穿くといったタイプの、キッズ向けのナイトウェアだった。ショートパンツの下にはクロッチ部分にナプキンを装着した女児用ショーツを穿かされているから、夏の夜、下腹部はじっとり蒸れて仕方ないのに、上半身は、ワンピースの裾がふわりと丸みを帯びたシルエットになっているせいで、ちょっと体を動かすだけで空気をふくんでふわふわ揺れ、男物のパジャマとは比べようもないほど頼りない着心地のナイティだ。
昨夜は、夕飯の後すぐ浴室に連れて行かれたものだから、皐月の手で白いおしっこと普通のおしっこを念入りに搾り取られ、頭にシャンプーハットをかぶせられた幼児さながらの姿でこれでもかというくらい丹念に体を洗われて浴室を出た時でも、まだ宵の口という時刻だった。なのに、「小っちゃな子は夜更かしをしちゃいけないのよ」と皐月に言われ、幼い女の子の部屋そのままにしつらえられた『葉月のお部屋』に連れて行かれて、花柄のシーツに包まれた敷布団を敷いた子供用のベッドに横たわらされた上、ベッドのすぐ横に置いた椅子に腰かけた皐月が読み聞かせる絵本の童話を耳にしているうちに、いつのまにかうとうとし始め、知らぬ間に眠りについてしまった葉月だった。
いや、童話を聞いているうちにいつしか眠ってしまったというのは、厳密に言えば正しくはない。時刻もまだ早いし、明日になったら保育園に通わされることになるのだと思うといたたまれなくなり、到底心安らかに眠りにつける状態ではなかった。なのに葉月がいつの間にか深い眠りに墜ちてしまったのは、なかなか寝ようとしない葉月に皐月が与えたホットミルクのせいだった。
ベッドの上に上半身を起こした葉月は、皐月から手渡されたカップに躊躇いがちに口をつけた途端、すーっと鼻を抜けて口中に広がる心地よい香りに思わず溜息を漏らしたものだ。それに加えて、舌の上に広がる上品な甘み。おそらく、気持ち落ち着かせる作用のあるハーブで香り付けをして、レンゲのハチミツを溶かしたのだろう、心が昂ぶって寝つけない時に

はぴったりの飲み物だった。葉月は、気がつけば一口二口とミルクを飲み進め、やがてカップが空になった頃にはすっかり気分が落ち着いて、皐月が再び童話の読み聞かせを始める中、いつしか穏やかな寝息をたて始めたのだった。

体を覆っていた毛布を剥ぎ取られた今、葉月は、眠りについた時と同じパイル地のワンピナイティ姿だった。けれど、まるで同じというわけではない。皐月に寝かしつけられて渋々横になった時にはよく乾いて糊が利いていたシーツの、葉月のお尻が載っている部分が、今はぐっしょり濡れてうすいシミになっていた。そうして、入浴の後に履かされたナイティのショートパンツは言うに及ばず、その下のショーツも、その内側に装着したナプキンも、シーツに負けないくらいびしょびしょになってしまっているのだった。

「それにしても、すごいわね、あんた。今日から保育園の年少さんだっていったら、本当に年少さんみたく、おねしょまでしちゃうなんて。そのなりきりよう、感心しちゃうわ」

皐月は、ナイティのショートパンツについたシミとシーツのシミにじっと目を凝らして、さも感心したように言った。

「ち、違う……そんなじゃない……」

葉月が顔をそむけたま力なく言って、よく見ていないとわからないほど小さく首を振った。

「違う？　違うって、何が違うっの？」

間髪を置かず皐月が聞き返す。

「……おねしょじゃない。おねしょなんかじゃない……」

葉月は声を絞り出すようにして応えた。けれど、まるで説明にはなっていない。

「おねしょじゃないですって？　あらあら、何を言い出すかと思ったら、そんな見え透いた嘘なんかついちゃって。保育園のお昼寝の時間にもいるのよね、そんな子が。おねしょをしちゃったのをごまかすために、暑かったからいっぱい寝汗をかいて、それでお布団が濡れちゃったんだとか、水筒の麦茶をこぼしちゃったんだとか。ほんと、子供っていうのは、大人からみればすぐにばれちゃうような嘘でも、大真面目な顔をしてそんなふうに言い張るんだも

の、おかしくってたまんないわ。ま、もっとも、そんなとこが可愛いんだけどね」
皐月は小馬鹿にしたように応じてから、がらりと口調を変えて続けた。
「でも、そんなに恥ずかしがらなくてもいいのよ、葉月ちゃん。だって葉月ちゃんは、今日から保育園に通うようになったばかりの、まだ小っちゃな女の子だもん。年少さんの中でも一番あとから保育園に入った一番小っちゃな妹だもん、おねしょなんて当たり前。だから、恥ずかしがらなくていいんのよ。さ、いつまでもぐずってないで、新しいパンツを穿こうね。新しいパンツを穿いて、新しい制服を着て、お友達がたくさんいる保育園へ行きましょう。先生たちも、みんな、可愛い年少さんの葉月ちゃんが来るのを待っているから」
そんなふうに、ナイティとシーツがぐっしょり濡れているのを葉月のせいだと決めつける皐月だが、実は、それは自身の企みの結果だった。
そう、葉月が思わぬおねしょでナイティの股間と敷布団をびしょびしょに濡らしてしまうよう仕組んだ張本人は、皐月だったのだ。
昨夜、なかなか寝ようとしない葉月に飲ませたホットミルク。その中には、睡眠導入剤と利尿剤とが溶け込んでいた。普通、睡眠導入剤や利尿剤を入手するのは容易なことではない。なのに皐月がそんな薬剤を所有していたのは、園長が自分の友人である女医に依頼して予め手に入れていたのを、昨日の面接の終わり間際に手渡されていたからだ（付け加えて説明しておくと、葉月の身長や体重、食物アレルギーの有無や特定の薬によって体調を崩したことがあるかないかといったことまで事細かに把握している皐月から得た情報に基づいて女医に工面してもらった薬剤だから、それで葉月が体に変調きたすような恐れもないという念の入れようだった）。むろん、ハーブの香り付けと、少し強いハチミツの甘みとが、ミルクに混入した睡眠導入剤と利尿剤のことを葉月に気づかせないための細工だったのは言うまでもないところだろう。
そして今朝になって睡眠導入剤の効き目も切れ、皐月が起こしに来る少し前に目を覚ました葉月は、まだぼんやりしたままの意識の中、下腹部から伝わってくるじとっと湿った感触に戸惑い、信じられない思いだった。が、ナプキンに覆われた股間だけがじっとり蒸れるのとはまるで違う、下腹部全体を包み込むような重く濡れた感触に、思わず手を伸ばして確認してみても、掌に触れるぐっしょり濡れた感触は気のせいなどではなかった。
そうして、思わぬ事態にどう対処していいのかわからずあれこれと逡巡していたのだが、結局、そうこうしているうちに廊下から聞こえてきた足音に気づき、皐月がドアを開ける直前に毛布の中にもぐりことしかできなかったというわけだ。

「……おねしょなんかじゃない。葉月、おねしょなんかしない……」
自分のことを徹底的に子供扱いして言う皐月の顔を恨みがましく横目でちらと見上げ、葉月は唇を噛んで訴えかけた。
「母さんから聞いたんだけど、あんた、おむつ離れが早かったそうね。昼間のおむつは一歳ちょっとで要らなくなったし、夜のおむつも、それから間もなく外れたんだって。なのに、大学生になってまたおねしょが始まっちゃうなんて皮肉なものね。でも、いいじゃない。あんた、本当は大学生だけど、年少さんの女の子として保育園に通うんだから、おねしょをしちゃってもちっとも変じゃないんだもん。ひょっとしたら、おむつ離れが早すぎたせいで、母さんに甘えられる期間が短くて、それが欲求不満みたいになって、ずっと心の底に溜まっ

てたんじゃないかな。で、また保育園に通うようになる初めての日の今朝、欲求不満のはけ口を探して、それで、おねしょしちゃったんじゃないかな。そう考えれば辻褄が合うのよね、十八歳にもなっておねしょしちゃった事情の」

葉月の訴えに対して、それが自分の企みだということはまるでおくびにも出さず、おねしょが葉月自身に起因するものだと信じ込ませるために、しれっとした顔で皐月は言った。

「そ、そんな……」

「でも、それでいいのよ。せっかくまた保育園に通えるようになったんだから、存分に子供に戻って、母さんに甘え足りなかった分、今度はたっぷり私に甘えればいいの。おむつ離れが早くて手のかからない葉月くんじゃなく、いつまでもおねしょが治らなくて手がかかってしようのない甘えん坊の葉月ちゃんとしてね」

皐月は葉月の横顔に向かって笑いを含んだ声でそう話しかけてからすっと体の向きを変え、壁際に配置した整理タンスの前に歩み寄ると、手早く引出を引き開け、新しいショーツを取り出しながら言った。

「じゃ、パンツを穿き替えてパジャマを制服に着替えようね。――今朝はお姉ちゃま、ちょっと寝坊しちゃったから、急がないと水無月のおばちゃまに迷惑をかけちゃう」

【二】

その後、大急ぎで着替えさせられた葉月は、朝食も与えられないまま皐月に手を引かれてマンションから連れ出され、通園バスを待つため歩道の端に立たされた。

朝食を口にできなかったのは皐月が「お姉ちゃま、ちょっと寝坊しちゃったから、急がないと」と繰り返し言って慌てて葉月を連れ出したせいだ。これまでなら他の保育士とローテーションを組んで順番に受け持っていた送迎バスの添乗係を今日からは毎日一人でこなさなければならなくなったにもかかわらず目覚まし時計を合わせ直し忘れていたせいだと皐月は説明するのだが、実のところ、それは、でっちあげの口実にすぎない。本当のことを言えば、皐月は、ホットミルクに混入した薬剤の効果を確認するため明け方前に葉月の部屋に忍び込み、まだ睡眠導入剤のせいでぐっすり眠りこけている葉月の股間をまさぐって、そこがぐっしょり濡れているのを確かめてからこちら、ずっと起きていて、たっぷり時間をかけて普段よりも丹念に化粧を施すことができたほどだ。そうしておきながら、皐月は、葉月のベッドの枕元に置いてある目覚まし時計が起床時間になっても鳴らないようベルを止めるボタンを押しておき、大急ぎで準備をしなければ通園バスに乗り遅れるというぎりぎりの時刻になるまで待っていたのだった。

わざわざそんなことをしたのは、トイレへ行く時間を葉月に与えないようにするためだった。結果として朝食を摂る時間も奪ってしまうことになったが、それはあくまでも副産物にすぎない。皐月の狙いは、葉月に朝一番のトイレを使わせないようにするところにあった。

むろん、皐月が葉月にトイレを使わせなかったのは、保育園で更に恥ずかしい目に遭わせて、それを口実に、葉月が自分や弥生、それに他の保育士たちの言いつけに従わざるを得なくなるよう仕向けるためだった。だが、葉月は皐月のそんな企みにはまるで気づいていない。

悪だくみに気づいていないどころか、むしろ、皐月が自分を急かす理由にしても、要らぬパンツの穿き替えなどで余計な時間を費やしたせいだとさえ思い込み、通園バスに乗り遅れないようにと、言われるままマンションから連れ出されたのだった。

＊

待つほどもなく水無月の運転するバスがやって来て、皐月に背中を押されおずおずとステップに足をかけた葉月だが、運転を担当する水無月の他に既に先客が乗り込んでいるのに気づいて、はっとしたように両目を大きく見開いた。

その先客というのは、自分が通っている中学校のジャージを着た芽衣で、運転席のすぐ後ろの席に腰かけていたのだが、扉が開くと同時に乗降口まで足早に近づいてきて、ステップを昇る葉月に向かって優しく手を差し伸べているのだった。

「おはよう、葉月ちゃん。今日からよろしくね」

驚いてステップを昇る脚を止めた葉月の体に腕を絡め、強引に通路へ引き上げるようにしながら、芽衣は声を弾ませた。

「ど、どうして芽衣ちゃ……芽衣お姉ちゃまが乗ってるの？」

思いがけない再会に昨日の水族館のトイレでの痴態が脳裏をよぎり、葉月は顔を赤くしながらおそるおそる訊いた。

「うふふ。私、葉月ちゃんと同じなんだよ」

葉月の問いかけに、芽衣は悪戯っぽく笑って応えた。

「は、葉月と同じ……？」

「そう、葉月ちゃんと同じで、職場体験。保育士さんたちが保育園でどんなお仕事をしているのか、実際に体験させてもらうことになったの。ほら、昨日、葉月ちゃんのお姉さん――御崎先生が私に耳打ちしてたでしょ？　あれって、よかったら保育園で職場体験させてもらえるよう園長先生のお許しを貰ってあげてもいいわよっていう御崎先生からのお誘いだったのよ。もちろん、私はすぐにお願いしたわよ。葉月ちゃんもそうらしいけど、私も将来は保育士さんになりたくて仕方ないんだもん。それに、せっかく知り合いになれた可愛い葉月ちゃんと少しでも一緒にいたいし。だから、葉月ちゃんと同じ保育園で職場体験させてもらうことにしたの」

芽衣はいかにも嬉しそうにそこまで一気に早口で説明し、それから、少し間を置いて付け加えた。

「でも、何から何まで葉月ちゃんと同じってわけじゃないんだけどね。葉月ちゃんは年少さんの園児として保育園生活を経験することになっているけど、私は保育士の見習いとして職場体験をするのよ。だって、中学生にもなって、もういちど保育園児に戻るなんて変だもん。でも、葉月ちゃんはまだ小学生だし、とっても可愛いから、保育園児に戻るのもいいと思うよ。だって、実際、保育園の制服がこんなに似合ってるんだもん。――正直言って、体の大きな葉月ちゃんが年少さんになって保育園に通うことになってるって御崎先生から昨日教えてもらった時はなんだか変に思ったけど、これなら、ちっとも変じゃないよ。葉月ちゃん、私より背が高いけど、でも、保育園の制服、とっても似合ってるよ。背が高いことさえ気にしなかったら、どこから見ても可愛い保育園児だよ。それも、短いスカートから可愛いパン

ツをちらちら見せてるとこなんか、年少さんそのものだよ。うん、これなら大丈夫。他の子供たちに混ざっても変じゃないから自信を持って」
「そ、そんな……」
芽衣は親切心から、初登園の葉月を元気づけようとして「自信を持って」と言ったのだろうが、当の葉月にしてみれば、保育園の年少さんにしか見えないと言われても、なんの慰めにもならないどころか、むしろ、羞恥をこれでもかと煽りたてられるばかりだ。しかも、制服に着替えさせられた時から気になって仕方のなかったスカート丈の短さを改めて指摘され、ますます顔が赤く染まってしまう。
赤い顔で俯いたままそれ以上は何も言えなくなってしまった葉月と、幼い妹を気遣うしっかり者の姉さながらの芽衣。そんな二人の様子を眺めながら、皐月は思わず胸の中でにやりとほくそ笑まずにはいられなかった。水族館のトイレで出会った時、自分の企みを進めるための持ち駒として芽衣を利用するのもわるくないかなとふと思いつき、さりげなく計画に引き入れた皐月の狙いはどうやら的中したようだ。

「さ、バスを出すから、芽衣さんも葉月ちゃんも座ってちょうだい。立ったままだと危ないからね」
一瞬しんと静まりかえった車内に、水無月の声が響き渡った。
「そうね、いつまでもぐずぐずしてちゃ、次の待合場所に着くのが遅くなっちゃう。芽衣さんは元の席について、葉月ちゃんもどこかに座りなさい」
水無月の声を受けて、皐月がぽんぽんと手を打ち鳴らした。
皐月に言われるまま芽衣はもともと座っていた席に腰かけたが、初めて通園バスに乗る葉月はどこに座っていいのかわからず、おろおろするばかりだ。
そこへ、
「こっちへいらっしゃい、葉月ちゃん。一緒に座りましょ。お外がよく見えるように葉月ちゃんが窓側の席に座るといいわ」
という芽衣の声が飛んで来た。
一瞬どうしようかと躊躇った葉月だが、そこに座らせてもらいなさいと皐月が目で指図しているのに気づくと、おどおどした様子で、芽衣に言われるまま窓側の席に腰かけようとした。
が、慣れないスカートに加え、園長や皐月の企みでスカート丈が短く仕立てられているせいで、腰をおろす時に制服の裾が座席の手すりに引っかかり、おねしょパンツの替わりにと穿き替えさせられたシナモロールの女児用ショーツが丸見えになってしまう。
「わ……きゃ！」
葉月は、思わず男声で喚いてしまいそうになるのを慌てて少女めいた声色で悲鳴をあげ、もたもたした身のこなしで手すりの端に引っかかったスカートの裾をたぐり寄せた。
だが、なにぶん慣れないスカートと初めての車内ということもあって、スカートの乱れを整えて座席に腰をおろすまでにはたっぷりの時間が必要だった。むろん、その間、葉月と入り替わりに通路側の席に座ろうとしていた芽衣の目にショーツの純白の生地がさらされたままだったのは言うまでもない。

「葉月ちゃん、今日もナプキンなんだね。でも、そうよね。昨日の昼前に始まっちゃったんだもん、すぐには終わらないよね」
やっとのこと座席につき、ぎゅっと閉じた両脚の上に通園鞄を置いた葉月のスカートの裾から覗く太腿をちらと見ながら、芽衣は気遣わしげな様子で話しかけた。どうやら、スカートの裾をたぐり寄せようとして身をよじっている間に、ショーツだけではなく、クロッチ部分から外に出ているナプキンの羽根まで見られてしまったようだ。
「あ……」
通園鞄の上に載せた両手をぎゅっと握りしめた葉月の口からあえかな声が漏れ出て、視線が宙を彷徨う。
「ご、ごめんね、葉月ちゃん。初めてのことだもん、こんなこと言われたら恥ずかしいよね。私ったら、自分は慣れっこになっちゃったもんだからたいして気にもしないで馬鹿なこと言っちゃったけど、そうだよね、葉月ちゃんはまだ慣れてないもん、恥ずかしくてたまんないよね。なのに私ったら……あ、そうだ。ね、ね、葉月ちゃんが御崎先生と一緒に住んでるマンションって、あの建物？」
思ってもみなかったほど激しい羞恥の表情を浮かべる葉月の様子に、芽衣は、咄嗟に話題を変えようとしてだろう、どこかとりなすような口調で葉月に言って窓の外を指差した。
「え？　あ、そうです。生け垣の向こうに見えてる古い木造の建物がそうです」
葉月は芽衣が指差す方に顔を向けておずおずと頷いた。
「へーえ、ちょっと古いけど、お洒落な建物ね。うわ、時計台が付いてて、いい感じ。それで、葉月ちゃんたちのお部屋はどれなの？」
芽衣はわざとらしい歓声をあげて重ねて訊いた。
「お姉ちゃまと私が住んでるのは、端から二番目の……」
そこまで言って葉月は大きく両目を見開き、唇を震わせて押し黙ってしまった。
自分の部屋のベランダに布団が干してあるのが見えたのだ。マンションを出てすぐ、忘れ物を思い出したと言って、皐月が歩道からエントランスに駈け戻った。あの時、葉月が寝ていた子供用ベッドから敷布団を剥ぎ取ってベランダの手すりに掛けたに違いない。しかも、よくよく目を凝らしてみれば、目が覚めた時には薄かったシミが、夏の日差しを受けて乾いてきたせいか、幾らか色が濃くなっているようだ。
中学生の芽衣は視力の発達が殆どピークに達する年ごろだから、走り出したバスの中からでも、ベランダの手すりに干してある布団を見落とすことはあり得ない。そして、おそらく、花柄のシーツに広がった薄茶色のシミを見逃すことも。
一瞬はそれがどういうことなのかわからなかった芽衣だが、すぐに事情を察したようで、困ったような顔をしてバスの窓から慌てて目をそらした。
「あ、そういえば、どうして芽衣さんがバスに乗っているのかしら？　確かに、昨日、職場体験のお許しを園長先生から貰ってあげるって言ったけど、添乗係までお願いした憶えはないわよ。それに、芽衣さんと卯月ちゃんのお家は保育園とあまり遠くないから、芽衣さん、いつも歩いて卯月ちゃんを送り迎えしてたじゃない。なのに今日に限ってバスに乗ってるのって、何かわけがあるのかな？」
おねしょ布団を見られて唇を噛みしめ顔を伏せている葉月と、見てはいけない物を見てし

まったとでもいうふうな表情を浮かべて押し黙る芽衣。そんな二人の様子を面白そうに見やりながら、前から二番目の座席に腰をおろした皐月は、芽衣の肩越しに声をかけた。
「あの、昨日、先生たちより先にトイレから出て、すぐの所で水無月さんに会ったんです。なんでも、ベンチに座って待ってらしたそうなんだけど、先生たちがなかなか出てこないから気になって様子を見にいらしたとかで。それで、その時、私がトイレの中で何があったのか事情を説明して、ついでに、職場体験させてもらえることになったことも話したんです。そしたら、もしも早起きが苦にならないんだったら、添乗係も体験させてあげようかって水無月さんにおっしゃっていただいて。それで、今朝、水無月さんが車庫からバスを出す時間に合わせて保育園に行って乗せてもらったんです。今日は母さん、パートがお休みの日だから、卯月の送り迎えは母さんにまかせて」
皐月の問いかけに、芽衣はそこまで簡単に説明して、運転席に座っている水無月の顔をルームミラー越しに見た。
「そういうことなのよ。芽衣さんに添乗係もしてみないかって誘ったこと、昨日のうちに御崎先生にも話しておいてもよかったんだけど、ちょっとびっくりさせちゃおうかなって思って黙っていたの。お楽しみは後でってことでね」
水無月が、前方を注視しながらも悪戯ぽっく微笑んで小さく頷いた。
「ああ、そういうことだったの」
皐月は納得顔で頷いた。

【三】

保育園の正門に横付けしたバスから、皐月と芽衣に誘導されて園児たちがぞろぞろおり始めたが、一人の例外もなく、自分の席を立つ時も、通路を歩く時も、ステップから地面におり立つ時も、みんな、まだ車内に残っている葉月の方にちらちらと目をやっていた。自分たちよりもずっと体の大きな女の子が保育園の制服、それも、これまで見たことのないピンクの制服を着て送迎バスに乗り合わせているのだから、気になって仕方ないのは当然のことだ。
待合場所でバスが停まるごとに園児たちが乗ってきて葉月の存在に気づき怪訝そうな顔をするたび、皐月は「この子のことは保育園についてから説明してあげる」と言い聞かせていたものの、園児たちの疑念はピークに達して久しい。
「ほらほら、いつまでもバスの中を見てないで、ちゃんと前を向いて歩くのよ。じゃないと、石に躓いてころんしちゃうからね」
皐月はバスからおりてくる園児一人一人に声をかけ、グラウンドで待っている各々の担任保育士たちのもとに向かわせた。
もちろん、芽衣も汗みずくになって手伝うのだが、なにせ慣れない仕事な上、園児たちが一様に葉月の方に向かって好奇に満ちた目を向けたまま歩くものだから、全員をバスからおろすのに、普段よりもたっぷり時間がかかるのは避けられなかった。
そうして、ようやくのこと、最後に残った葉月が乗降口に姿を現す。

だが、グラウンドで各々の担任保育士の前に並びながらも好奇心満々といった様子でこちらを見ている園児たちの視線を浴びて、葉月は足をすくめてしまった。救いを求めるような目で皐月の顔を見つめ、昇降口の手すりをぎゅっと握りしめて、なかなかステップに足をかけようとしない。

それに対して行動を起こしたのは芽衣だった。

「さ、おりてきなさい。転ばないように、私の手につかまるといいわ」

身をすくめるばかりの葉月の様子を見かねた芽衣がバスの乗降口に駈け寄り、すっと右手を差し伸べた。

けれど、葉月はこわばった表情で弱々しく首を振るだけだ。

「だけど、いつまでもそんな所にいると、パンツが見えちゃうよ。　それでもいいの？」

芽衣の言う通りだった。バスの乗降口に立ちすくんでいる葉月を園児たちが下から見上げる格好になって、ただでさえ丈の短いスカートの中を覗き込むような状況になる上、時おり吹く風のせいでスカートの裾が捲れ上がって、シナモロールのショーツが丸見えになってしまう。

葉月は右手でスカートの裾を押さえ、左手を、芽衣が差し伸べた手に向かってそろそろと伸ばした。

突然、そこへ、どこか刺々しい女の子の声が飛んでくる。

「お姉ちゃん、今朝は卯月のことほっぽって一人でさっさとお出かけしちゃうし、それに、随分その子と仲良しみたいじゃない。誰なのよ、その子。ひばり保育園の制服を着てるけど、そんな色の制服なんて見たことないし、それに、その子、すっごく背が高いよね。誰なの、その子!?」

バスをおりる園児たちの流れとは逆にグラウンドからこちらへやって来たその女の子は、葉月の顔をきっと睨みつけ、きつい口調で芽衣に問い質した。

「あ、卯月。この子は、葉月ちゃんっていって、今日から保育園に通うことになっているのよ。それで、葉月ちゃんは御崎先生の妹で……」

葉月たちの眼前に立ちはだかったその女の子こそ、芽衣の妹で、年長クラスの園児・菅原卯月だった。
「今日から保育園に通う？　こんなに大きな子が？」
芽衣の説明に対して、卯月は半ば驚き半ば呆れたような声を出した。
「うん、そうなのよ。私の妹なの。体は大きいけど、年少さんなの。仲良くしてあげてね」
芽衣に代わってそう応えたのは皐月だった。
「御崎先生の妹？　年少さん？　こんなに体がおっきくて背が高いのに？」
卯月はいかにも怪訝そうな顔をして重ねて訊いた。
「そうよ。こんなに大きな体で年少さんだなんて変だと思うでしょうけど、後で説明をしてあげるから、それまで待っていてちょうだい。ほら、卯月ちゃんのクラス、あとは卯月ちゃんだけよ。他のお友達はみんな揃ったみたいだから、さ、卯月ちゃんも早く列に並びなさい」
「……わかった。じゃ、後でちゃんと説明してね、御崎先生」
卯月は尚も要領を得ない表情を浮かべながらも皐月に向かって渋々頷いてから、改めて芽衣の顔を見上げた。
「今朝は保育園までママに送ってもらったんだよ。そりゃ、ママに送ってもらうのも嬉しいけど、お姉ちゃんが朝早くに一人でお出かけしたってママから聞いて、どうしたんだろって心配したんだからね。それで、ずっとずっと心配してたら、お姉ちゃん、バスからおりてくるんだもん、卯月、びっくりしちゃったんだよ。それに、私の知らない子と手をつないだりしてさ。どうしてそんなことになったのか知らないけど、そうなるって前からわかってるんだったら、ちゃんと話しておいてくれればいいのに」
卯月は半ば責めるように半ば拗ねたように言って、さっと踵を返し、自分たちのクラスの園児が列をつくって待っている方に向かって歩き始めた。
「今日から職場体験すること、卯月ちゃんに秘密にしていたの？　それに、どうやら、大好きなお姉さんを見ず知らずの子に取られたと思ってのこともあるんでしょうけど、ご機嫌斜

めね、卯月ちゃん」
不意に、若い女性の声が芽衣の耳に飛び込んできた。
はっとして振り向いた芽衣の瞳に映ったのは、髪をポニーテールにまとめた新人保育士・遠藤弥生の姿だった。
「そうみたいですね。今日から見習い保育士さんになるのを黙ってたの、卯月に意地悪する気なんか全然なくて、びっくりさせるつもりだけだったのにな」
芽衣は、卯月を送り迎えしているうちに顔馴染みになり、いつしか親しげに会話を交わす仲になっていた新人の弥生に向かって、ちょっとしょげた声で応じた。
「おはよう、遠藤先生。もう園長先生から聞いていると思うけど、今日から芽衣さんに保育士見習いということで職場体験をしてもらうことになっているの。遠藤先生に預けるから、どんどん用事を言いつけてちょうだい。変に遠慮なんてするより、保育士がどれほど大変なお仕事なのか今のうちに知っておいてもらった方がいいから」
葉月と二人きりの時は弥生のことを馴れ馴れしく下の名で呼びならわしている皐月だが、さすが、職場ということもあって、ここはきちんと『遠藤先生』と呼んで手短に言った。
「承知しました、主任。――これからよろしくね、芽衣さん。あ、ううん、ちゃんと『菅原先生』って呼ばなきゃいけないかな。見習いとはいっても、子供たちにとっては私たちと同じ保育士なんだから」
弥生は、明るい笑顔で芽衣に向かって右手を差し出した。が、その笑みがどことなくぎこちなく感じられてならない。
「それと、こっちが……」
弥生と芽衣が握手し終えるのを待って、皐月は、バスのステップからおり立った葉月の背中をぽんと突いて自分の前に押しやった。
が、皐月が紹介するまでもなく、弥生は満面の笑みをたたえて葉月の顔を正面から見据えて言った。
「おはよう、葉月くん――あ、ううん、今日からは葉月ちゃんだっけ。葉月ちゃんの担任になる遠藤弥生です、よろしくね。葉月ちゃん、自分のお名前、きちんと先生に教えられるかな？」
弥生は、芽衣に対してはどこかぎこちない笑みを見せていたのだが、葉月に対してしめした笑みは、なぜとはなしに、獲物を目の前にした獣が舌なめずりせんばかりのようだった。
「葉月くん？　遠藤先生、今、葉月ちゃんのこと、葉月くんって呼びませんでした？　あ、ううん、慌てて呼び直したけど、最初はそう呼んだみたいに思えたんですけど……。それに、御崎先生が紹介する前に名前を呼ぶなんて、前からご存じだったんですか、葉月ちゃんのこと？」
弥生に向かって葉月が返事をする前に、芽衣が怪訝そうな顔つきで尋ねた。
それに対して弥生は、葉月に対して見せたのとはまた違った悪戯めいた笑みを浮かべて
「私が葉月ちゃんのことを『葉月くん』って呼んだですって？　あら、そうだったかしら？　うふふ。さ、どうだったかな。――でも、ま、御崎先生のお宅に行ったことはあるし、その時に葉月ちゃんのことは見かけたことがあるから、まるで初対面というわけじゃないのは確かね」
と曖昧に応えただけで、再び葉月の方に向き直るのだった。

葉月は、弥生の視線を受けて、射すくめられるような思いだった。初めて会ったあの時の目はこんなじゃなかった。全体の雰囲気は楚々としていて、（園長室で聞かされてわかったことだが、強姦未遂というひどい目に遭ったせいで）物憂げで幾らか陰鬱な目こそしていたけれど、こんなに冷たい眼光をたたえた目では決してなかった筈だ。それも、冷たいだけでなく、こちらの隙を窺ってでもいるかのような鋭い視線などでは。

「どうしたの、自分のお名前、先生に教えられないのかな？」

気圧され口を開けられないでいる葉月に向かって、それこそ、本当の園児に対するみたいな口調で弥生は話しかけた。

そうして、葉月がなかなか口を開こうとしないのを見て取ると

「菅原先生に手をつないでもらってバスからおりるところ、先生も見ていたのよ。入園早々、新しい先生と仲良くなるくらいだからお口も達者で積極的なんだろうなって思ったんだけど、それって先生の思い違いだったのかしら。本当は、自分のお名前も言えないくらい恥ずかしがり屋さんなのかな、葉月ちゃんは」

と、僅かに首をかしげて続ける。

その声に憐憫と嘲りとが入り混じった笑いが含まれているように思えたのは、決して葉月の気のせいばかりではない。

「ほら、ちゃんとお名前を言わなきゃいけないでしょ？」

皐月がスカートの上から葉月のお尻をぽんと叩いた。

「……葉月……御崎葉月です」

ようやく葉月は弱々しく応えた。

「はい、よくできました。今日から保育園のお姉ちゃんになるのよ。もう赤ちゃんじゃないんだから、先生が訊いたことにはきちんと答えるようにしましょうね。それで、葉月はどのクラスになるのかな？」

弥生はわざと大きく頷いてみせてから続けて訊いた。

「……と、特別年少クラスの……ひ、ひよこ組です」

葉月は、制服の胸元に縫い付けてある名札に書かれた文字をちらと見て躊躇いがちに応えた。

「そうね、葉月ちゃんは今日から特別年少クラスのひよこ組に入るのよ。ただ、ひよこ組には葉月ちゃん一人しかいないの。でも、寂しがることなんてないからね。私がずっと付きっきりでお世話をしてあげるし、芽衣さんが私のお手伝いをして葉月ちゃんの面倒をみてくれるから。――あ、いけない。菅原先生って呼ばなきゃいけないって言ったばかりだったのに。じゃ、葉月ちゃん、葉月ちゃんの受け持ちの先生のお名前、ちゃんと憶えられたかな。憶えられたかどうか、試しに呼んでみようか。最初は私から。はい、私は誰でしょう？」

「遠藤先生、ひよこ組の遠藤先生です」

「よくできました。じゃ、私の隣にいるのは？」

「芽衣お――菅原……菅原先生です」

自分よりもずっと年下の女の子のことを『お姉ちゃま』と呼ぶよう強要され、そして今度は『先生』と呼ばされるのだ。大学で初等教育を学んでいる自分が、ただ漠然と保育士になりたがっているにすぎない中学一年生の少女のことを。葉月は、例えようのない屈辱に胸が

焼かれる思いだった。
「それじゃ、葉月ちゃんの隣にいるのは？」
「おねえ――み、御崎先生です」
「はい、よくできました。他の先生方の名前はあとで教えてあげるから、ゆっくり憶えていけばいいわ。じゃ、その前に朝のご挨拶を済ませちゃおうね。朝のご挨拶っていうのは、先生と子供たちが『おはよう』の挨拶をして、忘れ物がないかどうか調べたり、保護者の方に書いてもらった連絡帳を先生が預かったりする、朝一番の大切な時間のことなのよ。ほら、年長さんと年中さんのお兄ちゃんやお姉ちゃんたちも、葉月ちゃんと同じ年少さんのお友達も、みんな行儀良く並んで、先生に鞄の中を見てもらったり、連絡帳を渡したりしてるでしょ？　だから、葉月ちゃんも同じようにするのよ」
自分たちの名前を一通り葉月に言わせた弥生は、次に、グラウンドの方を指差してそう言った。

【四】

芽衣に手を引かれて葉月がグラウンドに足を踏み入れると、それまでもちらちらとこちらに向けられていた園児たちの視線が一斉に集まった。
「ほら、駄目でしょ、ちゃんと先生の方を見なさい」
「こらこら、まだ朝のご挨拶の途中なんだから、じっとしてるのよ」
興味津々といった様子で葉月に無遠慮な目を向ける園児たちをたしなめる保育士たちの声がグラウンドのあちこちから聞こえる。
「みんな、先生の言うことをきいて、ちゃんと朝のご挨拶を済ませなきゃ駄目よ。あとできちんと説明してあげるから、それまで待ちなさい」
葉月のことは弥生と芽衣にまかせ、皐月が園児たちの列の前に立って大声をあげた。
「はい、ここでいいわ。むこうの列から年長さん、年中さん、でもって年少さんの順番になっているから、特別年少クラスの葉月さんは、ここで朝のご挨拶をしようね」
皐月が言い聞かせてようやく園児たちが静かになる中、弥生は、年少クラスの園児が二列になって並んでいるすぐ隣の場所に葉月を立たせ、
「じゃ、鞄の中を見てみようかな。葉月ちゃん、ハンカチやティッシュ、ちゃんと持ってきたかな」
と言って、葉月が肩にかけている黄色の通園鞄に手を伸ばした。
そうして弥生は葉月の返事を待たずに蓋を開け、通園鞄の中にすっと右手を差し入れたかと思うと、芽衣に掌を広げるよう指示して、鞄の中からつかみ上げた物を順番に芽衣の手の上に置いていった。
「最初はハンカチ。汗をかきやすい季節だから、ちゃんとガーゼのハンカチか。さすが、準備をなさるのが御崎先生なだけに、小さなことまで用意周到ね。で、次はポケットティッシュ。うふふ、可愛いカバーに入ってるんだ。ええと、それから――」

そう言いながら弥生が次に通園鞄から取り出した物を目にした瞬間、葉月の頬がかっと熱くなる。
「これは替えのパンツね。汗をかきやすいから、グラウンドでお友達と一緒に駆け回った後で穿き替えさせてあげればいいのかな。それとも、お昼寝の時の寝汗で濡れちゃった時の替えかしら。――あら？」
決して独りで呟くようにではなく、葉月や芽衣のみならず、それこそ、グラウンド中の園児みんなに聞こえるのではないかと思えるほど声を張り上げ、新しいショーツをこれ見よがしに大きく振ってみせる弥生だったが、再び通園鞄に手を入れた瞬間、不思議そうな顔をした。
「どうしたんですか、遠藤先生」
何があったのかと、心配そうな顔で芽衣が尋ねる。
それに対して弥生はどこか呆れたような表情を浮かべて、鞄の中に差し入れた手を引き上げた。
「え？　また替えのパンツですか？　それも、二枚も」
弥生がつかみ上げた物を手渡された芽衣がきょとんとした顔になった。
「そうなのよ。さっきのと合わせて、替えのパンツが三枚。いくら汗をかきやすい季節だとはいっても、ちょっと多すぎるわよね。何か事情があるのかしら」
弥生はわざと不思議そうな表情を浮かべつつ、わざとまわりの園児たちにもよく聞こえるようにして言った。
「そうそう、連絡帳を読んでみましょう。何か書いてあるかもしれないから。ええと、どれどれ――ふぅん、なるほど。そういうことだったのか」
「なんて書いてあるんですか？　替えのパンツが三枚も入っている理由、書いてあるんですか？」
思わせぶりに言って健康連絡帳を読み進める弥生に向かって、芽衣が気がかりな様子で尋ねる。
「うん、あのね、葉月ちゃん、おねしょしちゃったらしいのよ。今朝、御崎先生が葉月ちゃんを起こしにいったら、パンツとパジャマとシーツがびしょびしょだったんだって」
訊かれて、弥生は健康連絡帳から目を離し、葉月の顔と芽衣の顔とを交互に見比べて言った。もちろん、園児たちや他の保育士たちにも聞こえるよう『おねしょ』という部分を強調するのを忘れない。
「あ、そういえば、バスの窓から……」
弥生が言った『おねしょ』という言葉に、通園バスの窓から目にしたベランダの布団を弥生は思い出したが、それ以上は口にするのが憚られ、途中で言葉を飲み込んだ。
反射的に葉月は、園児たちの列の前にいる皐月を恨みがましい目で睨みつけた。が、大勢の目が再び一斉に自分の方に向けられるのを感じて、おずおずと顔を伏せてしまう。
「やだ、あの子、おねしょしちゃったんだって」
「体はあんなに大きいのに、年少さんみたいにおねしょしちゃうんだ、あの子」
「そういえば、年少さんの列のすぐ隣に立ってるんだよね。ほんと、どういう子なんだろ」
「先生は後で説明してあげるって言ったけど、いつになったら教えてくれるのかな」

弥生の言葉がきっかけになって、いったんは鎮まっていた葉月の正体に対する好奇や疑念が再び園児たちの胸の中にむくむくと湧き起こり、あちらこちらで互いに囁き合う声が聞こえ始めた。
けれど、弥生はそんな喧噪になどまるで気に留める様子もなく改めて健康連絡帳に目をやると、再びわざとらしい驚きの声をあげた。
「あらあら、おねしょだけじゃなく、おもらしまでしちゃったんだ、葉月ちゃん。ええと、昨日だけでも、制服を試着する時に一回と、お家で二回。それに、おもらしじゃないけど、水族館のトイレでもちゃんとおしっこをできなくてパンツを汚しちゃったみたい」
弥生は連絡帳に目をやったままそう言ってから、おもむろに顔を上げ、芽衣に手渡したショーツを見て納得顔で頷いた。
「あ、そうか。それで、替えのパンツがこんなにたくさん鞄の中に入っていたわけね。お昼寝の時におねしょでパンツを濡らしちゃうかもしれないし、お友達と遊ぶのに夢中でトイレへ行きそびれてパンツを濡らしちゃうかもしれないし。そうね、だったら、三枚くらいは替えのパンツが必要になるわね。ううん、ひょっとしたら、もっと要るかもしれないくらいだわ」
弥生がそう言い終わるか終わらないかのうちに、園児たちのざわめきがますます大きくなる。
が、次の瞬間、ピーッと笛を吹く音が聞こえて、園児たちはたちまち静かになった。
笛の音が聞こえた方に思わず葉月が視線を向けた先に、夏の日差しを浴びてきらきら光る金属製のホイッスルを口にした皐月の姿があった。
「みんながなかなか静かにならないから、このまま朝のご挨拶を続けるのは無理みたいです。今日だけ特別に各々の教室で朝のご挨拶の続きをするから、ちゃんと並んで先生のあとについて教室に入りなさい。それと、朝のご挨拶が終わった後、入園式を開くから、みんな発表室に集まること。いいわね？　――じゃ、先生方、子供たちの誘導をお願いします」
ほんの短い間だけ葉月と目を合わせた皐月だったが、すぐに園児たちの列を見渡して声を張り上げ、もういちどピッと笛を吹いた。
「今ごろ入園式だって。なんか、変なの」
「うん、変だよね」
「あ、そうか。ほら、あの子の入園式なんじゃない？」
「え？　ああ、そうだね。きっと、そうだよね」
皐月が言った『入園式』という季節外れの言葉に怪訝な表情を浮かべた園児たちだったが、中の一人がふと気づいて口にした推測を耳にするなり、さも納得したように互いに頷き合うと、葉月に向かって好奇に満ちた目を向けたまま、先にたって歩き出した保育士に付き従って各々の教室に向かって足を踏み出した。
「入園式？　ぼく……は、葉月の入園式……!?」
建物の中に消えてゆく園児たちの列を見送りながら、葉月は、園児たちが互いに言い交わす言葉を、呆然とした表情で口の中で繰り返した。
「そう、今から葉月ちゃんの入園式を開くのよ。葉月ちゃんのこと、他のお友達にまだちゃんと紹介してないから、新しいお友達ですってお披露目しなきゃね。それに、菅原先生のこ

ともみんなに紹介しなきゃいけないし」
葉月の呟き声を耳にした弥生が、こともなげに言った。
「で、でも……」
「あら、恥ずかしいの？　葉月ちゃん、体は大きいのに、人見知りが激しいのかな。でも、みんなにちゃんとお顔を憶えておいてもらわないとお友達もできないから、勇気を出してみんなの前で自分の名前をしっかり言って、仲良くしてくださいってきちんとご挨拶しなきゃね」
何か言いかけて、けれど途中で言葉を飲み込んでしまった葉月に、弥生は励ますように言った。
そうして、葉月の耳元に唇を寄せて
「そりゃ、恥ずかしいよね。小学校五年生なのに、保育園の年少さんになっちゃうんだもん、恥ずかしいのが当たり前よね」
と囁いたかと思うと、芽衣に聞かれないようますます声をひそめて、こんなふうに付け加えるのだった。
「でも、本当は小学生どころか、大学生なのよね、葉月ちゃんは。それも、女の子じゃなくて、いやらしいおちんちんを持ってる男の子。それが年少さんの女の子として保育園に通うんだもの、恥ずかしくて恥ずかしくてたまらないわよね。でも、それでいいのよ。恥ずかしい目に遭うたびに、葉月ちゃんは女の子に変わっていくんだから。私を襲ったバカ男と同じ最低のケダモノから、けがれを知らない可愛い女の子に変身していくんだから。これからたっぷり時間をかけて、御崎先生の期待以上に葉月くんを葉月ちゃんに躾け直してあげるから楽しみにしてなさい」
「……！」
弥生の言葉に、葉月はぎょっとしたように顔を上げた。
弥生の目には、つい今しがた葉月に向かって囁きかけた言葉が冗談でもなんでもないことをしめす、相手を射すくめるかのような鋭くぎらぎらした光が宿っていた。

第八章　～羞恥の入園式～

【一】

園児たちが各々の教室で朝のご挨拶を終えてしばらくすると、柔らかな音色のチャイムが鳴り響き、それを合図に、保育士たちが受け持ちの園児を『発表室』へ連れて行った。

学校とは違って、保育園には体育館や講堂といった施設がない。その代わりにあるのが、普通の教室に比べると何倍も広く、オルガンやピアノが置いてあって普段は音楽の時間に使うこともできるし、踏み台や椅子を並べることで合唱や合奏の舞台にして音楽会を開くこともできる、多目的の『発表室』や『つどいの部屋』と呼ばれる部屋で、卒園式や入園式といった行事の会場として使われることも多い。

発表室の壁は、保育士たちが手作りした色とりどりの造花や紙製の人形や星で飾りたてられ、前方の扉から入ってすぐの所には、きらびやかなモールで彩られたアーチが立っていた。それは、どれも、四月の初旬に新しい園児たちを迎え入れた入園式で使った後しまいこんであったのを再び倉庫から運び出してきた物ばかりだった。

しばらくの間は園児たちの甲高い声でざわついていた発表室だが、皐月が部屋の中央に立ってぱんぱんと両手を打ち鳴らすと、ほどなく園児たちのお喋りがやみ、静寂が訪れた。

「それじゃ、今から臨時の入園式を始めます。四月の入園式とは違って、お母さんやお父さんはいないし、自由登園の間だからお友達も少ないけど、そのぶん、みんなで四月の入園式の時よりもしっかり拍手をして新しいお友達を呼びましょうね。新しいお友達のお名前は御崎葉月ちゃんです。いいかな？　じゃ、みんなで一斉に、はい、葉月ちゃーん！」

園児たちが静かになるのを待って、皐月が葉月の名前を呼んだ。

それに合わせて、床に座った園児たちが声を合わせて

「葉月ちゃーん！　御崎葉月ちゃーん！」

と大声を張り上げる。

同時に前方の扉が開いて先ず弥生が姿を現し、モールに彩られたアーチの前に立った。

続いて、芽衣に手を引かれた葉月がおどおどした様子で発表室に入ってくる。

「じゃ、そのまま進んで、アーチの下をくぐるのよ。それから、みんなに向かってぺこりと頭を下げればいいの。葉月ちゃんはお利口さんだもん、難しくないわよね？　四月の入園式の時は新しい年少さんはみんなできたから、負けないように頑張るのよ」

弥生は、自分の後から部屋に入ってきた葉月の耳元にそう囁きかけると、芽衣に向かって目で合図を送り、葉月の背中をとんと押した。

「さ、行きましょう、葉月ちゃん。私がお手々を握っていてあげるから心配しなくて大丈夫よ」

芽衣が葉月の顔を気遣わしげに見て、ゆっくり歩き出した。

が、葉月はなかなか足を踏み出そうとしない。本当は大学生の男の子がいよいよ保育園の年少クラスの女の子として扱われることになるのだから足がすくんでしまうのも当たり前のことだが、葉月がなかなか歩き出そうとしない理由は、実は、それだけではなかった。

「ほら、いつまでもみんなを待たせてちゃいけないわよ」
弥生がもういちど葉月の背中を、今度は両手でとんと突いた。
その拍子に葉月の脚が動いて、芽衣に手を引かれるまま、入園式用のアーチをくぐって部屋の中央まで連れて行かれてしまう。
葉月は弥生に背中を突かれた瞬間、園児たちの前に連れ出されまいとして両脚を踏ん張ったのだが、それも束の間、すぐに顔色を変えて抵抗を諦め、芽衣に付き従ったのだった。実は、弥生たちに気づかれないように努めていたが、そのまま抵抗を続け、下腹部に余計な力を入れたりしたらどうなるかしれたものではない状態に葉月は追い込まれていた。ついさっき、芽衣が歩き出した時に葉月の足がすくんだのも、そのせいだった。
「じゃ、改めて紹介します。今日からみんなのお友達になる御崎葉月ちゃんです。はい、拍手〜」
二人がアーチをくぐって発表室の中ほどまで進むと、葉月の胸の内などまるでしらぬげな明るい声で皐月が園児たちに歓迎の拍手を促した。
園児たちの手が一斉に動いて、葉月たちは大きな拍手の音に包み込まれた。自由登園の期間だから園児の数は普段の半分くらいだが、それでも、部屋中の園児が一斉に手を打ち鳴らすと、なかなかの音量だ。

「あ、葉月ちゃんのパンツ、かっわいーい。あたしのと同じシナモロールだぁ」
鳴りやまぬ拍手の中、不意に、甲高い女の子の声が園児たちの一角からあがった。
声のする方に葉月が反射的に目をやると、、年少クラスの列の中に愛くるしい女の子の姿があった。その女の子は発表室の床にお尻を落として体育座りをしているのだが、自分の制服のスカートがはだけているのを気にする様子もなく、むしろ、スカートの裾からこれみよがしにショーツをさらけ出すようにしてにこにこ笑っていた。
その子だけではなく、園児たちはみな部屋の床に座って葉月の姿を見上げている。そのせいで、ただてさえ丈の短いスカートと相まって、園児たちの目には葉月のショーツが丸見えになっていた。今更ながらそのことに気づいた葉月は慌ててスカートの裾を押さえたが、もう手遅れだ。
「ね、ね、あれ、なんだろう？」
「え、どれ？」
「ほら、脚と脚の間、パンツの一番下のとこから出てる、なんだか白いの」
「あ、ほんとだ。パンツのリボンじゃないし、なんだろね」
グラウンドでの時のような喧噪にこそならないものの、あちこちでひそひそ囁き合う声が葉月の耳にも届いた。それがナプキンの羽根のことを言い交わしているのだと瞬時に理解した葉月の頬にさっと朱が差す。
「はい、今から大事なことを話すから静かにしてちょうだい。——みんなもとっくに気がついていると思うけど、葉月ちゃんはみんなに比べてとっても体が大きいよね？」
あちらこちらから聞こえる囁き声や葉月の胸の内などまるで気に留めるふうもなく、皐月は澄ました表情で葉月の横に立ち、園児たちの顔を見渡した。
それまでナプキンのことをひそひそと囁き合っていた子供たちだが、自分たちの前に現れた少女が何者なのかいよいよわかるのだという期待に、一斉にぴたっと口を閉ざして前方を

注視する。
「あのね、保育園の制服を着ているけど、葉月ちゃんは本当は小学生なの。それも、一年生とか二年生とかじゃなくて、みんなから見るとずっとずっとお姉さんの五年生なのよ。それに、葉月ちゃん、私の妹だったりします」
初めて見るピンクの制服に身を包んだ少女が実は小学校の高学年で、しかも、自分たちが日頃から面倒をみてもらっている保育士の妹だという事実に、園児たちが再びざわめく。
皐月は両手を打ち鳴らしてそれを鎮め、園児たちの顔を順番にゆっくり見渡しながら続けて言った。
「小さな頃から私にべったりだった妹は、なんでも私の真似をするのが好きで、今度は、私と同じように保育園の先生になりたいって言い出したの。それで、園長先生にお願いして――」

＊

あとはお馴染みの説明だった。弥生の心のケアのためだというのは省きつつ、皐月はこれまでの経緯を虚実とり混ぜて園児に話し、最後にこう締めくくった。
「――というわけで、妹、つまり御崎葉月ちゃんは、今日から年少さんとしてこのひばり保育園に通うことになったの。それも、四月に入園した子より何ヶ月も後に入園したんだから、年少さんの中でも一番の妹ということになるわね。新しい妹ができたと思って、みんな、可愛がってあげてね。本当は小学五年生のお姉さんだってことは忘れて、年少さんの一番小さな妹として可愛がってあげてちょうだい」
（ふぅん、あの葉月って子、私よりも下の年少さんになるんだ。なにが小学五年生のお姉さんよ。ふん、年少さんのちびっ子ちゃんなんかに私の大好きなお姉を渡したりするもんですか。年少さんは年少さんどうし、お子ちゃまのお友達とお人形遊びでもしてればいいんだわ）皐月の説明を聞く卯月の胸の中に、幼いながらも、自分が知らぬ間に姉と仲良くなっていた葉月に対する嫉妬の念が湧き起こってくる。
「さ、それじゃ、今度は葉月ちゃん本人からみんなにご挨拶してもらいましょう。年少さんの中でも一番小さな妹だからまだ上手にお喋りできないかもしれないけど、みんな、ちゃんと聞いてあげてね」
小学生が年少さんとして自分たちと同じ保育園に通うことになると聞かされて、嫉妬と嘲りとがない混ぜになった表現しようのない感情に妖しくほくそ笑む卯月と、それとは対照的に、一様に驚きの表情を浮かべるばかりの残りの園児たち。皐月は、子供たちの反応を興味深げに見やりつつ、葉月の背後にすっと身を退いた。
「え……？」
本人からご挨拶してもらいましょうと言われても、なんの準備もしていない葉月にはどうすることもできない。だいいち、こんな入園式の真似事があること自体、前もって聞かされていないのだ。
と、皐月の代わりに今度は弥生がぴったり身を寄せ、葉月の背中をぽんと叩くと、声をひそめて言った。

「大丈夫よ。私が教えてあげるから、その通りに言えばいいわ」
そうして、返事も待たずに、『入園のご挨拶』を葉月の耳元に囁きかける。
「……」
けれど、咄嗟のことに、葉月は口をつぐんだままだ。
「どうしたの、葉月ちゃん？　やっぱり、年少さんの葉月ちゃんにはご挨拶は難しいのかな。四月の入園式の時は、年少さんなのに、みんなちゃんとご挨拶できたんだけどな。でも、そうね。年少さんの中でも一番小っちゃな妹の葉月ちゃんには難しいかもね」
なかなか口を開こうとしない葉月に、弥生は挨拶の言葉を教えるのを途中でやめ、わざとらしく溜息をつくと、意味ありげに少し間を置いてから、にっと笑って
「だけど、入園のご挨拶もできないような子を年少さんクラスに入れるわけにはいかないわね。そんな子は二歳児クラスに入ってもらわなきゃいけないかな。だとすると、これがお似合いね」
と園児たちにも聞こえるように大きな声で言い、ジャージのポケットからゴム製のオシャブリを取り出して葉月の唇に押し当てた。
「あ、葉月ちゃん、かっわいーい」
「ほんとだ、赤ちゃんみたい、葉月ちゃん」「小学生のお姉さんなのに、本当に私より小っちゃい子みたい」
オシャブリを咥えさせられた葉月の姿に、それまでびっくり顔をしていた園児たちが今度は口々に囃したてる。
「や、やだ、こんなの。こんな、赤ちゃんみたいなの……」
オシャブリを咥えさせられたせいでくぐもった声になりながらも、葉月は恨めしげに訴えかけて首を振った。
けれど、弥生が押さえているため、オシャブリを吐き出すことはできない。
「赤ちゃんみたいでいいのよ。だって、簡単なご挨拶もできない葉月ちゃんは二歳児クラスだもん。二歳児っていったら、まだまだ赤ちゃんと同じよ。年少さんがすごくお姉さんに思えるくらい小っちゃな赤ちゃんと同じなのよ、葉月ちゃんは」

弥生はそう言って、葉月の口にふくませたオシャブリの端を指先でぴんと弾いた。
「ご挨拶する……ちゃんとご挨拶するから、もうオシャブリは……」
挨拶を終えない限りいつまでもこの羞恥に満ちた姿を園児や保育士たちの目にさらさなければならないことを思い知らさた葉月は、唇と舌を押さえつけられて自由にならない口で懇願した。
「そう、ご挨拶できるの。だったら、葉月ちゃんは二歳児クラスの赤ちゃんなんかじゃくて、年少クラスのお姉ちゃんね。じゃ、私が教えてあげるから、その通り続けて言うのよ」
弥生はおもむろにオシャブリを人差指と親指でつまんで葉月の口から引き離し、改めて耳元に唇を寄せた。

「……今日からひばり保育園に通う御崎葉月です。体……体はおっきいけど、年少クラスに入ります……」
二度三度と浅い息を吸い込み、ようやく覚悟を決めた葉月は、耳元で弥生が囁き聞かせる言葉を、今にも消え入りそうな声で復唱し始めた。
「……年長クラスと年中クラスのお兄ちゃん、お姉ちゃん。それに、年少クラスのお友達。ううん、年少クラスだけど葉月よりも先に入園したお兄ちゃんとお姉ちゃん。これから仲良くしてください。葉月は一番後から入園したから、保育園のことはまだ何も知りません。だから、いろいろ教えてください。……それに、もしも葉月が何かいけないことをしたら、きちんと叱ってください。葉月がちゃんとごめんなさいしていい子になるまで叱ってください。お願いします、お兄ちゃん、お姉ちゃん」
年長クラスや年中クラスのみならず年少クラスの園児のことまで『お兄ちゃん』『お姉ちゃん』と呼ぶよう強要される口移しの挨拶に、葉月は限りない屈辱を掻きたてられてならなかった。けれど、弥生がまだポケットにしまわず手に持ったままにしているオシャブリを目にすると、挨拶を拒むこともかなわない。
だが、それまで途切れ途切れながらも挨拶の言葉を口にしていた葉月も、弥生が囁いた次の言葉を耳にするなり、顔をかっと熱くして再び口をつぐんでしまった。
弥生は葉月に
「それと、葉月はまだおねしょが治りません。だから、お昼寝の時、一緒におねむしてくれるお友達に迷惑をかけるかもしれません。それに、おもらしもまだ治らないから、遠足や音楽会でみんなに迷惑をかけるかもしれません。だから、今のうちにごめんなさいしておきます。ごめんなさい、お兄ちゃん、お姉ちゃん。おねしょとおもらしの治らない葉月のこと、許してください。――ほら、こう言うのよ」
と囁きかけたのだ。
さすがにそれを口にするのは憚られた。
が、弥生はまるで容赦しない。葉月が思わず口を閉ざすと
「あら、せっかく途中までご挨拶できてたのに、最後までは無理なのかな。だったら、やっぱり葉月ちゃんは二歳児クラスで決まりね。うちの保育園、二歳児は預かってないんだけど、いいわ、葉月ちゃんをひばり保育園で初めての二歳児クラスの園児にしてあげる。二歳児クラスの赤ちゃんなんだから、オシャブリが欲しくてたまらないわよね。まんまの時以外はずっとオシャブリを咥えているといいわ」

と言って、これ見よがしに、オシャブリを持った手を高々と差し上げるのだった。
それに対して葉月は弱々しく首を振り、再びおずおずと口を開くしかなかった。もちろん、赤ん坊みたいにオシャブリを咥えた姿を大勢の目にさらす屈辱に耐えかねてという理由もあるが、実を言うと、その他にも、この羞恥に満ちた挨拶を一刻も早く終えずにはいられない切羽詰まった事情があったのだ。
それは、もう既に我慢の限界ぎりぎりのところまで達している尿意だった。
小さい頃からそうだったが、大学に入ってからも葉月は、いつも同じような時間に目を覚まし、同じバスに乗って大学に通っていた。それは夏休みが始まってからも同じで、授業がなく大学の図書館に引き篭もる際にも、皐月が呆れるほど、毎日同じペースで生活していた。それが、今朝は、皐月が仕組んだおねしょ騒動のために目を覚ましてすぐのトイレを済ませることができなかった。そのせいの尿意が、今や、もうぎりぎりにまで高まっているのだ。
「……は、葉月……まだおねしょが治りません。だから、お昼寝の時、一緒におねむしてくれるお友だちに……迷惑をかけるかもしれません。それに、それに……おもらしもまだ治らないから……だから、遠足や音楽会でみんなに迷惑をかけるかもしれません。先にごめんなさいしておきます。……ごめんなさい」
葉月は弥生から口移しで教えられた通りそう言うと、ぎゅっと唇を噛みしめて顔を伏せた。固く拳に握った両手がぶるぶる震えているのは、けれど、屈辱に耐えるためばかりではない。

「はい、上手にご挨拶できました。みんな、新しいお友達の葉月ちゃんに大きな拍手をしてあげてね」
いったんは身を退いていた皐月だが、小刻みに震える声で葉月が挨拶を終えると再び前方に歩み出て、両手をぱちぱちと打ち鳴らした。
それに続いて園児たちが小さな手を叩いて拍手を送る。
けれど、拍手の音はまばらだった。今日から年少クラスとはいっても、本当は小学五年生の葉月がおねしょやおもらしでパンツを汚してしまうという思いがけない事実を知らされて、どう反応していいのかわからず、ついつい拍手をしそびれてしまった園児が殆どだった。
「どうしたの、みんな？　元気がないわよ。ほら、拍手～」
園児たちの胸の内を充分に承知していながら、皐月はわざと明るい声で再び拍手を促した。
そこへ、卯月の甲高い声が飛んで来る。
「先生、葉月ちゃんのことで質問があります」
「はい、どうぞ。新しくお友達になる子のことだから、遠慮しないでどんどん訊いてちょうだい」
大きな瞳を葉月に向けながらすっくと立ち上がる卯月を指差して皐月が頷いた。
「葉月ちゃん、本当におねしょやおもらしをしちゃうんですか？　年少さんだっていっても、ほんとは五年生なんでしょ？　なのに、ほんとにおねしょもおもらしもしちゃうんですか？」
卯月は、スカートの裾から僅かに見える葉月のショーツをねめつけるようにして、まるで遠慮するふうもなくずけっと尋ねた。
「うん、そうなのよ。グラウンドで遠藤先生が健康連絡帳を読んでいたの、卯月ちゃんにも聞こえていたでしょ？　あれ、私がお家で書いたんだけど、嘘なんかじゃないわよ」

卯月の質問に、皐月は微塵の躊躇いをみせることなく応え、僅かに首をかしげて続けた。
「でも、そうよね、小学五年生の葉月ちゃんがおねしょとおもらしだなんて、すぐには信じにくいわよね。じゃ、もういちど本人に答えてもらおうか。その方が確かだもんね」
皐月がそう言った直後、葉月は、よく注意して見ていないとわからないほど弱々しく首を振った。
けれど皐月はそんなことには全く気づかないふうを装って葉月の肘をつかみ、それまでより一歩分、前方へ連れ出して
「ほら、年長クラスの卯月お姉ちゃんからの質問よ。これからずっと可愛がってもらわなきゃいけないんだから、正直に答えようね」
と言い聞かせた後、真っ赤な唇を葉月の耳元に寄せて
「ちゃんと『本当のこと』を答えるのよ。もしも嘘なんかついたら、どんな口実をつけてでも入園式を長引かせてあげるから、そのつもりでいなさい。あんた、おしっこを我慢してるみたいだけど、もうそろそろ限界なんでしょ？　入園式が長引いて、いつまで我慢していられるか楽しみだこと。――どんなに細かなことだって、あんたのことは全部お見通しなんだってこと、忘れちゃ駄目よ」
と囁きかけた。
それに対して、葉月は、顔を伏せたまま横目で皐月の顔を恨みがましく睨みつけてからおずおずと口を開くことしかできなかった。送迎バスがコースの半分くらいの地点に差し掛かった頃から感じ始めていた尿意は全く衰えることなくじわじわと高まり、バスが保育園の正門に横付けになった時には、もうどうしようもないほどになっていた。
それを、朝一番のトイレに行けなかったせいだと葉月は思い込んでいる。しかし、実は、この尿意さえもが皐月の企みの結果だった。昨夜、皐月が葉月に飲ませたホットミルクに混入していた利尿剤は、効き目こそあまり強くないものの効果が長時間に渡って継続するタイプのもので、数度くらいの排尿では効能が消えることはない。そのせいで、目を覚ましてからもじわじわと効き目を発揮し続けて、バスに乗っている間からおしっこをしたくて堪らなくなっていたというわけだ。
そのせいで尿意の高まり具合はいつもより激しく、バスの乗降口の手すりにつかまったまま立ちすくんでいたのは、それもあってのことだった。そうして、バスからおりた後、グラウンドで途中まで行われた朝のご挨拶の途中、とうとう我慢できなくなって、ペニスの先からおしっこの雫を何滴か溢れさせてしまってもいたのだ。その時は必死になって膀胱の緊張を取り戻したためショーツの表面まで濡らしてしまうことは免れたけれど、今度またそんな状態になって再び我慢し通す自信はまるでない。汗だけでなはなくつい溢れ出させてしまったおしっこのせいでじっとり湿ったナプキンの感触を下腹部に覚えつつ、葉月には、蚊の鳴くような声で返事をすることしかできないのだった。
「……は、葉月、お……おねしょ、しちゃいます。お、おもらしもしちゃいます。それで、昨日だけでたくさんパンツを汚しちゃいました。葉月、本当は小学五年生なのに、おねしょもおもらしも治らないんです。……だから、年少さんがお似合いなんです。こんな葉月だけど、仲良くしてください、お願いします、卯月……卯月お姉ちゃん」
さっきの挨拶と同様、弥生から口移しに教えられるまま応えさせられる葉月。だが、それは確かに『本当のこと』だった。それが例え皐月が仕組んだ無理強いのおねしょと白いおし

っこのおもらしだとしても。
「そうなんだ、葉月ちゃん、ほんとにおねしょしちゃうんだ。それに、おもらしもしちゃうんだ」
葉月の返答を耳にするなり卯月はきらりと瞳を輝かせ、なにやら思案顔になると、葉月の下腹部をじろじろ眺めまわしながら言った。
「御崎先生にもうひとつ質問があります。年少さんの子たちは、おもらしが治るまでパンツを穿かせてもらえません。恥ずかしいけど、もうおもらしが治ったから言うけど、卯月も年少さんの時は夏までパンツじゃなくておむつでした。――葉月ちゃん、年少さんでおねしょもおもらしも治らないのに、パンツを穿いてもいいんですか？　そんなの、えこひいきだと思います」
「そうね、ひばり保育園は、おもらしの治らない年少さんはパンツじゃなくておむつっていうことになっているわね。でも、まだ葉月ちゃんは保育園じゃおもらしをしてないでしょ？　おねしょもおもらしもお家の中だから、今はまだパンツでいいんじゃないかな」
思ってもみなかったおむつという言葉に顔をひきつらせる葉月の様子を横目で窺い見ながら、皐月は取りなすように言った。が、それは、皐月の心情を慮ってのことなどではない。ただ、卯月とのやり取りをできるだけ長引かせて葉月をのっぴきならぬ状況に追い込むために、胸の中で舌を突き出してみせながら、さも庇っているかのようなふりをしているだけのことだ。
「でも、でも、あたし、保育園でおもらししなかったのに、おむつだったよ。ちょっと前にパンツにしてもらって大好きなシナモロールのパンツ穿けるようになったけど、入園式の時からずっとおむつだったよ、あたし」
皐月が言い終えた直後、さっき「私のと同じシナモロールのパンツだ！」と嬉しそうな声を上げた年少クラスの少女が今度は不満げな表情を浮かべて言った。
「あ、そうだったわね。確かに純ちゃんは最初からおむつだったっけ。でも、それは、入園式の日、お家からおむつをあてて保育園に来たからじゃなかったかな。たしか、心配だから当分はおむつで通園させますってお母様がおっしゃっていたから、そうなった筈よ」
年少クラスの少女に対して皐月はそう答え、なにやら含むところのありそうな目で葉月と少女とを交互に見比べながら続けて言った。
「でも、このままだと、卯月ちゃんや純ちゃんだけじゃなく、他の子供たちからも私が葉月ちゃんのこと依怙贔屓してるって思われるかもしれないわね。本当はそんなことないんだけど、自分の妹だから特別に贔屓してるんだって。いいわ、そんなふうに思われないように、これから葉月ちゃんが一度でも保育園でおねしょかおもらしをしちゃったら、その時はパンツじゃなく、おむつを使わせるようにしましょう。みんな、それでいいかな？」
「ちょ、ちょっと待ってよ、姉さ……」
思わず我を忘れて叫びだしそうになる葉月。
だが、その声は
「はーい。それでいいと思いまーす」
「私もそれでいいでーす」
「約束だよ、先生。一度でもおもらししちゃったら、葉月ちゃんもおむつだからね」

「葉月ちゃん年少さんだもん、そうじゃなきゃおかしいよ」
と口々に発する園児たちの嬌声に掻き消されてしまう。
「あんたもそれでいいわよね？　まさか、保育士の資格を取ろうっていう初等教育科の学生が、大勢の園児との約束を反故にしたりなんかしないよね？」
園児たちのはしゃぐ姿をおかしそうに眺めながら、皐月は葉月にぴったり寄り添い、声をひそめつつも有無を言わさぬ口調で囁きかけた。
「そ、そんな……」
皐月の真意を図りかねて、葉月は曖昧にそう言うのが精一杯だった。
「どうしたのよ、心配そうな顔しちゃって。あんた、こんな格好はしてるけど、本当は大学生なんでしょ？　まさか大学生がおもらしなんかするわけないじゃない。だったら、おむつのお世話になるかもなんて不安がる必要なんてないでしょ？　だから、ほら、あんたが自分で子供たちと約束しなさい。さもないと、大騒ぎになって、いつまでも入園式が終わらなくなっちゃうわよ。そんなことになって一番困るのはあんたじゃないの？」
口ごもる葉月に向かって、皐月は片方の眉を僅かに吊り上げて言った。
「で、でも……」
「なにをぐずってるのよ。あんた、ひょっとして、おもらしをしない自信がないの？　もしかしたらおもらししちゃうかもって心配してるの？　大学生にもなって？　やだ、それじゃ本当に年少さんのまんまじゃん。だったら、今からでもおむつをあててあげなきゃいけないわね。今はパンツになってるけど、入園した時から七月の半ばまでずっとおむつだった、あの純ちゃんっていう女の子と同じように」
皐月は年少クラスの列の中にいる少女を目で指し示してくすっと笑った。
そこまで言われては、他にできることはない。葉月はのろのろと顔を上げ、園児たちと目を合わせないよう部屋の片隅に視線を向けて、小刻みに震える声で言った。
「……は、葉月、保育園でおねしょかおもらしをしちゃったら、他の年少さんのお友達と同じように……お、おむつを使います。……約束します」
「うん、わかった。約束だよ、葉月ちゃん。みんなと約束したんだから、絶対に守らなきゃいけないんだよ」
震える声で屈辱の言葉を言い終えて葉月が口をつぐむと同時に、卯月が葉月の顔をじっと見て言った。もうすっかり自分の方が年長だと信じてやまない様子で、それこそ、最上級クラスのお姉さんが年少クラスの妹分に言って聞かせる口調そのままだ。
「……わかりました、卯月お姉ちゃん」
皐月にスカートの上からぽんとお尻を叩かれて、葉月は伏し目がちに弱々しく頷いた。

だが、羞恥に満ちた入園式がこれで終わるわけではない。一刻も早くこの発表室をあとにしたくてたまらない葉月の胸の内を手に取るように見透かしていながら、皐月はこんなことを言い出したのだ。
「それじゃ、ついでだから、他の子も葉月ちゃんに何か質問があったら今のうちに訊いておくといいわ。せっかくだから、いろんなことを知ってもらって、少しでも早く仲良しになってほしいから」
皐月の言葉が終わるか終わらないかのうちに何人もの園児が我先にと手を上げる様子を、

葉月は絶望の色をたたえた大きな瞳で眺めるしかなかった。

【二】

好きな食べ物は何？とか、どんなアニメが好きなの？や、寝る時は布団なのかベッドなのかとかいう、葉月にとってはどうでもいいような、しかし、皐月にとっては入園式をわざと長引かせるための質問が幾つも続き、その後に芽衣の自己紹介があって、ようやくのこと入園式は終盤を迎えた。

入園式を終えるにあたって最後に残っているのは、部屋の中央に立っている葉月を年長クラスの園児が手を引いて年少クラスの列の中に連れて行くという、新入園児を自分たちの仲間として迎え入れることを意味する行事だけだ。その、葉月を年少クラスの列の中に連れて行く役に選ばれた年長クラスの園児は、卯月だった（卯月に白羽の矢を立てたのが皐月なのは言うまでもないところだろう）。

皐月と弥生それに芽衣の三人と入れ替わりに卯月が葉月の目の前に歩み寄り、すっと手を差し伸べた。

一瞬は躊躇った葉月だが、最後に残ったこのセレモニーが終わりさえすれば部屋から出てトイレへ行くことができるのだと思うと、自分でも意識しないうちに体が動いて、気がついた時には卯月の手をぎゅっと握りしめていた。それはまるで、大勢の他人の中に取り残された無力な幼児がしっかり者の姉にすがりつく姿さながらだ。

だが、卯月はそのまま園児たちの列に向かって歩き出すことなく、さっと体の向きを変え、葉月の背後にまわりこんだ。

葉月がはっとして身をすくめる。

その直後、卯月は

「入園おめでとう、葉月ちゃん。ほら、これが卯月からの歓迎のご挨拶よ」

と大声で言って、葉月のスカートをぱっと捲り上げた。

「い、いやぁー！」

葉月の悲鳴が部屋中に響き渡った。

卯月にしてみればほんのちょっとした悪戯のつもりだった。自分の姉である芽衣と仲良さそうにしていた葉月をちょっぴり恥ずかしい目に遭わせやろうと思いついて軽い気持ちで実行に移した、些細な嫉妬心の表れに過ぎなかった。

だが、卯月にとっては何気ないそんな悪戯が、思ってもみなかった結果を招くことになる。

悲鳴をあげた葉月は、慌ててスカートの裾を押さえ、その場にしゃがみこんだ。けれど、急に体を動かしたものだから、思いがけない力が下腹部に加わってしまう。

「……！」

床にしゃがみこんだ葉月が不意に両目を大きく見開き、声にならない声をあげた。

葉月が唇を震わせているのは、園児たちの目の前でスカートを捲り上げられた羞恥のためなどではなかった。いや、卯月のスカートめくりが全く関係ないとは言えない。それが引き

金になったのは確かだ。しかし、葉月が今にも泣き出しそうな顔をしているのは、ショーツを大勢の目にさらす羞恥のためではなく、表現しようのない絶望感のせいだった。
「あ、あ……」
葉月の肩が小刻みに震えて、呻き声とも喘ぎ声ともつかぬあえかな声が漏れ出た。
それまでじっとり湿っていたナプキンが、じくじく濡れ始める。ナプキンをとめどなく濡らすのは、とうとう堪えきれなくなって溢れ出したおしっこだ。
「いや……」
葉月は弱々しく首を振った。ナプキンがいつまでもおしっこを吸い取ってくれるものではないことは葉月にもわかっていた。
「や、やだったら……」
際限なく溢れ出るおしっこを遂に吸い取れなくなったナプキンの内側から生温かい液体が沁み出し、ショーツのクロッチ部分がじわっと濡れる感触が下腹部から伝わってくる。
「……見ないで。……見ちゃ駄目なんだからぁ！」
誰にともなく力なく呟くように言った葉月だが、あとの方は感情の高ぶりに耐えきれず、涙声で喚いてしまう。
だが、それも束の間。内腿を伝い落ちる雫がますます増え、とうとう一条の筋にまとまり、ペニスから溢れ出たおしっこがまるでナプキンに吸い取られることもなくショーツの生地をしとどに濡らし、クロッチ部分からも床に滴り落ちるようになって、葉月が声を失ってしまうのに、さほど時間はかからなかった。

*

「まだ途中ですが、ここで入園式を中断します。先生方は、子供たちを連れて速やかに各々の教室に戻ってください」
葉月がしゃがみこんでいる床に小さな水溜まりができだした頃、皐月が大声を張り上げて入園式の中断を告げた。
正直なところを言えば、葉月の痴態をこのまま晒し者にしておくのも面白そうだなという思いが皐月にないわけではなかった。しかし、後で葉月のショーツを脱がせることになった時、裸に剥かれた下腹部を見て葉月が実は男の子だということに気がつく園児もいるかもしれない。そんなことになったら、思ってもみなかった醜い肉棒を目の当たりにして、幼い心に深い傷がつく恐れが多分にある。そういった事態になるのを避けるため、葉月のことを思いやってなどではなく、ただ子供たちの心に傷を負わせないようにするために、受け持ちの子供を連れてこの部屋から出るよう皐月は保育士たちに指示したのだった。
目の前で新入生が、それも本当は自分たちよりもずっと年上の筈の女の子がおしっこを漏らす姿に、園児たちは動揺を抑えきれなかった。が、それと共にいいようのない好奇の念がむくむくと湧き上がってきて、部屋の中ほどにしゃがみこんだままの葉月から目を離せないでもいた。
それを、それぞれの受け持ちの保育士たちがぱんぱんと手を打ち鳴らし、手を引いて強引に立たせ、後ろの扉に向かわせる。

「さ、卯月ちゃんも自分の教室に戻りましょうね。ほら、もうみんな廊下に出ちゃったよ」
しばらく間があって園児たちが残らず発表室から出て行った後、年長クラスの副担任が引き返してきて、まだ葉月のそばにいる卯月に声をかけた。
だが、卯月は首を縦に振ろうとしない。
「卯月、ここにいる。ここにいて、御崎先生や遠藤先生やお姉ちゃんのお手伝いをする」
卯月は胸を張って副担任にそう応えた。
「え？　でも……」
思いがけない卯月の返答に、副担任が困惑の表情を浮かべた。
「だって、先生、いつも言ってるじゃない。小さい子には優しくしてあげなさいって言ってるじゃない。小さい子が困ってたら助けてあげなさいって言ってるじゃない。先生も御崎先生も遠藤先生も、それに園長先生も、いつもそう言ってるでしょ？　だから、卯月、御崎先生や遠藤先生やお姉ちゃんのお手伝いをして、おもらししちゃった葉月ちゃんの面倒をみてあげるの。だって、卯月、年長さんのお姉さんだもん」
副担任の戸惑いをよそに卯月は澄ました顔で言い、葉月の方に向き直って、わざとのように優しく話しかけた。
「だから大丈夫よ、葉月ちゃん。みんな教室に戻って一人ぼっちになっちゃって寂しいかもしれないけど、お姉さんが一緒にいてあげるからね。年長さんのお姉さんがずっと一緒だから安心していいんだよ」
「いいわ。葉月ちゃんのお世話、卯月ちゃんにも手伝ってもらうから、先生は教室に戻って、いつも通り子供たちの面倒をみてあげて」
卯月が葉月に話しかけている間に、皐月は副担任に向かってそう指示していた。
けれど、副担任はすぐには頷かず、
「でも、いいんですか、主任？　卯月ちゃんは本当に教室へ連れて戻らなくてもいいんですか？」
と、いささか怪訝そうな顔つきで訊き返す。
皐月や弥生、園長や水無月だけでなく、ひばり保育園の職員は全員、葉月が大学生の男の子だということを知っている。もちろん、この副担任も例外ではない。その事実を知っているからこそ、葉月の正体を卯月に気づかれる恐れがあるのに手伝いをさせるつもりなのか？という疑念が湧き起こってくるのは当然のことだった。
「うん、卯月ちゃんのことはいいわ。せっかく年長クラスのお姉さんが入園ほやほやの年少さんの面倒をみてあげるって言ってくれてるのに、それを断っちゃ申し訳ないもの。それに、卯月ちゃんにはこれからもいろいろ葉月ちゃんがお世話になりそうだから、今のうちに少しでも仲良くなっておいてもらわないとね」
皐月は副担任の心配をよそに大きく頷いてそう言い、微かに笑ってみせた。副担任はまだ気づいていないが、芽衣をそうしたように、皐月が、自分の企みを確実に推し進めるための手駒として卯月をも利用しようとしているのは明らかだ。
「わかりました。主任がそうおっしゃるのでしたら……」
まだ要領を得ない表情を浮かべながらも、部屋の片隅に立って事の成り行きを見守っている園長までもが皐月に同意するかのように頷くのを見て、それ以上は何も言わず、副担任は発表室をあとにした。

【三】

「さ、そろそろ出ちゃったかな。おしっこ、みんな出しちゃったかな、葉月ちゃん？」
副担任が出て行ってしばらく経った後、床にしゃがみこんだままの葉月の腰が小さくぶるっと震えるのを見て、皐月が確認するように言った。
葉月からの返答はない。
だが、生温かい水溜まりになって床を濡らすおしっこの量から考えて、もうそろそろおしまいだろうと判断しても間違いはなさそうだ。
「先生、葉月ちゃん、靴下も濡れちゃってるよ。早くしてあげないと可哀想だよ」
床に滴り落ちるおしっこの飛沫が自分にかからないよう少し離れた所から葉月の様子を見ていた卯月だが、もうおしっこはおしまいと聞いて、葉月の足元を覗きこんで言った。年下の園児を気遣う年長者を装ってはいるものの、その実、本当は自分よりも年上の葉月が恥ずかしい目に遭っているのを存分に楽しんでいるに違いない。
卯月の言う通り、葉月のソックスは、ショーツの股ぐりのゴムの周囲から沁み出して内腿を伝い落ちるおしっこを吸収し、また、防水性の高い素材でできた床材の上に広がったおしっこの水溜まりに浸かって、ぱっと見ただけでわかるほどぐっしょり濡れていた。
「本当、びしょびしょね、葉月ちゃんの靴下」
卯月のすぐそばに膝をついて同じように葉月の足元を覗きこんだ弥生が軽く頷き、そのまま視線を僅かに上げて葉月の下腹部に目を凝らした。
「あらあら、スカートもびっしょり濡らしちゃって。パンツが見えるのが恥ずかしくてスカートの裾を押さえたままおもらししちゃったもんだから、余計におしっこを吸っちゃったみたいね」
「本当だ。早く着替えさせてあげないといけませんね」
代わる代わる葉月の足元や下腹部を窺い見る輪に加わった芽衣も心配そうな声を出して頷いた。
「じゃ、芽衣さん――菅原先生は特別年少クラスの教室へ行って、棚から通園鞄と手提げ袋を取ってきてちょうだい。鞄には替えのパンツの他に、念のためと思って替えのソックスも入れておいたから。それと、手提げ袋には園内着が入っているから、濡れちゃった制服を着替えさせましょう」
入園式が始まる前、芽衣と弥生は、『特別年少クラス・ひよこ組』と書かれた真新しい札の掛かった教室に葉月を連れて行った。教室といっても、園児は葉月一人だけだから、元は物置部屋にでも使っていたらしい八畳くらいの部屋に明るい色の壁紙を貼り、木製の棚や机、黒板に掲示板といった備品を運び込んで模様替えした、さほど広くない部屋だ。急ごしらえのその教室で弥生は葉月に通園鞄と手提げ袋を棚に置かせた。皐月は芽衣に、その通園鞄と手提げ袋をここへ持ってくるよう指示したわけだ。
「わかりました。急いで取ってきます」
言われるまま芽衣はぱっと駆け出し、ひよこ組の教室に向かって発表室をあとにした。

「卯月は？　卯月はどんなお手伝いをすればいいの？」
芽衣の背中を見送りながら、卯月がぱっと立ち上がって皐月に尋ねた。
「じゃ、卯月ちゃんは私と一緒に園長室まで行ってもらいましょうか。ここへ運んで来たい物があるんだけど、一人じゃ持ちきれないから手伝ってちょうだい」
そう言ったのは、部屋の一角で事態の推移を見守っていた園長だった。入園式が無事に進めば最後に挨拶をする手筈になっていたのだが、思いもよらぬ（あるいは、皐月にとっては半ば期待通りの）葉月のおもらし騒ぎのせいで出番がなくなった後は、大きな混乱が起きないよう、園児たちの動静をじっと窺っていたのだ。
「園長先生のお手伝い？　でも卯月、葉月ちゃんのお世話をしてあげなきゃいけないし」
園長の申し出に対して躊躇いがちな声をあげ、卯月は少し困ったような顔になった。
「大丈夫よ。園長室から持って来てもらう物っていうのが、葉月ちゃんのお世話をするのにどうしても必要な物なの。だから、私のお手伝いをしてくれることが、そのまま、葉月ちゃんのお世話をすることになるのよ」
卯月の疑問に、園長は悪戯めいた笑みを浮かべて応え、軽くウインクをしてみせてから付け加えた。
「それに、卯月ちゃんとの約束を守るためにも必要な物なんだから」
「約束……？」
園長が何を言っているのか咄嗟にはわからず一瞬きょとんとした表情を浮かべた卯月だが、すぐに顔をほころばせて嬌声をあげた。
「あ、わかった。うん、約束したもんね。卯月、先生たちや葉月ちゃんと約束したもんね」
そこへ、弥生も声を重ねる。
「ああ、そうか。確かに卯月ちゃんとの約束があったわね。年長のお姉さんとの約束だもん、ちゃんと守らなきゃいけないわよね、葉月ちゃん？」
けれど、葉月はどこか遠い所を見るような目をしてぽつりと呟くだけだった。
「約……束……」
自分がこれからどんな恥ずかしい目に遭うのか、すっかり自失してしまっている葉月にはまだ想像すらできていないようだ。

＊

通園鞄と手提げ袋を持った芽衣が先に発表室に戻ってきて、しばらく時間が経ってから、藤製の篭を抱えた卯月が戻ってきた。大人なら片手で持って運べる篭だが、保育園児の卯月にはとても大きく、両手で抱えるのが精一杯だ。それに続いて、こちらは大きな紙袋を両手に提げた園長も発表室に姿を現す。
一方、部屋に残された葉月は、三人が戻ってくるまでの間に皐月と弥生の二人がかりで制服とソックスを脱がされ、キャミソールとショーツだけの姿に剥かれていた。生温かい水溜まりも二人の手で綺麗に拭い取られ、足元の床はすっかり元通りになっている。
「あーあ、可哀想。せっかく可愛いシナモロールのパンツなのに、おしっこでびしょびしょにしちゃって、とっても可哀想」

制服を脱がされてショーツが丸見えになった葉月の姿を目にするなり、卯月はさも同情するかのように言った。けれど、『可哀想』の対象が葉月本人のことなのか、それともショーツにプリントされたシナモロールのことなのかは判然としない。
卯月の不躾な視線に葉月が身をよじると、ショーツの生地がよれて、せっかく沁み出しのなくなっていたおしっこの雫が再び太腿の後ろをつっと流れ落ち、膝の裏側を伝い滴る。
葉月が本当の女の子なら、皐月と弥生とでさっさとショーツまで脱がせてしまっていたところだ。だが、そうすると、お尻の方に折り曲げたペニスの存在を、発表室に戻ってきた卯月に知られるおそれがある。ナプキンも外さずショーツを穿かせたままにしておいたのには、それを防ぐために（とは言っても、それも葉月のことを慮ってのことではなく、いきなりペニスを目の当たりにして卯月がショックをショックを受けないようにするためなわけだが）という理由もあるが、それに加えて、おしっこでびしょびしょに濡らしてしまったショーツを自分よりもずっと年下の幼女の目にさらす屈辱をたっぷり葉月に味わわせる目的もあってのことだった。
「あらあら、せっかく綺麗に拭いた床をまた濡らしちゃって。本当に困った子ね、葉月ちゃんは」
葉月の膝の裏側からふくらはぎを伝い、踵から床に流れ落ちるおしっこの雫を目にした弥生が軽く肩をすくめて言った。
「駄目ですよ、そんなふうに言っちゃ。いつも注意しているように、小さい子は大人の何気ない一言で傷ついてしまうのだから、不用意な発言をしないよう充分に気をつけないと。大勢の見ている前でパンツを汚してしまう恥ずかしさは葉月ちゃん自身がよく知っているんだから、更に傷付けるような発言は厳に慎まないといけませんね」
弥生の発言を園長がそう言ってたしなめる。
もっとも、園長の発言にしたところが、新人看護士である弥生をたしなめるという態を取りながらも実は葉月の羞恥を更に煽り立てるためなのは明らかだった。
葉月の頬がさっと赤くなるのを見て、園長は卯月に目配せをした。
それを受けて卯月はこくんと頷き、両手で抱えた藤製の篭をさっと前に差し出しながら
「先生、葉月ちゃんはもうおしっこで床を汚したりなんかしません。ほら、これを使えば、大丈夫でしょ？　だから、葉月ちゃんを叱らないであげてください」
と弥生の顔を見上げて言った。
「ん？　園長先生のお部屋から何を持って来てくれたのかな、卯月ちゃんは？」
弥生は、篭に向かってすっと手を伸ばして一枚の布地をつかみ上げると、すぐにそれが何なのか理解した様子で、卯月に向かってにっと微笑みかけた。
「なるほど。これなら、いくらおもらし癖のある葉月ちゃんでも、もう床をおしっこで汚したりしないですみそうね。それに、卯月ちゃんや純ちゃんとの約束も守れるし。いい物を持ってきてくれたわね、卯月ちゃん」
「でしょ？　ちょっと重いけど、頑張ったんだよ。葉月ちゃん、おしっこで濡れちゃったパンツのままだったらお尻が気持ち悪くて可哀想だと思ったから、急いで運んできたんだよ。園長先生に手伝ってもらわないで、一人で持ってきたんだよ。――こんなにたくさんのおむつなのに」
卯月は弥生が褒めてくれたことに気を良くしてぐっと胸を張り、いかにも自慢げな声で言

った。
「そう、一人で持ってこられたんだ、このおむつ。おむつがたくさん入って重い篭なのに、一人で持ってきたんだね、卯月ちゃん。年長のお姉さんが運んできてくれたおむつだもん、きっと葉月ちゃんも喜ぶよ」
弥生は何度も何度も『おむつ』という言葉を繰り返し言って更に卯月を褒めそやした。
その声が葉月の耳に届かないわけがない。
「え……!?」
まさかという思いと共に葉月が顔を上げ、弥生が手にしている布地におそるおそる目を向けた。
「……!」
育児経験など全くなく、まだ保育実習も履修したことのない葉月にも、それが赤ん坊の下着である布おむつだということは一目でわかった。それも、昨日、最初に穿かされたシナモロールのショーツを汚してしまい、替わりに穿かされた女児用ショーツにプリントしてあったのと同じハローキティの顔がピンクの染料で幾つもプリントされた、見るからに可愛らしい布おむつだ。
「ね、ね、先生。そのおむつ、端っこに字が書いてあるでしょ？　それ、なんて書いてあるのか読んでみて」
葉月が困惑の表情を浮かべる様子を面白そうに眺めて、卯月は弥生にせがんだ。
「えーと、どれどれ。あ、これかな。ちょっと薄くなってるけど、ちゃんと読めるわね。最初の字は『す』で、次は『が』、その次が『わ』――あ、これ、『すがわらうづき』って書いてあるんだ。そっか、卯月ちゃんの名前が書いてあるんだね、このおむつ」
ハローキティのプリントに合わせた色遣いのピンクの油性マジックで布おむつの端に書いてある字を読んだ弥生は、卯月の顔を正面から覗き込むようにして声を弾ませた。
「うん、そうなんだよ。それ、卯月が使ってたおむつなんだよ。ね、園長先生？」
卯月は少しばかり恥ずかしそうな表情を浮かべながら園長の顔を見上げた。
「そうよ、卯月ちゃんが年少さんの時、まだおもらしが治っていない頃、卯月ちゃんのお母さんから預かって使っていたおむつよ。他の子のと間違わないよう、お母さんにちゃんとお名前も書いてもらったのよね」
園長は目を細めて卯月に応え、葉月と芽衣の顔をゆっくり見比べながら続けた。
「おもらしやおねしょが治らなくておむつが必要な子は、お家からおむつを預かることになっているの。殆どの子は年少さんの早いうちにおむつ離れするから途中で要らなくなるんだけど、預かっていたおむつについては保育園に寄付しますとおっしゃってくださる保護者の方が多くて、いろいろ助かっているのよ。たとえば、体調が悪くていつもよりおもらしの回数が増えちゃって預かっているおむつだけじゃ足りない子の予備として使うこともできるし、それに――」
そこまで言って園長は葉月の顔に目を留めた。
「――おもらし癖があることを知らないまま預かった子に使わせることもできるからね。寄付していただいたおむつは、たとえ実際に使うことがないとしても、可愛い園児たちの大切な思い出にもなるから、名前を確かめながら一枚ずつ丁寧に折りたたんで園長室にある収納庫にしまってあるのよ。それで、卯月ちゃんが使っていた分もあることを思い出して取り出

してきたの。どうやら卯月ちゃんが葉月ちゃんの面倒を一番みてくれそうだから、卯月ちゃんのお下がりのおむつを葉月ちゃんに使ってもらうのがいいかなと思って」
卯月ちゃんのお下がりのおむつ。葉月の顔が屈辱と羞恥に歪む。大学生にもなっておむつを使わされそうになっている羞恥と、そのおむつが自分よりもずっと年下の保育園児のお下がりだという屈辱に。
葉月は弱々しく首を振って身を退いた。
けれど、皐月に首ねっこを押さえつけられて一歩も後ずさりできない。

「あの、でも、園長先生……」
ふと弥生が卯月の顔から視線を外し、少し困ったような表情で言った。
「葉月ちゃん、体が大きいから、おしっこの量も多いんです。主任と一緒に床を拭いた時も、雑巾でおしっこを吸い取ってバケツに絞る回数は他の子供たちに比べて何倍も多かったし。卯月ちゃんのお下がりのおむつだけじゃ足りないんじゃないでしょうか」
もうすっかり葉月が何度もおむつを汚してしまうものだと決めてかかっているかのような弥生の言葉に、葉月が唇を噛みしめる。
「ううん、それは大丈夫。遠藤先生は今年の春から勤め始めたばかりだから詳しくは知らないかもしれないけど、これまでに寄付していただいたおむつは本当にたくさんあるんだから。卯月ちゃんのお下がりだけじゃ足りなくても、その他にも数え切れないくらいの枚数があるから心配しなくていいのよ。だいいち、あまり古いおむつをわざわざ引っ張り出してこなくても、少し前におむつが外れたばかりの純ちゃんのおむつも頂戴しているし。だから、葉月ちゃんがどんなにたくさんおもらしをしちゃっても、使わせてあげられるお下がりのおむつはたっぷりあるの」
園長は、両の瞳に悪戯っぽい光をたたえて応えた。
「そうだったんですか。なら、それは安心ですね。枚数が充分だったらおむつは心配ないと思います。サイズにしても、子供用のおむつでも、元々二つ折りにして使ったりしますから、折らずにそのまま使えば葉月ちゃんの大きな体に合わせられるでしょうし、その点も問題ないと思います。もしも長さが足りないことがあっても、何枚かのおむつを少しずつずらして重ねればなんとかなるでしょうし。ただ、もう一つだけ心配なことがあるんですけど……」
園長の説明に弥生は小さく頷いたものの、まだすっきりしないようで、再び遠慮がちにこんなことを尋ねた。
「あの、おむつカバーはどうなっているんでしょうか？　布おむつの方は枚数もサイズも問題ないとしても、さすがに、おむつカバーは子供用のをそのまま葉月ちゃんに使わせるのは無理だと思うんです」
弥生の疑問はもっともだった。布おむつは工夫次第で赤ん坊用のものをそのまま葉月に使わせることができるにしても、おむつカバーは、小さな子供用のものを葉月に使わせようとしても、窮屈どころか、そもそもホックやマジックテープを留めることもままならないだろう。
「それも心配しなくて大丈夫よ。制服や体操着を納入してもらっている業者さんに特別にお願いしたから。その篭にも入っている筈よ」
園長はこともなげに応えて、卯月が抱えている篭に視線を向けた。

「え？　あ、これかな。へーえ、うふっ、可愛いおむつカバーだこと。見た目はまんま子供用なのに、たしかにサイズは随分と大きいみたいですね。これなら葉月ちゃんにぴったり合いそうだわ」
園長に言われて、それまで手にしていた布おむつを篭に戻した弥生は、その代わりに、レモン色の生地に、これもやはりハローキティの顔をあしらったおむつカバーをつかみ上げた。おむつにプリントされたハローキティの顔がパステルピンクの単色なのに対し、おむつカバーの方は、ショーツと同じようにカラフルで、お尻のところにアップリケで大きな顔が縫い付けてあるという、ぱっと見には幼児向用としか見えない可愛らしいおむつカバーだ。が、弥生が言う通り、サイズは特別仕立てで、小柄とはいえ大学生である葉月の下腹部を包み込むに充分な大きさに仕立ててあるのがわかる。
「園長先生が業者さんにお願いしたんだから間違いないに決まってるけど、一応、サイズ合わせをしてみようかな。葉月ちゃん、少しの間じっとしていてちょうだいね」
なんとも表現しようのない笑みを浮かべた弥生はそう言って、両手で広げた大きなおむつカバーを葉月の下腹部に押し当てた。おしっこを吸ったショーツに触れておむつカバーの表面が濡れてしまわないよう僅かに隙間をつくったものの、傍目には、ショーツの上からおむつカバーをぴったり押し当てているように見える。

【四】

「うん、これなら大丈夫。多めにおむつをあててあげても窮屈じゃなさそうだし、かといって、ぶかぶかでもないし。葉月ちゃんのお尻にぴったりフィットってとこね」
葉月の下腹部に押し当てたおむつカバーをたっぷり時間をかけて眺めすがめつした後、ようやく弥生は満足そうに頷いた。
「よかったわね、葉月ちゃん、体にぴったり合うおむつカバーができて。これも、日頃から細かいところまで葉月ちゃんのことに何かと気をつけてくださっているお姉さんの見立てのおかげね」
園長は、サイズの確認を終えた弥生がゆっくり立ち上がるのを待って、穏やかな表情で言った。
「いいえ。私は、妹の体つきに合う制服や園内着を特別に仕立ててもらうためにサイズを伝えただけで、こんなに可愛いおむつカバーを用意していただけたのは全て園長先生のおかげです。妹のためにいろいろご面倒をおかけして申し訳ありません。――ほら、葉月ちゃんからも園長先生にお礼を言いなさい」
皐月は園長の言葉にわざとらしく恐縮してみせてから、葉月の肩を押さえつけている手の力を緩めた。
けれど、葉月はぎゅっと閉じた唇を「へ」の字にして肩を震わせるばかりだ。
「どうしたの、葉月ちゃん？　園長先生にお礼を言えないの？　でも、変ね。葉月ちゃんはお口もきけない赤ちゃんじゃなくて、保育園のお姉さんの筈よ。なのに、ありがとうも言えないのかな？」

なかなか口を開こうとしない葉月に皐月は重ねて言った後、ひょいと肩をすくめて弥生の方に向き直ると、
「やれやれ。妹ったら、入園式の途中で遠藤先生に咥えさせてもらったオシャブリのことがすっかり気に入ったみたいで、まだちゃんとお喋りのできない二歳児の真似っこなんかしちゃってる。わるいんだけど、遠藤先生、もういちどオシャブリをお願いできるかしら？　おもらしが治らなくておむつのお世話にならなきゃいけない妹にはお似合いみたいだから。この調子じゃ、どうやら、年少さんのお姉さんになるにはまだ早かったみたいだわ。クラスの名前も『特別二歳児クラス』に変更した方がいいかもね」
と呆れたように言った。
「うふふ、そうみたいですね。この調子だと、葉月ちゃん、年少クラスに入るにはまだ早いかもしれませんね。でも、今はおむつ離れしてすっかりお姉ちゃんらしくなった純ちゃんだって、入園したての頃は今の葉月ちゃんみたいになかなかお友達とお喋りできなかったじゃないですか。大丈夫、葉月ちゃんだって、卯月ちゃんみたいなお姉さんにいろいろ教えてもらいながら純ちゃんを見習って頑張れば、すぐに年少さんらしくなりますよ。それに、一人だと難しいトイレトレーニングも、まわりのみんながちゃんと自分でトイレへ行っているのを見ていれば、自分だけおもらし癖が治らないのが恥ずかしくなって、おむつ離れも早くなるんじゃないかな。あまり急かさないで、今は長い目で見てあげましょうよ。そうやって甘やかしてあげた方がのんびりできて、却っていい方向に向かうんじゃないかと思いますよ。じゃ、そういう意味も込めて、葉月ちゃんに大好きなオシャブリを咥えさせてあげますね。――二歳児みたいでもいいから、私たちに思いきり甘えながら、ゆっくり年少さんのお姉さんになっていこうね。卯月お姉さんみたいにしっかりした年長さんにはなれなくても、純お姉さんみたいにパンツのお姉ちゃんになれるよう頑張ろうね。それまで、気が済むまでオシャブリを咥えていていいからね」
弥生はにこやかな表情で皐月に同意してみせ、ジャージのポケットから取り出したオシャブリを葉月の唇に押し当てた。
「いや！　は、葉月、赤ちゃんじゃないし、二歳児なんかでもない。だから、オシャブリなんていや！」
葉月は、芽衣と卯月の手前、女の子のふりをして甲高い声をあげながら激しく首を振った。目の前にいるのが皐月と弥生、園長の三人だけなら、男言葉で喚いていたに違いない（もっとも、びしょびしょに濡れたショーツにキャミソールという姿で声を荒げたとしても、まるで迫力はないだろうが）。
「あらあら、遠慮なんかしなくていいのよ、葉月ちゃん。簡単なお礼も言えない葉月ちゃんは年少さんのお姉さんなんかじゃなくて、まだ上手にお喋りできない二歳児なんでしょ？　二歳児っていったら、まだママのおっぱいが恋しくて、オシャブリが大好きに決まってるじゃない。だから、ほら、嬉しそうに笑って咥えてごらん」
それまで葉月の肩を押さえつけていた皐月の手が後頭部にかかり、首を振るのを強引にやめさせた。同時に、弥生が葉月の唇にオシャブリを強引に押し込んで口にふくませる。
「む……」
無理矢理ふくまされたオシャブリのせいで舌を下顎に押しつけられた葉月の口からくぐもった呻き声が漏れ出た。

「それでいいのよ。せっかく可愛いおむつカバーを用意してくださった園長先生にありがとうもできないような子には、おしっこでぐっしょり濡れたパンツにオシャブリの組み合わせがお似合いの格好だわ。もっとも、本当の二歳児クラスの子はキャミソールなんて生意気な物は着ないけどね。いい？　勝手にオシャブリを吐き出したりしちゃ駄目よ。ごはんの時以外にオシャブリを口から離したりしたらお仕置きだからね。ま、もっとも、オシャブリを大好きな葉月ちゃんが勝手に吐き出すなんてことしないと思うけど」

ゴム製のオシャブリを咥えた葉月に、皐月は、卯月や芽衣には聞こえないよう声をひそめてそう囁きかけ、どこか毒を含んだ口調で更に続けた。

「それとも、ちゃんとお礼を言う？　葉月に可愛いおむつカバーをプレゼントしてくれてありがとうございます、園長先生。葉月、ずっと前から、こんな可愛いおむつカバーが欲しかったんです。きちんとそう言ってありがとうできる？　もしも言えるんだったらオシャブリはないないしてあげるわよ」

だが、葉月はオシャブリを口にふくんだまま弱々しく首を振るばかりだ。どちらにするのかと迫られても選べるわけがない。

そこへ、卯月がきょとんとした顔で割って入った。

「御崎先生、葉月ちゃんと何のお話をしてるの？　なんだか葉月ちゃん、いやいやをしてるみたいだけど」

「うん、あのね、卯月ちゃんを見習って少しでも早くしっかりした子になろうねって言い聞かせていたのよ。いつまでも人見知りが激しくて引っ込み思案でおもらしが治らなくて一人じゃ何もできない赤ちゃんみたいな子じゃなくて、卯月ちゃんみたいに何でも自分でできて、はきはきお喋りできるお姉さんになろうねって話していたの。でも、葉月ちゃん、しっかり者のお姉さんになるのがいやなんだって。いつまでもずっとずっと誰かに構ってもらえる小っちゃい子のまんまがいいんだって。それで、いやいやしていたのよ、葉月ちゃん」

卯月の問いかけに、皐月はしれっとした顔で偽りの説明をした。

それに対して葉月は再び首を振るのだが、幼い卯月が事の真相に思い至る筈もない。

「ふうん、そうなんだ。葉月ちゃん、小っちゃい子でいたいんだ」

皐月の言葉に卯月はきらっと瞳を輝かせた。

「でも、そうだよね。毎晩おねしょでお布団を濡らしちゃって、一日に何枚もおもらしでパンツを濡らしちゃうような子が年長さんみたいになれるわけないよね。会ってすぐの遠藤先生にオシャブリをせがむような子がお姉さんになれるわけないよね。だったら、ずっとずっと誰かに甘えてられる小っちゃい子がいいよね。小っちゃい子のままだったら、おむつも恥ずかしくないもんね」

卯月はそこまで言うと、少しだけ間を置き、にまっと笑って続けた。

「卯月も、年少さんとか二歳児さんとかに戻りたいなぁって思うことがあるよ。お絵描きが上手にできない時とか、もうお姉さんなんだから駄々こねちゃ駄目よってママに叱られた時とか、小っちゃい頃に戻りたいなって思うことがあるよ。でも、二歳児さんとか赤ちゃんに戻っちゃったら、お友達と一緒にハイキングに行けないし、ポケモンのゲームもできなくなっちゃうから、やっぱり、今のままでいいやって思い直すの」

オシャブリを咥えて瞳を不安げにきょときょとさせる葉月の顔をじっと見上げて、卯月は

尚も続けた。
「あ、ううん。今のままでいいんじゃなくて、早くもっと大きくなりたいなって思うの。卯月、同じクラスに好きな男の子がいるんだ。その子も卯月のこと大好きだよって言ってくれるの。だから、早く大きくなって、二人でデートができるようになったらいいのになっていつも思ってるの。でも、葉月ちゃんは小っちゃい子のままでいいんだよね。オシャブリとおむつがお似合いの赤ちゃんでいいんだよね。だって、そうだよね。葉月ちゃんにはデートの相手なんていないんだもん。デートしてくれるボーイフレンドがいたら、オシャブリやおむつなんて恥ずかしくてたまんないよね」
卯月は勝ち誇った様子で胸を張り、両手で抱えた篭を葉月の目の前に突きつけて更に言葉を重ねた。
「ほら、卯月が持ってきてあげたおむつだよ。卯月が年少さんの時に使っていたお下がりのおむつを持ってきてあげたんだから、御崎先生や遠藤先生にあててもらいなさいよ。いつまでもびしょびしょのパンツのままだと風邪をひいちゃうわよ、おもらし葉月ちゃん」
これまでに誰に言われたのよりも、この卯月の言葉が一番こたえた。思わず唇を噛みしめた葉月だが、口にふくまされたオシャブリのせいでそれもかなわず、弾力のあるゴムのくちゅっという感触だけが唇から伝わってくる。
「そうね、卯月ちゃんの言う通りだわ。夏とはいってもいつまでも濡れたパンツにキャミのままじゃ風邪をひいちゃうから、御崎先生と遠藤先生、早く葉月ちゃんのパンツを脱がせてせておむつをあててあげてちょうだいな。卯月ちゃんのお下がりのふかふかのおむつをね」
卯月が一通り喋り終えるのを待って園長が軽く頷き、葉月のショーツに視線を向け直して言った。
「い、いや！　おむつなんて、おむつなんて……」
園長の言葉を耳にするなり、葉月が悲痛な声をあげた。
その拍子に、咥えていたオシャブリがぽろりと落ちる。
と、皐月の手が素早く動いて、葉月の唇からこぼれ落ちたオシャブリが床に落ちる前にさっと掌で受け止めた。
「あらあら、大好きなオシャブリを落としちゃうなんて、どうしたのかな、葉月ちゃん。ほら、もういちど咥えさせてあげるから、今度は落とさないよう気をつけるのよ」
落ちかけたオシャブリを再び葉月の口にふくませながら皐月はわざと優しげな声で言ってから、葉月の耳元に小さな声で囁きかけた。「言った筈よ、オシャブリを勝手に吐き出したりしたらお仕置きよって。今回は大目に見てあげるけど、今度また同じようなことをしたら、その時はひどいからね。さ、どんなお仕置きがいいかな。『私はこんなに大きいのに、まだおもらしが治りません』って書いた札を首からかけて、濡れたパンツを持って保育園の正門の外に一時間ほど立たされるのがいいのかな。それとも、いつまでもおもらしが治らないから診てくださいって、びしょびしょのパンツのまま小児科や泌尿器科のお医者様に連れて行く方が効き目があるかしら。あ、そうだ。もっとたくさんおむつカバーをつくってもらうために仕立屋さんに保育園まで来てもらって、みんなの前で採寸してもらうのもいいかもね。さ、葉月ちゃんはどれがいい？　好きなのを選ばせてあげるわよ」
けれど、そんな想像するだに羞ずかしい責め苦中からどれかを選ぶことなどできるわけがない。今の葉月にできるのは、唇の代わりにオシャブリをくちゅっと噛みしめることだけだ

った。
「そうそう、それでいいのよ。大好きなオシャブリだもん、今度こそ落とさないようしっかり咥えているのよ」
皐月は、オシャブリを口にふくんだ葉月の頬を人差指の先でつんとつついた。
「さ、それじゃ、ふかふかのおむつをあてようね。でも、葉月ちゃんを床に直に寝かせるのは可哀想だから、これを敷いて、と」
皐月が葉月にオシャブリを咥えさせる様子を面白そうに眺めながら、弥生は、卯月が抱えている篭から、おむつと一緒に入っている大きなバスタオルをつかみ上げてさっと床に敷いた。
それを見た芽衣が
「あ、私も手伝います」
と大きな声で言い、弥生がいったん篭の中に戻したおむつカバーを両手で持ち上げて、床に敷いたバスタオルの上に広げる。
「あの、おむつは何枚くらい要るでしょうか？　お母さんが忙しいから、私が卯月のおむつを取り替えてあげたこともあって、赤ちゃん用だったら何枚くらいでいいのかわかるんですけど、葉月ちゃんみたいな体の大きな子のおむつの用意なんてしたことがないからわからなくて」
おむつカバーをバスタオルの上に広げるところまではてきぱきと体を動かしていた芽衣だが、続いて布おむつの用意をしかけたところで、困ったような表情で皐月に助けを求めた。
「そうね……八枚くらいでいいんじゃないかな。あまり多いと窮屈だし、少ないとおしっこが漏れちゃうけど、とりあえず八枚くらいで様子をみてみましょう。それでおしっこがおむつカバーから横漏れしちゃうようなら、次からは枚数を増やすことにして」
芽衣の問いかけに、皐月は、床にできたおしっこの水溜まりの大きさを思い出しながら答えた。
「わかりました、八枚でいいですね。えーと、一枚、二枚……」
芽衣は皐月に指示さ

れた枚数を律儀に復唱してから、布おむつを一枚ずつ丁寧に篭から取り出し始めた。
芽衣にしてみれば、その行為に、他意などまるでない。けれど葉月には、そのゆっくりした手の動きが、これからあてられるおむつをわざとこれみよがしに見せつけられているように思えてならない。

「遠藤先生はこの春から勤め始めたばかりだけど、一応はおむつのあて方とかも知っているわよね？」
オシャブリを口にふくんだ姿で羞恥に体を震わせる葉月の様子を覗い見ながら、芽衣がおむつの用意を済ませるまでの間、園長が確認するような口調で弥生に話しかけた。
「はい。短大で人形を使った講習を受けましたし、保育実習でも、あまり回数はこなせませんでしたけど、二歳児クラスの子供のおむつを取り替えさせてもらったことがあります」
弥生は少し考えながらそう応えた。
「じゃ、布おむつを使っている保育園が多い理由も教えてもらったかしら？　たいていのお家じゃ紙おむつなのに、どうして保育園では手間のかかる布おむつを使っているところが多いのか、その理由を知っている？」
園長は微かに首をかしげて重ねて訊いた。
「あ、はい。そのことも前もって短大で教えてもらっていたんですけど、保育実習で実際に布おむつを使ってみて、その大変さを実感しました。特に、パンツタイプの紙おむつなんかと比べると取り替えるだけでも簡単なことじゃないのに、その後の処置にもすごく手間がかかって。うんちで汚れた布おむつなんか、洗濯機で洗う前に手で揉み洗いしなきゃいけませんでしたし。紙おむつじゃなく布おむつを使う意義というのは先に短大で説明を受けていたんですけど、頭でわかったつもりになるだけなのと、実際に体を使って理解するのとでは大違いでした」
弥生は、これ以上はないくらい真剣な表情で応じた。
「頼もしいわね。そのぶんだと布おむつを使う意義というのを身をもって理解したようだから、念のために簡単に説明してみてくれる？」
園長は満足そうに目を細めて先を促した。
「はい。布おむつには、子供への目配りということに関連して、お家と保育園、両者が共同しての育児というもののシンボル的な意味合いがあります。紙おむつを使った場合、保護者は保育園に対して紙おむつの代金を支払うだけの存在になってしまう恐れがありますが、布おむつの場合、保育園で用意するのではなく、一般的に、お家で用意していただいて保育園がそれを預かって使うということになっています。そうすると、親御さんにしてみれば、我が子を保育園に預け放しにしているわけではないということを実感することができます。それに、子供を迎えに来られた時、保育士さんたちと、例えば、おむつかぶれがかなりマシになりましたよとかいう話題をきっかけにして情報交換が密になることが期待できます。あと、環境への配慮という観点もありますけど、こちらはマスコミで取り上げられることも多いから今は省略してもよろしいですよね？」
弥生は園長の顔を正面から見て言った。
それに対して、園長がにこやかな表情で応じる。
「はい、よくできました。うん、合格ね」

「よかった〜。急に質問されたから、どう答えようかとあせっちゃいましたよ」
抜き打ちの口頭試問を終えた学生のように、弥生は明らかにほっとした顔つきになって声を弾ませた。
「え？　布おむつを使うのに、そんな理由があったんですか!?」
横合いから驚いたように言ったのは、八枚の布おむつをきっちり重ねて両手で捧げ持ち、改まった表情を浮かべた芽衣だった。
「うち、私も卯月も布おむつで育ったんです。だから、それが当たり前のことだとずっと思ってたんですけど、そんな理由があっただなんて、私、母さんのこと尊敬しちゃいます。手間のかからない紙おむつを使わないで、面倒なのに布おむつで愛情たっぷり私や卯月を育ててくれた母さんのこと、誇りに思います。私、いつも我儘ばかり言ってたけど、愛情いっぱいで育ててくれた母さんの言いつけ、これからはちゃんと守ります」
「あら、いい心がけだこと。そう、それでいいのよ。自分が子供のうちは、子供を育てるということがどんなに大変なことなのかまるでわからない。だから、駄々をこねたり我儘を言ったりする。でも、自分が子供の面倒をみる立場になったら、これまでは鬱陶しく思っていたお小言が、本当は愛情の表現だということがわかってくるの。ま、そういうことがわかるようになるのは大人になってからなんだけど、芽衣さんは中学生なのに、もうそのことを理解してくれたんだもの、きっといい保育士さんになれるわよ。まずはうちの保育園で頑張ってちょうだいね、芽衣さん――いいえ、菅原先生」
芽衣の言葉に園長は顔をほころばせてそう声をかけてから、オシャブリを口にふくんで立ちすくんでいる葉月の方に振り向いた。
「葉月ちゃんも早く菅原先生みたいに子育ての大変さに思い至れるようになるといいんだけど、それはまだ先のことでしょうね。同じ保育士見習いとはいっても、菅原先生はもう本職の保育士と同じ気持ちになったみたいだけど、葉月ちゃんの方は、まだまだ子供だもの。だから菅原先生、愛情たっぷり葉月ちゃんの面倒をみてあげてちょうだいね。菅原先生がお母様から受けたと同じくらいの愛情を、今度は菅原先生が葉月ちゃんに注いであげる番よ」
「わかりました、園長先生。私、葉月ちゃんのお世話、うんと頑張ります。このふかふかのおむつに負けないくらい優しい気持ちで」
芽衣は恭しく頷いて言い、手にした布おむつを自分の頬にそっと押し当てた。
「菅原先生と卯月ちゃんのお母様は、自分の愛娘が将来どんなに素敵な女の子になるか、それを想像しながら、愛情を込めておむつに名前を書いたんでしょうね。おむつそのものは出来合いのだけど、そこに込められた愛情は手縫いのおむつにも負けていないのよ。そうして、そのおむつを次は葉月ちゃんにあててあげるの。菅原先生と卯月ちゃんの愛情がいっぱい詰まったおむつをね」
園長は『愛情』という部分を殊さら強調して言った。葉月が本当の年少クラスの園児なら、園長の言うことはもっともだ。けれど、実のところ、葉月は大学生。自分よりもずっと年下の幼女が今よりも更に幼かった時に使っていたお下がりのおむつを、こちらも自分より六歳も年下の少女の手で準備されているのだから、『愛情』という言葉に、却って、屈辱がこれでもかと煽りたてられる。
「じきに準備してあげるから、びしょびしょのパンツが気持ちわるいでしょうけど、もうちょっとだけ待っててね。すぐに、ふかふかのおむつをあててあげるから」

あやすようにそう言う芽衣にとって、既に葉月は自分よりも少しだけ年下の小学五年生などではなく（まして、大学生などでも決してなく）、大勢のお友達の前でおもらしをしてパンツを汚してしまう困った年少さんになりはててしまっているようだった。

「さ、できた。じゃ、パンツを脱ごうね。いつまでもおしっこパンツだと風邪をひいちゃうもんね」

おむつの準備をすっかり整えた芽衣は、膝立ちの姿勢からすっと身を起こし、まるで邪気のない笑顔で葉月の目の前に立った。

「い、いや！　パンツを脱ぐの、いや！　葉月、このままでいい。おしっこパンツのままでいいの！」

芽衣や卯月の目の前でショーツを脱がされるのだけはなんとしてでも避けたい。葉月は甲高い声で叫びながら激しくかぶりを振った。駄々をこねるように身をよじる様子と、叫び声をあげた拍子に口から落ちそうになるオシャブリを（皐月から厳しく戒められたことを思い出して）慌てて自分の手で唇に押し戻す仕草は、体こそ大きいものの、葉月のことを純たち年少クラスの園児よりも幼く思わせるに充分だ。

「なにを言ってるのよ、葉月ちゃんてば。濡れたパンツのままがいいだなんて、そんなの変でしょ？」

少し呆れたような顔をして芽衣がたしなめた。

そこへ、園長が取りなすように割って入る。

「そうね、殆ど経験のない菅原先生には、葉月ちゃんの反応が変に思えるかもしれないわね。でも、小さな子にはいるのよ、こういう反応をする子が。例えば、おむつが外れたと思ってパンツにした後、一人でいる時はおしっこを教えられるんだけど、お友達と一緒だと遊びに夢中になっておしっこをしたくなっても教えずに、そのまましくじっちゃう子とか。そういう子は、おもらしをしちゃった後もお友達との遊びを続けたくて、なかなかパンツを穿き替えさせてくれないの。そういう時、『濡れたパンツのまま我慢する』って言うのが本当なんだけど、子供心にプライドがあって妙に意地を張っちゃうんでしょうね、『濡れたパンツが好きなんだから構わないでよ』なんて言い方をすることがあるのよ。そういう子はこちらが注意していても遊びに夢中になった時はおもらしが治らなくて、結局、おむつに戻してから改めてトイレトレーニングをやり直すことになるんだけど、今の葉月ちゃんもそんなところじゃないかしら。おむつ離れは簡単なようでいて、でも、ちょっとしたことで失敗しちゃうから、気長に進めないとね」

自分のことを徹底的に幼児扱いする園長の言葉に、けれど葉月は反論できない。そんな小さな子供と一緒にしないでくださいと言おうものなら、じゃどうしておしっこでびしょびしょのパンツを脱ごうとしないの？と問い返され、返答に詰まるのは目に見えている。

「それに、今は葉月ちゃん、恥ずかしさが先にたって、それでますます意固地になっちゃってるんじゃないかしら。だって、知り合ってまだ間のない菅原先生や卯月ちゃんにおむつのお世話をしてもらうだなんて、恥ずかしくてたまらないと思うわよ」

歯噛みする代わりにオシャブリをくちゅっと噛む葉月の様子を横目で窺いながら、園長は尚も取りなすような口調のまま続けて言った。

「あ、そうか。そうかもしれませんね。もともと引っ込み思案の葉月ちゃんだもん、お姉さ

んならともかく、まだ知り合ってすぐの私におむつをあててもらうなんて、とっても恥ずかしいですよね。だったら、ここはお姉さんの御崎先生にまかせて方がいいのかしら」
頭の回転が早く、誰に対しても気配りのできる芽衣は、園長の説明を聞くなり納得顔で頷いた。もっとも、おむつの世話をする役を皐月にまかせた方がいいかなと芽衣に言わせるよう園長が仕向けたのが、葉月のためではなく、パンツを脱がされてあらわになった葉月の股間で蠢くペニスを目の当たりにして芽衣がショックを受けないようにするためなのは今更いうまでもないところだ。
「ええ、私はそう思うんだけど……」
芽衣に向かって軽く頷き、園長は言いかけた言葉の途中で意味ありげに一瞬の間を置いてから、葉月のそばにすっと近づいた。
「一応、葉月ちゃん本人にきいてみましょうか。誰におむつをあててほしいのか、本人の口から聞いた方が確かだものね」
ショーツに伸ばしかけていた手を芽衣がそっと引っ込めるのを見ながら園長はそう言って、幼児をあやすような口調で
「さ、葉月ちゃんは誰におむつをあててほしいのかな。もしも知り合ってすぐの菅原先生がいいんだったら遠慮しないで正直に言えばいいのよ。菅原先生、保育士さんの見習いになったばかりだけど、葉月ちゃんのことをとっても可愛がってくれているから、喜んでおむつをあててくれるわよ。どう、菅原先生がいい？」
と、葉月が頷くわけがないことを充分に承知した上で最初に芽衣の名前を挙げ、次に
「それとも、卯月お姉ちゃんがいいかな？　卯月お姉ちゃんはまだ子供だけど、先生たちに手伝ってもらえば、きっと上手に葉月ちゃんにおむつをあててくれると思うわよ。なんたって、お下がりのおむつを葉月ちゃんにプレゼントしたくれた優しいお姉ちゃんだもん。どうする、卯月お姉ちゃんがいい？」
と言って卯月を掌で指し示した。
むろん、葉月が頷くわけがない。
思惑通り葉月が身を固くするのを目にして、園長はすっと目を細めると、
「そう。やっぱり、知り合ったばかりの二人におむつをあててもらうのは恥ずかしいのね。じゃ、お姉さんの御崎先生にお願いしなきゃいけないわね。御崎先生と、今日から葉月ちゃん専属の担任になっていただく遠藤先生とに」
と決めつけた後、とびきり優しい声でこう付け加えた。
「だったら、御崎先生と遠藤先生に自分でお願いしなきゃいけないわね。『御崎先生、遠藤先生、葉月のパンツを脱がせておむつをあててください。パンツの代わりに、卯月お姉ちゃんのお下がりのふかふかのおむつをあててください。じゃないと、葉月、いつまたおもらししちゃうかわからないから』って、ちゃんと自分のお口でお願いするのよ。葉月ちゃん、お利口さんだもん、できるよね？」
だが、もちろん、それに対しても葉月は口をつぐんだままだ。
頑なに身をすくめる葉月に向かって園長はわざと不思議そうな表情を浮かべて更に言った。
「どうしたの、葉月ちゃん？　御崎先生や遠藤先生にお願いできないの？　だったら、私、思い違いをしていたのかしら。知り合って間のない菅原先生におむつをあててもらうのを恥ずかしがるとばかり思っていたんだけど、本当は、御崎先生や遠藤先生よりもずっと自分と

年が近い菅原先生にあててもらいたいのかな。だったら、菅原先生にお願いしてパンツを脱がせてもらわなきゃいけないわね。優しくパンツを脱がせてもらって、おしっこの雫が一つも残らないよう菅原先生の手で丁寧にお股を拭いてもらって、お尻のまわりに湿疹ができてないかどうか菅原先生にじっくり見てもらうといいわ。お股に変な腫れ物とかができていたら大変だから、しっかり見てもらわないと駄目よ」

園長は再び芽衣の名前を挙げてそう言いながら、ぐっしょり濡れたショーツの上から葉月の両脚の付け根のあたりをぽんぽんと叩いた。園長が口にした『変な腫れ物』というのが、おしっこを吸って膨れぎみになっているナプキンの中で窮屈そうにしているペニスを指しているのは明らかだ。

そこまでされては、それ以上押し黙っていることもかなわない。

「……御崎先生……御崎先生にお願いします……」

諦めきれない表情を浮かべつつ、葉月は呻くように言った。

「何をお願いするのかな、葉月ちゃん？」

嵩にかかって、念を押すように園長が訊く。

「……お、おむつ……おむつをあててくれるよう……お願いします」

オシャブリを落とさないよう唇をあまり開けないで、しかも躊躇いがちに声を出すものだから、どうしても、まだお喋りが上手でない幼児めいた話し方になってしまう。

「そう。御崎先生に、おむつをあててくれるようお願いするのね。いいわ、みんなで見ていてあげるから、ちゃんとお願いするのよ。年長クラスの卯月ちゃんに比べればまだ一人じゃ何もできなくて、おしっこパンツでオシャブリを咥えている葉月ちゃんだけど、赤ちゃんや二歳児に比べれば年少クラスのお姉さんなんだから、上手にお願いできるわよね？」

たどたどしくさえ聞こえる葉月の喋り方に、園長は満足そうに目を細めて応じた。

「……み、御崎先生。……葉月のパンツ……パンツを脱がせて、お、お、……おむつをあててください。……お願いします」

回数ばかり多くて実際には殆ど空気を吸い込めない浅い呼吸を何度も繰り返してから、葉月はかすれた声で言った。

そうして、園長に目で指示されるまま、次に弥生の方に向き直って、小刻みに震える声を絞り出す。

「は、葉月、このままじゃ、いつまたおもらししちゃうかわかりません。だから……卯月お姉ちゃんのお下がりのおむ……おむつをあててください。……お願い、遠藤先生」

「うん、いいわよ。可愛い妹のお願いだもの、喜んできいてあげる」

「おむつをあててって自分でお願いできるなんて、本当にお利口さんね、葉月ちゃんは」

葉月の羞恥に満ちた『お願い』に、皐月と弥生が同時に応じた。

「さ、そうと決まったら、卯月ちゃんは自分の教室に戻りましょうね。菅原先生は、指導係の遠藤先生が一息つくまで、卯月ちゃんの教室へ行って、とりあえず、年長クラスの担任の先生を手伝ってちょうだい」

顔を真っ赤に染め両の手を拳に握ってぶるぶる震わせている葉月の様子を目の端にとらえながら、園長が芽衣と卯月に言った。

途端に卯月から
「や。私、先生たちのお手伝いする。お手伝いして、一緒に葉月ちゃんにおむつをあててあげる」
と不満そうな声があがった。
それを優しくたしなめたのは芽衣だった。
「うん、卯月の気持ちはよくわかるよ。自分のお下がりのおむつを葉月ちゃんがあててもらうところ、卯月も見たいよね。でも、本当は小学生なのにおむつをあてられるところ、大勢に見られたら恥ずかしくてたまんないんじゃないかな、葉月ちゃん。だから、今は我慢してあげようよ。これからずっと保育園で一緒なんだから、そのうちきっと葉月ちゃんも慣れるよ。その時になってから卯月も先生たちのお手伝いをして葉月ちゃんにおむつをあててあげればいいと思うよ。でも、今は、ね？」
さっき自分が園長から言われた言葉と、水族館のトイレでの今にも消え入りそうにしていた葉月の恥ずかしそうな様子を思い浮かべて、芽衣は卯月に言い聞かせた。
「……うん、わかった。お姉ちゃんがそう言うんだったら我慢する。葉月ちゃんが保育園に慣れて卯月と仲良しになって恥ずかしくなくなってから、卯月がおむつをあててあげる。それまで我慢する」
まだ名残惜しそうにしながらも、いつも面倒をみてもらっている大好きな姉から諭されて、卯月はぽつりと応じた。
現役の保育士たちの間に入って、もともと持っていたしっかり者の姉さんキャラにますます磨きをかける芽衣と、そんな芽衣に影響されたのか、幼いながらも保育園での最年長クラスの園児にふさわしく面倒見のよさを発揮してお姉さんぶりが板についてきた上、自分の姉と勝手に仲良くなりそうな相手に対しては冷たい目で睨みつけるような、或る意味では既に女性としての自我を併せ持った卯月。そんな、実際の年齢よりもずっと大人びた行動をみせる二人とは対照的に、本当は大学生なのに一人では何もできず引っ込み思案な少女として扱われ、おもらしが治らないという口実で今まさに赤ん坊みたいにおむつをあてられようとしている葉月。すっかり年齢が逆転してしまったかのような三人の対比に、園長の胸の内が妖しくざわめく。
「それじゃ、卯月の教室へ行こうね。さ、お手々をつないであげるから一緒に行きましょう」
芽衣は、卯月が不承不承ながらも納得してくれたことにほっとしながら、すっと右手を差し出した。
けれど、卯月はどこか悪戯めいた表情で
「やだもん。私、お手々をつないでもらわなきゃ部屋から出られないようなお子ちゃまじゃないもん。私、年長さんのお姉さんなんだよ？　葉月ちゃんみたいにいつまでもおむつ離れできない赤ちゃんじゃないんだから、気をつけてよね。ま、今回だけはお姉ってことで許してあげるけど」
と減らず口をたたくと、（もうすぐしたら、私が葉月ちゃんにおむつをあててあげる。大好きな私のお姉を独り占めしようたって、おむつも外れない赤ちゃんなんかに誰が渡したりするもんですか。そんなふうに言いたげな目で）改めて葉月の顔を睨みつけながら、ゆっくりした足取りで扉の方に一人で歩き出すのだった。